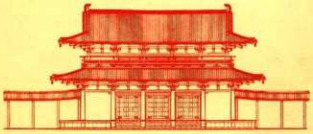
平城宮発掘調査報告 IX



奈良国立文化財研究所

朱雀門復元模型

平城宮発掘調査報告Ⅸ

奈良国立文化財研究所

序

文化財保護委員会が特別史跡平城宮跡の調査，保存問題の重要性に鑑みて，当時日本考古学協会委員長をしておられた藤田亮策先生を奈良国立文化財研究所長に御迎えし，先生の指揮のもとに平城宮跡の継続的な大規模発掘調査をはじめた昭和34年から数えて満20年を経過した。発掘開始当初は宮域内遺跡の性格の究明といえば聞えはよいが，宮内には何処を掘っても役所遺構が埋まっていることの証拠を一般の人に見せることを目的としていた。その間に木簡の発見があって，発掘事業の有効性がようやく世間に認知されるようになった。ところがその頃平城宮跡付近は，大阪，京都と交通至便の地という立地条件によって都市化の波がおしよせ，宮域三分の一の未指定の水田地帯が一括開発されることになった。このことが報ぜられるや全国的保存運動がおこり，国会でもとりあげられ，前例のない100ヘクタールの宮域の買上げ保存が決定された。この新しい事態に対応するために，在来説かれていた宮全域の範囲を発掘により確認する必要が生じた。昭和39年に宮域西南隅の確認調査にはじまり，南辺中央の朱雀門，西辺南門の玉手門，西辺中央の佐伯門およびその周辺施設の調査が昭和41年度にかけておこなわれた。本報告書に収録したのはこの西・南辺および北辺の一部の宮域外周施設の発掘成果で，諸門のみならず，大垣，壕地，外湟など，これまでは文献と地形等から推定した外郭施設の実態がはじめて明らかとなった。

宮域西南辺外郭の発掘調査が順調に進みはじめた昭和39年，奈良市内を通過する国道24号のバイパスを平城宮跡に東接すると考えられていた左京東一坊大路を復原する形で計画され，種々折衝の結果事前の発掘調査を北から順次実施することになった。昭和40年の北門推定地，40・41年の中門推定地の調査で門遺構は検出されず，42年に南門地区を調査し，はじめて南門が東一坊大路推定線の上に南面した東西棟で，奈良時代の早い時期構築されていたことが明らかになった。平城宮東辺はそれまで予想もされなかった北三分の二の地域が東の法華寺と境を接する半坊分東に張出していたことになり，西側保存問題同様一体的に保存すべきとのことで，建設省で計画決定までしていたバイパス予定線を東側に変更を願い，この東院地区の追加指定，買上げされ，昭和49年に平城宮跡の保存問題が指定範囲に関して一段落することになった。以後は全域の整備管理問題が課題となる時期をむかえ今日にいたっている

本報告書は昭和43年に計画立案されたにもかかわらず，相継ぐ編集担当者の転任等に伴って継続的に編集業務にたずさわれなかった体制的な不備を反省し，遅延の御詫びをするとともに困難な条件を克服して報告書完成に当った各員に感謝の意を表はすものである。

最後に，内容その他全般にわたって忌憚ない御批判と一層の御鞭撻たまわれば幸いである。

昭和53年3月

奈良国立文化財研究所長

坪　井　清　足

平城宮発掘調査報告 IX

― 宮城門・大垣の調査 ―

目　次

第Ⅰ章　序　　言 …… 1

第Ⅱ章　調査経過 …… 4

1　調査概要 …… 4

2　調査日誌 …… 7

A　第14次発掘調査……7
B　第15次発掘調査……8
C　第16・17次発掘調査……9
D　第18次発掘調査……11
E　第23次発掘調査……12
F　第25次発掘調査……13
G　第25―2次発掘調査……15
H　第34次発掘調査……15
I　第52―2次発掘調査……16
J　第58次発掘調査……16
K　第62次発掘調査……16

第Ⅲ章　遺　　跡 ……17

1　遺跡序説 ……17

2　遺構各説 ……18

A　朱雀門地区……18
B　玉手門地区……21
C　佐伯門地区……24
D　宮西南隅地区……27
E　玉手門・佐伯門中間地区……31
F　北面大垣地区……32
G　その他の地区……33

第Ⅶ章　遺　　物 ……34

1 木　　簡 ……34

A SD1900A 出土木簡 ……34　　B SK1979 出土木簡 ……37

2 屋　　瓦 ……39

A 軒 丸 瓦……40　　D 丸・平 瓦……52
B 軒 平 瓦……46　　E 文 字 瓦……53
C 道 具 瓦……52

3 土　　器 ……54

A SD1900A 出土土器 ……54　　D 包含層出土土器・硯……61
B 暦書土器……60　　E 陶　　棺……61
C その他の遺構・包含層出土土器…60

4 木 製 品 ……62

A SE1230 出土の櫛 ……62　　C SK1979 出土の木製品 ……71
B SD1900 出土木製品 ……66　　D その他の地区出土の木製品…76

5 金属製品・石製品……78

A SK1979 出土の金属製品 ……78
B その他の地区出土の金属製品・石製品……78

第V章 考　　察 ……80

1 遺　　跡 ……80

A 宮 城 門……80　　C 宮内の道路……84
B 大　　垣……82　　D 造 営 尺……85

2 遺　　物 ……88

A 屋　　瓦……88　　B 土　　器……92

3 文献にみえる宮城門・大垣……96

4 結　　語 ……99

第VI章　復原模型 ……100

1　朱　雀　門 ……101

A　門の型式 …… 101
B　柱 …… 101
C　斗　栱 …… 102
D　軒 …… 102
E　屋　根 …… 103
F　雑作等 …… 103
G　基壇外装 …… 104
H　築地大垣 …… 104

2　西面門（南門および中央門）……105

別　　表 ……107

English Summary ……115

図　　面

図　　版

図　　面

PLAN	1	平城宮跡全域地形図	
	2	6ABX・6ABY区	全域実測図
	3	6ABY-D・E・F・G区	南半部中央実測図
	4	6ABY-G・E区	南半部東実測図
	5	6ABY-F・G区	南半部西実測図
	6	6ADF-P・R・T区	
		6ADD-Q区	
		6ADE-K・L・M区	全域実測図
	7	6ADF-R・T区	全域実測図
	8	6ADF-P区	南半実測図
	9	6ADF-K・P区	全域実測図
	10	6ADD-Q区	
		6ADE-K区	実測図
	11	6ADE-K・L区	全域実測図
	12	6ADE-L・M区	全域実測図
	13	6ADH区	全域実測図
	14	6ADH-F区	実測図
	15	6ADH-I区	実測図
	16	6ADH-K区	実測図
	17	6ADH-K・L区	実測図
	18	6ADH-L・J区	北半実測図
	19	6ADE-P区	
		6ADF-J・K区	全域実測図
	20	6ABA-N区	
		6ABN-B区	全域実測図
	21	6ACA-D・E区	全域実測図

原色図版

巻首図版	朱雀門復元模型
COLOR PLATE	隼人楯
	隼人楯模型

図　　版

PL. 1　平城宮跡

2　6ABX・6ABY区　全景　南から

3　6ABY-E区　1　南面大垣SA1200・朱雀門SB1800・東脇門SB1801　東から
2　朱雀門SB1800・塀SA1812　東から

4　6ABX・6ABY区　1　全景　南から
2　朱雀門SB1800・広場SH1850　北から
3　溝SD1825に伴うSX1830・1831・1832　西から

5　6ABY-E・G区　朱雀門SB1800礎石跡北列・塀SA1812柱掘形　北から

6　6ABY-E区　1　朱雀門SB1800礎石跡と掘込み地業　西北から
2　朱雀門SB1800掘込み地業と版築　西から
3　南面大垣SA1200掘込み地業と版築　東から

7　6ABY-E・G区　1　東脇門SB1801　北から
2　同上　西北から
3　西脇門SB1802　北から

8　6ABY-E・G区　1　東脇門SB1801西柱根　南から
2　同上東柱根　南から
3　西脇門SB1802東柱根　南から
4　朱雀門SB1800東第4北礎石跡・塀SA1812東第7柱掘形　北から
5　塀SA1812東第4柱掘形と柱根　南から
6　同東第3柱掘形と柱根　東から

9　6ABY-E・G区　1　朱雀門東の宮内道路SF1761・塀SA1765　東から
2　同上　西北から
3　朱雀門西の宮内道路SF1880　西から

10　6ABX・6ABY区　1　西脇門SB1802・広場SH1850西辺部　南から
2　広場SH1850東辺部・宮内道路SF1950　南から
3　広場SH1850西半部　北から

11　6ABX・6ABY区　1　溝SD1900A　北から
2　溝SD1900B　北から
3　堰SX1891　東から
4　同上　西北から

12　6ABY-G区　1　溝SD1825に伴うSX1830・1831・1832　北から
2　同上　南から

		3	SX1830東柱根・溝SD1900土層　北から
		4	溝SD1900土層　北から
13	6ADF区	1	R・T地区全景　東北から
		2	西面大垣SA1600・玉手門SB1616　南から
14	6ADF区	1	玉手門SB1616・東西塀SA1692　北から
		2	玉手門SB1616掘込み地業と版築　東北から
		3	同上細部　北から
15	6ADF区	1	全景　北から
		2	建物SB1711・1717，塀SA1692　西北から
		3	建物SB1711・1717　西南から
16	6ADF区	1	溝SD1759　北から
		2	土壙SK1623の埋土堆積状況　東南から
		3	土壙SK1623　南から
17	6ADF区	1	井戸SE1748　西南から
		2	井戸SE1595　北から
		3	井戸SE1591　南から
		4	井戸SE1598　西北から
		5	井戸SE1588　南から
		6	井戸SE1596　東から
18	6ADD•6ADE区	1	佐伯門SB3600　南から
		2	佐伯門SB3600，塀SA3590・3680　東北から
19	6ADD•6ADE区	1	佐伯門SB3600，塀SA3669　東北から
		2	佐伯門SB3600基壇掘込み地業と版築　東南から
		3	同上細部　東北から
20	6ADD•6ADE区	1	佐伯門SB3600，塀SA3590・3680　北から
		2	同上　南から
		3	塀SA3590，建物SB3640，土壙SK3650　西北から
21	6ADD•6ADE区	1	塀SA3680，建物SB3690　南から
		2	塀SA3590，建物SB3640　西から
		3	塀SA3590，建物SB3599　北から
22	6ADE-M区	1	塀SA3563・3590，旧河床SD1759，土壙SK3573　南から
		2	同上　北から
		3	塀SA3555・3557・3563，建物SB3560　西北から
23	6ADH-F•K•L区	1	宮西南隅　東から
		2	宮南辺部　西から
24	6ADH-F•K•L区	1	南面大垣SA1200　西から
		2	大垣SA1200北側瓦散布状況　塀SA1240・1245　東南から

		3　大垣SA1200北側瓦散布状況　東から
25	6ADH-J•K•L区	1　全景　東北から
		2　塀SA1221・1240，建物SB1220・1222　井戸SE1230上部　北から
		3　塀SA1221・1240，建物SB1222，井戸SE1230上部　南から
26	6ADH-J•K•L区	1　宮西南隅　東北から
		2　建物SB1333　東北から
		3　塀SA1345，建物SB1342　東から
		4　建物SB1397　東南から
27	6ADH-J•K•L区	1　全景　西南から
		2　全景　北から
		3　建物SB1414　東から
28	6ADH-J•L区	1　塀SA1345・1365，建物SB1366　南から
		2　建物SB1366　西から
		3　建物SB1379・1419　東から
29	6ADH区	1　南面外堀SD1250（東トレンチ）　西北から
		2　同上　西から
		3　南面外堀SD1250（西トレンチ）　西南から
30	6ADH-F区	1　井戸SE1230上部検出状況　北から
		2　井戸SE1230　東南から
		3　同上　東南から
31	6ADE•6ADF区	1　南北トレンチ全景　北から
		2　塀SA1970　西から
		3　塀SA1970，暗渠SX1975　東から
32	6ADE•6ADF区	1　方形殺殺SX1978，土壙SK1979，暗渠SX1982　北から
		2　方形施殺SX1978，土壙SK1979　西から
		3　塀SA1970，暗渠SX1975　南西から
33	6ABA•6ABN区	1　6ABA区北半，6ABN区全景　西南から
		2　北面大垣SA2300　西から
		3　北面大垣SA2300・2330　西から
34	6ABA•6ABN区	1　6ABA区全景　西北から
		2　北面大垣SA2300，瓦敷き施殺SX2333　南から
		3　瓦敷き施殺SX2333　東南から
35	木　　簡	
36	軒　丸　瓦	
37	軒　丸　瓦	
38	軒　平　瓦	

39　SD1900出土土師器
40　SD1900出土土師器
41　SD1900出土土師器
42　SD1900出土土師器
43　SD1900出土須恵器
44　SD1900出土須恵器
45　SD1900出土墨書土器
46　SD1900出土須恵器・土師器・陶硯・陶棺蓋
　　SK1949出土陶棺蓋
47　SE1230出土楯
48　SE1230出土楯
49　SE1230出土楯
50　SE1230出土楯
51　SE1230出土楯
52　SE1230出土楯細部
53　SE1230出土楯墨書・刻書
54　SE1230出土楯刻線画
55　SD1900出土木製品　曲物
56　SD1900出土木製品　曲物・鉢
57　SD1900出土木製品　紡織具
58　SD1900出土木製品　工具・その他
59　SD1900出土木製品　帯・その他
60　SK1979出土木製品
61　SK1979出土木製品　工具
62　SK1979その他出土木製品
63　金属製品・その他
64　朱雀門模型　1　正面　2　側面　3　断面
65　西面門模型　1　正側面　2　正面　3　軸部詳細

別　　表

1　主要建物一覧表
2　軒丸瓦分類表
3　軒平瓦分類表

挿　　図

1　各次調査地域……5
2　第14次調査地域の地区割と主な遺構…7
3　第15次調査地域の地区割と主な遺構…8
4　第16・17次調査地域の地区割と主な遺構…10
5　第18次調査地域の地区割と主な遺構…12
6　第23次調査地域の地区割と主な遺構…13
7　第25次調査地域の地区割と主な遺構…14
8　第25―2次調査地実測図……16
9　掘込み地業による基壇模式図……17
10　SE1247 西から……28
11　SE1313 南から……28
12　SE1410 東南から……30
13　SE1422 北西から……30
14　軒丸瓦6233・6273・6274・6275……41
15　軒丸瓦6275・6276・6278……43
16　軒丸瓦6278・6279・6281・6284……45
17　軒平瓦6641・6642・6643 ……47
18　軒平瓦6643・6646……49
19　軒平瓦6681……50
20　軒平瓦6647・6671・6675……51
21　文字瓦……53
22　土師器食器の法量……56
23　須恵器食器の法量……58
24　陶棺実測図……61
25　門・大垣間寸法図……87
26　各点の座標値および概念図……87
27　軒丸瓦瓦当文様の変遷……90
28　隅木蓋瓦……91
29　SD1900出土土器の螢光X線分析……93
30　第1群・第2群土器器種別個体数表…94
31　土師器の用途別比率……94
32　各遺構における土器の比率……95
33　模型木作り ……105

表

1　各次調査の期間と面積……4
2　第2次内裏北方官衙地域軒瓦出土個体数……39
3　「理」銘瓦出土一覧表 ……53
4　SD1900A出土土器数量表 ……55
5　土師器杯・皿の調整手法……56
6　楯寸法表……62
7　楯棧寸法表……65
8　曲物容器法量表……66
9　曲物容器法量表……67
10　曲物容器法量表……67
11　糸巻筌計測表……68
12　SD1900出土加工板・棒一覧表 ……69
13　SK1979出土木製雛形寸法表 ……71
14　SK1979出土工具柄計測表 ……73
15　削掛け寸法表……76
16　鉄釘寸法表……77
17　銭貨計測表……77
18　築地規模一覧表……84
19　瓦当・丸瓦・接合角度……91
20　宮城十二門号……97

平城宮発掘調査報告 IX

—宮城門・大垣の調査—

1978

平城宮発掘調査報告 Ⅸ

宮城門・大垣の調査

第Ⅰ章　序　　言

この報告は，奈良市佐紀町にある特別史跡「平城宮跡」のうち，南・北・西辺地域で実施した，1963（昭和38）年度の第14次調査，第15次調査，1964（昭和39）年度の第16次調査，第17次調査，第18次調査，第23次調査，1965（昭和40）年度の第25次調査の成果を中心としてとりまとめたものである。ここでとりあげた調査地域は，南面中央門（朱雀門），西面南門（玉手門），西面中央門（佐伯門）の3宮城門地域と，宮の西南隅地域，玉手門・佐伯門間の中間地域，北面中央部での大垣地域である。その他，平城宮域内で実施した宮域大垣に係る発掘調査のうち，宮域西南部での小規模な5回の調査，1965（昭和40）年度の第25―2次調査，1966（昭和41）年度の第34次調査，1969（昭和44）年度の第52―2次調査，第58次調査，1970（昭和45）年度の第62次調査の結果もあわせ付記した。

さて，このような宮の四至を明らかにすることを目的とした調査は，1962年におこった宮域西南部の開発問題が契機となったものである。これを契機として平城宮跡は1963年に特別史跡の指定範囲が方1kmの宮跡全域に拡大され，同時に宮域保存のために土地買収・国有地化がなされることになった[1]。調査組織も1963年度には平城宮跡発掘調査部が発足した。今回報告の調査は，この新たな機構で実施した調査である[2]。

平城宮の調査事業の進展については，今回報告する地域の調査時点を含めて，すでに公刊した報告書で記述したとおりである[3]。その後の概況をここで略述しておく。平城宮内の調査は，1976年度から第1次朝堂院推定地域と東院地域で重点的に行なっている。第1次朝堂院推定地域の東北部においては，地上にその痕跡をとどめる東第1堂及び東第2堂推定土壇を中心に調査を行ない（第97[4]・102次[5]），礎石建ちの南北棟建物を2棟検出している。これら2棟は約15mの間隔をおいて建てられており，第1堂は桁行10間，梁行4間の規模であることを確認した。

註

1）平城宮跡の全面保存に至る経過に関しては，奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅳ』宮廷地域の調査2 奈良国立文化財研究所学報第17冊1966年 p.1～3（以下，『平城宮報告』『平城宮報告Ⅳ』等と略称する）。坪井清足「平城宮発掘調査10年の進展」『奈良国立文化財研究所年報1968』p.2～6（以下『年報』1968年等と略称する）。『奈良国立文化財研究所二十年史』1972 p.40・41 等に述べられているので，これらを参照されたい。

2）今回報告する各調査地の概要については，第14・15次は『年報』1964年で，第16・17・18・23次は『年報』1965年で，第25・第25―2次は『年報』1966年で，第34次は『年報』1967年で報告している。

3）『平城宮報告Ⅶ』1976年 p.1～7。

4）『年報』1977年 p.22～24。

5）『年報』1978年 p.19～21。

この地域においてはすでに1967年から数次にわたって調査を実施し（第27・41・75・77次調査），第1次朝堂院推定地の規模やこれと北城遺構との関連についての知見を一部得ている[6]。

一方，東院地域[7]においては1968年に実施した第44次調査で検出した園池のほぼ全貌を明らかにする調査を1976年に行ない（第99次），複雑に屈曲する汀線をもつ南北約60mの逆L字形の池であることを確認した[8]。また，この池が外形をくずさず，前後2時期に分れることが，明らかになった。宮内における園池の調査としては，1977年に行なった宮の北辺西部の佐紀池の調査（第101次）がある。この調査は幼稚園建設に伴う事前調査であるが，明治年間に開さくされた溜池と考えられていたこの池底において，奈良時代の汀線を検出し，現在の佐紀池とほぼ同じ汀線をもつ池を推定し得た[9]。

平城京内の大規模開発工事が増大するにともなって，発掘調査を要する機会も増えてきた。京内の調査は，従来ほとんど薬師寺・大安寺・西大寺等，寺院の調査に限られていたが，条坊内居住地域の調査をも行なうようになった。今回報告の第25—2次調査も，簡易保険奈良保養センター建設にともなう事前調査であり，この先鞭ともいうべきものであった。その後，大規模に実施した発掘調査の多くは，奈良市域の西への膨張にともなう事前調査であったため，それらの成果については逐次概略を報告している[10]。右京地域の発掘調査は近鉄西大寺駅界わいの開発に伴なう調査が中心で，なかでもショッピングセンター・銀行建設に伴なう事前調査でまぼろしの寺といわれた四隅寺の金堂，塔，東門等の伽藍遺構が明らかになり，大きな成果をあげた[11]。また，1976（昭和51）年度に右京地区でははじめて庶民の居住地域として右京五条四坊三坪（奈良市立西京中学校建設予定地）において発掘調査を実施した。発掘地が丘陵地帯であるため，削平が著しく，検出遺構はさほど稠密ではなかったが，条坊・宅地割の新たな資料を得ることができた。さらに蔵骨器に鬱・筆・銭を副葬した火葬墓かと思われる遺構を検出したことによって，律令体制下における喪葬令との関わりに新たな問題点を提起した[12]。

検出遺構や出土遺物の永久的な保存については，発掘の当初から大きな課題であった。平城宮の発掘調査が大規模化し，恒常化するに伴って，ますますそうした要請は強くなった。

保存処理を要する資料は多方面にわたるため，各種の機械設備を順次整え，その処理にあたっている。現在，埋蔵文化財センター遺物処理研究室との連携によって木製品のP・E・G含浸処理，木簡の真空凍結乾燥，金属遺物の保存処理等をはじめ，皇朝十二銭のX線分析，緑釉陶釉薬の化学分析等各種材質の分析，さらには保存のための修復を行なっている。

今回報告する調査は1963年度から1969年度にわたるが，中心部は1963～1965年度である。

今回報告の発掘調査は，1963年度から1969年度にまでおよんだため，調査関係者の出入がか

6）『年報』1966年p.34～36，『年報』1968年p.37・38，『年報』1973年p.19～25。

7）この調査は，第29・39次の調査で宮の東面南門（的門）が東一坊大路に南面して建つことが明らかになったため（『年報』1967年pp.35）に，宮の東張出部分の東南隅を検出することを目的として行なったものである。『年報』1968年p.38。

5）『年報1966』p.34～36，『年報1968』p.37・38，『年報1973』p.19～25。

8）『年報1977』p.24～28。

9）『年報1977』p.28～30。

10）『平城宮報告VII』1974年，奈良国立文化財研究所『平城宮左京二条二坊』奈良国立文化財研究所学報第25冊1975年，奈良県・奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年，奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976年等。

11）西隅寺調査委員会『西隅寺発掘調査報告書』1976年。

12）奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977年。

なりはげしかった。1964年度の発掘調査関係者は次のとおりである。

調査責任者

調査責任者	奈良国立文化財研究所長	小林　剛		
	平城宮跡発掘調査部長	樫木亀治郎		
第一調査室	坪井　清足	本村　豪章	鈴木　充	藤井　功
	森　郁夫	石井　則孝	荒木　伸介	佐藤　興治
第二調査室	工藤　圭章	岡田　茂弘	牛川　喜幸	八賀　晋
	三輪　嘉六	猪熊　兼勝	鬼頭　清明	高島　忠平
第三調査室	沢村　仁	河原　純之	工楽　善通	町田　章
	横田　拓実	松下　正司	栗原　和彦	
保存整理室	横山　浩一	田中　琢	佐原　真	横田　義章
	八幡　扶桑	仙　幹雄		
史料調査室	田中　稔	狩野　久	伊東　太作	

本報告書の作製にあたっては，上記関係者に加えて多数の調査員が参加した。主として，遺構については，亀井伸雄・清水真一・中村雅治・藤原武二・藤村泉・細見啓三・宮沢智士・宮本長二郎・村上訓一，遺物については，秋山隆保・阿部義平・綾村宏・石松好雄・今泉隆雄・稲田孝司・小笠原好彦・岡本東三・甲斐忠彦・加藤優・黒崎直・沢田正昭・田辺征夫・東野治之・西弘海・西谷正・山沢義貴・山中敏史・吉田恵二が整理・作成に参加し，調査研究の遂行にともなって数回の討議を経て，原稿を作成した。執筆分担はつぎのとおりである。

第I章狩野久，第II章森郁夫，第III章1森郁夫，2伊東太作，第IV章1横田拓実，2森郁夫，3稲田孝司，4佐藤興治，第V章1A～C森郁夫，1D伊東太作，2A森郁夫，2B稲田孝司，沢田正昭，3横田拓実，鬼頭清明，4狩野久，第VI章細見啓三，

英文要訳は，合衆国ハーバード大学 William Carter 氏をわずらわした。写真撮影は仙幹雄，印刷用複製は仙幹雄・渡辺泉芳が担当し，藤村礼子・池田千賀枝が助力した。編集は，坪井清足・鈴木嘉吉・狩野久の指導のもとにすすめ，沢村仁が着手し，森郁夫がこれをうけつぎ，石川千恵子の助力を得て完成した。

第Ⅱ章　調　査　経　過

1　調　査　概　要

今回報告する地域は，宮の四至を確認するために行なった第14次調査から第25次調査までの一連の調査のうち，主として第14～18・23・25次の7次にわたって調査した地域である。その他に西面南門地域の前面で西一坊大路の位置にかけて建設されることになった簡易保険奈良保養センター建設予定地における事前調査（第25－2次），またその後に行われた宮域周辺部での住宅建設等にともなう小規模な調査（第52－2・58・62）を含んでいる。調査地区・調査期間および調査面積は Tab.1 のとおりである。

宮の西南隅　第14次調査は宮の西南で実施し，水田の畦畔や農道の形状から宮の西南隅にあたると推定される位置である。調査の結果，宮の南辺大垣（SA1200）の基底部を検出し，宮の四至の一部を確認した最初の発掘調査となった。さらに，南辺部において小トレンチを2か所設定し，約10m幅の墳地と宮の外濠の一部を確認した。この地域では建築遺構はさほど密ではないが，少なくとも4期の変遷が認められた。なお，井戸SE1230の枠板には，彩色をもつ桶が16枚転用されており，これが『延喜式』隼人司条記載の威儀用桙と一致するものであることが明らかになったことは注目に値する。また，下層遺構として弥生時代後期の大規模な集落跡を検出した。

調査次数	調査区・地区名		調査期間	調査面積
14　次	6 ADH－F・I・J・K・L	宮域西南隅	1963.12.3～1964.3.19	57.0 a
15　次	6 ADF－P・R・T	西面南門	1963.12.19～1964.5.2	46.0
16　次	6 ABY－D・E・F・G	朱雀門	1964.5.29～10.25	35.0
17　次	6 ABX－F・H・I	朱雀門内方	1964.5.29～10.25	57.0
18　次	6 ADE－P 6 ADF－J・K	西面大垣	1964.5.2～6.13	26.0
23　次	6 ABA－N 6 ABN－B	北面大垣	1964.10.3～11.19	7.0
25　次	6 ADD－Q 6 ADE－K・L・M	西面中門	1965.3.27～10.2	39.2
25－2次	6 AGC－D	西一坊大路	1965.7.7～7.24	3.6
34　次	6 ACA－C・D・E	北面大垣	1966.5.12～5.26	21.3
52－2次	6 ADC－P・R	西一坊大路	(P) 1969.5.8～5.14 (R) 1969.5.30～6.6	1.3
58　次	6 ADH－O・T	西一坊大路	1969.9.22～10.4	2.6
62　次	6 ABN－X	北辺中央	1970.1.7～1.21	2.2

Tab. 1　各次調査の期間と面積

第15次調査は宮の西面南門（玉手門）推定地で実施した。門の遺構（SB1616）は，基壇部の削平が著しく，礎石や根石が残存せず，掘込み地業による基壇基底部を確認したのみである。その規模は南北長，即ち桁行方向が32.1mである。東西方向については西半部が県道下になるため，状況が明確でないが，幅2.7mの大垣が中心にとりつくであろうから，西面大垣のとりつき状況から14mと推定した。この地域は建物遺構が少ないが，中央部で検出した東西塀 SA1692は官衙地域の区画をなす施設のようである。 玉手門

第16・17次調査は宮中央南辺部で実施し，南面中央門（朱雀門）SB1800の北半部を検出することができた。門基壇は掘込みで地業がされており，検出面から掘込み底面までは深さ約1.5 朱雀門

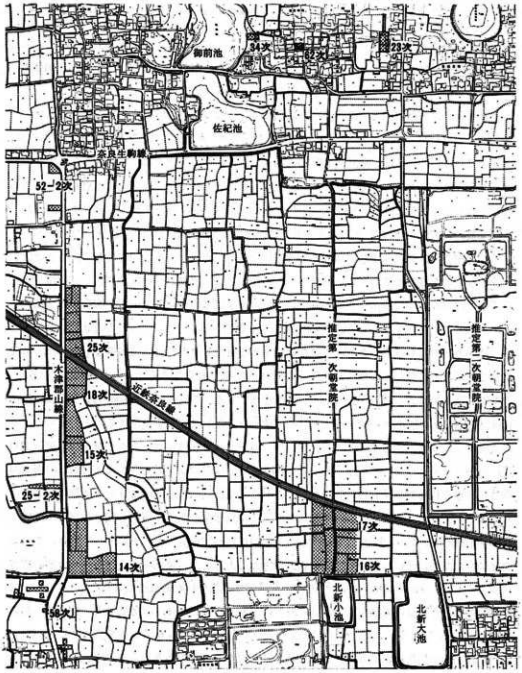


Fig. 1 各次調査地域

m～1.6m，版築が丁寧に行われていた。基壇の検出面では礎石はすでに取り去られていたが，根石の残存状況は良好であった。それによって，朱雀門の規模が5間3戸で桁行・梁行ともに17尺等間であることが明らかになった。門にとりつく大垣基底部も良好な残存状態を示し，第14次調査の結果と合せて造営方位を検討する資料を得ることができた。また，朱雀門の中心から東西それぞれ約29mの位置に脇門が設けられていた。門の内方地域（第17次）においては，

脇　門

数条の溝を検出したのみで，何らの建築遺構も検出できなかった。従来，平安宮の応天門に相当する門を発掘区内に想定していたが，今回の調査で検出し得なかったことによって，平城宮の応天門の存否については，将来の課題として残ることになった。

この調査地でいまひとつ重要な点は，2条の溝SD1860・1900の検出である。西溝が門の基壇によって破壊され，宮造営前のものであることから，これが下ツ道の側溝であると推定した。両溝間の距離は約21mである。朱雀門の東西心は，この下ツ道の心に一致しており，平城京造

下ツ道

営の基準線を下ツ道の心に合わせたことが改めて確認されることになった。また，SD1900下層出土土器は宮造営直前の土器編年の重要な資料となった。

第18次調査は西面南門と中央門との中間地域でおこなったものである。この調査はトレンチ掘削にとどめたが，ここでは旧秋篠川の河道を検出した。宮造営時に埋めたてたものであるが，不完全であったらしく，宮造営後も幅20～25m，深さ約1mの南北にのびる凹みとしてその名残りをとどめていたようである。この他，発掘区中央に東西方向の掘立柱塀(SA1970)，中央部に杭で方形に区画した施設SX1978，そしてこの区画内に掘られた土壙SK1979を検出した。この土壙SK1979からは鞴口・鉱滓とともに釘に関する記載をもつ木簡が出土している。

第23次調査は，北辺西寄りの地域における住宅新築工事に伴う事前調査である。ここでは北

北面大垣

面大垣推定地を縦断する形でトレンチをいれ，南側では，遺構面は攪乱が著しく，建築遺構としてまとめ得るものは検出できなかった。大垣の築土は地山を約1.4mの幅で15cm程度掘り下げ，版築の状況を残すが，きちんとした掘込み地業というほどではない。大垣北方は約7mの平坦地があって瓦敷溝にいたり，この間が塀地かと推定された。この築地をともなった大垣は造営当初のものではなく，最初は柱間寸法約2.8mの掘立柱塀であったことが判明している。

佐伯門

第25次調査地は宮の西面中央門（佐伯門）推定地である。門の遺構(SB3600)は，西面南門(SB1616)と同様，基壇の削平が著しく，掘込み地業による基壇基底部を検出するにとどまった。その規模はSB1616と比較すると南北方向，即ち桁行方向が29.1mでありやや短かい。東西方向は，西面大垣のとりつき状況からみるとSB1616と同様な規模と考えられた。発掘区の南北両端地域で掘立柱建物数棟を検出しており，これらの重複関係から，少なくとも3期の変遷を認めることができた。また，門の内側8mの位置では発掘区を南北に横切る掘立柱塀SA3590とSA3680を検出した。両塀は，門の正面の位置で10間分約26m 隔たって始まっており，この塀

西一坊大路

の途切れた空間が門につながる宮内の通路にあたると考えた。第25—2次は西一坊大路の確認調査である。外濠(SD3699)の西方約30mの位置で南北溝(SD3698)を検出した。

この他の調査地は，北大垣及びそれにちかい位置での調査(第36・62次)と，西一坊大路の調査(第52—2・58)である。北辺の調査は後世の攪乱が著しいため，何ら遺構を見出すことができなかった。西一坊大路の調査は，発掘面積が狭少なため，宮の西外濠と考えられる溝を検出するにとどまった。

2 調 査 日 誌

A 第14次発掘調査

6ADH区F・I・J・K・L地区
1963年12月3日～1964年3月19日

12・3 ベルトコンベアー運搬。

12・4 表土排土開始。雨のため午前中で中止。

12・5 表土排土。実測基準線設定準備。

12・6 表土排土。実測基準線設定。

12・7 J・L地区遺構検出開始。床土下の暗褐色砂質土を排土。瓦器を含むが，遺物の出土量は僅少である。

12・9～10 暗褐色砂質土排土完了。この面では柱穴が見られないため，さらに掘り下げる。砂と粘土の土層のため，柱穴の検出は困難をきわめる。小穴数個を検出。

12・11 南半では再度の排土でも遺構は発見されない。そのため，現状を遺構カードに記録してさらに粘質砂層面まで掘り下げる。溝数条を検出。

12・12 SB1414を検出。この他に柱掘形をいくつか検出したが，建物としてまとまりにくい。また，土質の異なる方形の輪郭がある。弥生式土器が含まれているので，弥生時代住居跡存在の可能性がある。

12・13 L地区で弥生式土器が多量に出土。K地区の床土排土開始（12・25迄）。

12・14 SB1366・1379・1419等を検出。SB1366にはいくつか柱根が残る。

12・16 SB1366東妻の柱穴と思われるものを検出したが，他と比べて小さく疑問である。J・L地区写真撮影。

12・17 写真撮影終了。

12・18 J・L地区実測準備。

12・19～21 実測。

12・23～29 J・L地区弥生時代の遺構検出。

1964・1・11 J・L地区埋め戻し開始。K地区遺構検出。西南隅近辺で東西方向の大垣（SA1200）痕跡を見出す。大垣の北側では瓦堆積が密であるI・F地区，地区杭打ち。

1・13 遺構面検出。

1・16 K地区西端で南北方向に達する高まりを検出。宮の西面大垣かと考えられるが南へ掘り進むにしたがって不明瞭になる。南面大垣（SA1200）も西に進むにつれて不明になり，宮西南隅は本日の段階では確認できない。

1・18 I地区の遺構検出開始。南辺部で瓦が集中して出土。この地区ではSA1200はかなり明瞭に検出し得るようである。

1・21 F・I地区南半部に瓦の散布が多い。とくにSA1200のすぐ北は幅50cm，深さ20cmの溝状になり，瓦がはいりこんでいる。

1・22 SB1222・SA1240の掘形を検出。柱根が良好に残る。SA1200犬走りの部分に柱穴状の小穴がある。しかし，整然としてはいない。

1・23 SA1240南端部でSA1200盛土の高まりが

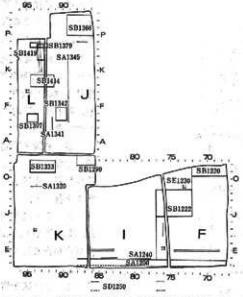


Fig. 2 第14次調査地域の地区割と主な遺構

明瞭になる。

1・24　発掘区南端の北約7mに浅い東西溝を検出。SA1200の雨落溝か。

1・25　I地区の遺構検出終了。

1・26　K地区でSB1333を検出。またSB1290の掘形を一部検出。F地区ではSB1220南側柱穴列を検出。

1・28　降雨のためほとんど作業進展せず。

1・29　K地区西端を掘り下げたが，青灰色砂利まじり粘質土，青色砂の堆積があり，大垣遺構は認められない。SB1333検出。東西棟建物になる可能性あり。F地区SB1220の西妻柱を検出。SB1220の北に接して井戸らしき掘形検出。多量の瓦出土。

2・3　写真撮影準備のため遺構検出面清掃。

2・4　写真撮影。

2・5～6　写真撮影。I・F地区実測準備。

2・10～11　ここ数日の降雨のため排水作業。

2・12　実測準備。

2・13～17　実測。

2・18　下層遺構検出。

2・19　大垣地域の瓦とりあげ。

2・20～26　下層遺構検出。

2・27　SA1200の北雨落溝を西寄りで検出。東へ進むにしたがって浅くなり，不明瞭になる。

2・29～3・9　遺構検出継続。

3・10　F地区SE1230掘り下げ。井戸枠の上部が見える。

3・11　SE1230掘り下げ。枠組みの構造がかなり明瞭になる。

3・12　SE1230掘り下げ。

3・13　SE1230井戸枠とりあげ。背面に文様彩色あることを発見。

3・14　SE1230井戸枠写真撮影。

3・16～19　補足調査。3・19にて上層遺構の調査終了。以後は下層の弥生時代の遺構調査を続行する。

3・23　京都大学小林行雄氏から，SE1230井戸枠に転用されていた彩色棺が『延喜式』隼人司条記載の威儀用棺と一致するとの教示をうける。

B　第15次発掘調査

6ADF—P・R・T地区
1963年12月19日～1964年5月2日

12・19～25　表土排土。

1964・2・22　南北両端から遺構検出開始，P・T両地区とも床土の下約60cmまで暗褐色砂質土が堆積し，瓦片を含んでいる。その下層は黄褐色砂質土であり，その上面まで掘り下げる。P地区はとくに砂が多い。西端で築地痕跡を検出。西南隅で石敷の井戸（SE1591）検出。

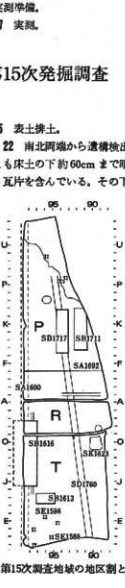


Fig. 3　第15次調査地域の地区割と主な遺構

2・24　暗褐色砂質土排土。T地区では瓦器片の出土が目立つ。西面大垣は明確でない。検出面下約30cmに黄色粘質土層があり，この層には多量の瓦を含んでおり，さらに掘り下げる必要があろう。

2・25　積雪のため作業中止。

2・26　P地区西端で大垣（SA1600）検出。床土下約30cmで青灰色砂質土及び粘質土があり，この層は大垣の下へ広がる。旧地表に近い層であろう。T地区暗褐色砂質土の下は，黒褐色粘質土になる。宮西面南門（SB1616）東南隅の部分で掘込み地業を検出。上部はすべて削平されており，礎石据付け時の根石も残存せず，基壇外構も検出できない。

2・27　P地区暗褐色砂質土の下層が酸化鉄の沈着した面になる。この面で遺構を検出。T地区黒褐色粘質土面露出。北へ掘り進むにしたがって次第に上昇する。

2・28　P地区酸化鉄沈着層の下層は黄褐色粘土層が薄く堆積し，砂層となる。黄褐色粘土層まで瓦器片が含まれている。T・R地区SB1616基壇を検出。

3・1　P地区黄青灰色砂層上面を検出。黒褐色粘質土が溝状に下がる。

3・2　P地区 SA1692の柱掘形を6間分検出。R地区SB1616の北端を確認。門基壇と大垣との造営時の先後関係は明瞭でない。

3・3　P地区SA1692は更に2間分東へ延びる。SB1717の柱掘形を検出。R地区門東北の溝状の下がりは東西溝となって東へ延びる。

3・4　P地区SB1717柱掘形を検出。T地区東北隅に1辺約8mの方形の落ちこみあり，竪穴住居跡か。

3・5　P地区SB1717は7×2間南北棟となる。またSB1717の東に7×2間南北棟SB1711を検出。T地区門基壇東方の黒褐色粘質土面を検出。

3・6　P地区発掘区東端に沿う旧河川の岸を検出。河川埋土は暗灰色砂質土。瓦器を含む。T地区門の東南隅にかかって SB1613の柱穴を検出。柱穴はきわめて小さい。柱穴の底から瓦器片出土。

3・7　P地区旧河川の西岸が西方に曲がる。

3・9～10　P地区岸検出。埋土上層には瓦片が多く見られる。

3・11　P地区川の埋土排土。南から遺構検出再開。T地区南端に小型の井戸2基検出。

3・12　P地区遺構面検出。T地区新たに井戸2基（SE1594・1596）を検出。SE1596底に曲物の側板を据えている。

3・13　P地区SB1717は2×7間でまとまる。T地区西辺部で門の基壇に接続する幅約40cmの南北溝検出。大垣の東雨落溝であろう。

3・14　P・R地区遺構面検出。T地区で新たに井戸（SE1598）1基検出。底に曲物の側板を据えている。

3・16　R・T地区遺構面検出。排水作業に専念。

3・17　写真撮影準備のため遺構面を清掃。写真撮影。

3・18～19　実測準備。

3・21～29　実測。

3・31　井戸（SE1592・1596）発掘。

4・1　井戸（SE1592・1596）発掘。発掘区中央部の古墳時代南北溝（SD1760）発掘。

4・2　SD1760発掘。T地区小型井戸2基（SE1588・1596）発掘。2基ともに底に曲物を使用。実測後とりあげる。

4・3　SD1760発掘。R地区では遺物が多い。T地区東北隅の土壙SK1623発掘。平安時代の土器が混入している。

4・4　午後排水。

4・6　SD1760写真撮影後実測。SK1623土層観察のため，西南4分の1を残し掘り下げる。下層に自然遺物（植物遺体）堆積。

4・7　SD1760実測。SK1623発掘。P地区から埋戻し開始。

4・11　排水作業。

4・14　SK1623発掘。写真撮影。実測。埋戻し作業続行。

4・15　SK1623西南部発掘。埋戻し続行。

4・16～5・2　埋戻し作業。

C　第16・17次発掘調査

6ABX—F・H・I，6ABY—D・E・F・G地区
1964年5月29日～10月25日

5・29　午前中ベルトコンベアー運搬。午後G地区南端から表土排土開始。買収地のため，耕土と床土を同時に排土。能率があがる。

5・30　E地区表土排土開始。

5・31～6・16　表土排土。耕土下の床土は約15cm～25cmの厚さであり，その下層は南半部では含礫褐色土，北半部では黄色砂質土となり，上面に瓦片が散見できる。この面で遺構検出を行う。

6・17　南から遺構検出開始。南端部で含礫褐色土が東西方向に拡がっており，宮大垣（SA1200）の基盤と考えられる。この含礫褐色土は北に向って次第に下がり，大垣の北縁部を検出。北縁部以北は瓦片を含んだ暗灰褐色砂質土が堆積している。東部では暗灰褐色土面から掘込んでいる南北溝（SD1825）を検出。

6・18　SD1825はなお北へ続く。溝底の3カ所に長さ約60cmの角材が据えられている。門（SB1800）の礎石据えつけの掘込み及び抜き穴（以下礎石跡とする）をE地区で1カ所，G地区で2カ所検出。いずれも不整形で径約2mある。根石を1部残し凝灰岩礎石の断片も含む。G地区のSB1800基壇内で柱根の残る柱掘形列（SA1812）を検出。G・E地区で東西溝（SA1200雨落溝）検出。

6・19　E地区で礎石跡を新たに2ケ所検出。SA1812の掘形検出。SB1800掘込み地業北縁でSD1763の延長部を検出。SB1800の北雨落溝か。G地区西半部は灰褐色瓦層の下が地山となり，この面で遺構検出を行う。

6・22　排水作業。G地区東南隅ですでに検出した礎石跡に対応する中央柱通り礎石跡検出。門の桁行は5間であろう。

6・23　SB1800中央柱通りの礎石掘形は，北側柱列より浅い。G地区でSB1800の掘込み地業西端と見られる土層の変り目を検出。

6・24　E地区SB1800中央柱通り礎石跡3カ所検出。E・G地区境界の農道側溝を除去し，礎石跡を南北に2カ所検出。

6・25　降雨のため作業休み。

6・26　SD1763は発掘区東端まで延びる。E地区でSB1800にとりつく大垣（SA1200）の掘込み地業境界を検出。これはG地区のものと対応する。

6・27　遺構検出作業開始後，まもなく降雨のため作業中止。

6・28　E地区SA1200上に約4.2mの間隔で柱掘形検出。いずれも柱根あり。脇門（SB1801）であろう。掘形内側に接して凝灰岩が据えられている。G地区SD1825の両岸に柱根の残る2個の柱穴（SX1830）を検出。

6・30　SB1800以北では地山上面で遺構が検出されるが，中央部の約20m幅の間は地山上に3～5cmの遺物を含まない褐色土の盛土がある。この置き土直上にはバラス層が認められる。E地区SD1844は古い溝SD1860を掘めたてた後に設けられたものである。SD1860からの出土遺物はない。SD1860は宮造営以前の溝か。G地区東西溝SD1893を検出。発掘区西端から約17mで南折する。

7・1　SD1893から南折するSD1890は大きく上下2層に分かれる。上層は瓦を多く含むが，下層は無遺物である。この地域で地山直上に弥生式土器の包含層を検出。この包含層上面で遺構検出を続行。

7・2　中央部のバラスをのせた褐色土はさらに北へのびる。SA1765の柱穴掘形1間分検出。掘形は大きく，一見土壇状である。

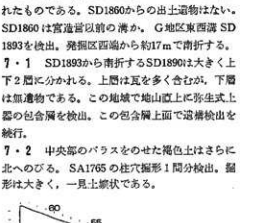


Fig. 4　第16・17次調査地域の地区割と主な遺構

7・3　SA1765の柱掘形をさらに2間分検出。SD1808上層の瓦出土状況を写真撮影。バラスをのせた褐色土はSB1800の北約15mまで延びる。

7・4　バラス敷きは北へ掘り進むにつれて残存していない部分が多いが，バラス下の褐色土はなお北方へ続く。

7・6　褐色の置き土はなお続くが，バラスはほとんど見られない。SD1890下層溝を追求。

7・7　E地区褐色土は門北方約30mでとぎれるため再び地山直上面で検出作業。G地区バラスは削平されているが，褐色の置き土は続いている。

7・8　E・G地区とも，弥生時代の土器，溝状遺構を検出したのみ。E・G地区の遺構検出完了。

7・10　雨のため午後から調査。D・F地区の遺構検出開始。新たな遺構なし。

7・11　全体的に地山が砂質を含み，北へ進むにしたがって次第に高まる。SD1790はD地区南半部で西へ屈曲する。

7・13　弥生時代の小溝・小穴が僅かに検出できるのみで，奈良時代の遺構の検出なし。

7・14　特記すべき遺構なし。黄褐色砂質土層上面の検出続行。瓦片の出土がやや多くなる。

7・15　黄褐色砂質土面の検出続行。

7・16　黄褐色砂質土面の検出続行。6ABY地区は終了。6ABX地区に入る。

7・17　I地区にて幅の狭い南北溝を数条検出したのみで，他に顕著な遺構なし。

7・18　F地区北部で東西溝SD1794検出。

7・20　午前中排水作業。黄褐色砂質土面の検出続行。顕著な遺構なし。

7・21　F地区は浸水のため，H地区北端部のみ遺構検出。2条の南北溝SD1900・1944を検出。SD1944埋土中に須恵器や瓦片を含む。

7・22　H地区東部でSK1949検出。陶棺片が出土。SD1900・1944はなお南へ延びる。

7・23　F地区幅約3mの浅い南北溝SD1860を検出。H地区未検出のSD1900・1944南延長部を確認。

7・24　F地区SD1794はSD1844とT字形に接続することを確認。H地区顕著な遺構の検出なし。

7・25　6ABX西半部I地区の遺構検出開始。

7・27　E地区SD1844・1860を検出。SD1844埋土中に瓦片を含む。I地区特に変化なし。

7・28　6ABY西半部で再び遺構検出。6ABX—I地区SD1900・1944検出。

7・29　I地区でSD1900・1944検出。他地区は特に変化なし。

7・30　I地区でSD1900・1944検出。他は特に変化なし。

7・31　SB1800から北方へ幅約20mまで続くバラス面を一部で除去したところ，バラス直下から

土器片出土。全面除去できるか。

8・1　E地区バラス面除去。黄褐色砂質土面検出。須恵器・瓦片出土。F地区SD1900の掘り下げ。

8・3　G地区 SB1800の北半部全面検出にそなえ発掘区中央を南北に走る農道西壁をけずり，堆積土を調査。F地区SD1900検出。

8・4　F地区 SD1900 検出。他地区では新たな遺構の検出なし。

8・5　SD1900上層はF地区の南辺ちかくで西折。この付近では，軒丸瓦を含む多数の瓦が堆積。

8・6　写真撮影準備。遺構検出面清掃。

8・7　SB1800基壇検出面清掃。SB1800にかかる農道跡層を削る。

8・8～10　写真撮影。

8・11　農道除去。

8・12　農道下でSB1800基壇地域精査。礎石跡及びSA1812柱根形と抜根検出。SA1812の掘形は，SB1800礎石抜取痕跡を切って掘込んでいる。なお道跡下でも階段痕跡は認められない。西脇門（SB1802）検出。東柱穴掘形が遺存。拡張部の写真撮影。実測準備。

8・13～15　実測準備。

8・17　実測開始。

8・18～25　実測。

8・26　実測終了。6ABXの補足調査開始。SD1900北端下層から陶棺蓋，須恵器甕破片等出土。

8・27　SD1900が上下2層に分れることが明瞭になる。両層ともに遺物を含む。

8・28　SD1900から木栓・加工木片・土器・陶棺片出土。I地区西北から東南に斜行する溝検出。幅約4m，深さ1.5mまで掘り下げたが，なお証に達しない。

8・29　調査開始後，まもなく降雨のため中止。

8・31　SD1900検出。SD1860は6ABY—D地区にも延びてくる。灰褐色砂質土が堆積し，土器片を僅かに含む。I地区斜行溝は湧水著しく，作業難航。

9・1　SD1860はD地区になお続く。I地区斜行溝は約2m掘り下げて土層を観察。地山の砂層が広く拡がり，それを切って浅い溝が掘られていることが判明。

9・2　I地区斜行溝埋戻し。D地区 SD1860 検出。F地区 SD1900 検出。

9・3　D地区 SD1860 検出。D地区の南端部では0.1m程度の浅いものとなる。

9・4　E地区SA1765精査。F地区SD1900検出。

9・5　E地区SD1808下層検出。SA1200の犬走り部まで延びることを確認。F地区東西溝SD1910はSD1900下層とは連ならず，上層溝に接続するものである。SD1900下層はさらに南へ延びる。

9・7　SB1800中央部で基壇築成状況の調査。SA1200基部の築成状況をE地区・G地区各中央部で精査。SB1800は検出面から約1.4m掘り下げても掘込み地業の底に達しない。下部では径20～30cmの玉石がよく突き込まれている。SA1200はE地区・G地区ともに犬走り部からの掘込み地業が見られる。SD1900下層は南にもなお続く。

9・8　SB1800基壇は，遺構検出面から掘り込み地業底まで約1.6mある。底部ははぼ平坦で，礫混り淡黄黒色土を約30cmの厚さで固めている。大垣の掘込み地形の深さは約0.45mである。G地区SB1800北西部で奈良時代面より下の木炭を含んだ層を発掘。土器を含む。SD1900の堆積状況をQラインで写真撮影及び実測。

9・9　SD1900には，下部砂層に打込まれた杭と堰の施設あり。これより南方では溝幅が広くなり，下部砂層の堆積が厚い。G地区奈良時代下層の木炭層を試掘。木炭層出土の土器は，SD1900下層とはぼ同型式のようである。この層は，大垣犬走り積土下に入る。SX1830の柱根を底まで現わし実測。農道復旧。

9・10　SD1900南端は，SB1800基壇掘込み地業で切られている。SX1830の柱根を写真撮影。

9・11　東西両脇門の柱掘形断面調査。SD1900内の溜SA1812を縮尺10分の1で実測。

9・12　下層遺構の写真撮影。実測。

9・14　下層遺構の写真撮影。柱根取り上げ。東脇門唐居敷き，縮尺5分の1で実測。発掘区南端から埋め戻し開始。

9・15　6ABX—H地区南端でSD1900発掘。実測。埋戻し作業続行。午後からブルドーザー2台投入。

9・16　6ABY—F地区北端でSD1900を発掘。実測。調査終了。埋戻し作業続行。

9・17～24　埋戻し作業。

10・25　ベルトコンベアー。遺器材撤収終了。

D　第18次発掘調査

6ADE—P，6ADF—J・K地区
1964年5月2日～6月13日

5・2　器材運搬・トレンチ設定。

5・4～13　耕土掘土。

5・13　地区設定。

5・14～19　床土排土。

5・19　K地区から遺構検出開始。床土直下は暗灰色粘質砂土。川の埋土と思われる。

5・20　K地区南端では床土下約1.7mで地山になる。その間は，暗灰色粘質砂土の堆積である。

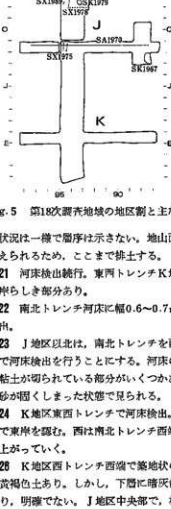


Fig.5　第18次調査地域の地区割と主な遺構

堆積状況は一様で層序は示さない。地山面が河床と考えられるため、ここまで排土する。

5・21　河床検出続行。東西トレンチK地区南部で河岸らしき部分あり。

5・22　南北トレンチ河床に幅0.6～0.7mの南北溝検出。

5・23　J地区以北は、南北トレンチを西半部3m幅で河床検出を行うことにする。河床のバラス混り粘土が切られている部分がいくつかあって、黒色砂が固くしまった状態で見られる。

5・24　K地区東西トレンチで河床検出。東半中央部で東岸を認む。西は南北トレンチ西端から次第に上がっていく。

5・26　K地区西トレンチ西端で築地状のバラス混り黄褐色土あり。しかし、下層に暗灰色砂質土があり、明確でない。J地区中央部で、杭を6本ずつ「ハ」字形に打ち込んだ遺構SX1975検出。

5・27　J地区西端で築地状遺構検出。補足調査で検討することにする。JM92で柱根の残る柱掘形検出。P地区遺構検出開始。河床に瓦堆積。

5・28　J地区東トレンチでSA1970の柱穴列検出。約2mの間隔で7個検出。柱根の残るものあり。川の対岸で同様の間隔で5個検出。最東端の柱穴から北へトレンチを拡張したが、柱穴は検出できなかった。写真撮影。実測準備。

5・29　J地区のSA1970は南北トレンチ内でも検出。東西一連のものとなる。実測。

5・30　J地区からP地区にかけて、南北杭列2条を2カ所（SX1982・1989）で検出。J地区中央部で検出した「ハ」字形杭列と同様のものであるが、これは北で東へ若干ふれている。実測並行。

6・1　P地区南北トレンチ西壁沿いが一段高くなる。川の西岸か。J地区からP地区にかけて検出した杭列東側を拡張。小杭数本と横転した材を検出。実測並行。

6・2　南北トレンチJ・P地区拡張部で杭列検出。5・30検出のものと一連である。南端の土壙SK1979から木質出土。

6・3　木質出土のSK1979拡張。拡張部写真撮影。土層図作製。

6・4　P地区東西トレンチ以南の南北トレンチは全面的に拡張。当初の6m幅で遺構検出。K地区東西トレンチで土層の状況観察のため幅50cmの小トレンチを設定。川の東岸は発掘区西端から約10mで検出。実測。

6・5　SK1979から木質2点出土。土壙のほぼ全形が明らかになる。木炭が多量に見られる。実測を続行する。

6・6　SK1979内で検炭の堆積した小土壙検出。SK1979の発掘終わる。写真撮影後実測。埋戻し作業開始。

6・7　埋戻し作業。

6・8　SX1982の層序調査。埋戻し作業並行。

6・9～13　埋戻し作業。

E　第23次発掘調査　6ABA—N，6ABN—B地区

1964年10月3日～11月19日

10・3　測量基準点設定。発掘器材運搬。表土排土開始。北端部では約40cmの盛土があり、その直下は含礫褐色土となる。大垣築土の可能性あり。南半部は、水田耕作土上に約50cmの盛土あり。

10・4～10　盛土排土。

10・12　耕土排土。

10・14　発掘区に北接する畑地に幅3m，長さ15mの南北トレンチを設定。耕作土排土。

10・15　N地区北辺で大垣SA2300基底部と内側犬走り、外側溝地の一部を検出。以南は、中世以降の溝、小穴などでかなり攪乱されている。

10・16　状況は大きく変化せず。

10・17　SA2300上面に、中世の遺物を含む幅1mの東西溝あり。水の流れた痕跡なし。あるいは中世の築地基礎か。SA2300南に奈良時代の柱穴数個検出。建物としてまとまらず。

10・19　北トレンチ設定。SA2300北約7mの位置に幅1.2mの瓦敷きを検出。築地と瓦敷きの間は埋地か。

10・20　写真撮影の準備。

10・21・22　写真撮影。

10・23　実測準備。北トレンチを北へ12m延長。

10・24　実測。北トレンチ溝状の落ち込み小穴以外顕著な遺構なし。

10・26　顕著な遺構なし。

10・27　北トレンチ写真撮影。SA2300精査のため1.5m幅のトレンチ設定。大垣は版築によって構築されている。

10・28　SA2300構築にあたって，掘込み地業はなされていないが，幅約1.4mで地山が約15cm下げられ，その上に版築が行われ9層の残存が認められる。北方はなだらかな傾斜をもって整地が行われており，塀地と考えられる。大垣部分写真撮影。

10・29　版築下層に大垣構築以前の土壙検出。

10・30　大垣下層の土壙は1辺2.2mの柱掘形であることが判明。6m西を発掘したところ，同規模の掘形を検出した。

10・31　SA2300下の柱穴列検出のため，東西トレンチ設定。約2.2mの掘形6個が約2.8m間隔で並ぶことが判明。築地以前の塀であろう。午後からブルドーザーによって6ABN区埋め戻し開始。

11・1～5　埋戻し。

11・6　6ABA区発掘開始。西の一部を除き床土排土終了。

11・7　床土排土終了後，西方から遺構検出開始。近世の土壙・溝・井戸などでかなり攪乱を受けている。

11・9　遺構検出面攪乱多し。

11・11　近世の小土壙著しく，顕著な遺構の検出なし。

Fig.6　第23次調査地域の地区割と主な遺構

11・12　柱穴と思われるもの数個検出。建物としてまとまるものはない。

11・13　小柱穴の数は増えつつあるが，建物遺構としてまとまるものはない。中央部に東西溝検出。堀土内に土師器，須恵器が多量に含まれている。

11・14　東西溝の検出続行。遺物は前日と同様，土師器・須恵器を含む。写真撮影準備。

11・16　写真撮影。実測開始。

11・17　実測。

11・18　実測終了。午後からブルドーザーにて埋戻し開始。

11・19　埋戻し完了。

F　第25次発掘調査

6ADD―Q，6ADE―K・L・M地区
1965年3月27日～10月2日

3・27～4・9　上土排土。

6・24　地区杭打ち。

6・24　北端から遺構検出開始。床土下は厚さ約15cmの灰褐色砂質土，そして約60cmの黄褐色粘質土となる。灰褐色砂質土層を除去し，黄褐色粘質土面で遺構検出を行う。柱穴4個検出。

6・26　中央部で南北に並ぶ柱掘形をいくつか検出したが，まだ建物としてはまとまらない。

6・29　小穴数個検出。灰褐色砂質土から藤原宮式軒平瓦片（6641E）が出土したが，9～10世紀の土器片も含んでいる。全体的に遺物の出土量は少ない。

6・30　灰般不良のため，灰褐色砂質土の排土にとどめ，遺構検出行わず。

7・1　中央部柱掘形列は，南北塀（SA3680）であることが判明。さらに南へ延びるもよう。SA3680の東に SB3690を検出。桁行6間以上，梁行2間でまとまる。1部で掘形の重複があるが，柱土はよく似た土質であり，判別困難である。灰褐色砂質土層の中間に黒褐色土の認められる部分あり。この層から土師器が出土。明日，広げて調査する予定。

7・2　灰褐色砂質土層間層の調査を行う。黒褐色土層は鬼化鉄が沈殿して形成されたもので，3×2mの楕円形に広がる。この層を除去し，土壙（SK3675）であることを確認。大量の土師器出土。

7・3　砂質土面で遺構検出に努める。東西・南北，それぞれの方向の小溝を3条検出したのみである。黄褐色粘質土面検出。Q地区西南隅で富西面中門（SB3600）基壇東北隅地形を検出。

7・5　午前中降雨のため，午後から作業。状況不良のため床上排土のみにとどめ，遺構検出は行わず。

7・7　午前中床土排土。午後遺構検出に移る。門 SB3600 基壇の東側込み地業境界が不明瞭ながら認められる。基壇検出面に敷条。東西方向の溝状遺構あり。きわめて浅い。上層から切込んでいる。水田耕作時の溝か。発掘区東辺，ほぼ門の中

軸線上に幅1.5mの黄色粘質土面検出。性格不明。検討を要す。

7・8　中軸線上の黄色粘質土はさらに広がる。K地区北端で柱穴を数個検出したが，対応するものなし。

7・9　E地区中央部から南へ，削り残した黄褐色土面の検出を行う。SA3680の続きを検出。

7・10　Q地区南端部で小穴多数検出。午後からL地区の表土排土開始。

7・12　Q地区南端部から検出面の土質が黄褐色土斑混入の黒色土に変化する。これは整地土かと考えられる。そしてこの上に門中軸線上に見られた黄色粘質土がのっている。この黄色粘質土は南に広がっていくもよう。

7・13　天候不順のため，L地区の表土排土。

7・14　K地区北部から南は黄色粘質土が砂質土に変わる。この面で柱穴や関連遺構は見られない。

7・15　門基壇南側はかなり削平されており，検出困難である。

7・16　K地区砂質土面削平。浅い東西溝の底は黄色粘質土であり，これはL地区に連続するものである。L地区黄色粘質土面での遺構検出。SB3640検出。この建物の西南隅を古墳時代の溝が斜走している。SA3621の柱穴4個検出。

7・17　K・L地区ともに表土排土。

7・19　SB3640の北廂柱穴列検出。SA3590掘形列は，Q地区で検出したSA3680に連なるものであろう。SD3630検出。

7・21　雨のため，1時間程度で作業中止。

7・24　SB3600掘込み地業の東南隅を検出。東に土壙SK3650検出。この土壙内ではSA3590の掘形は検出できない。L地区表土排土終了。

7・26　SA3590はL地区南端まで延びる。L地区南端で井戸SE3605検出。薄い板での井戸枠が認められる。底に玉石が多量に見られる。

7・27　SD3630は北へ進むにつれて次第に浅くなり，SB3600の東南で消滅する。SA3590をL地区南端まで発掘。

7・28　L地区東南隅で井戸SE3595検出。M地区黄色粘質土面は，遺構検出面としてL地区と連続する。

7・29　6ADD－Q地区，6ADE－K・L地区ほぼ終了。M地区の遺構検出続行。SA3590はM地区においても検出。東端で柱掘形数個検出。

7・30　西半部検出面はバラス混り褐色土に変化し，次第に広がりを見せる。最終的には除去し得るものと思われるが，この面での検出を続ける。東北寄りで土壙検出。井戸の可能性あり。

7・31　西半部，バラス混り褐色土面検出。

8・2　バラス混り褐色土面検出。

8・3　バラス混り褐色土面検出。東部で柱穴を数個検出。

8・4　西南隅で，黄褐色土面検出。この面は東に向って下がる。東部でSA3555・3563，SB3560の柱穴検出。

8・5　黄褐色土面にバラスが混じる。旧河道の底と考えられる。

8・6～7　旧河道底追求。

8・9　旧河道の岸辺求。河底は黄褐色バラス面であり，西岸はこのバラス土が岸になっている。東側では青色粘質土にかわる。

8・10　旧河道東岸は北西に延びる。西辺部で西面大垣SA1600犬走りと思われる面あり。

8・11　旧河道東岸は蛇行して西折する。犬走り部からの瓦の出土多し。

8・12　旧河道を調査。

8・13　写真撮影準備のため，遺構検出面清掃。

8・16　SB3690の北部2柱掘形位置で，入念に掘形を探索したが検出できず。写真撮影準備のため，遺構検出面清掃。

8・17　写真撮影。

8・18　写真撮影。実測準備。

8・19　実測準備。

8・20～21　実測。

8・23～28　奈良時代以前の溝SD3620発掘。両岸はかなりきりたっている。

8・30　M地区中央部西半に東西トレンチ設定。旧河道の調査。東側では東南部でSB3560の柱掘

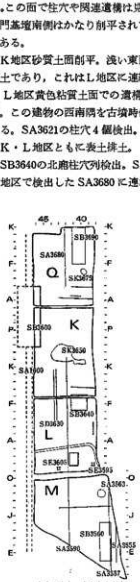


Fig. 7　第25次調査地域の地区割と主な遺構

形を検出。

8・31　西半部にトレンチを入れ，土層調査。大規模造成土と考えられる土層を数問確認。その下層は黒色土である。この黒色土が旧河道の岸になる。

9・1　西側トレンチ土層図作製。東南部のSB3560が7×2間南北棟にまとまる。SB3600基壇築成状況調査のため，トレンチ設定。

9・2　SB3600基壇調査。

9・4　M地区のトレンチ調査。

9・6～8　M地区の土層図作成。

9・11～13　M・Q両地区の土層図作製。

9・15～10・2　埋戻し作業。

G　第25―2次発掘調査

6AGC―D地区
1965年7月7日～7月24日

7・7　南北6m，東西60mのトレンチを設定。すでに盛られている約1mの整地土をバックフォーを使用して排土。

7・8　整地土排土。

7・9　整地土排土。東方から遺構検出開始。灰褐色粘土質土面を遺構面と予想して発掘。本日は顕著な遺構なし。

7・10　整地土の排土終了。若干の遺物が散在するが数条の南北方向の小溝以外には遺構なし。灰褐色粘土質土面は，東方ではやや砂質を含むようになる。

7・12　トレンチ中央部で小柱穴を検出したが，建物としてまとまるものではない。

7・13　トレンチ西部南壁寄りで柱穴を2個検出した。その北側に凝灰岩を含んだ直径30cm前後の石が散在し，この付近は東西方向に暗褐色土の広がりがある。

7・14　暗灰褐色土の広がりは中世の溝状遺構となる。トレンチ東端から1mの位置に，南北溝SD3699の西岡を検出。

7・15　SD3699を掘り下げる。上層は暗褐色粘質土，下層は，黒色粘質土が堆積している。壁面は強い傾斜をもっているが底面はトレンチ外になる。位置，規模から宮の西外堀と考えられる。トレンチ中央部で浅い南北方向の溝状遺構を検出。四一坊大路西側溝の可能性もある。

7・16　写真撮影。

7・17　降雨のため実測できず。午後から中止。

7・19　実測。補足調査に移る。東半部でトレンチ南壁に沿って幅1.5mで掘り下げる。遺構検出面（灰褐色粘質土）の下層は，青灰色砂土が約0.25m堆積し，その下層は有機質を含んだ暗青灰色砂土となるが，湧水が激しい。

7・20　トレンチ西半部の補足調査。不明確であった西側の溝（SD3698）を検出。上層からは瓦器片が出土。下層からは藤原宮式を含む瓦類や施釉陶片が出土。

7・24　土層図作製。調査終了。

H　第34次発掘調査

6ACA―C・D・E地区
1966年5月12日～5月26日

5・12　調査開始。表土排土。

5・13　床土が約15cmあり，この下が地山となるため直ちに遺構検出。D地区中央部で東西溝（SD4315）検出。宮の外堀か。

5・14　SD4315調査。検出面はかなり削平されており，中世以降の溝であることが判明。

5・16　D地区の遺構検出終了。E地区を開始。D・E地区中間の通路面がすでに地山面にちかいことを確認。E地区の遺構検出面はそれより約1m下である。検出遺構なし。

5・17　E地区では近年の瓦用土取り跡の他，検出遺構なし。C地区の調査開始。

5・18　C地区，3m間隔で柱掘形を3個検出。D・E地区，遺構検出面清掃後写真撮影。ひき続き実測準備。

5・19　C地区，トレンチを北へ約12m延長。しかし，延長部では後の攪乱があり小規模な井戸を検出したのみで柱穴は検出できない。D・E区実測。一部埋戻し開始。

5・20　C地区，遺構検出終了。写真撮影後，実測にとりかかる。D地区，実測終了。

5・21　雨もようのため，埋戻し作業のみ。

5・23　C地区，実測，D地区，埋戻し作業。

5・24　C地区，実測，南端部で土坑（SK4319）検出。D地区，埋戻し作業。

5・25　C地区，SK4319は約2mの深さまで掘ったが，底が出ない。D・E地区，埋戻し。

5・26　SK4319の底部を確認。底部にちかい埋土から平安時代の瓦片が出土。実測図作製。調査終了。

I　第52－2次発掘調査　6ADC－P・R地区

1969年5月8日～6月6日

5・8　R地区，土層観察のために，幅0.5mの東西トレンチを15m設定。床土下は暗褐色砂質土で黒色土器を含む。その下層の青灰色砂質土面を遺構検出面とする。

5・9　東西15m，南北4.5mのトレンチを設定。青灰色砂層面まで掘上。東半部で幅約4.5mの南北溝SD6200を検出。深さ約0.5mで埋土に土器片を含む。写真撮影。

5・10　西半部を掘り下げるが，検出遺構なし。

5・12　実測。実測終了後，土層調査のために数ケ所を掘り下げる。

5・13　土層調査。

5・14　土層図作製。R地区調査終了。

5・30　P地区の調査開始。東半部に南北溝らしき凹みあり。

5・31　東の凹みは南北溝（SD6200）となる。埋土は大きく2層にわかれる。上層は砂層，下層は粘質土であり，いずれにも少量の瓦や土器片を含む。

6・2　SD6200調査。写真撮影。

6・3　雨のため作業中止。

6・5　実測。調査終了。

6・6　埋戻し終了。

J　第58次発掘調査　6ADH－O・T地区

1969年9月22日～10月4日

9・22　東西25m，南北3mのトレンチ設定。排土開始。

9・23　雨のため作業中止。

9・24　O地区排水作業。T地区に東西24m，南北3mの東西トレンチに直交して東西3m，南北9mのトレンチを設定。排土開始。

9・25　T地区，排土作業，O地区，遺構検出につとめる。

9・26　T地区トレンチ西端で落ちこみあり。鉱滓出土。この東は，小鍛冶場と伝えられる跡か。O地区，遺構検出につとめる。

9・27　T地区，小鍛冶縁跡調査。遺構なし。出土遺物なし。写真撮影。O地区写真撮影。

9・29　T地区，小ピット検出。瓦器片出土。

9・30　O地区，西北に小トレンチを設定して発掘したが，検出遺構なし。T地区，小穴数個検出。

10・1　O地区埋戻し開始。

10・2　O地区埋戻し。T地区，南北トレンチで柱根の残る柱掘形4個検出。写真撮影。

10・3　O地区埋戻し終了。T地区，実測。埋戻し開始。

10・4　T地区の柱掘形から瓦器片出土。埋戻し終了。

K　第62次発掘調査　6ABN－X地区

1970年1月7日～1月21日

1・7　調査開始。排土作業。

1・8　排土作業続行。

1・9　遺構検出開始。床土の下層は厚さ約30cmの暗褐色粘質土であるが，これには機瓦や陶器片が含まれる。暗褐色粘質土を排土し，地山面で遺構検出を行う。

1・10　中央部で土壙を検出。近世の遺物が多数出土。

1・12　検出面は攪乱が著しく，近年の土坑や小穴が多い。

1・13　状況は前日と変らず。写真撮影。

1・14　実測準備。

1・16　実測。埋戻し開始。

1・17～21　埋戻し作業。

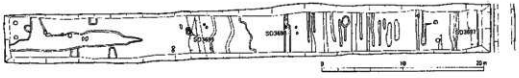


Fig. 8　第25－2次調査地実測図

第Ⅲ章　遺　　跡

1 遺 跡 序 説

今回報告する調査地は，宮城の各地域におよんでいる。すべての調査が宮城門と宮の大垣の実態を把握することを目的としていた。調査結果はおおむね初期の目的を達し得たものであり，宮城門3・脇門2，そして宮の大垣を南面・西面・北面で確認することができた。しかし，それぞれの調査地が宮の大垣に近接した地域であったため，建物遺構は概して少なく，またその重複関係もほとんど認められなかった[1]。発掘総面積298.2aに対して検出したおもな遺構は建物22，築地3，塀22，溝15，井戸14，土壙10である。

本章の構成

遺構各説においては，調査次数の順でなく，朱雀門地区（第16次・17次），玉手門地区（第15次），佐伯門地区（第25次），西南隅地区（第14次），玉手門・佐伯門中間地区（第18次），北面大垣地区（第23次）の順で述べ，その後その他の地区を述べることにする。

それぞれの地区での遺構は番号順に説明し必要に応じて遺構相互の関係にもふれる。

掘込み地業および版築

検出した遺構の種類は上掲のとおりであり，用語については『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に準じたが[2]，今回の報告ではとくに掘込み地業，版築の用語を使用した。

基壇を築くためには，ほぼ基壇の大きさで地耐力の十分な地山が露出するまで掘鑿する。そしてその底から粘土・山砂を1～2cm，厚い場合は10cm程度の厚さに積んで突き固め，これをくりかえす。このような一連の地業を「掘込み地業」とよび，薄く盛った土を層ごとに突き固めていくことを「版築」と称する。版築は「掘込み地業」内のみで行われるのではなく，基壇地上部分，また大垣や宮内の築地においても行われている。

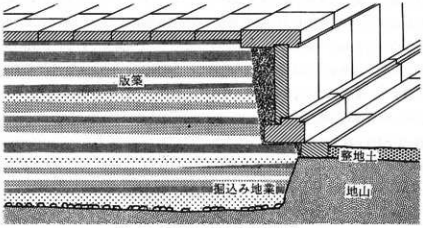


Fig. 9　掘込み地業による基壇模式図

1）第14次調査においては，下層から埋蔵施設を含む弥生時代後期の大規模な集落跡を発見しているが，この報告は別の機会にゆずる。横山浩一・工楽善通「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」（『年報』1965年）pp.30。

2）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』内裏北外郭の調査　奈良国立文化財研究所学報第26冊 pp.21。以下『平城宮報告』と略す。

2 遺 構 各 説

A 朱雀門地区（6ABX，6ABY区）

調査地は宮南面中央門地区であり，南北約130m，東西約80mの広大な地域である。この地域の現状は水田がほぼ平坦に連なっている。遺構検出面は，おおむね表土面下30～40cmにある暗褐色ないし灰褐色の粘質土面であるが，南半部では後世の整地土直下の砂質土（地山）面が遺構検出面となった。地山面の比高差は，当発掘地の南北距離約130mの間で，北端と南端とでは約0.2m程度であり，おおむね平坦であるといえよう。

検出した主要な遺構は，宮南面中央門（朱雀門）SB1800とそれにとりつく南面大垣SA1200，SB1800の中心から東西それぞれ約29m離れた位置でSA1200に開く脇門SB1801・1802，SB1800の北にのびているバラス敷き宮内道路（SF1950）の両側溝SD1860・1900をはじめとするいくつかの溝，SB1800基壇上に設けられた塀SA1812，またSB1801の北約9mの位置にある東西塀SA1765などがある。また広場SH1850は門のすぐ北側にあり，SD1790とSD1890とが広場の東西を画している。

SA1200（PLAN. 2・4，PL. 3・6）

宮の南面大垣であり，基底部と北側犬走り部を検出した。これは第14次調査地域（6ADH）で検出した大垣の東延長部である。基底部はおおむね北半部を検出したにすぎないが，SB1800（朱雀門）東妻にとりつく部分ではSB1800の南北心から1.75mの位置に北縁がある。この位置では，心を折り返した3.5mの幅に復原できる。大垣北縁はSB1800の東約12mの位置で約0.4m，角をもって南によるので，南面大垣は，基底部幅がSB1800よりがとくに広くなっていたことがわかる。大垣基底部と北側雨落溝との間は約3.5mが平坦面で，犬走りとなっている。

大垣北側一帯は宮当時の旧地表と地山がほぼ一致し，砂混りの黒色粘質土からなり，この上面から大垣基底部とほぼ同じ範囲で深さ0.35～0.4mに掘込み，そのなかを丁寧に版築している。築土は掘込み線の約3.5m北側まで広がっており，これが犬走りの基礎となっている。なお，大垣掘込み地業はSB1800と接する位置でその掘込み地業によって切断されている。

大垣心から北約5mにある東西溝（幅約0.5m）は大垣の北雨落溝である。SB1800の東では（溝の深さ約0.2m）基壇東縁には達せず北へ斜行し，SB1800基壇の東約5mにある南北溝SD1790に接続する。溝中には藤原宮式瓦が多量に落ちこんでいた。SB1800の西側においても（溝の深さ約0.4m）SB1800基壇西縁には達せず，約13m西側で南北溝SD1890に接続する。

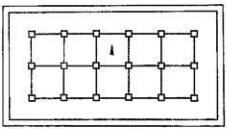
SF1761 付 **SD1764**（PLAN. 2・4，PL. 9）

SB1800東の宮内東西道路である。路面幅は約6.5mある。SA1200北雨落溝を南側溝とし，SD1764（幅0.8m強，深さ0.2m）を北側溝としている。

SA1765（PLAN. 2・4，PL. 9）

宮内道路SF1761の北側溝（SD1764）にちかく設けられた掘立柱東西塀である。西端は南北溝SD1790に接し，発掘区内で柱掘形を4間分検出したが，さらに東へ延びるであろう。柱掘形は長方形（1.2×1.7m前後，深さ0.8m）で大きい。柱根は残っていないが，各掘形からみて，柱間寸法は2.76mとなる。

SB1800 付 SD1763 (PLAN. 2・4, PL. 3～6)



宮の南面中央門，即ち朱雀門である（以下SB1800は朱雀門と称する）。礎石の抜取り痕跡を東西方向（桁行）で5間分，南北方向（梁行）で1間分，それぞれ5.05m間隔で検出した。南の列はSA1200の中心にあたるので，梁行2間に復原できるが，これは発掘区外である。根石は20～35cm大のものが多く，強く突き固められた褐色含礫土面で検出した。基壇の基礎は掘込み地業がなされている。掘込み地業の範囲は，梁行中央柱列を折返すと16.2mになる。掘込み地業に際しては褐色砂質土の地山面まで削平排土し，この面からほぼ基壇の範囲を1.5～1.6mの深さで穴を掘り，底にまず10～30cmの礫をおき砂質土や小礫を含んだ土で互層に築きあげていく。それぞれの築土の厚さは薄いところで約8cmであるが，厚いところでは50cmちかくある。

門の平面規模は桁行方向で25.25m，梁行方向で10.10mあり，柱間寸法は桁行・梁行ともに5.05mの等間になる。基壇はその出を約4mとした場合，ほぼ東西33.25m，南北18.10mに復原することができる。この規模は，掘込み地業の大きさとおおよそ一致する。北面階段の痕跡は確認できなかった。基壇検出面から出土する瓦は藤原宮式のみである。基壇の北に接する東西溝SD1763（幅0.9m強，深さ0.3m）は雨落溝の位置，あるいは基壇地覆石もしくは延石が据えられていた位置に相当するが，地覆石や延石を抜き取った痕跡は認められない。また基壇の位置をはずれると幅約0.5mと狭まってSF1761中央部を東方へ続くので雨落溝とも決めがたい。

SB1801 (PLAL. 2・4, PL. 3・7・8)

朱雀門の東脇門である。朱雀門との心々距離は28.9mある。南面大垣SA1200の心にあわせて掘立で穀柱2本をたてた穴門である。柱掘形（径0.7m，深さ0.6m）には柱根（径0.4m）がいずれも残っていた。柱間寸法は4.3mである。柱の下に直径20～30cmの石や丸・平瓦を入れこんでいる。柱の高さをそろえるためであろう。柱の内側北に接して凝灰岩切石（東40×50cm，西30×40cm，厚さ東西とも15cm）が据えられている。これは扉の取付けのための唐居敷の礎石である。

SB1802 (PLAN. 2・5, PL. 7・8)

朱雀門の西脇門である。SB1801と同じ掘立柱立ちであるが，後世の攪乱のため，東の柱掘形（径0.4m，深さ0.65m）を検出したのみである。柱（径0.3m）は柱掘形の底にそのまま据えている。朱雀門と東脇門の心々距離を折り返すと検出した柱の西2.3mの位置になるので，朱雀門の東西等距離に両脇門が設けられたことが明らかである。柱の内側には大小（径10～40cm）の石を敷個おいている。

SA1812 (PLAN. 2・4, PL. 3・8)

朱雀門基壇北縁に設けられた方形掘形（1辺0.5～0.7m，深さ0.4m）の東西塀であり，7間分検出した。東端の掘形が基壇東北隅にあるので，さらに2間分西にあった可能性が認められる。東第1・4掘形以外の6個に柱根が残っていた。いずれも1辺20cm前後の角柱である。

3）模式図の記号　●柱根をとどめる掘形　◉柱痕跡をとどめる掘形
○頭立柱掘形　□礎石抜取痕跡　…推定　Aは北をしめす。

SD1825（PLAN. 2・4，PL. 4・12）

朱雀門の基壇西端近くを掘込んだ南北溝（幅2m，深さ0.2m）で，朱雀門廃絶後のものである。溝の北端は朱雀門の北約6mの位置にある。溝の中で角柱状木材を2本ずつ2ケ所（SX1831・1832）に据えた状況で検出した。また直径10～20cmの礫が散在しているが，これは朱雀門西北隅の根石が落込んだものであろう。

SX1830（PLAN. 2・4，PL. 4・12）

SD1825の北端近くで，この溝をまたぐように設けられた掘立柱2本の構築物である。柱掘形はやや不整円形（径1.1m～1.2m，深さ1m）で漏斗状に掘込まれている。柱根（径東0.5m，西0.4m）がいずれも残っており，先端を尖らせている。

SX1831・1832（PLAN. 2・4，PL. 4・12）

SD1825の底に角柱状木材を2本ずつ据えた施設である。角材はいずれも幅25cm，長さ75cm，厚さ20cm前後のものである。角材よりひと回り大きい掘形を掘り，角材の上面が10～15cm溝底より上になるように据えている。SX1831とSX1832とは約5m離れており，それぞれの角材の間隔は1mある。SD1825の深さからして，これらの角材は木樋据えつけの台と考えられ，SX1830は木樋に関連した施設，例えば宮廷絶後の開田に伴う灌漑用水汲上げのための水車の支柱のごときものが考えられる。

SH1850付SD1790・1810・1890・1910（PLAN. 2・4，PL. 4・10）

朱雀門北側の広場で，東西51m，南北37mの範囲である。東は南北溝SD1790（幅1.2m，深さ0.6m）で，西は南北溝SD1890（幅0.8m，深さ0.6m）で画し，北は東半を東西溝SD1810（幅0.8m，深さ0.1m）で，西半を東西溝SD1910（幅0.7m，深さ0.15m）で画し，中央部は南北道路SF1950に連なる。この広場は朱雀門の心に対称ではなく，西が9m広く，西を画す南北溝SD1890を西脇門SB1802の西柱位置に合わせている。

SX1891（PLAN. 2・5，PL.11）

SD1900Aの6ABY区中央部で杭と小枝を使用した堰を検出した。SD1900Aを横断して幅2.3～2.5mで3段に組まれている。その状況はかなり密で，直径約8cmの杭を5本ないし6本打込み，それに小枝を交互に通して編むようにからみつけている。各段の間隔は約0.5mである。3段目の南側は水流によって溝底がえぐられ，約0.2mの段差が生じている。

SK1949（PLAN. 2）

直径約0.8mの小土壙である。検出面からの深さは約0.1mで浅い。玉石数個とともに，須恵質の家形陶棺蓋の破片が発見された。なお，この陶棺と同一個体の破片がSD1900の北端部からも出土している。

SF1950（PLAN. 2・3，PL.10）

朱雀門北の南北宮内道路である。広場SH1850から連なるものであり，東を側溝SD1860（幅4.5m，深さ0.1～0.25m）で，西を側溝SD1900（幅2.8～3.0m，深さ0.6～0.8m）で画しており，道路は幅約10mある。地山直上に灰褐色粘質土の整地土があり，この上面にバラスを残すところがあるが，これは広場SH1850内の南北溝SD1844（幅0.5m，深さ0.1m）・1944（幅0.5m，深さ0.1m）間で顕著である。これら2条の溝は断続的に北に延びており，宮の造営当初にSD1860とSD1900が両側溝であったものを，後にSD1844とSD1944に改めたと考えられる。

ここで当初の側溝について述べておこう。SD1900はSD1860西方約21mにある南北溝で時期を違えて上下（A・B）に重なっている。SD1900Aは幅2.8～3.0m，深さ0.6～0.8mの大規模な溝である。砂あるいは砂質土が数層堆積し，調査地域のほぼ全域の流路から多量の土器が出土した。またSD1900Aに設けられた堰SX1891上流のくぼみから木筒が9点出土した。このSD1900Aの調査地域での南端部は朱雀門基壇築成時に断ち切られている。したがってSD1900Aは宮造営前の溝である。造営後，この溝は埋めたてられ，宮内道路SF1950の西側溝（SD1900B）として再使用されるが，朱雀門の北方約37mの地点で西折し南北溝SD1890に接続する。東側溝SD1860はもともと浅い溝であり，後の削平のためSH1850内では検出できなかったが，SH1850内では，SD1900同様埋めたてられたものと考えられる。そして東西溝SD1810から南北溝SD1790へ接続させている。なお，SD1860とSD1900Aにはさまれた幅21mの間は大和盆地を縦断していた下ツ道と推測できる。

B　玉手門地区（6ADF区）

調査地は宮の西面南門地区で，発掘区は東西約30m，南北約120mの狭長な範囲である。

遺構はおおむね，やや砂質の暗褐色土面で検出したが，困難な部分では地山面である黄褐色粘質土面で検出作業を行なった。

検出した主な遺構は宮の西面中央門（玉手門）SB1616と，西面大垣SA1600である。SB1616には礎石や枕石，また基壇にともなう施設も残存せず，基壇の掘込み地業部分を検出し得たにすぎない。その他，西面南門北方の官衙を区画するかのように門の北側約14mの位置に東西塀SA1692がある。このSA1692の北に2棟の南北棟建物SB1711・1717を検出している。発掘区北端は旧秋篠川川床SD1759がある。SA1692の南では，小穴や小井戸が多い。

SE1588（PLAN.6・7，PL.17）

発掘区の南辺部で，小規模な井戸5基を検出した。SE1588は直径1.2m，深さ約0.8mの穴を掘り，曲物側板を2段据え，その上部に平瓦を曲物の外縁にそうようにめぐらせた井戸。曲物は下段が直径34cm，高さ16cm，上段は直径36cm，高さ20cm。

SE1591（PLAN.6・7，PL.17）

穴の底に径約20cmの河原石を円形に1段めぐらせ，その上に約0.5m平瓦を小口平積みにし，最上部に径約10cmの玉石を1段めぐらせた井戸。上縁の内径0.8m，底の内径0.5m，深さ約0.7m。

SE1595（PLAN.6・7，PL.17）

河原石積みの上部に瓦を平積みにした円形の井戸。上縁部の内径0.7m，深さ約0.5m。底に玉石を敷き，中央部を約0.1mくぼませ曲物の側板を据えている。

SE1596（PLAN.6・7，PL.17）

1辺1.3m，深さ2.8mの隅丸方形の穴を掘り，中央に径37～41cmの曲物の側板を8段以上積んだ井戸。高さは一定せず，8段の総高は1.9m。曲物には底板を固定するための釘穴がなく，これらが容器の転用でない点は興味深い。

SE1598（PLAN.6・7，PL.17）

長径1.2m，短径0.9m，深さ1.7mの楕円形の穴を掘り，西寄りに曲物の側板を7段以上積

んだ井戸。曲物の直径は最小25cm，最大45cm。上段に従うほど大きな物を積む。7段の総高約1.1m。

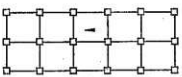
SA1600（PLAN.6・7，PL.13）

宮の西面大垣であり，築地基底部を検出した。構築にあたっては地山面まで削平し，この面から0.1～0.2m掘込み，粘土混りの砂質土を約0.2m積み，この上に小礫を混えた土を版築している。掘込み地業東縁のさらに東に築土が延びるので，犬走り部は掘込み線の東へ大きく出ていたものと考えられるが，削られているためその規模は定かでない。掘込み地業の西縁は発掘区外になるが南面大垣SA1200と同規模であろう。

SB1613（PLAN.6・7，PL.13）

SB1616基壇の東南隅に一部かかる東西棟4間（7.4m）×2間（4.1m）の掘立柱建物である。柱間寸法は一定でないが，桁行・梁行ともに約2mである。柱掘形は小さく（径約0.3m強，深さ0.1m）不ぞろいである。柱根は残存しない。

SB1616（PLAN.6・7，PL.13・14）



宮の西面中央門，即ち玉手門である（以下SB1616は玉手門と称する）。基壇上部は全く削平され，礎石や根石は残っていないが，基壇の掘込み地業が行われているため，その輪郭によって門の規模の推定が可能である。基壇掘込み部の規模は南北約32.1m，東西は発掘区内で7.6mである。SA1600入隅との距離は5.6mあり，西面大垣基底部幅を2.7mに復原すれば玉手門掘込み地業の東西幅は13.9mに復原できる。玉手門掘込み地業はSA1600と接する位置ではSA1600の掘込み地業を切断している。玉手門の掘込み地業の深さは，検出面から0.55～0.6mである。底部に青色粘土塊を混入した灰黒色粘土を約0.2mおいた後，砂質土，粘質土，あるいは含礫土を互層に版築していく。全体に丁寧に行われており，厚い層で0.15m，最も薄い層では部分的にではあるが0.05m未満である。

SK1623（PLAN.6・7，PL.16）

玉手門の正面，発掘区東端で検出した東西4m，南北4.6m，深さ1mの長方形の土壙である。土壙内には周囲から投げこんだ状況で5層にわたる堆積土が確認された。平安時代の土器が出土している。

SE1627（PLAN.6・7）

玉手門の前面にある井戸。井戸枠はすでに抜きとられており，長径4.5m，短径2.2mの東西に長い楕円形の浅い（深さ0.3m）抜取り時の土壙の西に寄って1辺0.7mの方形の土壙（深さ0.5m）があり，これがもとの井戸の規模にちかい。埋土から砥石・鍔・土釜が出土した。

SK1636（PLAN.6・7）

SK1623の北で検出した1辺約2m，深さ約0.2mの小土壙である。長径0.3～0.4mの玉石が5個あり，根石のようにみられるが，これに組合うものはみられない。

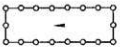
SD1668（PLAN.6・8）

SB1616東北10mの地点から掘られた東西溝である。幅2.5mあるが，発掘区東端での深さが約0.15mで，ごく浅い溝である。溝の埋土から，8世紀の須恵器，土師器片とともに瓦器片，10世紀の黒色土器片が出土している。

SA1692（PLAN.6・8，PL.14）

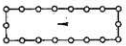
SB1616の北約15mの位置で大垣SA1600にとりつく形で設けられた掘立柱東西塀である。11間分検出したがさらに発掘区外東方に延びる。柱掘形の大きさは一定でない（0.75×0.7～1.4×0.8，深さ0.5m），柱根は西第3・5掘形に残る。2本の柱根間が4.7mあり，各柱間は2.35mに復原できる。なお，この塀の西に接して柱掘形が2個ある。東の掘形には柱根（径0.15m）が残るが，掘形は円形（径0.6m）で浅く（深さ0.2m），SA1692と状況が異なり柱間寸法もやや短かい（2m弱）。また，西の掘形は大垣SA1600の位置に，東の掘形は犬走りの推定位置にあるので，SA1692とは別個のものとみた。

SB1711（PLAN.6・8，PL.15）



SA1692の北にある南北棟7間（16.1m）×2間（5.2m）の掘立柱建物である。北2間目に間仕切りがある。柱間寸法は桁行方向が2.3m（7.5尺）等間，2.6m（8.5尺）等間である。柱掘形は方0.5～0.9m，深さ0.2～0.4mである。柱根は残存しない。

SB1717（PLAN.6・8，PL.15）



SB1711の西にある南北棟7間（16.8m）×2間（4.8m）の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行，梁行ともに2.4m（8尺）等間である。柱掘形（方0.8m，深さ0.3m）は方形である。柱根は残存しない。

SK1741（PLAN.6・8）

SB1717の西北で検出した長方形（3.2×2.6m）の浅い（深さ0.1m）土壙である。底に小石が数個みられる。埋土から瓦質土器が出土している。中世の土壙である。

SE1748（PLAN.6・9，PL.17）

P地区北半部の井戸である。直径1.1m，深さ1.2mで川原石（径10～20cm）を組み上げた中に，1辺約0.85mの竪板組の井戸枠がある。柱を4本立て，上部を横木で枘留めし，外側から竪板をあてている。おそらく当初，石組で築いたものを後に竪板組で補強修理したものであろう。底には直径45cm，高さ28cmの曲物の側板を据えている。板組井戸の方位は北で西へ大きく振れている。瓦器片が出土している。

SE1749（PLAN.6・9）

SE1748の西に近接して設けられた竪板組の井戸である。枠板は1辺0.6mで組んでおり，各隅に柱を立て，上部と下部に横木を枘留めし，各辺外側から竪板を2枚ずつ立てている。底に曲物はない。

SE1758（PLAN.6・9）

SE1749の北約10mにある。上径2.3m，底部径1.2m，深さ1.2mの土壙状であるが，枠板が抜きとられた井戸である。

SD1759（PLAN.6・9，PL.16）

発掘区の北端を西北から東南方向に斜行する川である。発掘区内では右岸を検出したのみであり，左岸は発掘区外である。岸から最も深いところで0.8mである。堆積土は砂質土であり，瓦器や羽釜が包含されている。

C　佐伯門地区（6AAD・6ADE区）

調査地は宮の西面中央門地区であり発掘区は東西約30m，南北約120mという狭長な範囲をしめる。水田面では発掘区北端と南端とで約1mの高低差がある。遺構検出面の傾斜は北から南へ緩傾斜で下がり，北端と南端とでは約0.5mの高低差がある。

遺構の検出は，床土直下に中世以降の遺物を混えた15～30cmの厚さの堆積土を排除して黄褐色粘質土面で行なった。この土層は北方ではおおむね暗褐色粘質土であるが，南方は漸移的に細砂を含む整地土である。南端ちかくでは秋篠川水系の旧河道を埋めたてている。

検出した主要な遺構には宮の西面中央門（佐伯門）SB3600がある。礎石や根石は残っていないが，基壇の基礎地業を明瞭に検出することができた。この門にとりつく西面大垣SA1600は，宮跡西辺の県道がこの地域で東に寄っているため，検出できなかった。SB3600の東15mの位置には，南北塀SA3590・3680が発掘区を縦断する形で存在するが，門を入った位置で10間分約26mが開放され，通路となっている。検出した建物跡はすべてこの2条の塀の東側にあり，南半部ではSB3560・3599・3640を，北半部ではSB3690を検出した。

この他，南北塀SA3555・3557・3563・3621，東西塀SA3567・3642・3669・3671・3673等があり，井戸としてSE3595・3605がある。

SA3555（PLAN. 6・10, PL.22）

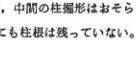
発掘区東南隅の掘立柱南北塀である。掘形（方0.7m，深さ0.3m）を5間分検出したが，さらに北へ延びるものと思われる。南第4掘形にのみ柱根小片が残っていた。柱間寸法は不ぞろいだが，5間分で13.7mある。

SA3557（PLAN. 6・10, PL.22）

SA3555の西2mの位置に近接して設けられた掘立柱南北塀である。SB3560の西側柱が重複しており，SB3560に先行するものである掘形（方1m，深さ0.15m）を4間分検出したが，南へさらに延びるものと思われる。北第1・第2掘形の間隔は2間分あり，中間の柱掘形はおそらく浅いために，すでに削平を受けたものと考えられる。いずれの掘形にも柱根は残っていない。検出した部分での長さは10.95mである。

SB3560（PLAN. 6・10, PL.22）

SA3557の廃絶後に建てられた南北棟7間（15.6m）×2間（4.75m）の掘立柱建物である。南3間目で間仕切られている。掘形は長方形（0.7×1.0m～0.9×0.7m，深さ0.3～0.4m）で6個の掘形に柱根（径0.15～0.25m）が残っている。



SA3563（PLAN. 6・10, PL.22）

SB3560の北半部で東側柱筋の0.7m西に重複する掘立柱南北塀である。7間分検出したが，発掘区外の北にさらに延びる可能性がある。柱掘形の重複関係によって，SB3560に先行するものであることが明らかである。掘形は方形（方0.8～1.2m，深さ0.2～0.7m）である。柱根は残存しない。柱間寸法はやや一定を欠くが，検出した部分では約3m間隔である。

SA3567（PLAN. 6・10, PL.22）

SA3563と直交する掘立柱東西塀である。掘形はきわめて不整形で小さく浅い。円形に掘ら

れているものは約0.6m，方形のものは一辺約0.5mである。深さは0.2m前後である。7間分検出したが，中1間分は後の削平によってか検出できなかった。7間分の長さは19.7mである。

SK3573（PLAN. 6・10）

SA3567の北の土壙である。長径3.1m，短径2.9mの楕円形で，底部は長径1.4m，短径1.1mの平坦面である。深さは1.3mである。埋土中には8世紀の瓦片や土師器片が混入している。

SA3590（PLAN. 6・10・11・12, PL.18）

発掘区K・L・M地区の中央で南北に長く連なる掘立柱塀である。25間分を検出した。南端は秋篠川の旧河道にあたり，その攪乱によって不明瞭である。北端の柱掘形はSK3650の南際にあるが，このSK3650掘さく時にいくつかの柱掘形が消滅した可能性がある。柱掘形は方形（方1.2m～1.5m，深さ0.8m）である。柱根は残っていない。柱間寸法は一定でないが25間分での長さは67.2mある。

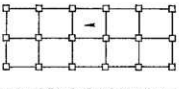
SE3595（PLAN. 6・10・11）

上縁の直径約2m，底部の直径約0.8m，深さ0.7mの円形の穴である。底部に玉石があり，曲物側板の断片が出土しているので，井戸と考える。瓦器・砥石が出土した。

SB3599（PLAN. 6・10・11, PL.21）

L地区中央部西端にある南北棟3間（5.4m）×2間（3.6m）の掘立柱建物である。柱間寸法は1.8m（6尺）である。柱掘形は小さく（径0.6m～0.7m，深さ0.2m），小規模な建物である。

SB3600（PLAN. 6・12, PL.18～20）



宮の西面中央門，即ち佐伯門である（以下SB3600は佐伯門と称する）。基壇上部は全く削平され，礎石や根石は残っていないが，基壇基礎築成にあたっての掘込み地業が行われており，その輪郭によって門の規模を推定できる。掘込み地業の規模は南北が29.4mである。東西は東辺が発掘区外にあるため確定できないが，発掘区内では約4.7m分を確認した。西面大垣SA1600は，この4.7mの中では検出できなかったので，門へのとりつき位置はおそらく玉手門と同じ位置と考えられ，佐伯門の掘込み地業の東西幅は玉手門とほぼ似た数値（13.9m）と考えられる。佐伯門の掘込み地業は上部が削平されているので，そのもとの深さは不明であるが，遺構検出面である黄褐色粘質土面からは0.7m残存し，底面は灰色砂質土に達している。掘込まれた底部には，まず黒色砂質土を0.06～0.15mほど積んだ後，粘質土，山砂等を版築していく。丁寧に築成されており，最も薄い層では0.05mに満たない。中央部においては，版築層は27層を数えた。基壇周囲の施設は，基壇外構に伴う石材，雨落溝等何ら検出できなかった。玉手門と比べると，南北方向は約2.6m短い。

SE3605（PLAN. 6・10・11）

1辺約1.2mの方形の穴を掘り，横板を組んだ井戸。深さ約0.3m。底に直径10～20cmの河原石を敷く。枠板は腐蝕が著しく，最下段の一部を残すにすぎない。瓦器が出土した。

SD3610（PLAN. 6・11）

SB3599の北にある東西溝（幅1m，深さ0.1～0.15m）である。発掘区を横断するが，東で北へわずかにふれる。

SA3621 (PLAN. 6・11)

SD3610の北で発掘区の西端にある南北塀である。柱掘形は方形（方0.5～0.8m，深さ0.2m）である。柱根は残存しない。3間分の長さは5.5mである。

SD3630 (PLAN. 6・11)

K地区からL地区にかけての南北塀SA3590の西にある南北溝である幅0.9～1.1m程度であり，深さは0.1mに満たない浅いものである。

SB3640 (PLAN. 6・11, PL.20)

K地区で南北柵SA3590の東にある東西棟3間（6.3m）×3間（6.3m）北廂つき掘立柱建物である。柱間寸法は桁行・梁行ともに2.1m（7尺）等間である。

SA3642 (PLAN. 6・11, PL.20)

SB3640の北にある東西塀である。南北塀SA3590の東際に西端の柱掘形があり，東へ4間分検出しているが，さらに発掘区外へ延びる可能性がある。柱掘形は方形（方0.5m，深さ0.2m）である。4間分の長さは8.2mである。

SK3650 (PLAN. 6・11・12, PL.20)

南北塀SA3590の北端に掘られた東西8.2m，南北7.3mの楕円形の土壙である。深さは0.2mほどであり，さほど深くない。埋土は黄灰褐色砂質土であり，遺物は少ないが，黒色土器，磁器片が含まれている。平城宮廃絶後の土壙である。

SA3669 (PLAN. 6・12, PL.19)

Q地区南辺で佐伯門の東にある東西塀である。7間分検出しているが，さらに東方に延びる可能性が認められる。柱掘形は不整円形で小さい（径約0.5m，深さ0.15m）。7間分の長さは12.3mである。

SA3671 (PLAN. 6・12, PL.19)

SA3669の北にある2間の掘立柱東西塀である。柱掘形の規模はSA3669とよく似ている。2間分で4.4mである。

SA3673 (PLAN. 6・12)

SA3671の北にある掘立柱東西塀である。4間分を検出したが，さらに東方へ延びる可能性がある。柱掘形は円形できわめて小さい（径約0.4m，深さ0.15m）。4間分の長さは8.6mである。

SK3675 (PLAN. 6・12)

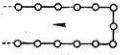
直径2.4m，深さ0.4mの土壙である。底は楕円形になる。底面南辺に径10cmの石が十数個ある。

SA3680 (PLAN. 6・12, PL.18)

Q地区中央で長く連なる掘立柱南北塀である。9間分検出した。柱掘形は方形で1辺1.2m以上，深さ0.5mのものが多いが，不整形である。柱根は残存しない。柱間寸法は一定ではないが，南辺の一部を検出した北端の掘形を除いた8間分で長さを求めると21.6mになる。

SB3690 (PLAN. 6・12, PL.21)

Q地区でSA3680の東側にある南北棟6間以上（5間分13.25m）×2間（5.3m）の掘立柱建物である。柱間寸法は2.65m（9尺）等間である。なお，北側の第51次調査で北妻を検出し，桁行15間であることがわかった。



D　宮西南隅地区（6ADH区）

調査地は宮の西南部であり，宮の西南隅確認を目的として調査を実施した。この地域は宮域内でも比高が低く，もともと低湿な地であったようである。遺構検出面は，耕作土面からおおむね0.8mの深さであり，検出作業は灰色砂質土，あるいは黄色粘質土の上面で行なった。

当地区の西南隅，南北約30m，東西約55mの範囲は空閑地となっており，遺構の存在はほとんど認められない。その北方では掘立柱建物を8棟，南北塀1条を検出し，東方のF地区では掘立柱建物SB1220とSB1222の2棟があり，これらに伴う塀を3条検出した。また，このF地区では，小規模な井戸SE1230・1247の2基を検出した。SE1230の枠板には彩色をもつ木製の桶が転用されていた。また，発掘区の南をかぎる農道と水路の南に2か所小規模なトレンチを設定し，南面大垣の埋地および外掘（二条大路北側溝）の一部を検出した。

SA1200（PLAN.13・14～16，PL.23・24）

宮の南面大垣で，発掘区の南辺に東西全面にわたって検出した。これは宮中央部の6ABY区で検出した大垣に連なる。南縁は現濱漁用水路で破壊されているが，基底部の築土をほぼ8.5mの幅で検出した。基底部は層状のいわゆる版築ではなく，ブロック状の粘土をつき固めたもので，検出した厚さは70～80cmにおよぶ。大垣本体は削平されているが，発掘区のなかほど，I地区で大垣の基底部幅2.7mと北側の犬走り3.5mが確認された。付近から多量の瓦が出土しており，大垣は瓦葺きであったことがわかる。寄柱の痕跡は明らかにはし得なかった。犬走りの北縁で断続的に連なる東西溝（幅0.8～1.2m，深さ0.1～0.2m）は大垣の北雨落溝と考えられる。

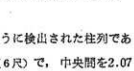
SB1220（PLAN.13・14，PL.25）

F地区東北隅で検出した東西棟6間以上（13.32m以上）×3間以上（5.32m以上）の掘立柱建物である。柱間寸法は2.66m（9尺）等間である。柱掘形は不整形で大きさも一定でない。西第3掘形に柱痕跡（径0.2m）を残す。SB1220の西妻柱筋は，この南で検出したSA1222の妻東柱筋にそろえている。SB1220は発掘区外に延びるため，全体の規模は不明で，廂の可能性も残している。

SA1221（PLAN.13・14，PL.25）

SB1220の西妻柱列南端とSB1222の東妻柱の北端とをつなぐかのように検出された柱列である。掘形は方形（方0.6m，深さ0.15m）である。南北の2間は1.78m（6尺）で，中央間を2.07m（7尺）と広くとっており，中央を通路としたものと考えられる。

SB1222（PLAN.13・14，PL.25）



SB1220の西南に検出した東西棟5間（14.18m）×4間（10.91m）南廂つきの掘立柱建物である。東妻はSA1221によってSB1220と連なり，西妻はSA1240によって大垣に連なる。このSB1222は発掘区で検出した建物のうち最大の規模をもつ。柱間寸法は桁行が2.96m（10尺）等間，梁行が身舎24.2m（8.5尺），廂の出3.65m（12尺）である。掘形は不整円形（径約0.9m，深さ0.5m）である。廂柱列西第I～3，及び東端掘形に柱根（径30cm）を残している。

SE1230 (PLAN.13・14, PL.25・30)

SA1221の西側にあって，SB1223の北に設けられた竪板組の方形井戸である。1辺約2.1mの隅丸方形の穴（深さ約2.3m）を掘り，ほぼ中央に1辺1mの井戸枠を設けている。掘形底面に礫を敷き，幅50cm，長さ150cmの長方形板を一辺に各2枚，計8枚立てならべ，これをさらに2段に組む。なお，この井戸側板は後述するように隼人瓶を転用したものであり，彩色のある面を外側にして使用してあった。各辺中央部にあたる板の合わせ目，および上下段の重ね部分には外側から板材（幅15~20cm，長さ80cm）で押えて目張りとする。側板内側の下端と中間重ね部分の2ケ所を，角材（1辺10cm）を方形に組んだ内枠で支える。なお，上段框に当てたとみられる枠組部材が井戸底から出土している。上段の地上に近い部分はすでに腐蝕し，原状を保っていないが，側板の規格と重ねの幅によって，框から底まで2.5mに復原できる。井戸内からは，先述の内枠部材，上段側板のほか曲物の断片が出土している。

SA1240 (PLAN.13・15, PL.25)

SB1222の西妻柱筋にそろえ，SB1222から南はSA1200に連する6間の南北塀である。柱間寸法は2.96m（10尺）等間である。柱掘形は方形（方0.8~1.1m，深さ0.25m）である。北第2・第3掘形に柱根を残し，第5掘形に柱痕跡を残している。なお，第4掘形から，6301型式および6273B型式の軒丸瓦が出土した。

SA1245・1264 (PLAN.13・15, PL.24)

SA1200北犬走り上にある東西掘立柱列である。大頭の寄柱の痕跡かとも考えられるが，いずれの掘形も小さく（径0.4m，深さ0.15m），柱間寸法も不ぞろいであり，決しがたい。

SE1247 (PLAN.13・15, PL.25)

SB1222の南に設けられた竪板組の方形井戸。1辺約1.9mのほぼ正方形の穴（深さ1m）を掘り，1辺約1mの井戸枠を設けている。各隅に4本の柱を立て，中央部に横機を納留めし各辺外側から竪板を5~6枚ずつ立てている。枠板は建築部材の転用である。各隅の柱は仕口穴の位置と形状から棟木材とみられ，横機は木舞とみられる。削掛けが出土した。

Fig.10 SE1247 西から

Fig.11 SE1313 南から

SD1250（PLAN.13～15，PL.29）

SA1200の南で検出した宮の外堀である。発掘区南限より農道と水路を隔てて設けたトレンチにおいて検出した。外堀検出を目的としたトレンチは2か所に設けたが，小規模なため，堀の北辺を確認するにとどまった。比較的良好な西トレンチでは，大垣の南端推定位置から10.5mで堀となる。この間が端地である。

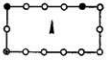
SB1290（PLAN.13・17）

K地区西北隅で検出した東西棟4間以上（7.11m）×2間（4.74m）南廂つき掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.37m（8尺）等間，梁行2.96m（10尺）で廂は梁行1.78m（6尺）である。柱掘形の大きさは一定でない（方0.6～0.8m，深さ0.15m）。柱根は残存しない。東方は発掘区外に延び，全体の規模は不明である。妻中央柱を欠いている。

SE1313（PLAN.13・16）

発掘区西南隅にある1辺2m，深さ0.4mの瓦積み井戸。底中央に径1m弱の円形に近い凹みがあり，この部分に瓦を平積みしたとみられるが，破壊されている。曲物片が出土しており，底に曲物を据えていたものであろう。

SB1333（PLAN.13・16，PL.26）



K地区でSB1290の西に検出した東西棟5間（10.4m）×2間（5.06m）の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.08m（7尺），梁行2.53m（8.5尺）である。柱掘形は方形（方0.8m，深さ0.3m）である。西北隅と，北側柱の東第2掘形に柱根（径20cm）を残し，西南隅掘形には柱痕跡（径23cm）を残す。

SA1341（PLAN.13・18）

SB1333の北で南北2個掘られた掘立柱掘形である。両掘形間の寸法は5.6mである。柱掘形は楕円形（長径1.2m，短径0.95m，深さ0.2m）である。柱根は残存しない。

SB1342（PLAN.13・18，PL.26）

SA1341の東に近接した南北棟2間（5.4m）×2間（4.5m）の小規模な掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.7m（9尺），梁行2.4m（8尺）である。掘形は不整円形で大きさも一定でない（径0.5～0.8m）。

SA1345（PLAN.13・18，PL.26）

J地区中央やや東寄りで検出した9間（25.49m）の掘立柱南北塀である。柱間寸法は2.55m（9.5尺）となる。柱掘形は楕円形で不ぞろいである（長径1m～1.4m，短径0.5～0.8m，深さ0.1m～0.2m）。北第3・5掘形は明らかではなかった。

SB1366（PLAN.13・18，PL.28）

J地区の東北隅で検出した東西棟4間以上（8.85m以上）×3間（8.4m）の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.95m（10尺），梁行2.80m（9.5尺）である。柱掘形は方形（方0.8m，深さ0.3m）である。柱根は1本のみ残り，3個の掘形に柱痕跡をとどめる。東では発掘区外にのびている。

SB1379（PLAN.13・18，PL.28）

発掘区西北端にある東西棟4間（7.3m）×1間（1.9m）の小規模な掘立柱建物である。柱間寸法は一定でない。掘形は方形（方0.4m，深さ0.2m）である。

SB1397 (PLAN.13・18, PL.26)

SA1341西の東西棟3間（4.50m）×3間（3.39m）掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が東2間で1.6m，西端間で1.3mである。梁行は1.13m等間である。柱掘形は円形（径0.35m～0.6m，深さ0.22m）と方形（方0.5～0.8m，深さ0.15m）とがあり大きさも一定でない。柱根は残存しない。

SE1410 (PLAN.13・18)

SB1414西南際の径約1.1m，深さ1.1mの円形の穴に曲物の側板を据えた井戸。掘形下半部は曲物を据えるだけの広さをもつ。曲物は3段を残す。直径34cm，高さは下段25cm，中段32cm，上段は破損のため計測不能である。砥石が出土した。

SD1413 (PLAN.13・18)

L地区の北端部で検出した南北溝（幅1.0～1.2m，深さ0.1m）である。発掘区北端から13.5m南で消滅する。この溝はSB1379・1419と重複する。しかし，SB1419の内部を南北に通じながら，柱位置をはずれているところからみて，この建物と一連のものとも考えられる。溝埋土から，少量の土器片とともに砥石が出土している。

SB1414 (PLAN.13・18, PL.27)

J地区とL地区とにかかる東西棟4間（9.52m）×2間（4.76m）の掘立柱建物である。柱間寸法は2.38m（8尺）等間である。掘形は方形（方0.7m，深さ0.3m）である。北側柱すべてと南側柱西第1・第2柱掘形に柱根（径22～27cm）を残すが，西妻中央柱の掘形は検出できなかった。

SB1419 (PLAN.13・18, PL.28)

SB1379と重複する南北棟3間（6.5m）×1間（3.1m）の小規模な掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が2.2m（7尺強），である。掘形は円形（径0.2～0.3m）で小さい。柱根は残存しない。

SE1422 (PLAN.13)

SB1419の西に設けられた井戸。1辺約80cm，深さ約0.3mの方形の穴を掘り，中央やや東寄りに曲物の側板（直径38cm，高さ15cm以上）を据えている。曲物は1段のみ残存し，それも上半部は腐蝕のため欠失している。埋土中から瓦片が多量に出土したので，もともと瓦組みであったものと考えられる。底から瓦器片が出土した。

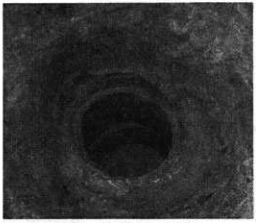


Fig.12 SE1410東　南から

Fig.13 SE1422北　西から

E　玉手門・佐伯門中間地区（6ADE・6ADF区）

調査地は第15次（6ADF—P・R・T区）調査地区に北接する。この発掘区に南接する水田が東南方向に大きく振れており，これに連なる形で一定の幅をもった水田が宮の南端まで認められる。これは秋篠川の氾濫によるものと考えられ，今回の発掘区はこうした他と方位のふれた水田の北に連続する部分であり，氾濫の痕跡の存在が予想された。したがって調査は，そうした状況を把握することを目的としてトレンチ調査にとどめた。トレンチは中央部やや西寄りに幅6mの南北トレンチを，これと直角方向に幅3mの東西トレンチを3か所，計4か所に設定した。

発掘区全体は，宮の造営以前は南北方向の河道であり，これを宮の造営時に埋めたてているが，完全に埋めたててはおらず，幅約25m，深さ約1.1mの南北に連なる凹みとなっている。

検出遺構は，発掘区中央で検出した東西塀SA1970，この塀にかかって設けられた暗渠SX1975，また13mほど上流に設けられた暗渠SX1982，鍛冶工房に関係するSX1983，SK1979などが主要なものである。第15次調査で検出した西面大垣（SA1600）は検出できなかった。

SA1970（PLAN.19，PL.31・32）

発掘区中央部にある掘立柱東西塀である。柱掘形をSX1975の東で8間，西で3間検出した。東第1～3・7掘形に柱根（径20～25cm）が残る。柱間寸法は一定でない。柱根の残る東端の1間は2.35mあるが，SX1975東の8間の長さは18.45mである。

SX1975（PLAN.19，PL.31・32）

SA1970西から4間目にこれと直交するように設けられた2条の南北方向杭列で，両列は0.9m隔てて並列している。各列6本でほぼ0.3m等間隔であり，この杭の両列上端が八字形に交叉するように打ちこんでいる。この両列の外側に板をおき，土盛りなどを施し，暗渠として使用したものであろう。

SX1978（PLAN.19，PL.32）

南北3.5m，東西4m以上の区画で方形に杭をめぐらせた施設である。西辺10本，北辺15本，南辺14本の杭を打ちこんでいるが，南北辺の杭列はさらに東方に延びるようである。

SK1979（PLAN.19，PL.32）

SX1978内にある円形の土壙である。上縁部の直径約1.4mで，深さは0.7mをこえる。土壙内の堆積土中からは，金属利器のための木柄，鞘口，鉱滓，木簡が出土している。木簡には釘に関したものが見られ，鍛冶関係工房の存在が推測できる。このSK1979とSX1978とは，一連のものであろう。

SX1982（PLAN.19，PL.32）

SX1978の西に接して検出した杭を2列に打込んだ施設である。その状況はSX1975によく似ている。両列の杭は4本ずつであり，その間隔は約0.5mである。また両列の間隔を南にいくにしたがって次第に狭めている。

SX1989（PLAN.19，PL.32）

SX1982の南で検出した杭を2列に打込んだ施設である。これはSX1975・1982と異なり，真直ぐに打込んでいる。

F　北面大垣地区（6ABA・6ABN区）

調査地は宮の北面中央部やや西寄りである。この地域の地山（赤褐色含礫層）は南へ急傾斜で下がり，南北約70mの発掘区の北端と南端とでは約2mの高低差がある。地山面はちょうど大垣の推定線から南が大きく一段下がっている。6ABA区では後世の攪乱が著しく，溝・土壙・池などが随所に検出された。平城宮に伴う主要な遺構には，6ABA区北端で検出したSA2300・2330があり，いずれも北面大垣である。この北6ABN区に設けた幅3m，長さ30mのトレンチでは，北面大垣の端地とこれに付属する施設SX2333がある。この他に小穴を検出しているが，建物遺構としてまとまるものではない。

SA2300 付 SX2333（PLAN.20，PL.33・34）

宮の北面大垣であり，築土が比較的良好に残っていた。大垣の築造にあたっては，大垣心から北約18mまで旧地表を削り，南に次第に下げてきており，北約8mの地点から南は地山をあらわしている。勾配は急で18m間で0.8m下がっている。整地は大垣の南にまで及ぶが，大垣の南4mからは水田耕作のために攪乱されている。こうして整地した上に大垣の中心部では入念に，これをはずれた位置では大まかに土を積む。大垣中心部は削り出した地山面をさらに0.2m掘込み，黄褐色粘質土や砂質土を0.05～0.1mの厚さで版築している。残存状況が良好なところでは9層，厚さ約0.6mある。北側端地は，0.1～0.3mの粘質土や砂質土を2層ないし3層おき，おおむね水平にしている。

大垣の北約13mで検出した瓦とバラスを敷いた施設（SX2333）は幅1.2mで東西方向に連なる。整地土をわずかに掘りくぼめ，バラスを敷いた上に丸瓦片や平瓦片を敷いている。排水施設と考えられ，大垣からこのSX2333までの約13mの間は平坦で，何らの遺構もみられず，北面大垣の端地である。

SD2303（PLAN.20）

6ABA区中央で検出した東西溝である。幅は一定でなく，狭いところで1.5m，発掘区西端では広く，4.5mある。きわめて浅い（深さ0.1m）。平安時代の遺物を含んでいる。

SD2323（PLAN.20）

6ABA区北際の東西溝である。上幅4.5m，深さ0.8mである。堆積土は大きく3層に分かれるが，いずれの土層にも砂や礫を含んでいる。最下層から中世の土器片や瓦片が出土している。超昇寺銘軒平瓦が1点出土している。

SA2330（PLAN.20，PL.33）

SA2300構築前に宮の北面大垣として設けられた掘立柱東西塀で，5間分検出した。柱間寸法は3.0m（10尺）等間である。柱掘形がSA2300の版築の下にあるため，SA2330の全容をあらわすことはできなかったが，明らかにし得た東第2柱掘形は長方形（2.4m×2.1m，深さ1.1m）である。柱根は残存しない。この塀SA2330を築地SA2300に改造した際に地山まで削平整地しているため，地山面から下1.2mが掘形の底となる。築地を構築する以前の掘立柱塀を明確にしたのは，この地区のみである。

G　その他の地区

上述の各地区以外の遺構について述べよう。発掘調査は第25－2，34，52－2，58，62次の各調査地で行なった。いずれも宮の大垣および西一坊大路を確認するための調査である。北面大垣確認の調査は御前池の東で行なった第34次と第62次の調査であるが，両次ともに後世の攪乱が著しいため，大垣の確認はできず，第62次調査地ではその他の遺構も何ら検出できなかった。第25－2，52－2次調査地では，宮の西面外堀と西一坊大路を確認した。第25－2次で検出したSD3698は，大路の西側溝と考えられ，路面幅が約21.5mであることを確認した。第58次調査地は，西一坊大路敷にあたる地域であるが，後世の攪乱のため遺構は検出できなかった。

i　第25－2次（Fig 8）

SD3697

発掘区東端で検出した南北溝。西岸を検出したが，東岸は発掘区外のため溝幅はわからない。西岸に護岸施設はなく，緩傾斜で掘られている。深さは0.77mある。玉手門中軸線と SD3697西岸との距離は約12mあり，宮の西面外堀の位置にふさわしい。

SD3698

SD3697の西約21.5m の位置で検出した南北溝（幅約0.9m，深さ0.1m）。埋土から奈良時代の瓦片や土器片が出土している。SD3697の溝幅を他地域で検出した溝幅と同じく3～4mとした場合，両溝の心々距離は約24mである。SD3698の西に接して右京二条二坊二坪の東面築地が設けられた場合，犬走り5尺，築地基底幅の半ば3尺を加えた位置から玉手門中軸線まで約37.5mを測る。この距離は宮の東面で確認した東一坊大路37.3mに近似する。

SD3699

SD3698の西8mの位置で検出した南北溝（幅約4m，深さ0.6m）。埋土から奈良時代の瓦片，土器片が出土している。水流が多かったためか，溝幅は一定でなく，溝底には凹みがある。

ii　第52－2次

SD6200

P・R両地区で発掘区の東端に検出した南北溝。溝幅はP地区では約3.8m，R地区では約3.1mある。深さは両地区ともに浅く，0.2～0.3mであるが，この溝と宮の西面大垣SA1600までの距離は約10mあり，この溝は宮の西面外堀にふさわしい。

iii　第34次（PLAN 21）

SD4315 付 SK4326

D地区で検出した東西溝。発掘区の東西両端部では攪乱が著しい。中央部での幅約2.2m，深さ約0.5mある。埋土から中世以降の土器片が出土した。南側のSK4326は近世の土壙である。

SK4319

C地区南端部で検出した土壙。発掘区外へ広がるため，規模は確認できないが，南北5m以上（深さ約1.4m）の大きなものである。底部で東西溝（幅1.3m，深さ0.5m）を検出した。

SE4325

C地区中央部にある石と瓦を組上げた円形井戸。底部の内径約0.6m，深さ1.3mあるが，組上げの残存部0.9mである。中世の井戸である。

第Ⅳ章　遺　　物

今回の調査で出土した遺物には，木簡・瓦・土器・木製品・金属製品などがある。これらは土壙・溝・井戸・柱穴・整地土などから出土した。これら遺物のなかでSD1900A出土の土器は，土器編年上良好な一括遺物であり，絶好の基準資料をなすものである。また，SE1230で転用されていた彩色をもつ櫛は，稀有の資料である。

本章の構成　本章では，木簡・瓦・土器・木製品・金属製品等の順に述べ，瓦・土器・木製品に対しては第Ⅴ章で考察を加えることにする。

1　木　　簡

木簡は朱雀門地区（第16・17次）のSD1900A，西南隅地区（第14次）のSD1250，西面中央・南門中間地区（第18次）のSK1979からそれぞれ出土している。そのうち，SD1250出土木簡は断片で遺存状況も悪く，墨痕の読取りはきわめて困難であった。すべてについて赤外線写真撮影を試みたが，なお判読できるものはなかった。SD1900AとSK1979出土木簡はすでに報告を済ませている[1]が，検出遺構とのかかわり上，若干の表現法の訂正を加えて再録する。

A　SD1900A出土木簡（PL.35）

出土地点は，朱雀門の北方約35mの位置でSD1900の下層に設けられた堰SX1891の上流にあったくぼみである。木簡は「過所符」を含む9点である。今回の調査で過所符が出土したことは，従来公式令（過所式）や唐代の過所などから推測するにすぎなかった古代，とりわけ奈良時代の過所の実物が出土したという意味においてその意義はきわめて大きく，古代の過所符を考える上でも貴重な資料となった。

1926・閃ミ司前解近江国蒲生郡阿伎里人大初上阿□（佐ヵ）勝足石許田作人

・同伊刀古麻呂　大宅女右二人左采小治町人牟上笑阿曽物安伊人石二
造寺司殿都　高屋根馬殿七　素民地信都殿

656×36×10　6011

過所符　過所符（カヂク）（通行証明書）。平安時代の僧円珍が将来した唐代の過所符が園城寺に伝来しているが，八世紀のものは，これがはじめてである。大宝令では過所符は「便に随い竹木を用う」とされていた[2]。この木簡は旧下ツ道の西側溝から二片に折れて発見された。折損部で「伎」の文字

1) SD1900A出土木簡〔1926～1932〕とSK1979出土木簡〔1933～1942〕については，『平城宮木簡二』（奈良国立文化財研究所資料館8冊・同図冊，平城宮発掘調査報告書，1974年）参照。木簡の前に記した番号は「平城宮木簡二」で使用した木簡番号である。釈文の後に，法量（長さ×幅×厚さ 単位mm）と木簡の型式番号（イタリック）を記す。欠損しているものは現存部分の法量をカッコつきで示す。型式番号については，『平城宮木簡一』（奈良国立文化財研究所史料館5冊）・『同二』を参照されたい。ここには本報告に見える型式について簡単に記す。011型式：短冊型。019型式：一端が方頭で，他端は折損などによって原形の不明なもの。021型式：小型矩形。031型式：長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの。032型式：長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの。081型式：折損，腐蝕などによって原形不明のもの。091型式：削屑。なお型式番号の第1位の数字は時代を示し，6は奈良時代である。

一字が釈読が困難であるが，ほぼ完形である。木簡の年代は記載された位階の表記と国郡里制（郷里制施行前）による表記法によって，大宝元年（701）～霊亀元年（715）の期間のものであることができる。下限の霊亀元年は，これ以後過所符に諸国印を捺すよう規定し，便により過所符に竹木を用いることを原則として禁止した年でもある[3]。

過所符の記載内容

公式令過所式には過所符の書式を定めている[4]。それによると，過所符には渡行の理由，どの関を越えてどの国に行くか，渡行者の官位姓名，年齢，本籍，従人（百姓の場合は某国郡里人，姓名年齢），奴・婢の名，携行品，馬牛匹数特徴，年月日，所司の許可などを記す必要があった。そして，この過所符を請うには，百姓はその本郡官司である郡司に，官人は本司に辞・牒を呈する。これを勘覈して認めた時は，さらに国司又は京職に送り，決裁を仰ぐことになっている[5]。この場合，過所二通を作成し，一通は職国に留めて案とし，一通を渡行人に交付するのを令の建前とした。職国に留めた過所符の案は伊勢国計会帳[6]（延暦二年）に「判給百姓過所廿五紙」とみえるものである[7]。

以下，内容について順次注釈を加えていこう。

「関々司前解」という表現は藤原宮木簡にみられる「御前申……」や「大夫前曰……」[8]と同じ表現である[9]。「関々の司の前に解す」とは近江国蒲生郡から京に往来する時，経過する関司に充てたものであろう。当時，関が三関以外にもあったことは，衛禁律私度関条に「三関，摂津，長門，余関[10]」とみえることからもあきらかで，たとえば，『日本書紀』天武八年十一月条にみえる大阪・竜田山の関[11]や川口関務所（平城宮木簡79）などによっても確められる。

過所符提出人の本貫地である「蒲生郡阿伎里」は『和名抄』では『安吉』と表記している[12]。「阿伎勝足石」はこの地方に勢力をもっていた一族であったことが後世の史料からわかる[13]。

「大初上」は裏面の笠朝臣弥安の位階も「大初上」と記し，「位」を脱落しているが，前述のように大宝令による表記法である。「田作人」は阿伎勝足石の許で田作に従事している人の意で，彼らが京の笠朝臣弥安の戸の人であれば，これは出作人の史料としては注目できる。「同伊刀古麻呂大宅女」の「同」の意は表の田作人の意か，同姓の阿伎勝の意か決め難いが，いま田作人の意と理解しておこう。この木簡で最も問題となるのは「左京小治町」である。これに左京小治町ついては前述の通り，この過所符が八世紀初頭という限られた時期のものであるので，「左京」が藤原京か平城京かという問題に直面するのである。八世紀初頭の藤原京が左・右京にわかれていたのは確実であり，また『続日本紀』文武三年正月壬午条に「林坊」がみえ，藤原京の坊が固有名称でよばれていたことが知られる。しかし，さりとて平城京の「左京」ではないとも断定できない。結局，この問題は他の木簡，遺物と関連させて理解する必要がある。この過所

2）『令集解』公式令内印外印等事条古記，国史大系本 p.853.
3）同上内印外印等事条古記所引和銅八年五月一日格。
4）『令義解』公式令過所式条，国史大系本 pp. 249.
5）『令義解』関市令欠度関条，国史大系本 p. 297.
6）『寧楽遺文』上巻 p.322.
7）滝川政治郎は，「過所考」（『日本歴史』第118～120号，1958年）の中で，唐過所，日唐の差，過所の申請・発給などの手続，律令過所制について詳細に考察を展開している。
8）『藤原宮木簡一』解説（奈良国立文化財研究所史料第12冊）pp.31.
9）国史大系本『律』p.30.
10）国史大系本『日本書紀』後篇p.352.
11）承平二年原昇家銘近江閑土四正田地注文（東大寺文書）でも「蒲生郡安吉郷」とみえる（『平安遺文』1―239号）。
12）『続日本後紀』承和七年九月壬辰条。宇野茂樹「近江国阿伎里阿伎氏族について」（『史迹と美術』第355号 pp.168，1965年）。

符と同じ下ツ道西側溝から発見されたものに，「大野里」と記載された木簡（1928）と，「五十戸家」或は「五十家」という墨書土器がある。「大野里」は藤原宮木簡の「所布（部）評大野里」[13]と同じものとしてよければ，『和名抄』の同郡にはみえない郷名で，遷都前の平城京地域の里名を知る資料として注目されるものである。また，「五十戸家」は五十戸＝里制の実施と関係し，五十戸＝里と表現して「里家」をあらわしている[14]。

五十戸家

したがって，この土器は里家，すなわち郡家に対して里長が行政実務を執った家で使用されたものであろう。大野里木簡にみられる白米もあるいはこの里家（五十戸家）に収められたものではなかろうか。さて，こうして平城京造営にともない消滅した大野里を想定してみると，白米貢進札が廃棄され，また，その里家も廃絶した時点が同時であったとは考えられないであろう。もし，この想定が正しいとすれば，この過所符にみられる左京小治町は藤原京と考えることが可能であり，その蓋然性は高いといえよう。なお，左京小治町を平城京と考えている説がある[15]が，以上述べたところから藤原京と考えるべきであろう。「笠阿曽弥安」は，「朝臣」が「阿曽」[16]とも「阿曽美」[17]とも表現されているので，「笠朝臣弥安」か「笠朝臣安」か決めがたい。「送行乎我都」は乎我都を奴の名とする考え方もあるが，渡行の理由として，「我が都ニ送り行ル」とよんでおきたい。携行する馬の特徴を記し，最後に「里長尼治都留伎」という過所符発行者の名がみえる。

符発行者名

廃棄の理由

ところで，藤原京に向かうのに過所符をなぜ当地点に廃棄したのであろうか。これを解く鍵の一つとして当時の交通路を考えてみる必要がある[18]。この過所符にみえる渡行者は近江国から東山道沿いに山背国を経ていわゆる奈良坂を越えて大和国に入ったものと考えられる。過所符が廃棄されていた場所は下ツ道側溝であるが，この下ツ道は南下すれば藤原京に接続する古くからの官道である。近江国からいくつかの関を越え，山背から大和に入る地点に最後の関があったのであろうか。前述のように，この地域が平城宮造営とともに消滅した大野里のあったところで，しかも「五十戸家」（里家）の存在が想定されるとすれば，ここを関の実務場所（関務所か）と関連させて考えることも，木簡の廃棄された理由の一つと思われる。このように考えると，大和国にたどりつき過所符も不必要となり，当地に廃棄されたものと考えるのが自然であろう。

1927・　□□

　□事

　　捉人□(マヽ)人逃率

・□□(抹消ヵ)　□□(智上ヵ)

　　□

(201)×(51)×5　6019

奴婢の逃亡

上端，左右両側面欠損。逃亡した奴婢を捉えた時の報告断片であろうか。補亡令には，逃亡の奴婢を捉えた場合には随近の官司に報告することや「促人」に奴婢の価の一部を賞として与

13）奈良県教育委員会『藤原宮跡出土木簡概報』第14号。
14）「五十戸」を「里」にあてた例は『万葉集』では山上憶良の貧窮問答歌の中にみられる（巻5—892）。
15）田村吉永「平城宮址発掘木簡の左京小治町について」『大和文化研究』第10巻第2号，pp.1，1965年。
16）『万葉集』巻16—3841～3843。
17）『続日本紀』宝亀四年五月辛巳条。
18）岸俊男『古道の歴史』『古代の日本』5，pp.93，1970年。

えることが定められている[19]。守人連なる姓はこれまでの古代文献資料にはみあたらないが，これと関連する氏姓に守部連がある。

1928　大野□(里カ)五百木部己□米五□　　222×36×6　6031　大野里

米の貢進札である。黒痕が薄く判読不能の個所がある。大野里はあるいは藤原宮木簡の「□妻倭国所布評大□(野カ)里」と同里であろうか[20]。倭国所布評は後に添上・添下両郡に分れた添（層富）県の地域であるが，大野の郷名は『和名抄』の添上・添下両郡には記載されておらず，あるいは平城京造営と同時に消滅した集落であろうか。1926の過所符参照。

1929　□(女カ)□□　　(34)×(8)×4　6081

1930　□□三□□□(之カ)□　　(122)×(9)×4　6081

1931　宮□(明カ)□　　(178)×(38)×4　6081

1932　□(高田寺カ)□□□□□　□□(太カ)□□□□　　(239)×(9)×7　6081

下端のみわずかに原形をとどめるが，他は欠損。文中にみえる「高田寺」は大和国十市郡（現在桜井市大字高田字寺谷）にある7世紀後半の瓦を出土する寺址と推定する説と大和郡山市高田に比定する説がある[21]。また，『続日本紀』天平宝字七年十月丁酉条に，高田寺僧の殺害の一件をのせ，高田毗登一族と高田寺との関係を窺わせるが詳かでない。『七大寺巡礼私記』によると，唐招提寺講堂の本尊をもと高田寺から移した仏像だと述べており，当時（11世紀ごろ）すでに高田寺が衰退していたことがわかる[22]。　高田寺

B　SK1979出土木簡（PL.35）

SK1979は玉手門・佐伯門中間地区で検出した直径1.4m，深さ0.7mをこえる土壙である。この土壙は南北3.5m，東西4m以上の区画で方形に杭をめぐらせた施設SX1978内に掘られたもので，SX1978とは一連のものと考えられる。木簡は，土壙内の堆積土中から金属利器のための木柄，鞘口，鉱滓などとともに出土した。出土点数は19点を数えるが，材の腐蝕がいちじるしく，判読可能なもの10点を収録した。記載内容はほとんどが釘に関したものであり，伴出した他の遺物の性格をあわせ考えると，この地域に鍛冶関係の工房があったことを推測させる。以下に釈文を掲げる。　鍛冶関係工房

1933・□卜二隻

・　　三月　　(241)×63×6　6081

上下二片に折られている。表裏ともに釈読した文字以外に墨痕がいくつか認められるので削り取られたものであろう。隻はここでは釘の単位と考えられる。

19）『令義解』補亡令宮私奴婢条・捉逃亡条，国史大系本 pp.305。
20）奈良県教育委員会『藤原宮跡出土木簡概報』14号。
21）関野貞太郎『大和上代寺院志』pp.60，1932年。『大和郡山市史』p.26，1966年。
22）福山敏男『奈良朝寺院の研究』pp.308，1948年。

1934・□□□（物ヵ）　□□□　　(162)×(24)×3　6081

・□□□　　□□

裏面は左方部の一部を残し剝離している。下端のみ完存する。表面第三字目以下の三字は金扁の文字である。

1935　□□口異二箇□　　(147)×25×4　6031

上端部欠損。物品付札の断片であろうか。

打合釘　1936　打合釘廿□　　87×17×5　6032

完形品である。打合釘の付札。奈良時代の釘の記録として，例えば「造石山寺所鉄充并作上帳」（大日本古文書15—292以下）によれば，打合釘，平頭釘，呉釘，切釘，羅釘などの名称が散見する。

1937　□□形（薄ヵ）二枚□堺打下□　　6091

銅加工文書の断片か。堺打は銅製品加工の一工程で，毛彫りをさす。正倉院文書には銅物製造工として火作工・真作工・砥磨工・堺打工・金泥工・魚子打工の名がみられる（大日本古文書16—292・293・307）。正倉院には雲花形の鍍金銅板がある[23]。

1938　□　□□□□□□　　6091

合点をもつ文書の断片であるが，判読不能。

平目釘　1939・平目釘一千六百□　　6091

・□

平目釘を書きあげたもの。正倉院文書には「平頭釘」（大日本古文書15—316）が散見するが，あるいはこれと同義語か。延喜木工寮式には「平釘」の名称もみえる。

1940・□（後ヵ）打合釘百　　81×15×15　6021

・斤二両

完形である。後打合釘を重量で表わしたもの。釘は隻で数えるのが一般で，これは製造された後打合釘の重さか，あるいは後打合釘を製造する鉄の重さを書きあげたものかのいずれかであろう。

1941　道　□（進ヵ）　　(13)×(79)×3　6081

上下・左右とも欠損。材を横に用いている。

1942　三寸□（単ヵ）　　(98)×21×4　6019

釘の長さを記したものか。下欠，上方中央に小穴がある。

23）『正倉院御物図録』第13冊　第42図　1941年。

2 屋　　瓦

今回報告する各地域から，多量の瓦類を発見した。丸瓦・平瓦・軒瓦を主体とするが，他に少量の熨斗瓦・面戸瓦もあり，丸・平瓦に箆書きや刻印を有するものも見られる。これらの瓦類は第16・17次調査地（6ABX・6ABY区）では朱雀門周辺から集中して発見された。とくに基壇回りの雨落溝からは多量に出土し，これらがSB1800に伴うものであることを知ることができた。第14次調査地（6ADH区）では，南面大垣（SA1200）に沿って幅50cmの帯状に約20mの範囲で集中的に見受けられた。他の第15次（6ADF区）・第18次（6ADE区）・第25次（6ADD区）などの調査地では，発掘面積に比較するとその出土量は，きわめて少ないといえる。なお，その他の調査地では小規模なトレンチ発掘であったため，瓦類の出土は僅少であった。

瓦の出土量

瓦類のうち，軒瓦は総数で41型式78種500個体が出土している。これらの型式・種別・計測値等は別表2・3に示したとおりである。各地域の軒瓦出土点数で100個体を越えるのは，6ABY区（198個体）と6ADH区（159個体）の2地域である。1アール当りの出土個体数は，6ABY区が5.7，6ADH区が2.8である。6ABY区は朱雀門基壇周辺から多量に出土したということもあり，他地域と比べてきわだっているが，既報告の推定第2次内裏北外郭地域と比較した場合，さほど多いとは言えない[1]。また，今回報告する軒瓦の特徴は，「藤原宮式」が目立つことで新出16型式のうち10型式が藤原宮式に属す。量的にも，藤原宮式は軒丸瓦で総個体数の52.9%，軒平瓦で42.5%という数値で，かなりのまとまりを示す。

藤原宮式

なお，前回の調査報告に際し，多量に出土した藤原宮式瓦については，今回一括して報告する旨を述べた[2]。

型式番号＼地区名		6AAO	6ABB	合計	
6233	A	2	0	2	4 (5)
	B	2	0	2	
6273	A	5	0	5	22 (37)
	B	11	0	11	
	C	3	0	3	
	D	1	0	1	
	E	2	0	2	
6274	A	1	0	1	1
6275	A	3	0	3	9 (11)
	B	1	0	1	
	D	5	0	5	
6278	A	1	0	1	1
6279	A	5	0	5	7
	B	2	0	2	
6281	A	14	0	14	33 (39)
	B	19	0	19	
合計		77	0	77	77 (90)
6641	A	1	0	1	3
	C	1	0	1	
	E	0	1	1	
6643	A	3	0	3	5 (7)
	C	1	1	2	
6646	C	2	0	2	2 (3)
6675		0	1	1	1
合計		8	3	11	11 (14)

（　）内は編類不明のものを含んだ数字

Tab. 2　第2次内裏北方官衙地域軒瓦出土個体数

6AAO区出土の瓦

6AAO区からは藤原宮式の軒瓦が115個体出土しているが，そのうち83個体がG地区からの出土である。当地区では，南辺部の築地回廊を除いては北部に掘立柱建物が3棟あり，1辺約14mの方形にめぐる溝にかこまれた井戸と数条の溝，そしていくつかの土壙が検出されたのみである。とくに南半部は整地がくり返し行われており数層の整地土がみられる。瓦類は井戸SE2128の周囲を方形にかこむ溝SD2126とSD2126の南面溝から南流する溝SD2110及びその周辺の整地土から集中的に出土したものである。

1）内裏北外郭の官衙地域では，発掘調査面積192aで出土総個体数3399，1aあたり18個体である。『平城宮報告Ⅶ』p.60。

2）『平城宮報告Ⅶ』p.60。

A 軒 丸 瓦 (PL. 36・37, Fig. 14～16)

19型式39種・総数261個体の軒丸瓦がある。これらのうち，新種は10型式18種である。以下，これらを列挙する。

6233 型 式　6233は，珠文縁複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当直径が15.5cmと出土した藤原宮式の中でもっとも小ぶりで，瓦当も薄く作られている。中房は弁区よりやや凸出している。外区外縁は素文である。A・Bの2種に細分でき，両者は中房に1＋4＋8と配した蓮子が，蓮弁との位置関係で異なる。即ち，外周の蓮子がAでは間弁の位置におかれ，Bでは複弁の中心の位置にある。外縁はいずれも斜縁であるが，Aには外縁の頂部を平坦に削ったものがあり，狭いもので0.5cm，広いものでは1.1cmの幅をもっている。両種ともに外縁の外側には，外縁頂部から0.6～0.7cmの位置に箔型端部の痕跡が認められる。丸瓦の接合位置は，瓦当裏面の上端にある。接合に際しては，丸瓦を挿入するための浅い溝を円弧状につけている。接合用の粘土は少量であり，接合線は円弧をえがく。瓦当裏面は丁寧に調整しており，全体的に平坦である。類例は日高山瓦窯・紀寺・久米寺・醍醐廃寺・尾張勝川廃寺にある[3]。

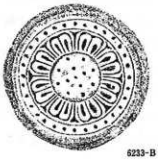
6273 型 式　6273は凸鋸歯文珠文縁複弁8弁蓮華文軒丸瓦で，大ぶりに作られた瓦である。A～Eの5種に細分できる。いずれも中房の蓮子・複弁・外区珠文・凸鋸歯文などが同数で文様構成が全く同一であり，それらの相違は微細である。5種のうちで瓦当直径が最も大きなものはAであり，蓮弁は全体的に盛りあがっているが，子葉の彫りが他の4種より浅い。中房の突出はBが他より高く，C・Dは扁平である。Cの蓮子の周囲には円圏をめぐらせたものがある。Dは蓮弁を肉厚に作っている。Eは弁端が高く直立している。外縁はいずれも斜縁である。Bの外側縁には，箔型端部の痕跡がある。A～Cの丸瓦はいずれも粘土紐を巻き上げて作っており，2.6～3.3cm幅の粘土紐の痕跡が認められる。凸面は丁寧に削って調整しているが，縦位縄叩目が部分的に残るものも見られる。また，Aの丸瓦には凸面にけけ状器具による調整の痕跡が認められるものがある。このはけ目は，3cm内に12～14条はどのものである。凹面は接合部を除いて全体的に布目が残っている。Aの丸瓦部凹面に×印を焼書きしたものも見られる。D・Eは丸瓦部が欠失しているもののみであるためわからない。瓦当裏面へ丸瓦を接合する際に，A・Bは丸瓦端面にきざみをつける場合がある。他種の接合状況は，資料が少ないために明らかでない。6273の類例は久米寺・巨勢寺にある[4]。

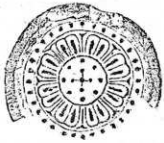
6274 型 式　6274以降に述べる軒丸瓦は，すべて線鋸歯文珠文縁複弁8弁軒丸瓦である。

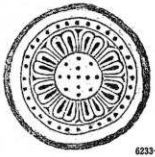
6274はA・Bの2種に細分できる。Aは，弁区全体とともに中房が突出しているために，内

3) 6233Aについては，保井芳太郎『大和上代寺院志』1932年 PL. 31（以下，『寺院志』と省略），『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅳ』瓦編4（以下，『基準資料Ⅳ』瓦編4と省略）1977年。今回報告する藤原宮式軒瓦は，日本古文化研究所（1934年～1940年調査『藤原宮址伝説地高殿の調査1・2』同研究所報告2・11 1936・1941年），奈良県教育委員会（1966年～1968年調査『藤原宮一国道165号線バイパスに伴う宮域調査一』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊1969年 以下，『藤原宮』と省略），奈良国立文化財研究所（1969年以降調査『藤原宮発掘調査報告Ⅰ』同研究所学報第27冊1975年 以下，『藤原宮報告Ⅰ』と省略，『藤原宮跡発掘調査』同研究所年報 1970～1977，『基準資料Ⅳ』瓦編4）などの発掘調査によってすでに発見されている類例の出土地をあげる際には，とくに「藤原宮」の名はあげない。

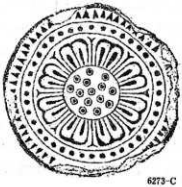
4) 6273はAが久米寺から，Bが巨勢寺から発見されている。『寺院志』PL. 31・36，『藤原宮』p.62，PL. 14・47，『藤原宮報告Ⅰ』p. 61，別表1，PL. 30，『基準資料Ⅳ』瓦編4参照。


6233-B


6233-Ac


6233-Ab

6273-A


6273-C

6273-B

6273-D

6273-E

6275-A

6274-B

6274-Ab

6275-B

Fig.14　軒丸瓦 6233・6273・6274・6275

区全体が盛り上がり蓮弁の反転度を強く感じさせる。外区にめぐらせた珠文と線鋸歯文は密である。外縁は斜縁であり，外側縁に笵型端部の痕跡を残すものがある。丸瓦は瓦当裏面の上端ちかくに溝を深くうがって接合する。接合用の粘土が少量なので接合線は深い円弧をえがく。瓦当裏面は丁寧に削って初期平坦である。丸瓦部は粘土紐巻き上げづくりで，幅約3cmの粘土紐の痕跡が認められる。凸面は縦位にへらで削っているが，縮叩き目を残すものがある。瓦当側面と丸瓦部凸面の一部，そして玉縁凸面全体にははけ状器具による調整痕が見られるものがある。このはけ目は，6273に見られるものより密であり，3cm幅で28～30条をかぞえることができる。この6274Aは，中房の状況でAa～Acにさらに細分できる。Aaは蓮子に円圏がなく，Abは蓮子に円圏があり，Acは中心の蓮子と一重目の蓮子とを結ぶ凸線がある。本例はAaである。Aa・Abは橿原市日高山瓦窯から出土している[9]。また，類例は醍醐廃寺にある[9]。

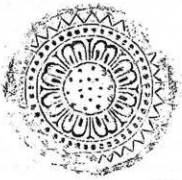
6275型式　6275はA～E・G～Iの8種に細分でき，これらのうちA～D・Iの5種が出土している。いずれも中房が高く突出し，蓮弁の反転が少ないところに共通した特徴があるが，中房の蓮子の数，外区にめぐらせた珠文や線鋸歯文の数の違いによって細分できる。Iは中房が他種より若干低く作られ，弁端は直立している。外縁はいずれも斜縁であり，B・Dは大きく外方に開いている。丸瓦を瓦当に接合する位置は，Iを除いて瓦当裏面の上端にある。Dの接合線はやや台形を呈し，瓦当裏面は平坦に削る。丸瓦を接合する際には，丸瓦凸面に斜格子状のきざみをつけ，さらに丸瓦側面先端を斜めに切り落とす6275の類例は桧前寺・大窪寺・紀寺・長林寺などにある[9]。

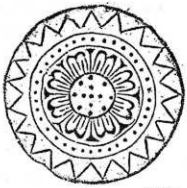
6276型式　6276は小片であり中房も欠失している。A～C・Eの4種に細分できるが，本例はいずれに属するか定かでない。藤原宮や薬師寺出土の例から見ると，中房に1＋5＋9の蓮子を配する複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。中房は大きく，内区直径の半ば以上ある。弁端は直立し，外区外縁の線鋸歯文は密にめぐる。外縁は三角縁であり，外側縁に笵型端部の痕跡を残している。類例は本薬師寺に見られる[9]。

6278型式　6278はA～Fの6種に分けられる。今回はA～Cの3種が出土している。いずれも弁区が平板に作られている。A・Bの中房は突出しているが，Cでは弁区と同一面にあって1条の沈線によって画されている。Bの蓮弁は，細い輪郭線で表現している。外縁は，A・Bが斜縁であるのに対して，Cは直立縁である。丸瓦の接合位置は，3種ともに瓦当裏面の上端にあり，接合用の粘土は少量である。接合に際して，瓦当裏面に半円形に溝をうがち，丸瓦を差し込むことは他と同様であるが，Bのみは半円形にうがった溝の頂点に，約2cm幅の粘土を出枘状に残している。丸瓦端面中央部には逆に切りこみをおこなって，瓦当部と接合している。瓦当裏面はいずれも平坦である。類例は吉備寺にある[9]。

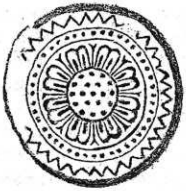
5) 網干善教『橿原市飛鳥町日高山窯跡』奈良県文化財報告5　1962年。
6) 6274Aについては，『寺院志』PL.25，『藤原宮』p.61，PL.14・47，『藤原宮報告Ⅰ』pp.61，別表1，PL.30，『基準資料Ⅳ』瓦編4参照。
7) 6275については，岩井孝次『古瓦集英』1973年，石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936年，『寺院志』，『藤原宮』p.62，PL.14・47，『藤原宮報告Ⅰ』p.62，別表1，PL.30，『基準資料Ⅳ』瓦編4参照。
8) 6276については，足立康『薬師寺伽藍の研究』日本古文化研究所報告5　1937年PL.15，『基準資料Ⅳ』瓦編4参照。6276Eは，塔婆用の小型丸瓦（瓦当直径14.0cm）である。また，Bは瓦当笵の摩耗が著しい段階に作られたものであり，A・Cいずれに属するか，あるいは全く別の笵型によるものか明らかでないためにBとしたものである。したがって，今回の出土例はA・Cいずれかの可能性がある。
9) 6278Bについては，『寺院志』PL.11，『藤原宮報告Ⅰ』p.62，別表1，PL.30参照。

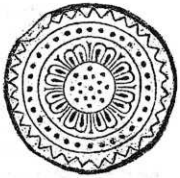
6275-C


6275-E


6275-D

6275-I


7275-H

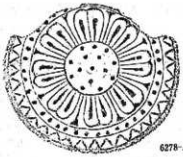

6275-G

6276-A

6276-B

6276-C

6276-E


6278-A

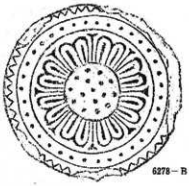

6278-B

Fig.15　軒丸瓦 6275・6276・6278

6279 型 式　6279は，既述の軒丸瓦とは中房においた蓮子の配置が異なる。即ち，既述のものは中心の蓮子の周囲に２重に蓮子がめぐるが，6279は一重のみである。この軒丸瓦はＡ・Ｂ２種に細分できるが，今回はＡ・Ｂが出土している。両者ともに中房は突出している。Ａは，中房の蓮子が１＋８であるが中心の蓮子とともに３個ずつ３列直線的に並び，中房の円周に沿っていない。蓮弁の反転度はＢより弱く，子葉は細く長い。焼成のきわめて堅いものがあり，この例では胎土に粗い砂を多量に含む。Ｂは１＋６と配された蓮子が均整に配置され，文様構成としては特に6308や6311によく似る。丸瓦の接合位置は瓦当裏面の上端ちかくにあるが，6233や6278ほどではない。瓦当裏面は平坦である。類例は醍醐廃寺や桧前寺にある[10]。

6281 型 式　6281は，間弁が変化して界線となり，各複弁を囲む軒丸瓦である。複弁の左右の単位は分離し，それぞれが単弁状に表わされる。Ａ・Ｂの２種に細分できる。今回報告のＡは，笵型が新しい時点に作られたものから，かなり磨耗した段階に作られたものまである。さきに6281Ｃと報告したものは，このうちの後者である[11]。この例では，本来別個に彫られた複弁の各弁がそれぞれ密接している。瓦当面の他の部分では磨耗は目立たない。これらは同笵品であることが明らかになったので，ここで訂正する。丸瓦の接合位置は瓦当裏面の上端ちかくにあるが，接合用の粘土を多量にあてるために接合線は浅い円弧をえがく，丸瓦部は粘土紐を巻き上げて作ったもので，丸瓦凹面には幅約３cm の粘土紐の痕跡が認められる。6281の類例はＡが醍醐廃寺と西隆寺で，Ｂが大和西田中瓦窯・唐招提寺・西大寺でみられる[12]。

6282 型 式　6282Ｌは，既に報告している6282の各種のものと文様構成は同じであるが，6282の中では瓦当が最も大型のもので，瓦当直径は20.7cm に復原できる。本例は外区外縁が欠失しているが，他の良好な資料からすると線鋸歯文20である。製作技法的な面も6282の他の種類と同様であって，丸瓦の接合位置が瓦当裏面の上端からかなり下位にあり，接合用の粘土も多くあてている。そして，接合部はへらで秡をもって削り，接合線は低い台形を示す。この6282Ｌの瓦当は大型であるが，これに接合する丸瓦は通常の大きさをもつものである。これは6225Ｌで見られる状況と全く同じである。その使用についても，おそらく6225Ｌと同様，大棟や降り棟の端に用いられたものであろう。

6284 型 式　6284Ｄは，既出のＡ～Ｃの３種より蓮弁の反転が大きい。中房がわずかに盛りあがっているが，弁区より低い位置にある。外区をめぐる珠文・線鋸歯文はともにもっとも少ない。外縁は三角縁にちかく，高い斜縁である。

6308 型 式　6308は中房が弁区よりやや凸出し，外区内縁にめぐらせた珠文が疎である。Ａ～Ｅ・Ｎの６種に細分できる。今回報告するＣは，弁区全体が盛りあがっており，中房はやや凸出しながらも，ほぼ弁区と同一面にある。外縁は低い斜縁であるが，頂部が幅広く作られている。瓦当裏面に布目が認められるものがあり，これはＡ・Ｂと同様である。

---

10) 6279Ａについては，『寺院志』PL.29，『藤原宮報告Ⅰ』p.62，別表１，PL.30，『基準資料Ⅳ』瓦編４を，6279Ｂについては，『寺院志』PL.25，『藤原宮』p.62，PL.14・48を参照。なお，6279Ａの胎土は緻密なものと，多量の砂粒を含むものとに分けられ，前者は橿原市日高山瓦窯から，後者は奈良県高市郡高取町市尾高台瓦窯からの出土が確認されている。(『基準資料Ⅳ』瓦編４)。

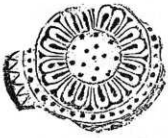
11) 『平城宮報告Ⅱ』p.59.

12) 6281の類例については，『藤原宮』p.62，PL.14・48，『藤原宮報告Ⅰ』p.62，別表１，PL.30，醍醐廃寺は『寺院志』，西隆寺は『西隆寺発掘調査報告』西隆寺調査委員会1976年 PL.27（以下『西隆寺』と省略），西田中瓦窯は『古瓦集英』PL.17，を参照。なお，6281Ｂは西田中瓦窯で6641Ｆと共伴する（『基準資料Ⅳ』瓦編４）。

6278-C

6278-E

6278-D

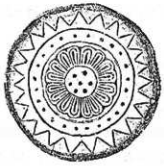


6278-F

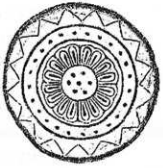
6279-B

6279-A

6284-B



6284-A



6284-C

6284-D

6281-Ab

6281-B

Fig.16　軒丸瓦 6278・6279・6281・6284

B 軒 平 瓦 (PL. 38, Fig. 17～20)

22型式39種・総数240個体の軒平瓦がある。これらのうち，新出のものは6型式11種であるが，それぞれの解説は，既出のものでも小片であったために説明不足であったもの，北方官衙地域から出土したものなど4型式6種を含めて行う。

6641 型 式　6641は，内区の主文が右方向に流れる偏行唐草文であり，上外区に珠文を，下外区と脇区に線鋸歯文をおいている。A・C・E～I・Nの8種がある。今回はA・Eが新たに出土している。Aのなかには，下外区のないものも見られる。しかし，こうした例でも低いものではあるが段顎を設けている。Cは右端に支葉を伴わず，主葉のみで終っている。また，脇区上半を斜めに削りおとす例が多い。Eは右端に左向きの支葉をおいている。脇区を伴わない。Fは主葉にかならず支葉が付属して反転を重ねていく。他種に見られるような，流れに相い反する方向の支葉がおかれることはない。顎は，いずれも段顎である。顎の高さは，Cが約1cmあるのみで，他は総じて低く削り出している程度である。平瓦部の成形は，粘土紐の巻き上げによっており，A・C・E 3種の凹面にその痕跡が認められる。Fについてはあまり明瞭ではないが，粘土の縞の状況からその可能性が認められる。なお，「平城宮発掘調査報告Ⅱ」でBとしたものはCに，Eとしたものは F に改めたことを付記する。類例は西田中瓦窯・山田寺・坂田寺・軽寺・大窪寺・醍醐廃寺・大官大寺・壺坂寺・法隆寺・西隆寺などから出土している[13]。

6642 型 式　6642は内区に6641と同じ方向に流れる偏行唐草文を主文としておくが，外区は上・下・脇ともに珠文を配するものである。A・B 2種に細分でき，Aは唐草の主葉がBより大ぶりである。顎は段顎である。平瓦部はA・B両者ともに粘土紐の巻き上げによっている。類例は壺坂寺・栗原寺にある[14]。

6643 型 式　6643は内区に6641・6642と逆方向の右から左へ流れる偏行唐草文を配し，外区には6642と同じく上・下・脇区に珠文を配するものである。A～Dの4種に細分する。新出のものとしてAがある。主文の唐草文は，各主葉・支葉ともに中央を流れる茎から分離している。瓦当面中央部に笵型の割れを示す例がある。こうした例では，その後に笵型の補修が行われ，連続波状の茎から支葉が2葉とも逆離していたもの（c類）を，1葉を茎から派生させている（b類）。また外区の珠文は，B・Dより小ぶりである。段顎をもつ。平瓦部は粘土紐の巻き上げによって成形しており，約4cm幅の粘土の凹凸が見られる。類例は高合瓦窯・日高山瓦窯・醍醐廃寺・紀寺・定林寺・安倍寺・西隆寺[15]にある。

6646 型 式　6646は，偏行変形忍冬唐草文を内区におく軒平瓦である。このような文様は，次に述べる6647とともに，藤原宮で多く見られ，藤原宮式軒平瓦のなかでもきわめて特徴的なものである[16]。6646はA～Hの8種に細分できる。今回A～Cが出土している。忍冬唐草文の展開の方

13) 6641については，『古瓦集荒』，『寺院志』，『藤原宮』p.62，PL.15・48，『藤原宮報告Ⅰ』p.62，別表2，PL.31，『基準資料Ⅳ』瓦編4を参照されたい。なお，6641Fは，西田中瓦窯で6681Bと共伴する（『基準資料Ⅳ』瓦編4）。

14) 6642Aについては，奈良県教育委員会『重要文化財南法華寺礼堂修理工事報告書』1965年PL.208，Bについては，『寺院志』p.33を参照されたい。

15) 6643については，『寺院志』PL.25，『藤原宮』p.62，PL.15・47，『藤原宮報告Ⅰ』p.62，別表2，PL.31，『基準資料Ⅳ』瓦編4，『西隆寺』pp.36を参照。なお，1975年の発掘調査で6643Aaが日高山瓦窯から出土した。

16)『藤原宮報告Ⅰ』pp.65.

6641-Aa

6641-Ab

6641-C

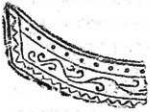
6641-E

6641-G

6641-F

6641-H

6642-A



6641-N

6642-B

6641-I

6643-Aa

Fig.17　軒平瓦 6641・6642・6643

向は，右から左へ向う。上外区に珠文，下外区に線鋸歯文をおくが，脇区は素文である。Aは内区の両端上部に珠文を1点ずつおいている。Bは，主文が全体的に簡略化されている。また，忍冬文各単位の形式化した蕾がBのみ半円形に表現されている。顎は深く，Aは7.3cm，Bは9.1cmある。両者ともに顎を厚く作っている。顎の接合時に平瓦部凸面の縄叩き目を消すことなく，そのまま接合しているものがAにある。この例では，平瓦部の凹面に糸切り痕を残す粘土板の合わせ目や，成形時の模骨痕が認められ，平瓦の成形が粘土板巻きつけの桶巻作りによったものであることが観察される。各砌とも凹面には，瓦当ちかくを除いて布目が全面に認められるが，凸面は顎接合後全体を丁寧に調整するので，縄叩き目は残らない。類例は薩摩廃寺に見られる[17]。

6647型式　6647は，変形忍冬文が左から右へ向い，6646と逆向きになるものである。A～Gの7種に細分でき，今回A～Dが出土している。A・Bは内区がC・Dより厚く，外区の珠文と線鋸歯文も大きく作られる。Cは，線鋸歯文がとくに小さい。Dは珠文も密におかれ，文様の彫りが4種の中ではもっとも浅い。またDの瓦当面には，箔のひび割れ痕が2カ所に見られる。顎はいずれも段顎であり，厚く作っている。Cでは，顎を平瓦凸面に接合するとき，平瓦凸面に0.7cmほどの幅をもつ櫛歯状の器具で沈線をつけて粘土が密着しやすいようにしている。Dの平瓦部凹面には6646Aと同様な粘土板巻きつけによる桶巻作りの痕跡が認められる。凸面は横方向に削って調整するので，叩き目は残らない。類例は本薬師寺にある[18]。

6664型式　6664はA～D・F～Oの14種に細分できる。既に内裏地域や北方官衙地域などいくつかの地域の報告書でその多くが報告されている[19]。

今回報告の地域ではC・D・H・Iが出土し，とくにH・Iが目立っている。Iは新出のものである。瓦当文様は，既出の各種と同じく花頭形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文を内区の主文としている。中心飾りの基部上端は左右に開き，かつ内区と上外区を画する界線に接していない（i）[20]。唐草の各主葉は大きく巻きこんでいる。外区をめぐる珠文は，Cと同様に大よりである。平瓦部の凹面はほぼ全面を調整するので，布目はほとんど残らない。凸面は全面に縄叩き目が残る。この縄叩き目は，顎のちかくは横位で，それ以後は斜位である。また，顎の下面にもわずかに横位の縄叩き目が認められる。Hは報告ずみであるが，今回良好な資料を得たので改めて報告する。文様構成はIと同様，花頭形の中心飾りをもつ均整唐草文を主文とするが，中心飾りの基部は上方に開かず直線的である。しかし，上外区を画する界線には接しない（ii）。主葉の巻きこみはIほど大きくはない。平瓦部の凸面には，全面に横位の縄叩き目が残っている。H・Iに見られるこの縄叩き目は，横位という点で既出のCの縄叩き目と同様である。また，Hの凹面は横方向に調整するが，この手法もCの凹面に見られる調整手法のものとよく似ている。

17）6646については『寺院志』PL.25『藤原宮』p.62，PL.15・48，『藤原宮報告Ⅰ』pp.63，別表2，PL.31，『基準資料Ⅵ』瓦編4参照。
18）6647については，『寺院志』PL.28，『古瓦集美』PL.，『藤原宮』PL.48，『藤原宮報告Ⅰ』pp.63，別表2，PL.31，『基準資料Ⅵ』瓦編4を参照。
19）6664型式は『平城宮報告Ⅱ』でA・C・D・Fを，『同Ⅲ』でC・D・Fを，『同Ⅳ』でGを，『同Ⅵ』でC・Hを，『同Ⅶ』でJ・L・M・Nを報告している。
20）6664中心飾の花頭については，さきに，（i）基部上端が左右に開き，かつ内区と上外区を画する界線に接していないもの（A・C・G・I・J・K・L・M）と，（ii）基部が平行する直線からなり，基部上端が上の界線に接していないもの（H），（iii）基部が平行する直線からなり，基部上端が上の界線に接しているもの（D・F・N）の3者に分けた。『平城宮報告Ⅶ』pp.67参照。

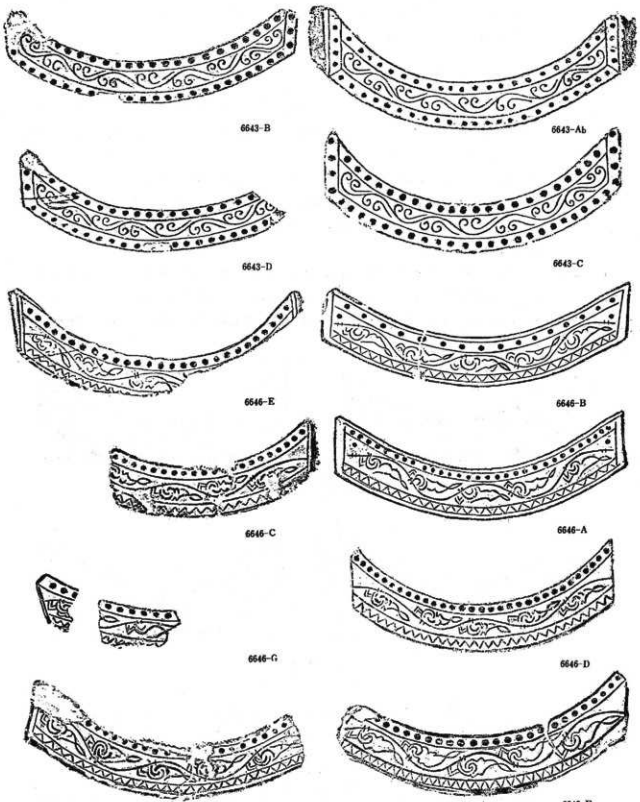


Fig.18　軒平瓦 6643・6646

6671 型式　6671はA～Dの4型ある。今回出土のCは，上から下に巻きこむ中心葉で中心飾りをかこみ，左右に3回反転の均整唐草文を配する軒平瓦である。上外区と脇区には杏仁状の珠文をおき，下外区には線綱歯文をおく。内区が，外区より一段低く作られる。顎は，直線顎にちかい曲線顎である。本型式は興福寺創建時に用いられたものと同型式のものである[21]。類例は平城京左京三坊大路地域，同じく左京三条一坊から出土している[22]。

6675 型式　6675は，左端の小片が1点出土している。平城京左京三坊大路東側溝から出土の完好な資料[23]を参考にすれば，内区に4回反転の均整唐草文を配する軒平瓦である。但し，唐草の主葉は各単位で分離せず連続している。上外区には大ぶりな珠文を，下外区と脇区には線綱歯文をおいている。顎は段顎である。

6681 型式　6681は，十字形に簡略された中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦である。A～Cの3種に細分できる。今回報告するAは，中心葉がBより幅せまく，第3単位唐草が3種の中で最長である[24]。類例は唐招提寺・西隆寺・法華寺・押熊瓦窯・平城京左京八条三坊・同一条三坊・同三坊大路にある。

6734 型式　6734は，3回反転の均整唐草文軒平瓦である。唐草文は巻きこみを表わすかのように，主葉・支葉ともに先端が玉状のふくらみをもつ。外縁は6681と同様に1条の界線がめぐり，内区と外区を画する界線とともに2重になっている。顎は，直線顎にちかい曲線顎である。類例は法華寺・信濃国分寺[25]にある。

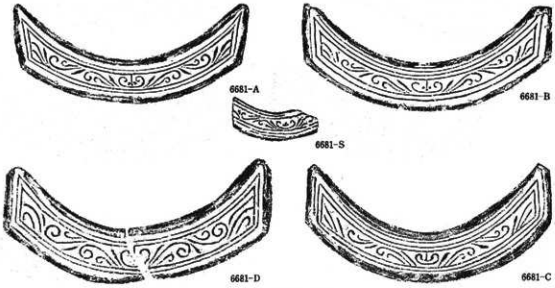
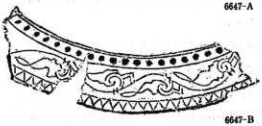


Fig.19　軒平瓦 6681

21）奈良国立文化財研究所『興福寺食堂跡発掘調査報告』学報第7冊1959年 p.7，PL.21。
22）『平城宮報告VI』p.35，PL.51。
23）『平城宮報告VI』p.35，PL.51。
24）6681Aは『平城宮報告VI』で報告ずみであるが，今回完好な資料を得たので改めて報告する。
25）信濃国分寺出土資料と比較すると，瓦当文様を反転したかのように，左右逆に観察される。特徴は，第2単位唐草文の主葉と支葉との分離状況，支葉の数等に顕著である。上田市教育委員会『信濃国分寺跡』1965年 pp.35，PL.17。これとよく似た例は6663Cにも認められる。6663Cは，左第2単位唐草文第1子葉が逆方向に巻きこんでいるところに大きな特徴がある。駿河国分寺と考えられている静岡市片山廃寺出土軒平瓦の1種は，6663Cを反転したかのように右第2単位唐草文第1支葉が逆方向に巻きこんでいる。望月薫弘「静岡市片山廃寺調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告』1968年p.229。

6647-A

6647-C



6647-B

6647-E

6647-D

6647-G

6647-F

6675-A

6671-B

6671-A

6671-D

6671-C

Fig.20　軒平瓦 6647・6671・6675

C 道具瓦

熨斗瓦　道具瓦には，熨斗瓦・面戸瓦・隅木蓋瓦がある。熨斗瓦は，42個体のうち完形品が18個体ある。これらは平瓦製作後，生乾きの段階で分割して作った「半熨斗」である。幅・長さともばらつきがみられるが狭端幅12cm・広端幅13cmを境いにして2つのグループがある。

いずれの凹面にも平瓦の凹面に施されるような調整痕は見られず，布目が全面に残り，粘土紐の痕跡を残すものが多い。凸面はほぼ全面すりけしているがわずかに縄叩き痕を残す。側縁は，両側縁ともにへら削りによる調整を行なったものと，片側縁のみを調整し一方には全く調整を加えず凹面からの分割痕を残したままの両者がある。

面戸瓦　面戸瓦は5個体ある。いずれも丸瓦製作後，生乾きの段階で面戸瓦に作りかえている。このうち完形品は2個体である。形態はいわゆる甑面戸である。茸き上げた際，丸瓦の上部をも覆い平瓦の上面にかかるよう，中央部を舌状に抉り出す。凸面の縄叩き目は，調整の際にすりけす6273と同様な横方向のはけ目痕を残すものがある。凹面縁部は，すべて削って面取りするが，その他の部分には布目を残す。粘土紐の痕跡を残すものと，粘土板合わせ目の痕跡をとどめるものとの両者があり，これらの面戸瓦が藤原宮式に伴うものであることを示している。

隅木蓋瓦　隅木蓋瓦は左後半部の破片である。後面の状況から幅28.6cmに復原できる。長さは他の例からして31cm程度であろう。側面のかかりの幅は1.6cmあり，内法幅25.4cmに復原できる。径0.9cmの釘穴が焼成前に下面から穿たれている。後面との位置関係から釘穴は2ケ所にあけられたものと考えられる（Fig. 28)。

D 丸・平瓦

出土した丸・平瓦の多くは，大ぶりで，粘土紐巻きあげや，粘土板巻きつけによる製作になる。とくに平瓦の場合はこれらの痕跡が桶巻作りの痕跡を示すものである。こうした特徴を示すものは，藤原宮式軒瓦に伴うものと見なすことができ，今回はこれらをとりあげた。

丸瓦　丸瓦はいずれも玉縁を有するもので，円筒形に作りこれを2分割している。これらは，粘土紐の巻きあげによったものと，粘土板の巻きつけによったものとがある。この両者ともに，凸面は第2次成形時の縄叩き痕が残るが，調整時にほぼ全面をすり消している。この場合，縦方向に調整する場合と，横方向に調整する場合とがある。さらに横方向の場合，最終的に幅広いはけ状器具（3cm内で12～14条）で調整する1群が見られる。長さは，玉縁を除いた部分で35～37cmの範囲に集中するが，30cm以下というものが数点見られる。

平瓦　平瓦は桶巻作りによって作られたもので，粘土紐巻き上げによるものと粘土板巻きつけによるものとがある。両者ともに凸面に第2次成形時の縄叩き痕と平行叩き痕が見られ，後者にはさらに格子叩き圧痕を残すものも見られる。ただ，成形後の調整が行われているものと，行われないものとがあり，調整を加えたものの中には，成形時の叩き痕を全く残していないものもある。また，調整の最終段階でのはけ状器具による調整痕を残すものも見られる。これは，丸瓦に見るものより密であり，3cm内に22～26条をかぞえることができる。凹面の布目は，多くがほぼ全面に残るが，端部の布目をすりけすもの，布目をほぼ全面すりけすもの，四周をへらで削って調整するものなどがある。両側縁は分割時のままのものと，へらで丁寧に調整するものとがある。

E 文 字 瓦 (Fig. 21)

文字瓦には，丸・平瓦に刻印を押捺したものとへら書きしたものとがある。刻印を押捺したものは「⊕」「修」各1点，「理」30点である。「⊖」は平瓦凸面狭端部ちかくに印されている。直径2.8cmの除刻[25]の輪郭中に直径2.1cmの⊕印がみられる。深さ0.2cmある。「修」は異体字「修」がやや形式化したものであって，分類は f・g[26]である。f は2.3×2.15cm の縦長，g は1辺2.2cm の隅丸方形の刻印で，いずれも除刻である。「理」は陽刻で丸瓦・平瓦ともにある。丸瓦は凸面に，平瓦は凸面に押される。8種30点出土したうち，i の1点が第17次調査地で出土した以外は第15・25次調査地で出土した（Tab. 3）。b は1辺1.7cmで扇の幅が狭く，文字は本体の輪郭いっぱいに刻されている。c は1辺1.65cmで旁がややゆがむ。f は1辺1.5cmで「理」のなかでは最小である。c・f は丸瓦にだけみられる。g は1辺1.6cmの刻印で旁の上端が輪郭に近接する。h は1.8×1.85cmで，扁が太い。とくに第4画が太い。宮内でも最も多量に出土する。i は2.35×2.25cm で大型である。文字が輪郭に対して右傾する。k は1.7×1.75cmで第3画が太い。l は1.7×2.3cm で横長の刻印である。扁と旁が分離する。g～l は平瓦だけにみられる。

「修」「理」

	b	c	f	g	h	k	l	不明	計
玉手門地区(15次)	6	2	1	4	4	2	2	2	23
佐伯門地区(25次)	0	0	0	0	5	0	1	0	6

Tab. 3　「理」銘瓦出土一覧表

へら書きには丸瓦凹面に記した「矢田」と，平瓦凸面に描いた人面とが各1点ある。人面の平瓦は顔面の約3分の2を残すにすぎない。口は半ば開き気味で明瞭な線で描かれる。

「矢　田」
人面の平瓦

これらのうち「修」「理」の刻印をもつ丸瓦は，粘土紐巻き上げの痕跡をもたず，また，平瓦では粘土板巻きつけ時の合わせ目や布の綴じ合わせ痕跡も残していない。平瓦の側辺は凸面円弧の中心に向かず，凹面弦とほぼ垂直になる。したがって，これら平瓦は1枚作りによるもの，即ち丸瓦とともに平城宮の時代の製品と考える。「⊕」を刻した平瓦は，胎土や焼成の状況から，藤原宮式に伴うもののように見受けられるが，小片のため断定できない。箆書きの「矢田」銘丸瓦も小片のため定かでない[27]。

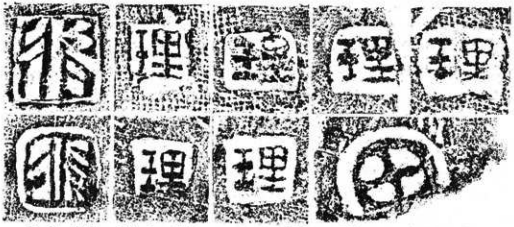


Fig.21　文字瓦　「修」f・「理」b・g・k・l・「修」g・「理」f・h・⊕（左上から）

25）除刻・陽刻は瓦面にあらわれた状態でいう。
また，大きさは瓦面での寸法である。
26）文字瓦の分類は『基準資料Ⅴ』瓦編5による。
27）藤原宮跡から『矢田』銘瓦が出土しているので，本例も藤原宮式瓦の可能性がある。

3 土　　器

各調査区からそれぞれ多量の土器が出土した。なかでも，朱雀門下層の溝 SD1900A から出土した土器群は，奈良時代の土器編年の基準となる重要な資料であり，今回はこれを中心に報告したい。

A　SD1900A出土土器 (PL.39～46，Tab.4・5，Fig.22・23)

出土量　6ABX区から6ABY区へ連なる溝 SD1900A からは，土師器183個体，須恵器139個体が出土した。土器は，南北約 130m にわたって調査した流路のほぼ全域から出土しているが，中央付近のFc～Fk地区の9地区に約70%が集中し，とくに，Fg・Fh の2地区には約40%が密集している。Fl地区から北には約20%，Fb 地区から南には約10%の土器が点在する。流路南部

SD1900Aの堆積層　ではEq地区の堰SX1891をはさんだ部分にやや多い程度であった。SD1900Aの堆積層は，溝底に堆積した厚さ約 25cm の灰色砂層と，それをおおう厚さ約 30cm の黒色土層とからなっている。土器のほとんどは，黒色土層から出土し，灰色砂層に含まれる土器は数%にすぎない。また，両層から出土した破片が接合する例も少なくない。そのため，ここでは出土した土器を，一括してとりあつかった。

i　土　師　器 (PL.39～42，Tab.4・5，Fig.22)

器種の構成　土師器には杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯E・皿A・椀C・椀X・高杯・鉢A・鉢B・甕A蓋・壺B・甕A・甕B・甕C・甑・鍋A・鍋B・鍋C[1]がある。

杯　A　a　杯A（1～15）　外傾する口縁部をもつ平底の土器で，法量によって杯AⅠ（1～6；口径18.7cm，高さ5.0cm）[2]・杯AⅡ（7；口径15.2cm，高さ3.2cm）・杯AⅢ（8～15；口径12.0cm，高さ3.0cm）の3種に区別できる。杯AⅠには，口縁端部を内側にかるく巻き込むもの（1～4）が多く，端部を巻き込まずまっすぐおわるもの（5・6）は2点のみである。底部内面と口縁部外面を横になで，底部外面をヘラで削ったb手法[3]によるものがほとんどである。底部外面を不調整のまま残すa手法によるものが1点あり，木葉痕が認められる。すべて口縁部外面をヘラで磨いている。内面には底部に螺旋暗文，口縁部に2段の斜放射暗文をつける。精良な胎土で硬く，淡褐色を呈するもの（1～4）と，軟質で淡橙色を呈するもの（5・6）とがある。

杯AⅡは，口縁部を内側に巻き込んだもので，b手法で調整し，口縁部外面をヘラで磨く。器面あれがあれているため，暗文の有無はわからない。

杯AⅢには，口縁端部を内側に巻き込み，平底になるもの（8・13）と，口縁端部を巻き込まず，丸底に近いもの（14・15）とがある。前者が後者の2倍ほどある。外面の調整には a_1・a_3・b_3 の3手法がある。螺旋暗文と1段の斜放射暗文をつけるのが通例で，2段の斜放射のもの（13），1段の斜放射と連弧暗文を組み合せたもの（10）は各1例にすぎない。淡褐色のものがふつうで，黄白色を呈するもの（14・15）もある。

---

1) 土器の名称は『平城宮報告Ⅶ』に従った。ただし新出の器種については今回新たに名称を付した。
2) 口径・高さなどの数値はとくにことわらないかぎり平均値を示す。
3) 土師器の調整手法については『平城宮報告Ⅶ』でその細別と一部の改定を行なった（『平城宮報告Ⅶ』pp.71，1976年）。

土師器			個体数			%	
杯A	Ⅰ	a	1	12	30	6.6	16.4
		b	11				
	Ⅱ	b	1	1		0.5	
	Ⅲ	a	5	17		9.3	
		b	6				
		?	6				
杯B				1			0.5
杯B蓋				1			0.5
杯C		a		3			1.6
杯E		a	7	2			1.1
		b	1				
皿A	Ⅰ	a	7	16	25	8.7	13.6
		b	7				
		?	2				
	Ⅱ	?		9		4.9	
椀C		a		3			1.6
椀X				16			8.7
高杯				5			2.8
壺A蓋				1			0.5
壺B				1			0.5
鉢A				6			3.3
鉢B				5			2.8
甕A	Ⅱ			5		2.8	21.9
	Ⅲ			35		19.1	
甕B				13			7.1
甕C				18			9.8
甑				5			2.8
鍋A				6			3.3
鍋B				1			0.5
鍋C				1			0.5
計				183			99.8

須恵器		個体数		%	
杯A	Ⅰ	2	69	1.2	41.3
	Ⅱ	67		40.1	
杯B	Ⅰ	1	40	0.6	24.0
	Ⅱ	2		1.2	
	Ⅲ	35		21.0	
	Ⅳ	1		0.6	
	Ⅴ	1		0.6	
杯B蓋	Ⅱ	1	28	0.6	16.8
	Ⅲ	25		15.0	
	Ⅳ	1		0.6	
	Ⅴ	1		0.6	
皿B蓋		1		0.6	
高杯		3		1.8	
壺B		1		0.6	
壺C		1		0.6	
壺F		1		0.6	
壺K		8		4.8	
壺X		1		0.6	
平瓶		5		3.0	
鉢A		1		0.6	
鉢E		1		0.6	
鉢X		1		0.6	
甕A		3		1.8	
甕B		2		1.2	
甕C		1		0.6	
		167		100.1	

Tab. 4　SD1900A出土土器数量表

b　杯B（19）　杯Aに高台をつけた形で，a_1手法で調整し，螺旋暗文と2段の斜放射暗文をつける。法量によって杯BⅢとする。口径17.4cm，高さ4.7cm。　杯B

c　杯B蓋（18）　平らな頂部となだらかに弯曲する縁部からなり，円形の扁平なつまみがつく。縁端部はわずかに下へ折れる。上面を4回にわけた方形の密なヘラ磨きでしあげ，内面とつまみ上面とに螺旋暗文をつける。法量によって杯BⅠ蓋とする。口径21.2cm，高さ2.9cm。

d　杯C（27・28）　外傾する口縁部とやや丸みのある底部からなり，口縁端部が，内傾する面をなす。a_0手法による。1段の斜放射暗文がある。螺旋暗文はわからない。口径14.4cm，高さ3.1cm。　杯C

e　杯E（29・30）　内弯する口縁部をもつ平底の土器である。a_1・b_1手法で，a_1の1例には木葉痕が残る（30）。口径15.1cm，高さ3.6cm。

f　皿A（16・17・20～25）　外傾する口縁部をもつ浅い平底の形態である。法量によって皿AⅠ（20～25；口径21.2cm，高さ2.8cm）・皿AⅡ（16・17；口径13.6cm，高さ3.0cm）に分ける。皿AⅠには，口縁部が外傾し，端部を内側にかるく巻き込むもの（20～22）と巻き込まないもの（24・25），口縁部が内弯し，端部を内側に巻き込むもの（23）がある。a_0・a_3・b_0・b_3手法で調整　皿A

し，螺旋暗文と1段の斜放射暗文をつける。木葉痕の残るもの（21）がある。淡褐色を呈し，焼成の比較的良好なものと，淡橙色軟質で，器面の風化の著しいものが多い。また，胎土中に砂粒のめだつものがあり，これには器面全体に丹を塗ったものが1例ある（24）。

皿AⅡには，口縁端部を内側にかるく巻き込むもの（17）と，巻き込まないもの（16）とがあり，後者が前者の2倍ある。器面があれているため調整手法はわからないが，外面のヘラ磨きはないらしい。1段の斜放射暗文がある。螺旋暗文はわからない。

へら磨き			0	1	2	3	不明	計
杯A	Ⅰ	a	1					1
		b		11				11
	Ⅱ	b		1				1
	Ⅲ	a		3		2		5
		b				6		6
		不明					6	6
杯	B	不明		1				1
杯	C	a	3					3
杯	E	a		1				1
		b		1				1
皿A	Ⅰ	a	6			1		7
		b	2			2	3	7
		不明					2	2
	Ⅱ	不明	9					9
計			21	18	0	11	11	61

Tab. 5　土師器杯・皿の調整手法
へら磨き，0―なし，1―口縁のみ，
2―底部のみ，3―口縁部・底部

椀　C　g　椀C（35・36）　屈曲しながらたちあがる口縁部をもつ丸底の土器である。a₀手法。あらい斜放射暗文のつくものが1例ある。灰褐色で精良な胎土を用いている。

椀　X　h　椀X（31～34）　丸い底部と内弯する口縁部からなる。内面全体と口縁部外面を横になで，底部外面をヘラで削る。黄灰色で胎土中に砂粒がめだつ。

高　杯　i　高杯（38・42）　平らな杯部と面取りした脚部からなるもの（38・39）と，口縁部が内弯する深い杯部と面取りのない脚部からなるもの（40・42）とがある。いずれも脚部は短い。前者は杯部内面を横になで，外面の全体をヘラで削って調整し，螺旋暗文と2段の斜放射暗文をつける。脚柱部はヘラで削って面取りし，断面は11角形となる。内面にはしぼり目が残る。裾部内面をヘラで横に削る。杯部外面と脚裾部の外面にはそれぞれ5回前後にわけて施したヘラ磨きがある。淡褐色で精良な胎土を用いている。口径30.9cm，高さ11.8cm。後者はすべて杯部外面をヘラで荒く削っているが，ハケメの痕跡を残すもの（40）があり，これには内面に螺旋暗文と2段の斜放射暗文がある。42の口径24.3cm，高さ14.2cm。

鉢　A　j　鉢A（49～52）　口縁部の内弯する半球形の土器で，いずれも口縁部の一部を外へ折りまげて片口としている。体部内外面をハケメで調整したあと，外面下半部を上から下へヘラで削っている。胎土中に砂粒が多く，黄灰色を呈する。外面に煤のあつく付着するものが2点ある（49・50）。口径34.0cm～14.6cm。

鉢　B　k　鉢B（47・48）　口縁部が外傾ないし直立するもので，底部は平底に近い。口縁端部を内側にかるく巻き込み，外面に成形時の凹凸を残しながら底部をかるくヘラで削り，口縁部にヘラ磨きを施すもの（48）と，口縁端部が巻き込まず，口縁部上端を残して外面全体をヘラで荒く削るもの（47）とがある。前者は淡褐色を呈する。後者は淡橙色軟質で，螺旋暗文と1段の斜放射暗文がある。

壺　A　壺　l　壺A壺（26）　杯AⅠを上下逆にし，頂部に扁平なつまみをはりつけたもので，内面と縁部外面を横になで，上面をヘラで削ったの

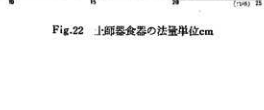


Fig.22　土師器食器の法量単位cm

ち，外面全体をていねいに磨いている。上面のヘラ磨きは，つまみをはさんで方形状を呈する。口径19.6cm，高さ6.1cm。

m　壺B（37）　丸い体部にわずかに外反する口縁がつく小型の器である。口縁部を横に強くなでる。体部は調整せず，粘土紐巻上げ痕を残す。淡褐色で胎土中に砂粒が多い。口径7.0cm，高さ約5cm。　壺　B

n　甕A（55～63）　丸い体部に口縁部のつくもので，法量によって，甕AⅡ（55・56；口径19.2cm，高さ21.0cm）・甕AⅢ（57～63：口径13.6cm，高さ12.8cm）にわける。口縁部は，外反するものがほとんどで，内弯するものは甕AⅡのごく一部である（55）。内外面をハケメで調整したあと，口縁部を横になで，体部外面の下半部を上から下へヘラで削る。底部内面をなでつけるものが多い。胎土中に砂粒が多く，黄灰色を呈する。例外的なものとして，甕AⅢのなかに，体部の内面をヘラで荒く削り，外面にヘラ削りのないもの（61・62）が4点ある。甕Aのほとんどは強い火熱をうけており，内面に有機物の付着したものが多い。　甕　A

o　甕B（64～66）　丸い体部と内弯する口縁部からなり，体部中ほどの両側に把手がつく。把手の平面形は二等辺三角形をなし，分厚く，周縁は角ばっている。内外面の調整手法や胎土・色調は，甕Aとおなじであるが，体部上半のハケメを幅せまく帯状にすり消したものが1点ある（64）。半数ほどのものに煤が付着している。ほかに，薄くて周縁の角ばらない把手の破片が2点ある。　甕　B

p　甕C（67～72）　長い体部に口縁部のつくもので，口縁部には内弯するもの（67～70）と，外反するもの（71・72）とがある。前者は，体部内外にハケメをつけ，外面下半部を上から下へヘラで削っている。外面上半のハケメを幅せまく帯状にすり消したもの（68・69）があり，すり消しは1条から5条にわたっている。口径25cm，高さ36.5cm前後。後者は体部の外面をハケメ，内面をなでで仕上げている。　甕　C

q　甑（53・54）　底部のすぼまった円筒形の体部の両側に把手のつくもので，底は大きくあいている。外面をハケメ，内面をなでで仕上げ，把手の平面形は二等辺三角形状で薄く，周縁は丸みをおびている。胎土中に砂粒の多いもの（54）と，砂粒のあまり目立たないもの（53）とがある。53の口径28.7cm，高さ30.7cm，底部円孔径13.0cm。　甑

r　鍋A（43・44）　半球形に近い体部に外傾する口縁部のつくものである。体部内外面をハケメで調整したのち，外面下半をヘラで削っている。外面上半のハケメを帯状にすり消したものが2点ある（43）。また，口縁部に径1cmの円孔を4ケ所にあけているものが1点ある（44）。胎土中に砂粒が多く，黄灰色を呈する。外面に煤の付着するものが多い。口径38.0cm～28.6cmある。　鍋　A

s　鍋B（45）　鍋Aの体部の両側に把手のつくものである。口縁部は内弯し，把手の平面形は二等辺三角形状で，分厚く，周縁は角ばっている。体部の内外面にハケメをつけ，外面下半をヘラで削る。口径33.1cm，高さ約16cm。　鍋　B

t　鍋C（46）　内傾する口縁のつく鍋で，体部の両側に把手がつく。把手は失われて形状はわからない。調整手法・胎土・色調は鍋A・鍋Bとおなじである。口径22.5cm，高さ約13.8cmある。　鍋　C

ii 須恵器（PL.43～45, Tab.5, Fig.23）

須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・皿B蓋・高杯・鉢A・鉢E・鉢X・壺B・壺C・甕F・壺K・壺X・平瓶・甕A・甕B・甕Cがある。

杯 A a 杯A（101～119） 外傾する口縁部をもつ平底の器である。法量によって杯AⅡ（101・102；口径16.2cm，高さ5.8cm）・杯AⅣ（103～119；口径12.6cm，高さ3.9cm）にわける。杯AⅡには，底部外面をロクロを用いてヘラ削り[4]するもの（101）と，ロクロを用いずに乱方向にヘラ削りするもの（102）とがある。後者は，外面全体をていねいにヘラで磨き，器面全体に丹を塗っている。

杯AⅣの底部外面には，ヘラ切りの痕跡を残し，さらにかるくなでつけるものが多く，ヘラで削るものはない。また，ワラ様のものの圧痕のつく場合が多い。口縁部のロクロなで痕跡の末端はわずかに上方へあがっている。色調は灰白色から青灰色・暗灰色まで各種あるが，灰白色のものには，口径・高さともに最大に属し，底部がやや尖り，底部内面を必ず乱方向になでつける特色をもった一群（104～106）がある。杯AⅣには墨書土器が3点ある（PL.45—107・113・115）。

杯 B b 杯B（135～145） 外傾する口縁部をもつ平底の器で，高台がつく，法量によって杯BⅠ（135；口径20.2cm，高さ9.0cm）・杯BⅡ（136：口径18.3cm，高さ4.0cm）・杯BⅢ（137～143；口径15.5cm，高さ4.1cm）・杯BⅣ（144；口径13.0cm，高さ4.4cm）・杯BⅤ（145；口径10.8cm，高さ3.7cm）にわける。杯BⅡ～杯BⅤは口径に差があるが，高さには大きな差がない。口縁部と底部の境は，丸みをおびるのがふつうで，屈折して稜をなすものは少い。高台は口縁部と底部の境から内寄りにつき，外方へふんばる低いものが多い。底部外面にヘラ切りの痕跡を残し，かるくなでつけるのがふつうで，ヘラで削るものは杯BⅠ（135）・杯BⅢ・杯BⅤ（145）に各1例あるだけである。底部内面を乱方向になでるものが多い。なお，杯BⅢの中には，口縁部が大きく開き，高台を貼りつけて調整するときのロクロなでが底部の中央付近にまでおよび，中央部に指先の圧痕を残す特色をもったもの（138・139）が4点あり，この一群にかきて「半」印の墨書がある（PL.45—138・139）。

杯 B 蓋 c 杯B蓋（120～134） 平坦な頂部と傾斜して周縁で下方へ折れる短い縁部からなり，つまみがつく。縁部の屈曲するものはなく，すべて縁部の屈曲しないものである。ほかに，縁部内面に身をうけるかえりのあるものが1点（121），頂部が山形に傾斜する器高の高いものが2点ある（131・132）。口径によって杯BⅡ蓋（120；口径18.3cm，高さ4.0cm）・杯BⅢ蓋（121～132：口径17.0cm，高さ3.0cm）・杯BⅣ蓋（133；口径13.6cm，高さ2.7cm）・杯BⅤ蓋（134；口径11.4cm，高さ1.6cm）にわける。すべて頂部の外面をロクロを用いてヘラで削っている。内面は乱方向になでたものが多く，中心までロクロなでを残すもの（126・130・132）は6点のみであ

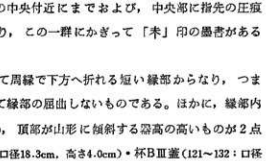


Fig.23 須恵器食器の法量 単位cm

4）杯A・杯B・杯B蓋でロクロ回転を利用してヘラ切り・ヘラ削り・なでを行う場合には，すべて右まわり（時計まわり）のロクロ回転によっている。

る。灰色ないし暗灰色を呈するのがふつうであり，132の外面には自然釉がかかっている。

d　皿B蓋　杯B蓋と同じ形態の大型品である。頂部外面をヘラで削り，内面を乱方向になでている。口径27.2cm。　皿 B 蓋

e　高杯（146・147）　脚部破片であり，杯部の形状はわからない。　高　杯

f　鉢A（148）　鉄鉢形の土器である。小片であり，器面もあれているため，法量・調整手法はわからない。　鉢　A

g　鉢E（149）　円盤形の厚い底部をもったすり鉢である。底部内面に敲打痕らしい器面のあれがある。　鉢　E

h　鉢X（150）　平底の大型の鉢で，体部上半を欠く。体部の両側に把手がつき，把手の位置には沈線が1条水平にめぐる。体部下半と底部の外面を乱方向にヘラで削り，内面はなでている。把手の平面形は正三角形状で，上方へ折れ曲がっている。灰白色を呈し，胎土中に砂粒がめだつ。　鉢　X

i　壺B（151）　肩に稜のある直口広口の短頸壺で高台がつく。肩の4ケ所に粘土紐を半環状にはりつけた耳がつく。体部外面下半をヘラで削り，底部内外面をなでつけている。肩に，蓋を被せて焼成した，径14cmの円形の痕跡がある。口径11.5cm，高さ17.2cm。　壺　B

j　壺C（156）　やや扁平な丸い体部に短い口縁部のつくもので，底部外面をロクロを用いずにヘラで削っている。口径5.9cm，高さ5.0cm。　壺　C

k　壺F（155）　平底で肩のはった体部に外傾する短い口縁部がつくもので，底部外面をロクロを用いずにヘラで削っている。口径10.5cm，高さ13.0cm。　壺　F

l　壺K（152～154）　ラッパ状に開く長い口頸部と肩に稜のつく扁平な体部からなり，高台がつく。口頸部は2段構成で，高台は短くふんばる。体部外面の下半をヘラで削り，口頸部の中ほどに1条の沈線がめぐる。154の口径10.7cm，高さ21.5cm，体部最大径15.9cm。口頸部を欠く1例（156）には，体部内面に漆が厚く付着し，漆の貯蔵に用いたと考えられる。　壺　K

m　壺X（160）　細頸瓶あるいはフラスコ形土器と呼ばれる器形で，倭形の体部だけが残っている。体部長軸の一方に閉鎖口がある。他の一方の外面をヘラで削って仕上げ，体部長軸の中ほどにヘラで径3cmの円孔をあけて口頸部のとりつけ口としている。灰褐色を呈し，上半に深緑色の自然釉が厚くかかる。胎土中に砂粒がやや目立つ。　壺　X

n　平瓶（157～159）　扁平な体部の上面に大きく開く口頸部をつけたもので，大型のものと小型のものとがある。小型品（157）は，体部最大径5.7cm，高さ5.0cmで，体部に粘土紐巻き上げの痕跡を残す。水滴かもしれない。大型品には，肩部が稜をなし，ヘラで面取りした把手の付くもの1点（159）と，肩部が丸みをおび，把手のないもの3点（158）とがある。後者には口頸部に沈線をめぐらすものが1例ある（158）。　平　瓶

o　甕A～C（161～163）　いずれも口縁部・体部の破片であり，甕A（161）・甕B（162）・甕C（163）がある。体部破片には，外面に平行の叩き目，内面に同心円文の当板の痕跡を残すものが多い。　甕　A～C

SD1900Aからは，以上あげた奈良時代の土器のほかに，古墳時代の須恵器杯（165）・蓋（164）・台付壺（166），盾形埴輪・円筒埴輪の小片が出土している。

B　墨書土器（PL.45）

SD1900A 出土土器のうち，文字を記したものが7点，記号を記したものが14点ある。ほかに，墨の付着するものが10点あり，うち杯B蓋3点は硯として用いられている。いずれも須恵器で，器種も杯A・杯B・杯B蓋に限られている。

「秋万呂」　1　「秋万呂十口」（107）杯AⅣの底部外面中央に記したものである。杯10口を重ねてその1枚に人名を記したものか。

「五十戸家」　2　「五十戸家」（128・140）　杯BⅢの底部外面に記したものが1点，杯BⅢ蓋の頂部外面に記したものが2点ある。大宝令の五十戸一里制の里家をあらわしたものと思われる。

「五十家」　3　「五十家」（141）　杯BⅢの底部外面に記したものである。意味は「五十戸家」と同じであろう。

4　「□□」　杯Bの底部外面に記したものである。2文字を縦書きにしたものであろうが，墨がうすくて判読できない。

5　「之」2字・「而」3字（168）　杯B蓋の頂部外面に「之」2字と「而」3字を不規則に書いたもの，習書か。

6　「＋」（113・137）　杯AⅣの底部外面に記したもの（113）が7点，杯BⅢの口縁部外面に記したもの（137）が1点ある。

7　「の」（115）　杯AⅣの口縁部外面に記したものである。

8　「未」（127・138・139）　杯BⅢの底部外面に記したもの（138・139）が4点，杯BⅢ蓋の頂部外面に記したもの（127）が1点ある。先にものべたように，「不」の墨書をもつものは，共通する手法をもつ一群の須恵器に限られている。

C　その他の遺構・包含層出土土器（PL.46）

溝出土土器（205・206）

SD1900B，SD1890その他の溝から，それぞれ少量の土器が出土した。そのほとんどが小片であるため，正確な年代をきめがたい。206は，SD1900B 出土の須恵器皿Aで，口縁端部を外反させ底部外面をヘラで削っている。土師器杯Cをまねたものであろう。205は，SD1860出土の須恵器杯Aで，SD1900A 出土の杯AⅣ（103～119）より口径がやや大きい。底部外面をヘラで削っている。

土壙出土土器（201・203・204・207）

6ABY区の土壙SK1906（G地区中央部）・SK1908（G地区西部）・SK1909（F地区南西部）や，6ABX区の土壙SK1938（I地区中央部）・SK1951（H地区中央部）などから土器が出土した。これらの土壙は，いずれも溝SD1900の西側にあり，出土した土器はSD1900A出土の土器に近い様式のものである。

201は，SK1909出土の土師器甕Bで，球形の体部に強く外反する口縁部がつく。把手は扁平で，周縁に丸みをもたせたものである。体部外面を細かいハケメ，内面をなでつけて仕上げる。淡褐色を呈し，外面全体に煤が付着している。口径23.5cm，高さ22.5cm。

203は，SK1908出土の甕Cで，外面をハケメ，内面をなでによって仕上げる。かまど形土

器と組んで用いられる甕である。

204は，SK1908出土の須恵器杯B蓋で，縁部内面にかえりがある。SD1900A出土の須恵器杯BⅢ蓋より口径がやや小さい。口径15.2cm，高さ3.2cm。

207は，SK1906出土の須恵器杯Aで，底部外面には「田末呂」の墨書がある(207)。　「田　末　呂」

以上のほか，SK1951からは土師器甕A・甕Bが出土している。甕AはSD1900A出土の甕A(70・71)に近い形態で，体部内面をヘラで削っている。甕Bは把手破片で，SK1909出土の甕B(201)の把手と類似している。

D　包含層出土土器・硯 (PL. 46)

6ABY区G地区のGE55～GG55地点には木炭を含んだ包含層があり，ここから土師器甕B・甕C，須恵器杯Bが出土した。いずれもSD1900A出土土器と類似のものである。また，遺構面より上の層から須恵器壺K(208)，須恵器蹄脚硯(202)，須恵器円面硯が各1点出土している。硯

蹄脚硯は，硯部と脚台部を別に作って接合する蹄脚硯Aに属するもので，脚台部を欠く。陸部よりも外提内高く，外提下端に一条の突帯をめぐらし，突帯の下に脚頭をはりつけている。内面に自然釉がかかっている。外提径24.6cm。

E　陶棺 (PL.46, Fig.24)

6ABX区の土壙SK1949から，陶棺の蓋が1点出土した。SD1900A包含層からもおなじものの破片が出土し，これを合わせてほぼ完形となった。棺身はない。蓋は四注式の屋根形で，両妻斜面に径約3cmの円孔を各1ケ所にあけ，一方の円孔の下に「＋」印を焼成前に線刻している。周縁内面に棺身を受けるための段がめぐっている。段の下面に布目の圧痕を残すほかは，内外面全体をヘラ削りとなでによって平滑に仕上げているが，外面には平行叩き板の痕跡がわずかに残っている。縦106.6cm，横56.0cm，高さ21.0cmで，青灰色硬質である。なお，同土壙からはSD1900A出土例に近い形態をもった須恵器壺Kの底部破片が出土している。

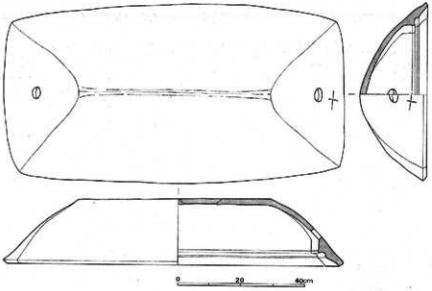


Fig.24　陶棺実測図

4 木　製　品

今回報告する各地域から多量の木製品が出土した。主要な遺構には第14次調査地（6ADH区）の井戸 SE1230，第16・17次調査地（6ABX・6ABY区）の南北溝 SD1900，第18次調査地（6ADF区）の土壙SK1979である。他にも第14次調査地の井戸 SE1247・1313・1410，第15次調査地（6ADF区）の井戸 SE1576・1598・1627，第25—2次（6AGC区）の宮西面外堀 SD3697等から各種の木製品が出土した。ここでは多量に出土した木製品を SE1230，SD1900，SK1979 の順序で述べ，その他の地区出土品は種類ごとに述べよう。

A　SE1230出土の桶（PL.47～54）

井戸枠に木製桶を転用していた。桶は完形品8，頭部のみの破片3，彩色の残る断片2，腐蝕した小片一括，横機板4である。横機板はすべて桶木休からはずれて井戸底に転落していた。

出土した桶のすべては長方形をした一枚板からなり，桧材の板目板を用いる。長さ幅ともにほぼ同大で頂部を山形につくりだし，表側は中央部を厚く，両側をやや薄くして鍔をつくる。鍔をはさんで中央部に把手を固定するための四孔を穿っており，山形頂部木口面には小孔が多数ある。この小孔は木口らか背面に斜めに錐で穿孔している。裏面は平坦面に仕上げ，上・下両端に寄った二ケ所に機をはめこむための横方向の溝をほり込む。溝内には両端と中央部に取りつけの小孔を穿ち，木釘が折れ残るものがある。桶の両面は鉋で丁寧に削って仕上げている。完形品の桶をふくめてすべてのものが木目に沿って割れており，使用中に破損したため，割れ目の両側の随所に紐で結縛するための補修孔があけられる。

渦文と鋸歯文

桶の表面には墨線で渦文と鋸歯文を描き，全面を白土・墨・赤の彩色を埋める。渦文は桶面の大部分を占めて大きくえがかれる。上半の渦文を下半の渦文が中央で連続して逆S字形となるが，これに二本の線を加えて黒・赤でぬりわけて複合渦文をつくり，さらに余白部分を白土で塗彩することによって三重の渦文を構成する。鋸歯文は上端と下端にあって，連続する五個の鋸歯を内方にずらせて二段に施文しており，外方の鋸歯文を黒に，内方の鋸歯文を赤色に塗彩する[1]。上端内方の鋸歯文のあり方は個体ごとに多少のちがいはあるが，原則的には同じと

	遺構	全長	幅	頂部 最大	頂部 最小	上段鋸 長	上段鋸 幅	下段鋸 長	下段鋸 幅	下4～7段 a	下8段 b	下8～下9段 c	下10上17段 d	下18上19段 e	鋸歯文数	彩文	彩	備考
No. 1	下層1	103.2	46.0	3.5	1.6	46.0	4.0	49.0	4.0	31.0	31.5	37.0	19.5	3.0	19	A	白	底板転用(底板に下穴あり)
2	上層	105.0	46.5	2.7	1.4	39.3	4.1	46.8	4.2	29.5	31.2	35.2	19.5	4.0	19	B	白，黒，赤	取手孔(黒)，(赤)，(赤)
3	S 1	108.4	50.5	2.9	1.4	47.3	4.3	49.8	4.7	29.7	29.3	39.5	21.0	4.0	19	B	赤，黒，白	取手孔(赤)，(赤)，(赤)
4	S 2	110.0	50.0	3.4	1.4	42.9	4.2	49.0	4.3	29.8	31.5	37.5	19.0	4.0	20	B	白，黒，赤	白土塗彩(黒，赤)あり
5	W 1	108.0	43.2	2.1	1.4	48.2	4.3	49.0	4.3	30.2	31.3	33.8	18.0	4.2	20	B	赤，白	白土塗彩
6	W 2	105.8	50.7	2.9	1.4	49.0	4.0	50.5 (49.5)	4.2 (4.0)	30.0	33.0	34.0	21.0	3.5	20	A	白，赤	横板転用
7	N 1	104.3	50.7	2.1	1.0	46.3	4.3	47.4	4.5	29.7	29.0	33.0	19.5	3.5	21 (19)	B	白，黒	白，赤
8	N 2	109.0	53.0	2.0	1.0	47.0	4.0	49.2	4.0	30.0	30.0	40.2	23.5	3.0	21	B	白，黒	
9	表土 2	108.0	49.5	(3.0)	(1.5)	46.3	4.2								17	A	白，黒，赤	白土塗，(赤)，(黒)
10	W 2	108.0	48.4	(2.0)	(0.8)	47.5	4.0								(18)	A	白	
11	W 1	110.0	47.7	(1.0)	(1.0)	(49.0)	(5.0)								17	A		
12	表土	100.0	(50.0)	(1.0)						(29.5)			(7.0)	(3.0)	No. 6			
13	転 落	104.0	(48.0)	(3.0)											19			
14	転 落	108.0	(44.0)	(3.0)											19			
15	表土中		(50.0)	1.4														
平 均		107.1	48.8	2.3	1.3	45.6	4.5～4.6	48.8	4.3	29.9	30.7	36.4	21.0	4.3	20			

Tab. 6　桶寸法表　単位cm　（ ）は現長

みられる。なお，淌文の彩色は，赤・黒の部分が入れかわることによって二種類ある。すなわち，上半淌文の外方を黒に，内方を赤に彩色するもの（A）と外方を赤に，内方を黒に彩色するもの（B）の二種がある。分類可能なものはA５点，B９点である（Tab.6）。　**A・B二種**

以下に各個別の特徴を記すが，括番号は井戸から取りあげた際に付した番号にしたがっており，枠板の位置を示している。橋１～８が下段で箱９～15が上段使用のものである。東面北側を１とし順次南・西にうつり北面東側を８とする。９～11は南面西・西面南・西面北の順となり，12～14は井戸底に転落していたもので，15は埋土中にあったものである。

橋１　木目にそって縦方向に二片にわれているが，割れ目を６ケ所で綴じて補修している。中央鎬のけずり出しはやや粗く，左右で厚さが不揃いである。表面上方鋸歯文と頭部定孔と裏面機溝に割付け刻線が認められる。裏面中央上方部に「□人」の刻書と「山」の墨書が，中央部右方と左方に「山マ長」，「此者近水海□」の刻書がある。その他不規則な刻文がある。　**橋　1**　**刻書と墨書**

橋２　頭部傾斜は他のものにくらべてつよく，山形は高い。鎬は上方部と下方部で，はっきりしているが中程付近では明瞭でなく，やや厚めに盛り上った感じである。裏面の左肩下方と下端から7.6cmの位置に横方向の刻線がつけられる。上方のものにはこれに沿って刃物で一部切りこみをほどこす。当初の仕事というよりは二次的に頭部を裁断するためのものと考えられる。中央やや左寄りの部分で木目に沿って縦方向に２枚に割れており，７個所に補修孔を穿っている。補修孔のうち先端と上機の中間にある四対の孔には木釘が折れ残る。上機の両端にはみだして割付け刻線がある。長方形のあて板で補強した痕跡が認められる。同様に下方機下側の四対の孔も当て板を用いたのであろう。表面は残存がかなり悪く文様の剝落が著しい。上・下内方鋸歯文は板の腐蝕のために痕跡程度である。裏面には墨書と鳥・魚の刻書がある。頭部近くの中央右寄り位置に「天□一」の墨書する。この左下方に刻書があり，「弓・海」ともよめるがはっきりしない。上機と下機の間に鳥３羽，魚６匹を描く。脚と嘴が長い水禽が魚を追っている構図で横向きに上下二段に配置する。頭部，尾，脚の表現がそれぞれ特徴的で魚は大きさが各々異り，口吻，鯽，鱗，鮒，などを表現するものと，輪郭線のみのものまである。これらの線の余白部分に「⊠」「×」「ウ」などの記号風の刻文がある。　**橋　2**　**刻書と墨書**

橋３　中央鎬は上下両端部で明瞭であるが，中央部は幅のある平坦面となる。木目にそって２片に割れ，さらに下方部分を一部折損している。割れ目は７ケ所で補修する。うち上機上方の四対の孔には木釘が折れ残る。橋２と同様，裏面に当て板を用いて補強したものである。持柄固定孔は上下とも表側には左右の孔が浅い溝でつながる。結縛の紐のずれのためであろう。機溝のなかには中央，左，右の三ケ所に集中して多数の孔があるが機を数度とりかえた結果であろう。上下の機溝はのみでほりとった後の面を鉋で粗く調整する。彩色は下方部の剝落が著しいが全体に下端の線は明瞭であり，鋸歯文の割付け刻線がある。刻線は全体にわたっていないが，もとの文様の輪郭をたどることができる。上部鋸歯文の中央に上下鋸歯文にはさまれて，流水をあらわしたような「ᘐ」の刻書がある。裏面上半部には墨書と刻線文がある。墨書は上機右上方にあるが判読できない。刻線文はいずれも，「×」印と平行線を重ねがきにしたものもものである。　**橋　3**　**刻　線　文**

1）『延喜式』隼人式に記す威儀用槍は「長五尺。広一尺八寸，厚一寸。編二著馬髮一。以二赤白土墨一畫二鉤形一」と規定されており，今回出土した槍はこの記載に一致する。『国史大系』本p.720。

楯 4 楯4　鎬は高くなく中央部のみを厚くしている。木目にそって縦方向に4条のひび割れが入る。このうち中央右よりのひび割れが深く，頭部と上下の桟で補強する。桟のとりつけおよび割れ目は紐で綴っており，四孔ある個所では各辺の孔に通した上にさらに架裟にかけた痕跡がある。下方桟の左端からはみだして割付け刻線が残る。彩色は下方部の剝落が著しいが，墨・赤土・白土の区別は全体に良好である。上部鋸歯文には彩色にさきだってあらかじめ文様を割りつけた刻線と，縦歯の頂点に釘でついた凹点が認められる。針で鋸歯文の位置をきめた後に点間を結んで線を引いたようである。なお，割付け線からはみだして黒の上に赤が塗られている。製作の際にはみだして塗彩したのではなく，再度の補修，塗り直しによるものであろう。同様に渦文にも墨線割付けと，一部墨と赤が重なった部分がある。裏面の頂部に沿った小孔列の間隔はやや不揃いである。中央部持柄固定孔には，上下各二孔にはさまれる部分に持柄の圧痕が認められる。圧痕は上下孔の位置で孔の間隔に等しく，内方に向って狭くなり梯形を呈する。紐で緊縛した際，柄の上下のずれを防ぐよう配慮したものであろう。両端幅5.2cm，上下端の長さ35cm ある。この形から持柄は中央部分にくり込みをつけたものを推測させる。下方桟の左端からはみ出して割付け刻線が残る。上溝と下溝に桟板(18)(19)がそれぞれあてはまる。

塗り直し

楯 5 楯5　鎬にそって2片に割れており，8ケ所でとじあわす。孔は紐でとじたものと当て板をしたものがあるが，先後はわからない。また，桟の部分にも当板を重ねて釘で補強しており，上下の桟自身も孔の配列からみて二度つけかえがあったようである。桟板(17)が上桟溝の穴と一致するが，桟溝には別の一組の穴がある。持柄固定孔は縦が割れたために右方によせて新たに穿ち，持柄をつけなおしている。また上下桟の外方の両側辺に近い位置に二対の孔が対応してある。割れ目の補修ではなく，長い板をあて裏面に固定して補強したものであろうか。表面の文様のうち上方鋸歯文には割付け刻線が一部認められ，渦文にも素描きの輪郭線が濃く残る。下半部の赤土・白土は大部分剝落している。裏面の頭部中央近くの右寄りに判読不明の墨書と右肩に「小墓」の刻書がある。またこの刻書の下にはじまって，縁にそって中程までに斜に連続して平行する刻線がほどこされる。

刻書と刻線

楯 6 楯6　中央の鎬は上から下まで明瞭につくり出す。木目にそって三片に割れているが，補修孔をあけ，紐で綴じつける。うち左端の一片はA渦文の彩色のある別材で補っている。中央の鎬にそった割れは桟をふくめて8ケ所で綴じるが，うち2ケ所の四対の孔の部分は当て板で固定する。別材を用いた左3分の1のとじ合わせは，桟の他に4ケ所で固定するが組合わない単独の孔が別材の木口近くに沿って4孔ある。うち二つは孔の半ばのみ残っており，この横に転用する以前の補修孔とみられる，下は本例のみ三段にとりつけられる。頂部直下の桟は長さ・幅ともに他の二つに比べて小さく，別材の方には溝をつくっていない。二次的な加工であろうか。上下の桟は，桟溝の孔の配置からみて二度のつけかえがされている。表面の文様は塗り直しがされているが，彩色の剝落のためにもとの輪郭がはっきりのこっている。とくに下方鋸歯文は彩色がほとんど落ちてしまっているため，もとの鋸歯文割付け線のみがはっきりしている。裏面頂部桟の上方に「因」の墨書と「□川」の刻書がある。

刻　書

楯 7 楯7　木目にそって三片にわれ，頭部の一部を欠損する。中央鎬線は持柄取付け位置が平坦面をなすほか上下に明瞭に通る。割れ面は10ケ所で綴じる。うち2ケ所は当て板を用い，紐で結縛した痕跡がある。桟は，桟孔の状況から数度のつけかえがなされたことがわかる。また，

頭部小孔の間隔は不揃いであり，破損した分をあらためて穿ちなおしている。表面彩色は明瞭でとくに上方鋸歯文と渦文には太い筆描きの素描線が残る。素描の上の彩色は部分的にはみ出しがあり，塗直しされたものとおもわれる。下方鋸歯文の排列はやや不揃いである。裏面の上桟上方中央に「八里」の墨書および左罰近くに「木」の刻書がある。

楯8　中央部を厚くするが端線は不明瞭である。木目に沿って二片に割れており，これを5ケ所で綴じる。下端部の磨滅と腐蝕が著しい。桟板（16）が上桟溝に一致する。ただし，合致しない孔が相方にあり，当初からの桟ではないようである。下方の桟棒は残存しないがこれも数度にわたってつけかえがおこなわれた痕跡を残す。表面彩色は下端部が腐蝕のため剝落している。上方鋸歯文と渦文は部分的に素描線からはみだして彩色される。中央部左寄りで渦文の中に星形などの意味不明の針書がある。裏面上桟上方に「海□」の墨書がある。　楯8　墨書

楯9　上桟から下部を欠失した頂部の破片である。縦方向に3片に割れたものを3ケ所で紐で綴じ合わせる。腐蝕のため材の表面は粗く，彩色も剝落している。中央鎬は高く明瞭に削り出している。桟とりつけ孔は両端に各四個ずつあるが孔の大きさに二種あり，位置も不揃いである。鋸歯文の左方には割付けの墨線と彩色部が重なった状態となる。渦文彩色は全体にうすれており，顔料はほとんど剝落している。裏面頂部中央に墨書文字（意味不明）と「山地□」の刻書が重なってある。さらにこの下方に直線を組み合わせた針書がある。　楯9

楯10　下半部を欠失し，持柄取付け位置から上の部分の破片である。右半部で2片に割れるが，これを桟と上下2ケ所の綴じ孔で補修している。彩色面の残存は悪く，鋸歯文と渦文は不鮮明である。鋸歯文の排列は左右不揃いでかつ輪郭は直線にならず粗雑である。なお，腐蝕した下端中央部分に持柄取付け孔の痕跡が認められる。　楯10

楯11　上桟溝から上部の破片であり，中央で縦に2片に割れており，これを3ケ所で補修している。うち上桟直上の補修孔には木釘が折れ残っており，裏面に当て板をあてがって固定していることがわかる。彩色面は剝落が著しいが鋸歯文の一部に塗りなおしが認められる。裏面頂部右下位置に意味不明の刻線による落書がある。　楯11

楯12・13・14　彩色面の残存した楯中央部近くの断片で，上端は上桟溝，下端は下桟溝部分で折損している。長さはほぼ70～80cmあり，幅は12が最大で26cm，13が18cm，14が4cmある。表面彩色は渦文の一部が残っており，いずれも外方から赤・黒・白の順で塗り分けたB類である。　楯12～14

楯15　井戸内埋土中より出土した桟溝を一部残す小片である。摩滅，腐蝕が著しく表面彩色および文様を全くのこしていない。　楯15

桟16～19　4枚あるが井戸内埋土中より出土している。いずれもほぼ相似た長さと幅を持つ細長い板状品で，一面の四辺を削って段をつくり出す。柾目材（16・17）と板目材（18・19）がある。楯へのとりつけは両端と中央部の三ケ所でおこなうが，両端の固定は木釘によるものが多く，2～4本からなる。桟19には木釘が折れ残っている。紐とじは18，19にあり，四孔の間に裂裳に掛けた紐ずれの圧痕が残る。18の紐とじは楯が割れたための後補である。16は楯8，7は楯5，18・19は楯4の桟溝に合致する（Tab.7）。　桟16～19

	長	幅	厚	楯木体
16	41.8	3.6	0.9	8の上桟
17	44.4	3.9	0.9	5の下桟
18	42.1	3.9	0.9	4の上桟
19	42.4	3.9	1.4	4の上桟

Tab.7　桟桟寸法表　単位cm

B　SD1900出土木製品（PL.55～59）

木製品は溝の上層・下層の両層から出土している。食膳具・紡織具・楽器・装身具・工具・箙・箙など内容は多様である。

i　食　膳　具（PL.55・56）

食膳具[2]としては曲物容器・鉢がある。

まげもの

a　曲物容器（21～34）　桧あるいは杉の薄板を曲げて側板とし，これに円形の蓋板，底板をとりつけたものである。完形の蓋，身がそれぞれ1個体出土したほかは円板と側板との「綴じ」の部分がはずれてしまったものである。これまでの蓋板と底板の出土例は，すべて正円に近い円形であったが，長楕円形（小判形）のものが2例ある。21は身に相当するもので，直径17.25cm，高さ2.4cmある。厚さ0.3cmの側板を曲げて柾目板の円板に木釘で6ケ所を固定したもので，側板の重ね部分は深く，両端部の2ケ所を桜皮で綴じる。身としては浅く，皿のような用途だったと思われる。22は円板の一方の面に側板を桜皮で綴じつけた蓋で，対向する位置4ケ所を穿孔し，桜皮を貫通させ固定する。蓋外面は外周部を薄くしてやや甲張りを持たせる。直径12.9cm。側板は端部を欠損しており，全高は不明である。なお，綴じ孔とは別に円板の周縁近くの2ケ所に2対の補修孔がある。

まげもの底板

身の円板は5点出土している。材質はヒノキで2，4の板目板の他はすべて柾目板を用いている。いずれも円板の側面に側板固定のための木釘孔があり，うちいくつかの孔には木釘が折れ残っている。23は完形品で両面に鉋で削った痕跡が明瞭に認められる。木釘孔は側面周囲に5ケ所あり，うち3ケ所に木釘の一部が残っている。24・25はともに半ばを欠失している。形・大きさともに23に似る。なお，23と25には片側面に二次的に刻まれた細い刻線が縦横にある。26は半ばを欠失しているが，両面を細かく削って仕上げている。中心部にやや大きな孔を穿ち，縁辺との中間にも1孔がある。ともに刃物で両面から刳り抜いたものである。27も同様のものであるが孔は小さく，1孔のみである。「箙」に使用したものと思われる。

まげもの蓋板

蓋に用いた円板が2個体出土している。28は板目板を用いた大形のもので，両面は丁寧に削って調整し，中心部を最も厚く，外周へ向けて次第に薄くする。側板綴じつけ孔は3ケ所にあり，うち2ケ所に綴皮の一部が残る。

種別	番号	直径	全高	備　考
蓋	22	19.6	3+a	6 ABY・SD1900
身	21	17.3	2.4	6 ABY・SD1900
	172	39.4	24.7	6 ADH・SE1410最下段
	173	40.8	28.0	6 ADH・SE1410　2段
	174	34.0	16.0	6 ADF・SE1588　下段
	175	36.0	20.5	6 ADF・SE1588　上段
	176	35.5	13.5	6 ADF・SE1595
	177	37.5	26.4	6 ADF・SE1596最下段
	178	38.0	19.0	6 ADF・SE1596　2段
	179	37.0	26.4	6 ADF・SE1596　3段
	180	42.0	19.1	6 ADF・SE1596　4段
	181	41.0	23.8	6 ADF・SE1596　5段
	182	41.0	22.5	6 ADF・SE1596　6段
	183	41.2	20.8	6 ADF・SE1596　7段
	184	45.5	30.5	6 ADF・SE1596　8段
	185	26.5	12.8	6 ADF・SE1598最下段
	186	30.0	13.7	6 ADF・SE1598　2段
	187	33.2	17.5	6 ADF・SE1598　3段
	188	39.0	13.0	6 ADF・SE1598　4段
	189	41.0	23.8	6 ADF・SE1598　5段
	190	41.1	13.0	6 ADF・SE1598　6段
	191	43.1	20.5	6 ADF・SE1598　7段
	192	46.0	6.3	6 ADF・SE1598　8段
	193	44.5	27.5	6 ADF・SE1748

Tab. 8　曲物容器法量表　単位cm

2）『平城宮報告Ⅶ』pp.118.

各綴じつけ孔を結んで側板の圧痕が認められ，径10.8cm に復原できる。29は柾目板で，円周の1/4程を残す破片である。側板のとりつく面には外縁にそって幅0.4cm，深さ0.1cm の溝状のくり込みをつくり，これに側板を立てて綴じる。綴じ孔1孔と，円板の側面に木釘孔2孔が残る。側板をたてるための溝の加工によって木釘孔の一部が削られているので，身の底板に製作使用したものを，のちに蓋板に転用したものと考えられる。蓋の外側にあたる面には全面に不規則な刻線がある。

以上述べた身・蓋の円板はすべて正円形に近いが，小判形の蓋板断片が2点出土している。30は現状で長径31.5cm，短径19.4cm あり，残存の形からみても通常の円形蓋板にくらべるとはるかに大きい。側板をとりつける面は外縁ぞいに「きりかき」を施す。側板綴じ孔は「きりかき」部分にまたがって各1孔をあけているが，いずれも斜外方向に穿孔する。綴じ孔には桜皮の断片が残るとともに表皮のついた小枝が打ちこまれている。なお，長軸側で木目ぞいの割れ目にある補修のための小孔にも木釘・小枝を充塡している。いずれも転用の際に目塞きりをしたものとみられる。31は同じく楕円形曲物の蓋板の断片であり，一端が焼け焦げている。現在長は31.5cm あり，30と似た大きさになるものと思われる。側板の綴じつけ部分は10と似たものであるが「きりかき」をほどこした縁辺部のみなので板の厚さは不明である。一端近くに1対の綴じつけ孔があり，両孔の間には側板の圧痕が認められる。

円板から遊離した側板は3個体分が出土しているが，すべて破損品であり，うち，綴じ合わせ部分と直径がわかるものが各一例ある（Tab. 9）。なお側板34の内側には炭化した繊のような植物体が縦方向に密にならんで付着している。容器として使用中に敷きならべてあったものかどうかわからない。

まげもの側板

種別	番号	径	厚さ	木取	備	考
底板	23	16.9	0.8	柾目	釘孔5	6 ABY・SD1900
	24	16.2	0.6	柾目	釘孔2＋a	6 ABY・SD1900
	25	15.7	0.6	柾目	釘孔2＋a	6 ABY・SD1900
	26	17.2	0.6	柾目	釘孔2＋a	6 ABY・SD1900
	27	16.2	0.6	柾目	釘孔2＋a	6 ABY・SD1900
	74	(16.6)	0.7	柾目		6 ADF・SK1893
	168	13.8	0.7	柾目	釘孔4	6 ADH・SE1230
	169	19.5	0.4	柾目	釘孔1＋a	6 ADH・SE1313
	170	19.4	0.5	柾目	釘孔2＋a	6 ADH・SE1313
蓋板	28	24.2	0.7	板目		6 ABY・SD1900
	29	18.6	0.7	板目	釘孔1 底板の転用か	6 ABY・SD1900
	30	(31.5)×(19.4)	1.5	板目	楕円形曲物	6 ABY・SD1900
	31	(30.9)×(3.4)	1.0	板目	楕円形曲物	6 ABY・SD1900

Tab. 9　曲物容器法量表（底・蓋円板）　単位cm

番号	長さ	高さ	直径	木取	備	考
32	104.6	(5.1)	33.2	板目	棒綴じあり，蓋身不明	SD1900
33	(11.4)	(3.4)	不明	板目	蓋・身不明	SD1900
34	(10.8)	4.6	不明	板目	蓋か	SD1900
171	(80.5)	(7.7)	不明	板目	身・釘孔3 棒綴あり	SE1598使用

Tab.10　曲物容器法量表（側板）　単位cm

は　ち

b　鉢（35）　僅かに四隅をつけた円形，平底のくりぬきの浅鉢である。内面は底から口縁まで横方向に削って1段に仕上げ，外面は立上り部から2段に削り上げる。やや厚目の口縁部は上面と外側面を平面に調整するが，他は内外とも削り面をそのまま残している。辺材から縦取りしたものである。口径は木目に平行方向で21.3cm，直交方向で22.3cm あり，高さは4.6cm，厚さは口縁部で1.2cm，底部で0.9cmある。

ii　紡　織　具（PL.57）

いとまき

a　糸巻（36～43）　棒状の4本の枠木を十文字形の横木で固定し，その中心に軸棒を通して回転するようにしたものであるが，出土したのは枠木と横木の部材で，枠木6点，横木1点がある。枠木36は両端部近くに横木を

うけるための山形の突出部を削りだしたもので糸のあたる外側面に面取りをして丸味を持たせる。両端部はやや削り細めて，木口は直截にする。横木を挿入する枘孔はひとつは丸く，他方は角孔で，角孔には横木の先端部が折れ残っている。37は形状大きさともに36に酷似し，出土地点も同じところから，同部材であろう。38・39は枘孔の位置が両端に寄り，「山」の部分は低く頂部は広い。両端部は一方を斜外方に直截し，他端は曲面をつけて仕上げる。枘孔は，38では外面まで貫通し，39は一孔が貫通するが，枘孔間隔もひとしく同一部材であろう。

40は背にあたる面をまるく面どりし，断面を「カマボコ」型に整えるもので，枘孔部分は「山」形にせず両端を削り細める。枘孔は外側（背面）まで貫いている。41は一端を枘孔部分で欠損するが，全体に入念な削りをほどこす。端部は斜め外方に截り落し，両枘孔の間は内側面を僅かに削り曲面を持たせるのみで山形をなさない。枘孔には横木の離脱を防ぐためのクサビを側面から打込んでいる。

42は横木を重ねて十字形に組み，桙木に嵌めこんで支えとする部材である。薄い短冊形をした板材の左右両端を削り細めている。中央部分には「あいかき」に組むための刳り込みを加える。中心部には心棒を通すための円孔をあけている。直径は刳り込みのある側で0.6cm，反対側で0.8cm ある。丸く削り細めた両端は折損している。

番号	全長	最大幅	最大厚	枘孔間隔	備考
36	24.9	1.5	2.2	13.7	SD1900
37	24.0	1.4	2.1	13.7	SD1900　36と同一部材
38	24.9	1.3	1.6	16.8	SD1900
39	(23.8)	1.4	1.9	16.8	SD1900　38と同一部材
40	23.9	1.7	1.5	14.6	SD1900
41	(21.1)	1.4	1.3	15.5	SD1900
157	28.6	0.6	1.5	6.5—8.0	SE1596
158	29.1	0.6	1.5	5.2—7.2	157と同一材より割りとる

Tab.11　糸巻菱計測表　単位cm

以上のほかに紡織具と考えられるものに43がある。広葉樹の丸材を平らに削ったもので身の両端に枘をつくり出している。一方の枘は根元から欠失している。長方形をした身の一面には両端から内方にかけて削り込みをほどこし，中央部を最も薄くする。他方の枘の断面は扁平で両端がまるみをおびる。先端部は折損しており，もとの長さは不明である。現存長 29.5cm，身の部分長15.6cm，幅3.4cm，中央部の厚さ 1.6cm である。榎・綜棒に似た形をするが，紡織具としては小さい。

はたあしお　さ

iii　楽　器 (PL.58)

こ　と　じ　a　琴柱 (44)　ヒノキの柾目板からつくりだしたもので，前のやや広がった三角形を呈する。頂部に絃受けのための「切り欠き」をほどこし，裾部中央をえぐって両脚をつくり出す。幅4.4cm，高さ1.9cm，厚さは頂部で0.4cm，脚下端で0.2cmある。

iv　装　身　具 (PL.58)

く　し　a　櫛 (45)　大型の横櫛である。上縁（ムネ）は直線をなし，肩が強く張るもので，身の半ば以上を欠失している。ムネの両面に面取りをほどこし，断面が圭頭状を呈す。歯の引通し線はムネに平行して直線をなし，肩にかかる部分は曲線となる。歯数は 2 cm 当り14本である。また，本櫛は歯の引通しが浅く，実質の歯長は引通し線から歯先端までの歯長の⅔弱である。宮内出土例では歯長の⅓が圧倒的である。全高 6.0cm，ムネ高 1.15cm，厚さ1.0cm，歯長4.8cm，ユスノキ製。

げ　た　b　下駄 (46)　歯の一部を残した側辺部近くの破片であり，材の劣化が著しい。使用中に磨

減したものらしく各部がすりへった状態をしている。4辺にまるみをもたせ，形はやや小さい。台の厚さは0.7cm，幽幅2.6cm，現存幽高は0.6cm。材質は明確でないが，針葉樹の柾目板を用いている。

v 工　具 (PL.58)

a 鎌柄 (47・48)　一端に鎌身を挿入固定するための枘孔をうがち，なかほどを細く，柄尻を太めにつくった柄で，全体に細身に削り仕上げ，断面形は楕円状を呈する。柄元の枘孔は幅0.2cm，長さ3.6cmあり，鎌先が柄に対して鈍角になるように斜方向に穿たれる。さらに枘孔に接して鎌先を固定するための釘孔が2対4ケ所にある。全長33.3cm，最大幅2.7cm，最大厚1.4cm。カシ材。48は3片に折損し，さらに柄元部分を欠く。柄身は反りはつくらず，まっすぐにする。柄尻は山形の突出部をつくりだして「すべりどめ」とする。全体は粗い削りで，各部に面どりをほどこすが未製品の可能性がある。長さ27.1cm，中央部の幅1.8cm，厚さ1.6cm，突出部分高さ3.1cmである。カシ材。　**かまの柄**

b 手斧柄 (49)　枝の分岐部分を利用して，幅のせまい長方形の身部と柄を一体につくりだしたものであり，柄は10cm程のところで欠損している。身の上半は両側から削りを加えてほそめ，頂部は直截する。身の下半はやや厚手につくり，先端は両側から斜めに削ってややとがり気味にする。柄側は両側をうすくし中央部を厚くするが，外側は直面に近いかたちとする。身の中央部につく柄は，身に対して約50°の角度で斜下方にのびる。柄の基部はもとの枝の太さをのこし，他は削り細めている。なお，身の先端部分に擦痕があることから袋身の鉄製斧先をはめこんだものと考えられる。あるいは短冊形の板状刃先を外面に密着緊縛させて使用するものであろうか。身の長さ16.5cm，幅3.2cm，厚さ1.4cm，柄の中央で径1.5cm×1.2cmある。カシ材。　**ちょうなの柄**

c 刀子柄[3] (50・51)　50は柄元および身の片面の一部を欠損している。全体を入念に削って仕上げたものである。断面は卵形を呈する。柄頭の幅が最も広く，柄元にかけてほそくする。柄元には0.9cm×0.25cmの長方形の茎孔があく。茎孔の先端は幅と厚みを減じながら柄頭の近くまであり，深さは9.2cmある。孔の内面は炭化しており，茎を焼込んだものである。カシ材。51は周囲を粗く面どりし断面形を楕円に整えたもので，両端木口をきりおとして，一方を柄元とする。柄頭は内側面を斜め方向に削りを加える。茎孔は柄元木口の一方に偏して穿たれており，一辺0.3cmの正方形で深さは1.0cmと浅い。内面は炭化していない。茎孔が浅いことから柄元部分の削りは，刀子の茎が離脱した後の二次的な加工かとも考えられる。長さ10.8cm，幅1.5cm，厚さ0.6cmあるヒノキ材。　**とうすの柄**

d 用途不明品　以上のほかに用途不明の板状品，棒状品などがある。52は短冊状の長方形板の一端を丸く削って整えて頭部としたも　**たんざく状木製品**

番号	種別	全長	径	材質	備　考
61	角棒	12.2	2.1×2.7	ヒノキ	3面ケズリ
62	丸棒	70.0	1.6×1.0	ヒノキ	周囲ケズリ
63	丸棒	14.8	0.7×0.5	ヒノキ	周囲ケズリ，一端細める
64	丸棒	41.2	1.2×1.1	ヒノキ	周囲ケズリ，一端細める
65	丸棒	14.2	1.2×1.2	ヒノキ	周囲ケズリ，一端細める
66	丸棒	23.0	0.7×0.7	ヒノキ	周囲ケズリ，両端細める
67	板	59.8	2.7(幅)・1.0(厚)	ヒノキ	両ワリ面，小孔アリ
68	板	22.6	1.7(幅)・0.4(厚)	ヒノキ	両面ケズリ，一端細める
69	板	16.5	1.6(幅)・0.2(厚)	ヒノキ	両ワリ面，一端尖らす

Tab.12　SD1900出土加工板・棒一覧表　単位cm

3）『平城宮報告Ⅶ』pp.115.

ので，上端近くの中央部に2孔を穿つ。孔の周囲は磨滅痕がある。両面ともに腐朽が著しい。

まるぼう　長さ14.6cm，幅3.3cm，厚さ0.4cm。ヒノキ材。砂層直上から出土した。53は丸棒品で周囲をこまかく削り，両端木口面に円孔を穿ったものである。円孔はいずれもナイフようの刃物でえぐったもので，一方の孔は深くややはそまりながら他端近くまでのびる。対応する側の孔は同様にえぐりこむが浅い。長さ5.5cmあり，断面はやや扁円形をしており，径2.5cm×2.0cmあ

かくぼう　る。ヒノキ材，溝下層から出土した。54は角棒の両端部に2つの円孔をあけたものである。一方の側面にゆるいくり込みをつけて各辺および木口面には面どりをほどこして丸味をもたせる。また円孔の外周は両面ともに擦れたような磨滅痕跡が認められる。長さ19.3cm，幅3.3cm，厚さ1.6cm，孔の径は1.6cm。ヒノキ材。溝黒色土から出土した。

55は長方形をした両面をていねいに削って仕上げた柾目の厚板で両端木口を刃物で切断した

けびき　もの。両面に木口に平行して細い刻線が合計6ケ所ある。刻線は「ケビキ」のようなものであるらしく，うち両端近くの2本の刻線は両面同位置にあり，さらに一面には中央部分に2本の刻線がある[4]。なお，両端近くの刻線のうち一方には，線上中央部に両面とも「ノミ」のような刃物を加えた痕跡がある。長さ16.5cm・幅7.7cm・厚さ1.1cm，各刻線間の寸法は「ノミ」痕跡のある線から順に4.6cm，2.2cm，6.4cmある。ヒノキ材。下層出土。

56は一端を尖らせた丸棒で，周囲は全体にていねいに削り，先端は削り細め，他端は木口を丸く面どりをほどこす。長さ28.0cm，最大径2.0cmある。ヒノキ材。黒色土出土。57も同様の丸棒の一端を尖らせたものである。広葉樹の枝の表皮を剝いだだけのもので，先端の形状は56とほぼ同じである。58は丸い縁部をつくり出すもので，表裏ともに滑面に仕上げている。カシ材。

かくぼぞ組物部材　59は一方に角枘のある組物部材とみられる。60も同様の枘を持つ部材であろうが加工途中の状態である。以上のほかにも棒状品・板状品がある。いずれも61・69のようなものである。これらは一括して別表に掲げる（Tab.12）。

vi　その他の木製品（PL.59）

かご　a　籠（70）　表皮のついた小割りの竹材で編んだ籠であるが，縁編の一部を残すのみで，本体の編みは原形をほとんど失っている。縁の巻き方は，本体の末端を各編目の間を交互にくぐらせて止めるいわゆる「矢筈巻」ようにする。また本体編みは明確でないが，「六ツ目」編みかともおもわれる。小形の籠であろう。縁編部分の高さ1.5cm，竹幅0.4cm。

むしろ　b　莚（71）　藺草を麻糸で織った莚の断片である。縦糸は横方向の藺草2本ずつを潜らせる。「二本潜り二本越え」で織るもので縦糸間隔はほぼ0.8cmある。縦糸26本分19.6cmの幅と藺草88本分17.6cmの長さがある。

ほうき　c　箒（72）　枝元から切りとったホウキグサを束ねた草箒である。穂先は部分的に折れ，磨耗などがあり，揃っていない。元を結縛した紐は欠失しているため差柄の有無はわからない。既報告[9]の箒にくらべてやや束ね本数の少ない小型のものである。長さ27cm。

ひさご　d　瓢（73）　ヒョウタン（ウリ科植物）の「じく」部の先端周辺のみを残した外皮であるが，容器として使用された可能性が強い。

4）SK820出土箒の柄は，割り材から作った丸棒の一端を尖らし，箒草の穂先をまといつけ，麦でしばり固定する。『平城宮報告Ⅶ』pp.132.

C　SK1979出土の木製品（PL.60～62）

SK1979の性格については第Ⅲ章２Ｅでのべたが，出土木簡，検出遺構の状況などからこの地域が鍛冶関係の工房址とみられる可能性がある。木製品についてみると工具の柄などの出土が多い。とくに SK1979の土壙内木炭層からは多量の工具柄その他が一括出土している。いずれも金属製刃先がとれてしまったものであり，焼けこげたもの，半割りにしたもの，あるいは樹皮をつけたままのもののほか，未成品までを含んでいる。また金属品をかたどった鏃形・刀子形・飾金具・鏃形・釘形・ピン形などが出土した。平城宮のこれまでの発掘調査でも鏃形・刀子形の木製品は出土しているが，これらは模造品として製作された儀器とみられ，祭祀に供する具と考えている。SK1979の状況からみて，祭祀品とするより，むしろ金属製品を鍛造する場合の「雛形」としての用途を推測できるのではないかと思われ，前記した工具類のように破損品，未成品が多いところから工具類の製作と再生を行なった工房の可能性が強い。

i 食 膳 具（PL.60）

a　曲物容器（74）　底板54はヒノキ柾目板で全形のほぼ½の破片である。復原直径は約17cm ある。両面ともにていねいに削って仕上げるが，腐朽が著しく側板止めの釘孔はわからない。　まげもの

b　匙形木製品（75～77）　75はヒノキ薄板の一端を削り細めて柄部をつくり出しており，他端は周囲を丸め片面は周囲を薄くし，やや受皿状に曲面をつける。柄は中途で欠損する。全長8.8cm，最大幅3.1cm，柄部幅0.8cm，厚みは中央部で0.2cm，柄部で 0.3cm ある。76は肩をつくりだすもので長さ 6.3cm あり，77は肩がなく曲面もつけられないヘラ状をする。長さ4.8 cm ある。ともにヒノキ柾目板。　さじ

ii 木 製 雛 形（PL.60）

鉄や刀子などの形につくったものが多数ある。

a　鏃形（78～82）　78は身の幅に対して長めのもので，先端部を尖らし，両面ともに端部を削って薄くし断面菱形にととのえ「鎬」をつくりだす。身の下半部を欠失している。79は尖った三角形の身と短い茎をつくりだしており，全体に入念な削りを加えて断面菱形にする。身の下端肩は両側を深くえぐって細め，茎は面取りをして丸味をもたせる。80は尖端をまるくしたはばのせまい身と長い茎をつくりだしたもので，身は薄く削り，片面に鎬をもつ。両肩は斜めに「そぎ落し」て茎とする。茎の末端は，両側からけずり細める。81は細形ながら，やや先太りしたものである。身部の両面は，板の厚みを残したままで鎬はない。茎部分は段をつけずに細め，周囲をけずってまるくする。茎の下半は折損している。82は身部および茎部は細く尖がらせ，各部とも断面形を四角に整える。ていねいな仕上げで，茎への移行部は僅かに曲面をもたせている。　やじり

番号	種別	全長	最大幅	最大厚	材質	備考
78	鏃形	(6.9)	1.7	0.5	ヒノキ・柾目	茎折損
79		9.5	2.7	0.6	ヒノキ・板目	
80		16.2	1.5	0.5	ヒノキ・板目	
81		(9.2)	0.7	0.3	ヒノキ・柾目	茎折損
82		11.3	0.5	0.5	ヒノキ・柾目	
83	刀子形	24.8	2.1	0.3	ヒノキ・板目	茎(幅1.2，長9.8)
84		(9.1)	1.8	0.4	ヒノキ・板目	茎幅1.8，両端欠
85	釘形	10.4	0.7	0.7	ヒノキ・	断面角形
86		12.5	0.5	0.5	ヒノキ・	断面角形
87	ピン形	16.8	1.0	0.4	ヒノキ・柾目	
88		18.8	1.0	0.5	ヒノキ・板目	

Tab.13　SK1979 出土鏃形・刀子形・ピン形寸法表　単位cm

とうす形 b 刀子形 (83・84) 83はヒノキの薄板から身と茎を削りだしている。身は元から先までほぼ同幅で先端は斜めに切り落し，いわゆる「かますきっさき」状になる。両面ともに一部を薄くして刃部をつくりだす。茎は身の半分の幅で長く，末端近くを尖らし，途中に半円状の抉りをつくり，目貫を表すかのようである。84は身の半ばを欠失しているが，73とほぼ似たものである。ただ，茎が身の背側に偏してつくりだされており，幅も広く短い。茎の末端木口は二次的に折断されている。

ざがね形 c 座金形 (85) 薄い円板を削って六花形をつくったもの。中央には径0.8cmの円孔があり，周囲に外縁との中間に3つの小孔を等間隔にあける。しかしうち1孔は欠失する。表裏ともに割ったままの粗面であるが，周縁部分は面取りにして入念な加工を施す。金属製の花形座金具を正確に模したものとみられる。直径4.3cm，厚さ0.2cm，ヒノキ柾目板。

びょう形 d 鋲形 (86) 笠形の頭部をした鋲をかたどったもので，脚の下端を折損している。頭部は全体をていねいに削ってまるくし，頂部は磨滅して平らになっている。下面は周囲から削りとんで平面にし，中央部分のみ四角に削りのこして脚をつくり出す。頭径3.6cm×3.3cm，全高1.8cm，脚の径0.9cm×1.1cm。ヒノキ材。

くぎ形 e 釘形 (87・88) 87は四角い棒の一端を尖らせ釘形にととのえる。上端木口は平らにけずり，頭部をのこして側面周囲をゆるく曲面をつけて削る。88も同様であるが頭はつくらない。いずれもヒノキ材。

ピン形 f ピン形 (89・90) 89は細長い板の一端をV字形に抉り，一方を削って尖らしたもの。細部の加工は入念であるが両面は割り面のままである。90は先端を尖らせるが，他端は圭頭状にしている。両面とも割り面のままである。89は長さ16.6cm，幅0.9cm，厚さ0.4cm。ヒノキ。90は長さ19.0cm，幅0.8cm，ヒノキ。

iii 工 具 (PL.61)

かまの柄 a 鎌柄 (91) 柄尻のみの断片である。周囲を粗く面どりして断面を卵形にととのえ，末端を太めにつくる。木口は粗くけずって丸味をもたせている。残存部分長さ6.2cm，長径2.8cm，短径1.7cm。カシ材。

きりの柄 b 錐柄 (92～97) 92は完形で，柄の軸に沿って周囲を削って稜をつける。柄元の木口には大きく浅い茎孔があり，茎を抜きとった際の二次的変形とみられる。93は柄元と柄尻を欠失しているが，茎孔の一部を残している。茎孔は0.15cm の方形である。94もほぼ同径の柄元部分である。95は末端の木口周囲を斜めに削って整形した柄頭部分である。96は断面が扁円形をするが，直径が3cm 程の大型のもので，周囲は細かく面取りをし，稜はない。柄頭木口には丸味をつけ，中央に方形の茎孔がある。97は同様の柄尻部分の断片とみられる。

とうすの柄 c 刀子柄 (98～127) 刀子の柄はそのほとんどが折れたり，割れたりしており，完形品は少ない。その割れかたからみて，刀身をとり出すために意識的に割っているようである。柄の挿入は施込みをしたものが多く茎孔内面が炭化したものがある。材は広葉樹が多く，樹皮のついたままの丸材の両端を截りおとしたもの。工作具として，日常的に使用されたものであるらしく，装飾的な要素はみられない。柄の形状からA～Gの7種に分類して記述する。

A 柄幅が柄頭の側で大きく，背はほぼ直線をなすもの。断面形は卵形を呈する。2点ある。98は柄元および柄頭部を欠失するが，全面に細かい削りをほどこして断面形を卵型にととのえ

	種別	長	厚・幅	茎孔(縦・横・深)	材	備考
91	鎌 柄	(6.2)	(1.7)×2.8		カ シ	柄元のみ
92	鉄 柄	17.6	1.2 × 1.1	I 0.6×0.3×1.7	広葉樹	角 形
93	〃	(10.8)	1.0 × 1.0	II 0.15×0.15×(0.7)	〃	両端欠
94	〃	(4.6)	1.1 × 1.0	IV 0.35×0.2×1.7	〃	柄元のみ
95	〃	(6.1)	1.2 × 1.0		〃	柄尻のみ
96	〃	(5.8)	2.1 × 3.0	IV 0.3×0.3×3.5	〃	
97	〃	(13.2)	2.1 × 2.1		〃	柄尻のみ
98	刀子柄A	(9.7)	1.4 × 0.9	III 0.7×a×6.2	〃	焼き込み
99	〃	(11.5)	1.6 × 1.7	III 0.5×0.1×(1.1)	〃	
100	〃 B	11.9	1.0 × 1.5	III 0.6×0.3×5.2	〃	
101	〃	7.6	1.4 ×(0.9)	III 0.6×(0.2)×7.6	カ シ	茎部重2段・焼込み
102	〃	(9.6)	(0.9)×(1.7)	I 0.7×a×(6.1)	〃	平 割
103	〃 C	(10.5)	(1.7)×(1.1)	III 0.7×0.4×(3.9)	〃	柄元欠
104	〃	(9.6)	(1.1)×(1.4)	IV 0.9×0.2×(6.0)	〃	〃
105	〃	(7.9)	(1.1)×(1.4)	IV 0.7×0.3×(3.8)	〃	両端欠
106	〃	(4.7)	(0.95)×(1.5)		広葉樹	柄元のみ
107	〃 D	(11.4)	(1.5)×(2.1)	II (0.6)×a×(11.2)	〃	平 割
108	〃 E	(14.1)	2.2 × a	III (0.7)×a×7.5	〃	〃
109	〃 F	11.2	1.8 × 1.8	I 0.7×0.2×7.6	〃	
110	〃	14.6	1.4 × 1.4		広葉樹	
111	〃	13.3	2.4 × 2.6		〃	平 割
112	〃	(6.6)	1.5 × 1.5		〃	〃
113	〃 G	13.3	1.9 × 2.1	I 0.6×0.2×6.7	〃	下ずれあり
114	〃	21.5	(3.8)× 5.0	I 1.4×a×9.1	〃	茎部・大型品
115	〃	(7.2)	1.7 × 1.2	I 0.5×0.2×5.2	〃	平 割
116	〃	(8.7)	2.5 × 1.8	III 1.2×0.3×(8.9)	〃	
117	刀 子	(7.3)	1.1 × 2.2	V 0.8×0.2×6.8	〃	
118	〃	(4.0)	(1.6)×(1.7)	IV 1.1×0.2×(3.2)	モノキ	平 割
119	〃	(5.4)	(1.7)×(0.9)	I 1.1×a×(5.4)	広葉樹	平 割
120	〃	(6.3)	0.8 × 1.2	0.6×0.1×(6.3)	〃	〃
121	〃	(5.0)	1.1 × 1.5	1.1×a×(4.1)	〃	〃 柄元のみ
122	〃	(5.2)	(1.8)×(1.8)	0.7×a×(5.2)	〃	〃 〃
123	〃	(2.7)	(1.2)×(1.4)	I 0.5×0.2×(2.7)	〃 〃	柄元のみ
124	〃	(5.7)	(1.2)× 1.2	0.5×a×(5.7)	〃	平 割 〃
125	〃	(7.1)	(1.4)×(1.4)	0.9×a×(7.1)	〃	〃 両端欠
126	〃	(5.5)	(1.1)×(1.7)	0.8×a×(5.5)	〃	〃 〃
127	鉄鋏小	13.5	2.1 × 2.0	II 0.4×0.4×8.2	〃	柏葉形
128	鑿 柄	12.3	4.2 × 3.1	I 0.6×0.3×(7.5)	〃	笠 形
129	〃	11.0	1.6 ×(2.5)	I 0.7×(0.4)×(6.2)	〃	柄元欠・平割
130	〃	(4.4)	2.9 ×(0.8)	II 0.5×a×(3.7)	〃	平 割
131	〃	(6.5)	2.0 ×(1.0)	II 0.8×a×(6.5)	〃	〃 〃 柄元のみ
132	〃	(6.8)	(2.1)×(1.0)	II 0.5×a×(2.2)	〃	両端欠・平割
133	〃	(7.4)	(1.5)×(1.2)	0.7×a×(5.0)	〃	〃 〃
134	鉈 柄	18.3	2.4 × 2.4	0.7×0.3×5.5	〃	笠 形
135	不明鉄	(9.6)	2.2 × 2.2		〃	茎孔欠・鉈柄か
136	〃	(6.2)	(2.7)×(2.8)		〃	柄付部か・鞘部のみ
137	木製品	13.4	2.7 × 2.5		〃	笠 形
138	〃	16.9	2.0 × 4.3		カ シ	板
139	〃	11.0	2.1 × 3.3		〃	角 板
140	板	9.3	3.8 × 1.7		〃	
141	〃	14.5	2.5 × 2.1		〃	
142	〃	7.0	1.2 × 1.3		〃	

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ

Tab.14　SK1979出土工具柄計測表　単位cm

る。柄元の片面を斜めに刃物で切り割っているが，茎をとりだす際に割りとったものであろう。焼込みである。89は柄元部分の腐蝕が著しく，保存は良くない。茎孔は欠損分を考えても非常に浅い。他の工具の可能性もある。

B　柄幅が柄元の側で大きく，背はほぼ直線をなす。3点ある。100は柄元から柄頭まで入念に削って仕上げる。柄元部分を最も大きくし，柄頭にかけてやや細くする。断面形は柄元部分で卵型，柄頭部分で楕円形になる。柄頭末端は斜めに切り落している。柄元木口の粗く削った面のほぼ中程に断面三角形の茎孔がある。101は茎孔にそって半割されている。身のつくりは100にくらべて短い。柄元木口には，黄金具を装着するための削り出しの段がある。茎孔は深く柄頭木口にまで達する。

C　柄の幅は柄元側で大きく，背はほぼ直線をなす。柄の中程から柄頭にかけて内側に丸ぐり込みをもつ。断面は卵形を呈する。4点ある。82は柄身全体を幅，厚さともに周囲を削って丸め，柄の中程から柄頭までの内側にゆるく山面を持ったくりこみをほどこす。柄頭木口は周囲から細かく面どりをする。103は柄元および柄頭を欠失する。茎孔は断面形が三角形をなすが，対応する2辺に半円形のふくらみがある。孔の内面全体が焼けてこげていることから，あらかじめ「焼けヒバシ」のような丸棒を押し込んだと思われる。なお，102・103の切断面はともにするどい刃物による切り口である。

D　柄幅は柄元，柄頭ともに同じで，柄頭の末端部内側にくり込みをほ

どこす。2点ある。87は柄元にかけてはの身の片側を欠失するが，柄の全体楕円形に整えるが柄頭部分は角が張った形にする。柄頭のくりこみは2cm幅できりかき面には側辺に片寄って小孔がある。孔は斜めに背へ貫通しており，紐紐を通したと思われる。茎孔は身に対しての一方に偏してあり，次第に細まりながら柄頭木口に達する。

E　柄の中程から後が背の方向に「く」字形に屈曲するもの。(88) 断面は楕円形を呈する。身の長軸にそって半ばを欠失しているが，柄の中程で背側に「く」字形に反るのが特徴である。同形のものは 6AAB区SK820 で出土している。柄元にくらべて柄頭部分が大きく，周囲にこまかい削りを加え断面楕円形にととのえる。柄頭木口は丸く仕上げる。茎孔の大部分は欠失していてわからない。

F　柄の途中が「く」字形に屈曲するのはEに同じだが，樹皮のついたままの丸木で，中間から柄元の部分を削って形を整えたもの。4点ある。109は枝の曲折部分を利用して柄全体をそり身につくる。柄の半ばから柄元にかけて面取りするように周囲を削る。他もほぼ似たものであるがいずれも断片である。

G　樹皮のついたままの丸材の両端を截り落しただけのもの。4点ある。113は柄元木口面の一部を削り出している。責金具を装着するためともみられるが，その半ばは切り込み線を入れただけにとどまっている。柄元は節に近くやや太くなる。また柄元から柄頭にかけて樹皮表面が部分的に磨滅している。使用中の擦痕とみられる。116は身の半ばを焼失して柄頭近くを残すもので，茎孔は残存部にはない。柄頭木口は周囲から切りこんで折り離しのまま調整していない。114は長軸に沿って半割したもので，断面に茎孔を残すもの。両端は直截した後，面を調整する。柄に相応して茎孔も大きく幅は次第に細まり，先端は斜めに切り落した形をする。茎孔の形状から大形の刀身を伴うとみられる。なお柄身周囲には縦横に細かい刻線がつき，部分的に樹皮が剝落している。

以上のほかに断片となったものが10余点ある。このうち117は大形の柄である。柄の断面形は細長い長方形をしており，四隅を面取りする。柄の幅は残存部では一定である。茎孔は柄に比べて大きく，丸ヒバシ縁のもので焼込んだ後に茎を焼込んでいる。また，118は断面が正円に近いもので，柄元の木口面は鉛びきにし，片側寄りに火バシで円孔をあけ，さらに断面三角形の茎を焼込んでいる。一端は刃を入れて切り落としている。119～126は茎孔の一部を残す小片である。

のみの柄　d　鑿柄 (128～132)　128は径の太い断面が円形の柄で，ドライバーのかたちをするもの。柄の中程から柄元にかけて周囲を削り込んで細くし，柄頭も同様に周囲に削りを加えて丸味をつける。柄頭にかけての径の太い部分は樹皮を剝いだだけで加工はしてない。表面は火を受けて部分的に炭化している。茎孔は断面長方形をなし，柄軸に対して平行でなく，やや角度がつく。129・130は柄身の断面が四角のもので，131は多面体で，132は復原すると直径はかなり大きいものである。いずれも，一見刀子柄ともみられるが，茎孔が刀子のものに比べて厚いのでの鑿の柄とした。

やりがんなの柄　e　錐柄 (134)　表皮をつけたままの丸材の一端に対応する2面から削り込みを加えて柄元をつくり出したもの。柄元の削り込みは一方を深く，他方を浅くして茎孔を柄軸の片方に寄せている。茎孔は焼込みで，断面形は長方形をし，柄元削りこみに平行して刃がとりつけられてい

たらしい。柄頭は周囲に斜めから刃を加えて折り離したままである。なお，表皮は全体に磨耗し，剝落が著しい。茎孔と柄の形状からは，手元から先方に押し出す用途が考えられるので鉋の柄とした。

f　その他の柄（127・136）　127は柄元を小さく，柄頭を太目につくったもので断面形は円形を呈する。表面の腐蝕は著しいが，周囲をこまかく削って仕上げている。茎孔は方形で，深い。刀子柄のようでもあるが，茎孔が方形であること，軸を円形にしていることから錐柄とも考えられる。136は身の周囲を八角形に面取りし，端部を直截する。他端は炭化している。茎孔はなく，柄頭か柄元か不明である。　**その他の柄**

g　未製品（112・138）　3点ある。うち112は樹皮を剝いだままの材で，柄の半ばから先を削り細め，柄頭は木口周囲を粗く面取りしたもの。138は厚い長方形をした板材の両端木口の両面から刃を加えて切断し，側面には粗い削りを施す。他の1点も同様の形をしており，柄の未成品と考えられる。　**未製品**

h　楔（140～142）　厳密には工具ではないが楔が3点ある。いずれも板・角棒・割材に一部加工をほどこして楔に用いたものである。140は長方形の板の一端4面を削って細めるが先端は尖らせずに木口面を残す。141は角棒の一端2面を削って両刃状に尖らせる。頭部は長い材から折りはなしたままで，周囲の切込みと折りとった痕跡を残す。各辺は面取りをして角を落す。なお，先端部近くの2面には横方向の圧痕が幅1cmにわたって数条みとめられる。142は割材の小片を利用しており，4面とも粗割りのままである。一端2面を両刃状に削り細め，他端は両面から切り込みを入れて折りはなしたままである。　**くさび**

iv　部　材（PL. 60）

a　組物の部材（143）　ヒノキ板目板の両端に枘を切り込んだ組物の部材とみられるもの。一端は2材を受けるための刳込みをつけ，それぞれに固定の目釘がある。内側の枘内には横材が折れ残る（外側枘幅0.7cm，内側枘幅1.3cm）。他端の枘は1材を受けるもので，同様に固定のための目釘がある（枘幅0.7cm）。長さ22.9cm，幅1.2cm，厚さ0.7cm。　**組物の部材**

b　板に円孔をあけた部材（144・145）　144は薄板の一端近くに円孔をもつ部材である。孔は4ケ所に火バシのようなもので穿孔したもの。板の両側は二次的な割れ面で，両端部は焼けて「もえさし」の様になっている。長さ16.6cm，幅1.6cm，厚さ0.6cm。145も火バシようのもので板に角孔をあけたもの。孔は板の長辺にそってほぼ等間隔に3孔あるが，孔の半ばは二次的な割れで欠失する。各面は部分的に焼け焦げている。長さ14.9cm，幅0.7cm，厚さ0.5cm，孔の1辺は0.4cm～0.7cm。ヒノキ材。　**円孔をあけた部材**

v　挽物（PL. 60—151）

a　広葉樹の丸木を輪切りにした材をロクロ挽きしたもの。浅い弯曲面を挽き出している。全周のほぼ½を残しているが外縁を欠失している。このため全形をうかがえないが容器の蓋ないし浅皿の底部近くの断片とみられる。　**ひきもの**

vi　用途不明品（PL. 62）

用途不明とするものには棒状品や板状品，それに大型の木製品がある。

a　棒状木製品（146～148）　146は多面体をした棒状のものである。一方を細くし，頭部に近い部分に2孔を錐で穿孔したもの。長さ12.9cm，最大径1.2cm，孔径0.4cm。ヒノキ材。147　**ぼう**

も同形品であるが先端が折損している。頭部に1孔をあける。長さ6.0cm，最大径1.6cm，ヒノキ材。148は細棒の1端につくり出しを持つもの。軸部は粗い削りで多面体につくり，末端にかけて細くする。つくり出し部は先をやや尖らし，断面円形につくる。全長21.5cm，つくり出し長さ2.5cm，径0.4cm。軸部最大径0.9cm，ヒノキ材。

くびき状 b 「く」字形木製品（149） 「く」字形をした大型品で，樹ないし太い枝の曲折部を利用してつくったもの。全面を手斧で削り断面を角形になるよう整え，各稜に面どりする。一方の端部は折損している。長さ70.6cm，中央部径13.6×8.1cm。端部で9.9×7.6cm。軛（くびき）の未製品か。

輪状 c 板状木製品 150も同様に大型品であり，輪状の曲面を持つもの。厚い板から削り出したもので，断面形は長方形を呈する。両木口部分は木目に沿って割れている。幅は両端でやや異なり，外周の曲率も等しくないので正円にはならないが，推定直径は120cm程になる。全長78.2cm，厚さ5.4cm，最大幅11.3cm，以上の他に151・152の棒状木製品，153～156の板状木製品などがある。

D その他の地区出土の木製品（PL.62）

わく a 箆（157・158） ともに同一材からつくったもので，薄板を木目にそって2分し，それぞれに加工した箆の部材である。両先端を刃先状に尖らせ，長辺の一側の3ケ所に「支え棒」をはめるための刳り込みがある。両者とも板面には箆木につくられる以前につけられた刻線があり，別材からの転用であることがわかる。板状の箆木は類例が少なく，これに似たものとして6AAB—SK820に1例があるのみである。157は長さ28.6cm，幅0.6cm，厚さ1.5cm，158は長さ29.1cm，幅0.6cm，厚さ1.5cm，6ADF区SE1596出土。

かまの柄 b 鎌柄（159） 柄元から柄頭までほぼ同幅で，直線状の柄である。柄元の刳り込みは木口面から鋸びきでつくるが，鎌先を固定するための目釘孔はない。柄頭部分は内側を深くえぐって鉤形の突起をつくり出す。柄の削り面は粗く，全体を断面長方形に整える。なお，柄元近くに「×」印の刻みがある。長さ27.9cm，最大幅2.6cm，最大厚さ1.5cm，カシ材。6ADF区SE1627出土。

けずりかけ c 削掛け[5]（160～167） いずれもヒノキの薄板の頭部を圭頭状にし，一端を尖らせたもの。161のほかはすべて割り放しのままの板目板である。切込みの有無および位置により3種がある。A（162・163）は切込みを持たないもの，B1（165～167）は圭は1～4にわたる。B2（161・164）はB1に似るが，切込みは両側面に施されるもので，164は各1回，161は各7回つけられる。161～163は6AGC区SD3697から，144～147は6ADH区SE1247出土。

b 棒状品（140） 広葉樹の角棒の一端を加工したもの。四面は割り面のままで加工していない。両端部は周囲に切込みを加えて折っている。長さ15.9cm，最大径2.4×2.0cm。6ADH区SE1627出土。

番号	全長	最大幅	最大厚	材質	型式	備考
161	19.2	1.4	0.3	ヒノキ・板目	B_2	6AGC・SD3697
162	19.5	2.2	0.3	ヒノキ・板目	A	6AGC・SD3697
163	20.9	2.4	0.4	ヒノキ・板目	A	6AGC・SD3697
164	19.4	3.1	0.2	ヒノキ・板目	B_2	6ADH・SE1247
165	19.0	2.7	0.4	ヒノキ・柾目	B_1	6ADH・SE1247
166	(14.9)	1.4	0.3	ヒノキ・板目	B_1	6ADH・SE1247
167	(14.1)	2.6	0.3	ヒノキ・柾目	B_1	6ADH・SE1247

Tab.15 削掛け寸法表 単位cm

5）『平城宮報告VI』ではB_1とB_2とが入れ持っている。頭部上面に切込みを加えるものはC以降にはみられず，すべて側辺への切込みとなることから型式的にはB_1の方が古いとみられる。

e　曲物容器（168～193）　底円板，側板のほか，井戸枠に転用した曲物側板がある。底円板（168～170）はヒノキ柾目板で，側面に木釘孔を持つ。148は6ADH区SE1230出土，149・150は6ADH区SE1313出土。井戸筒に使用された曲物は24個ある。直径の最大は45cm，最小は34cmまであり，最も深いものが30cmである。なかに，口縁部あるいは底部に籐を巻くものがあり，重ね部の樺綴じにも各種ある。178は底板がないほかは完形である。側板はヒノキ板目板を用い，重ねの部分は浅く3.8cmで，樺綴じは1行5段とする。内側には全面に縦の刻目を入れ，さらに円周の3/4には斜方向の刻線を加える。底板固定の木釘孔が6ケ所にある。口縁外側に幅6.9～7.6cm の籐を巻く。板目板を用い，重ねの部分は6cmあり，樺綴じは2行3段又は2段とし，側板に密着させて固定する。側板中間で木目沿いに裂目が走るが，これを補修した綴じ孔が7ケ所にある。外径38cm，高さ19cm。側板厚さは口縁で0.55cm底で0.4cmある。6ADF区SE1596に使用した下から2番目の曲物である。

まげもの底板　井筒

172は底板がないが，側板一部が欠損するほかはほぼ完形である。側板はヒノキ板目板で，重ね部分は3.5cmあり，樺綴じは1行7段ある。内側全周に縦方向の刻み目を入れ，重ね部分を中心に円周のほぼ半ばに斜方向刻目を加える。口縁部と底部の2ケ所に籐を巻く。口縁の籐は幅7.3cm で重ね部分は8cmあり，2行2段の樺綴じとし，側板に密着固定する。底の籐は幅3.7cm，重ね部分は7cm，2行2段の樺綴じとする。底板固定の木釘孔は20ケ所にあり，うち6ケ所には木釘が折れ残っている。なお，木釘孔は2個宛が相接してあることから底板を一度取り替えたものとみられる。身の中間に，側板の裂け目を3ケ所で樺綴じする補修がある。口径39.4cm，高さ24.7cm，側板厚さ4mm。6ADH区SE1410に使用された下から2段目の曲物は上下端部と底板への取付け木釘孔3，綴じ孔の一部を残す側板で，高さ7.7cm，厚さ5mmあり，現存長は80.5cmあるが直径は不明。内面には縦と斜方向の2通りの刻目がつけられる。6ADF区SE1598使用の曲物ヒノキ材。

番号	図物番号	全　長	脚径(最大値)	種　別	備　　考
1	4	(8.5)	0.4×0.3	不明・角	6ADF・SK1983
2	5	(12.4)	0.6×0.4	A・角	6ADF・SK1983
3	6	7.7	0.4×0.4	環頭釘	6ADF・SK1983
4	7	6.8	0.8×0.7	不明・角	6ADF・SK1983
5	10	(3.3)	0.4×0.4	A・角	6ADHKQ93，暗褐土
6	11	5.9	0.4×0.3	C・角	6ADH・KE93暗褐土
7	15	(5.4)	0.5×0.5	環頭釘	6ADD・DM73暗黄褐土
8	16	(5.8)	0.5×0.5	B・角	6ADD・NO57床土下
9	17	(3.8)	0.3×0.3	C・角	6ADD・Q176暗褐砂土
10	19	(9.7)	0.6×0.6	C・角	6ADE・LB44床土
11	20	(13.4)	0.6×0.5	A	6ADE・KR43灰褐土

Tab.16　鉄釘寸法表　単位cm

	種　別	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
神功開宝	B	(2.30)	26.6	21.4	8.0	5.9	1.98	0.89
富寿神宝	D	2.36	23.3	19.8	8.1	6.3	1.81	0.60
開元通宝	小頭元	2.14	24.5	20.5	8.1	6.8	1.23	0.39

Tab.17　銭貨計測表

5　金属製品・石製品

各発掘区を通して金属関係の遺物は比較的少量であったが，6 ADF 地区内の工房跡の一画にある木炭を多量に含んだ土壙 SK1979 からは，各種の木製品と共にややまとまって帯金具，鎌先，釘などの銅・鉄製品が出土している。このほかには遺構に伴うものはなく，いずれも床土下の遺物包含層などから出土したものである。

A　SK1979出土の金属製品 (PL.63)

帯金具　a　帯金具[1]（1・2）　巡方（1）と丸鞆（2）が各1点ある。1は定形的なA帯の板状 a 鈴板で，長方形の透し孔をあけ，裏面に四脚をもつ表金具である。表面の外周縁には面取りをほどこし，裏面には黒漆漆がよく遺存する。脚は四脚ともとりつけ部から折損している。つくりはやや粗雑で，やや正角をなしていないが，各部の数値は縦1.8cm，横2.5cm（2・4），厚さ0.18cm で，ほぼ銅鈴帯ＡＶに合致する。なお，ＡＶ帯[1]の巡方表金具は裏面に凹面を持たない板状品であることはすでに述べたとおりである[2]。2は比較的大きな長方形透し孔をあけ，外面周縁に面取りをほどこす。3ケ所の留孔のうち，上方の1孔に脚の一部が折れ残る。なお，か裏面透し孔に接して鋳造の際のバリを残している。各部の数値（縦1.6，横2.5，厚さ0.19cm）は銅鈴帯ＡＶに相当する。

鎌　b　鉄鎌先（3）　身幅が一定で，先端部を弯曲させ，細める。基部の折り返しから柄に対して約120°の角度で装着したようである。全長（復原長）18.5cm，最大幅2.5cm，厚さ0.2cm。

c　環頭鉄釘（6）　円環をもつ釘で，環の断面は円形，脚は角形を示す。6は全長7.7cm，円環外径2.2cm，同円径1.3cm。

釘　d　鉄釘（5・7・10・11・16・19・20）　頭部のつくりによってA～Dの4種がある。A：端部を折り曲げて頭部とする折り釘（10），B：端部の一側を用いて平らにして折り曲げて頭部をつくるもの（16），C：端部両面を叩き延して頭をつくるもの（11・17・19），D：平形の角頭もしくは丸頭をつくるもの（5・20）である。4・7は頭を欠失しているが，いずれも折損面にスラッグが付着しており，製作中の破損品，もしくは再生中の廃棄品とみられる。

針金　e　鉄針金（8）　一端近くを板状に薄く叩き延ばした針金状のもの。各部の断面形は不整形で中央部分は角状をし，末端部は楕円形を呈する。全長24.2cm，最大径0.4×0.3cm。

鉄板　f　鉄小板（9）　二つ折りになった薄板で，何かの素材とみられるもの。全長14.0cm，幅0.5cm，厚さ0.15cm。

B　その他の地区出土の金属製品・石製品 (PL.63)

鏨　a　鉄鏨（13・14）　頭部から先端にかけて次第にほそめた小形の整状のもので，頭部は磨滅して丸くなる。先端はともに折損している。断面形は四角形を呈する。13は長さ9.8cm，頭部最大径0.9×0.9cm。14は長さ7.6cm。最大径1.1×1.0cm。6 ADD区灰褐色砂質土出土。

1）革帯を構成する鉸具，巡方，丸鞆，銙尾は形状に応じて分類でき，それぞれの組合せによって銅鈴帯はA・B・Cの3分類する。さらに各鈴帯は，鈴の縦と横幅によって細分できる。これらの分類については『平城宮報告VI』pp.155.

2）AV帯は，帯幅が2.0cm 以上のものである。巡方，丸鞆ともに表金具は裏面がくぼまない板状につくるもの。『平城宮報告VI』p.158.

b　鉄鏃（12）　短葉形をした鋌のない鏃で身の下半部に刳り込みを持ち，これに続く篦被は面取りをした六面体を呈する。茎は断面四角である。先端および茎端部は欠失する。平根有茎式に属する。現存長3.8cm，刃最大幅1.8cm，刃厚0.18cm。6 ADD区，灰褐色砂質土から出土。　鏃

c　銅鈴（18）　頭部の残存状態はよくないが平形丸頭の鈴であり，頭上面には鈴金痕跡がある。脚は比較的長く太く，断面四角形である。全長3.3cm，頭部径0.9cm。SK3583出土。　鈴

d　釘（7）　頭部と脚の半ばを欠失した断片。現存長4.2cm。6 ADD区暗黄褐色粘質土出土。　釘

e　銭貨（21～23）　各発掘区から総計34点の銭貨が出土した。神功開寶，富寿神寶，開元通寶各1点のほか，宋銭12点，寛永通寶19点がある。いずれも遺構にともなうものはなく床土あるいは床土下の遺物包含層からの出土である。寛永通宝は朱雀門基壇検出にあたって道路を切り下げた際，路面下から銭差しに連らなった状態で一括出土したものである。　銭貨

神功開寶　功の旁を「力」につくる「力功神功」とよばれるもの[3]。遺存状態は不良。6 ABY区，朱雀門基壇西方から出土。

富寿神寶　銭型は小型で，富の「田」第4画横線が短かく「冂」がまえに接しておらず，いわゆる「不接培」とされるもの。遺存状況は普通，6 ABY区SD1900南端近く出土。

開元通寶　完形で遺存状況および鋳上り，仕上げともに良好。元の第1画が短かく（小頭元），第2画が向って左側斜上に跳ねる。6 ABY地区朱雀門北方から出土。

f　とりべ（55）　短い口縁を持った丸底のとりべである。口縁部には片口状の注ぎ口がつく。器壁は厚く，外面は全面を指頭押えで調整するが数度の塗り重ねと補修痕がある。内面には全面に厚く銅滓が付着する。胎土は微粒砂を用い，白灰色を呈する。口径14.0cm，高さ5.8cm，6 ADF区SB1419の南側小穴から出土。　とりべ

g　鞴羽口（56）　両端部を欠失するが，一端は火口に近く，火熱を受けて暗灰褐色を呈し，他は暗褐色である。外面はヘラ削りで調整し胎土には大粒の石英を含む。外径5.0cm，内径2.7cm，現存長7.4cm，とりべの近くから出土した。　ふいご

h　砥石（57～65）　計9点ある。57は研面を六面もち，うち二面は円錐状の凹面をなす。砂岩製。同様に円錐状研面をもつものが他に2点ある。61は不整形であるが全面を研面にし，8面をもつ，砂岩製。62および63は長方形であるがともに両端部は古い折損面である。62は研面は1面のみ。63は4面をもつ。ともに砂岩製。57は6 ADH区SB1419南側，61～63は6 ADF区SE1627から出土。　砥石

i　滑石製臼玉（66）　計16個あり，6 ADF区黒色粘土層から出土した土師器壺に入っていた。灰白色，青灰色，暗緑色などを呈する。外径はほぼ揃うが高さはふぞろいである。最大径0.54cm，（最小径0.43cm），最大高0.36cm（最小高0.15cm）である。　臼玉

j　滑石製石塙（67）　やや内傾する厚い口縁と短い鍔をもつ羽釜形の口縁部破片。外面は横方向に粗く磨くが，右回りの削り痕を残す。鍔から下は縦の削り痕を残す。内面はていねいに磨き滑面をなす。復原口径24cm。6 ADF区SK1741出土。　石塙

3）銭貨については『平城宮報告Ⅵ』pp.97を参照。なお計測値については，同報告p.189を参照されたい。

第V章　考　　察

1　遺　　跡

今回報告する地域は，いくつかの宮城門と宮の外郭をめぐる大垣を含む地域を中心としている。第II章で述べたように，宮城門・大垣ともにその中軸線の内側を検出したにとどまり，さらに門の残存状況については，根石の残存していたSB1800が最良という程度であった。大垣に関しても発掘区においてすべて連続して検出し得たわけではなく，その他の遺構も概して稀薄であった。

したがって，各宮城門内の縁辺部がどのように区画され，宮西がどのように構成されているかという面についての資料を得るには至らなかった。しかし，その後の調査の成果から，佐伯門を宮内に入ってすぐの位置に設けられたSA3590・3680の両南北塀が，馬寮の西を画す施設であることが確認された。この馬寮の南限を示す施設については必らずしも明らかでなく，今後の課題として残った。玉手門・佐伯門中間地区の調査で検出した土壙SK1979から約10点の木簡が金属利器のための木柄，鞘口，鉱滓などとともに出土している。木簡は釘に関する記載をもつものである。この土壙を検出した方形に区画されたSX1978を含めて，この地域に鍛冶関係の工房があったことを推測させる。

ここではまず，宮門・大垣・宮内道路と建物配置について述べ，つぎにすでに『平城宮報告II』[1]で考察を加えた宮の造営尺について新たな事実を含めて若干の考察を加えよう。

A　宮　城　門

門　号

遺構を確認した宮城門は，南面中央門(SB1800)，西面南門(SB1616)，西面中央門(SB3600)の3門である。宮城門門号については『平城宮報告II』[2]で考察を加えたところであり，それに従えばSB1800は朱雀門，SB1616は玉手門，SB3600は佐伯門と称されていたものと考えられる。

朱雀門は他の2門と比較して残存状況が良好であり，遺構検出面から1.5～1.6mにおよぶ深い掘込み地業と礎石掘付けに際する根石を検出している。根石の位置によって，すでにふれたごとく門の規模は桁行5間，梁行2間であることが判明し，それぞれの縁長距離は25.25mであり，各柱間寸法は5.05m (17尺) 等間である。

朱雀門

宮城外門に関しては，従来さほど明確ではなかったが，朱雀門・玉手門・佐伯門の検出によって，その一端を明らかにすることができた。とりわけ朱雀門においては，根石の残存から，構造や規模を推測する手がかりを得ることができた。朱雀門では，礎石据え付けに際しての掘込み地業を検出しているので，基壇の基礎を固め，礎石据え付け面に至ってさらにその作業のために掘込みを行ったことが明らかである。朱雀門の平面規模は先述のごとく桁行5間，梁行2間であるが，これは『拾芥抄』に7間5戸と記された平安宮朱雀門とは異っている。平安宮

1)『平城宮報告II』pp.99.　　2)『平城宮報告II』pp.103.

の他の宮城門を『拾芥抄』[3]で見ると，陽明門・談天門・待賢門・美福門の4門について5間3戸と記されており，柱間寸法が同一寸法であったとすれば，朱雀門は他の宮城外門よりひとまわり大きく造られたことが明らかである。

玉手門・佐伯門

平城宮の場合，検出した玉手門・佐伯門はいずれも礎石掘付け痕跡が認められず，掘込み地業による基壇基礎部が残っていたのみである。したがって，両門の柱間寸法は明らかではないが，朱雀門と変らないものとすれば掘込み地業の平面規模によって，両門の平面規模は朱雀門とほぼ同一であったことが推測できる。但し，朱雀門が宮城正門であったこと，低湿な下ツ道に位置したとは言え，掘込み地業が他と比べにならないほど深く行われていたこと，平安宮の宮城門の中で朱雀門と壬生門のみが二階と記されていることなどからして，朱雀門を入母屋重層門と考える。また玉手門・佐伯門については，掘込み地業の規模から，妻側の軒の出が短くなるので，切妻単層門と考えた。柱間寸法は桁行17尺（5.05m等間），梁行15尺（5.05m等間）に復原した。

藤原宮では，宮の南面中央門と北面中央門の平面規模が同一で，桁行5間・梁行2間，柱間寸法17尺等間に復原されており[4]，平城宮朱雀門はこれを踏襲したと考えてよいだろう。

門SB7801

平城宮内の門のうち，朱雀門と同規模と推定されるのは6ABR区（第77次発掘調査）で検出したSB7801である[5]。これは，朱雀門北方約520mの位置にある門で基壇規模が東西約31m，南北約17.2mであることを確認している。これは推定第1次朝堂院北半地区の南辺中央にある門で，宮の造営当初に設けられたものである。今これを基壇平面規模からみて，朱雀門と同様な重層門とみた場合，宮城の西面各門より大規模な門が宮の中央に設けられたことになる。一方，藤原宮で南面中央門と北面中央門が平城朱雀門と同規模で，さらに朝堂南門もほぼこれと同規模であることが確認されている[6]。このことは，宮において中軸線上にのる中枢部をより重視したあらわれとも考えられよう。

門の上部構造と基壇外構については第VI章復原模型の項にゆずり，基壇内に設けられた掘立柱塀SA1812について検討を加えたい。

朱雀門廃絶

SA1812は，SB1800の掘込み地業内で8間分検出し，さらに西に1間分延びることが考えられる東西塀である。この塀は，朱雀門の北側柱筋のすぐ北に接して設けられ，しかも基壇内のみに設けられた塀である。検出した柱掘形は，朱雀門礎石の抜取り痕跡を掘込んでおり，これが朱雀門廃絶後に設けられた塀であることがわかる。門の廃絶からSA1812設置までの期間は，門基壇のみの塀であることを考えれば，両翼の大垣がまだ存在していることをうかがわせ，門の廃絶後ほどなく設けられたものと考えられる。このように考えると，SA1812は朱雀門廃絶にともなって閉塞施設であることが明らかであり，この門は宮の出入口としての機能が停止せしめられたとすることができよう。

朱雀門廃絶の時点については明確でないが，恭仁遷都に際して，またその後であれば長岡遷都に伴う場合の両者が考えられる。

平城宮の朱雀門が文献にみえるのは，和銅8年正月朔，天平6年2月朔，天平16年3月丁丑

3）『拾芥抄』中　宮城部第十九　新訂増補古実叢書13　1955年pp.386.
4）藤原宮南面中門については『藤原宮報告Ⅰ』pp.51を，北面中門については『年報』1976年pp.42を参照。
5）『年報』1973年pp.20.
6）『藤原宮址伝説地点殿の調査二』pp.20.図版第57～64.『日本古文化研究所報告』第12，1941年.

(『続日本紀』)，『儀制令儀戈条古記』[7] である。他の門も含めて文献にみえる頻度というものは必らずしも多いわけではないが，元日朝賀をはじめ，国家的儀式に欠くことのできない朱雀門の記事が天平17年以降の史料にみえないことは，この門の機能が何らかの事情によって停止させられた状況をうかがわせる。さらに，天平16年3月の朱雀門は難波宮のそれであることから，平城宮の朱雀門については天平年間前半にすでにそうした状況にあったことを推測させる。いずれにしても，文献的に僅かな史料しか持ち得ないなかで云々することはできないが，宮城正門としての機能に変化を来した時点に求めねばならない。それは，とりもなおさず平城宮全体の機能の変化に原因するものと考えねばならない。

恭仁遷都　ところで『続日本紀』天平15年12月条には「平城の大極殿ならびに歩廊を壊ち，恭仁宮に運び造る云々」とみえており，恭仁遷都に際しては平城宮の中心的建物のいくつかが恭仁宮造営のために運ばれたことが知れる。こうした際に，朱雀門を移築した可能性も考えられよう。

長岡遷都　次に長岡遷都に伴った場合であるが，『続日本紀』延暦10年9月甲戌条に「越前，丹波，但馬，播磨，美作，備前，阿波，伊予等の国に仰せて平城宮の諸門を壊ち運んで，以て長岡宮に移し作らしむ」とみえている。これには諸門とするのみで，具体的な門号は記されていないが，計8ケ国に移作せしめていることは，平城宮に残っているすべての門を運んだと考えて良いだろう。もとよりその中に朱雀門が含まれていたかいなかは明らかでないが，ここにも今ひとつの可能性が認められるのである。長岡宮に諸門を移した後も，たとえば『続日本紀』延暦11年2月癸丑条に「諸衛府を率い平城旧宮を守る」と見えており，門撤去後も何らかの形で閉塞施設は必要としたわけであり，長岡宮への移築後ただちに閉塞されたとすることもできよう。

このような状況は，ひとり朱雀門のみに限らず，他の門においても同様であったろう。しかし，玉手門・佐伯門の遺存状況は良好でなく，礎石据付けの痕跡を残さないほどの削平を受けているので，仮りに閉塞施設が設けられたにしても，SA1812程度の柱穴掘形の深さでは，遺構として残り得ない状況である。このように，いくつかの問題点を後に残さねばならない。

B 大　垣

大垣の規模　宮の南・北・西各面において検出した大垣は，北面を除いていずれもその中軸線の内側を検出したものであるが，朱雀門に付属する東西脇門（SB1801・1802）の検出によって中軸線内側の規模を確認することができた。即ち，西脇門の柱筋の北1.35mで築地が一段さがることから，これが大垣基底部の残存部と考えられる。したがって，これを折り返した2.7mが宮の大垣の基底部幅と考えられる。そして，掘込み地業の築土が基底部の北約3.5mの幅をもって広がり，溝SD1762に達するので，この間を内側犬走りと考えた。但し，東脇門と，朱雀門の間12mの範囲では，大垣の北縁が約0.4m北へ広げられているので，朱雀門と東西脇門の間では大垣の基底部は3.5mの幅で造られたものと考えられる。

宮内の各地域で検出する築地は，ほとんどの場合築土が残らず，両側の雨落溝間の距離，即ち築地と犬走りとを含めての規模を確認する場合が多い。ただ，内裏地域については築地回廊が寄柱の小礎石を残しているために，築地幅1.5mという数値を得ている[8]。また，内裏東外郭において検出した東を画する築地に排水用の石組暗渠が設けられており（6AAD区一第32次発

7）『令集解』儀制令儀戈条，国史大系本p.719。　　8）『平城宮報告Ⅲ』pp.14。

掘調査[9]，暗渠壇石の状況から築地の幅を2.4mに推定できる。

平城京南辺部の発掘調査が先年羅城門地域で行われた[10]。羅城門にとりつく築地（羅城）については，後世の浸蝕がいちじるしいため，なお明確でないが，朱雀大路と九条大路が交叉する入隅地点で築地の掘込み地業を確認している。これによると，掘込み地業の規模は朱雀大路西側築地が4.3m幅，九条大路北側築地が4.2m幅である。築地本体の築土が残存していなかったので築地の幅自体は明らかでないが，薬師寺・大安寺の発掘事例から推して基底幅7尺と考えられる[11]。しかし，この復原では，通常の築地と比較した場合，出土した瓦によって正確に復原できる屋根が異様に大きくなるので，基底幅8尺の可能性もある，としている。また，昭和52年3月に行われた春日大社境内の発掘調査では，明らかに8世紀に築かれた築地本体の一部が確認され，基底部幅2.4mという数値が示されている[12]。

『延喜左京職式』[13]には，宮大垣の内側犬走りの記載はないが，大垣の幅は7尺とされている。平城宮大垣は平安宮大垣と比べた場合，9尺に復原できるので，約2尺幅広く造られたことになる。

塀地の規模

塀地は，第14次調査の際にSA1200とSD1250との間で確認することができた。SA1200心とSD1250北縁との間は12mあり，この距離から大垣の半ば1.35mを差引くと10.65mとなる。第23次調査地においては，北面大垣SA2300とその北に検出した瓦敷きSX2333との間13.5mが北面大垣の塀地と考えられる。これらの数値は，『延喜左京職式』に記された平安宮塀地2丈6尺5寸と比べるとはるかに広く，前者で3丈5尺を，後者で4丈5尺を優にこえる。

掘込み地業

大垣築造時の掘込み地業が南面において，それも6ABY区のみで検出されている。このことは，朱雀門にとりつく位置の大垣がとくに高く造られたためか，または地形的なものか明らかではないが，朱雀門の掘込み地業が他の2門の掘込み地業より約1m深く掘込まれていることに対しては，構造的な面と同時に地形的な面にも注意をはらう必要があるだろう。平城宮造営以前の旧地形の復原状況をみると，秋篠川旧河道はひとつの谷筋として表われてくる。そして玉手門と佐伯門はちょうどその谷筋の南北両崖上の高まった位置にあたる。それに対して，朱雀門はやや低い地形上にある。また，もともと低湿な地であった下ツ道筋に平城京の中軸線があり，そこに造営された朱雀門は重閣門であり，いきおい基礎地業は堅固なものでなければならなかっただろう。

北面大垣SA2300の場合，とくに掘込み地業は行わず，地山面まで削平し版築を行なっている。ここの地山は堅固な洪積層であるため，掘込み地業を行う必要がなかったものであろう。

掘立柱塀 SA2330

北面大垣で注目すべきは，造営当初は塀SA2330で画されていた点である。宮の外郭を掘立柱塀で画することは藤原宮に見ることができ，平城宮北面でこのようなことが行われたのは，前代の遺制とも考えられるが，『続日本紀』和銅4年9月4日条「宮垣未だ成らず云々」とみえる宮垣を宮城大垣をさすと考えた場合，造営工事の進捗上の事由から北面において臨時的な措置として塀で画したと見ることもできよう。

9）「昭和41年度平城宮発掘調査概報」『年報』1967年pp.37。

10）『平城京羅城門跡発掘調査報告（第一次～第二次発掘調査）』大和郡山市教育委員会 1972年p.32。

11）大岡実他「大安寺南大門，中門及び回廊の発掘」『日本建築学会論文集』50 1955年pp.133 大岡実他「薬師寺南大門及び中門の発掘」『同上』pp.142。

12）「春日大社奈良朝築地遺構発掘調査報告」春日顕彰会 1977年pp.19。

13）『延喜式』左右京職式，国史大系本 p.927。

C　宮内の道路

宮内で検出する空閑地は単に通行のための道路だけではなく，広場としての性格をもつところもある。とくに朱雀門から宮に入った位置はそうした性格をもっている。

平城宮造営時に宮を縦断していた下ツ道の側溝 SD1860・1900 は，朱雀門の造営に際して断ち切られ，両側溝は門の北方約38mの地点でそれぞれ東西に迂回させている。即ち，SD1860 は東へ直角に曲げられ，約 8 m の地点でSD1790に連なって南へ折れる。SD1900は西へ直角に折れて，約15mの地点でSD1890に接続し南へ折れる形である。SB1800の中軸線を SD1860 と

道路と広場

SD1900 とのほぼ中心におきながら，SD1808 と1890 とで構成された東西幅約 51mの広場 SH 1850の中軸線は朱雀門のそれとはいちじるしく西へずれている。広場の東限が朱雀門と東脇門との間にあり，西限が西脇門の西柱の位置にそろえているところを見ると，東西の脇門に機能上の差があったものとも考えられる。

広場から北へ直進する道 SF1950 は，旧下ツ道をそのまま使用している。下ツ道の側溝は東側溝が浅く，西側溝が深くなっている。両溝の心心距離は約24mである。

朱雀門を入った道路の当初の状況は前に述べたとおりであるが，門内の広場 SH1850 は後に廃止され，道路の側溝も改修され，東側溝はSD1844，西側溝はSD1944となる。両溝の間隔は門付近で約30m，発掘区北辺部で約27.5mというように，わずかなちがいが認められるが，門の中軸線と道の中軸線は一致している。

朱雀門を宮内へ入って東西へ向う道として，東の SF1761 と西の SF1880がある。SF1761の幅は約 6 m，SF1880の幅は約7.5mと東西で異なっている。東では，SD1764の北へSA1765があたかも目隠し塀のように設けられている。西側にこうした施設がないのは，朱雀門の東西で機能上のちがいがあったためと考えられる。

西面中央門地域では，西面大垣と南北塀 SA3590・3680 間が，南北に通ずる道となる。大垣の心とこれらの塀との距離は約15mであるが，路面幅は大垣の東雨落溝と塀との間の約11mである。西面中央門から東へ通ずる道は，南北に並ぶ SA3590・3680 とが途切れている間である。SA3590 は SK3650 によって北辺部が除かれているが，門の中軸線とSA3680南端の柱穴との距離を折り返すと，SA3590 の北辺部 2 間分が欠かれたことになり，この間10間分26mが東西に通ずる道路となる。

	大垣基底幅	犬走り幅	備　　考
平城宮	2.7 m	3.5 m	朱雀門・脇門間のみ 3.5m，本文 p.18・82参照，塀地10.5m
平城京	2.1	1.1	朱雀大路西側築地，九条大路北側築地
藤原宮			掘立柱塀（北面，西面で確認）
平安宮	2.1（7尺）		延喜左京職式，塀地 2 丈 6 尺 5 寸（7.9m）
大宰府	2.0	1.3	政庁北面築地
多賀城	2.4		外郭西面
薬師寺	2.1	2.2	南　面
大安寺	2.1		南　面
東大寺	2.8		南　面
法隆寺	1.4	1.8	現南面大垣
春日大社	2.4	2.7（東） 1.7（西）	南辺入隅

Tab.18.　築地規模一覧表

D 造 営 尺

これまでに検出した遺構のうち，門，大垣等，大路に接し宮の造営計画，京の街路計画に関する事項を拾い出し，数値的検討を加えてみたい。これにかかわる遺構は，第14次発掘調査で検出した宮城西南隅付近南面大垣心，第15次の西面南門（玉手門）南北心および推定東西心，第16・17次の南面中央門（朱雀門）心，および同門東西両脇門柱根，第23次の北面大垣下層柱列心，第25次の西面中央門（佐伯門）心のそれぞれのX，Y座標値である。

また，今回の報告の範囲ではないが，第32次の二条大路と東一坊大路の交差点，第35次の南面入隅門（的門），第44次の東院張出し部東南隅の座標も，補足的に使用した。

平城宮跡の遺構実測基準方位（以下平城方位）は，測量法に定める平面直角座標系，第6系（以下国土方位）に対し，西偏0°07′47″を採用しているが，ここでは便宜上，国土方位に換算した座標値を用い，座標軸の振れが距離に影響をあたえる場合に限って，再び平城方位に換算した座標値を用いた。ちなみに，0°07′47″の振れは，距離にして，1000mあたり，直角方向で，2m強と大きいが，平行方向ではわずか3mmとなり，無視しても差しつかえない。

平行方向の誤差

平城宮の四至及び条坊の地割については，すでに『平城宮報告Ⅱ』[14]で考察をおこなっており，今回の検討は発掘調査結果により，これを裏づけ，あるいは再検討する形となる。

i 門および大垣中心点座標の決定法

a　南面中央門（朱雀門）　礎石据つけのための根石および根石掘形を棟通りで6個所，北側通りで6個所，検出しているが，根石掘形は径2m平均と大きくcm単位では中心点を定め難い。そこで，同時に検出した，同門の東脇門の西側柱根と，西脇門の東側柱根の中点を，門の中心座標とした。

b　西面南門（玉手門）　門基壇の西半部が現県道下にあり，発掘不能なためと，建物の平面を知る上の礎石，根石，同掘形等の類はすべて削平されている。そこで，門基壇築成のための掘込み地業により，門の南北中軸線を求めた。東西中心点は，門にとりつく築地（西面大垣）痕跡の東半部を検出しているので，大垣本体基底巾8尺（2.4m）を推定復原しその中点座標を採用した。

c　西面中央門（佐伯門）　玉手門同様，この門も門の構築物平面を知り得る遺構は残っておらず，基壇築成のための掘込地業により中心位置を求めざるを得ない。また，大垣等，東西位置を決定する遺構は現県道下にあり検出不能であるため，座標値は南北軸のみにとどまる。

d　北面大垣　築地遺構の下層より検出された，掘立柱塀SA2300の柱根心を北面大垣中心点とした。なお，上層の築地は，この塀の直上に構築されている。

e　南面大垣　宮の西南隅付近，第14次発掘区南端に，東西ほぼ全幅にわたって南面大垣痕跡を検出した。部分的には，現農道下にあって南辺を検出出来ない個所もあるが，発掘区中央から西にかけて，基底部巾8尺（2.4m）を確認することができ，土層断面で明確に中心点をおさえることのできる朱雀門心より西へ，457m地点での築地基底部心を南面大垣心とした。なお，この地点は推定南面大垣と西面大垣の角より51mほど東にあたる。

14）『平城宮報告Ⅱ』pp.99.

ii　各点間距離

このようにして求めた各地点の座標値の差をとり，比較検討を加えてみたい。

まず朱雀門南北心と，宮西南隅付近での南面大垣南北心との座標差は，門心より西へ456.92m地点で南に0.74mとなり，國土方位に対し，朱雀門から西へのびる南西大垣が南へ0°5′30″振れることが知れる。これは，先述した平城方位西偏7′47″とわずか，同方向へ2′強の違いである[15]。つぎに，朱雀門心，玉手門心間距離は平城方位に座標変換して，南北241.83m，東西506.95mとなる。これを820，1720，で除すると，それぞれ0.2949，0.2947，となる。つまり，1尺あたり0.295mとすると，朱雀門心より玉手門心は，北へ820尺，西へ1720尺に位置することとなる。同様に，朱雀門，佐伯門心間距離は，先に述べた理由により，南北座標差のみ比較すると，平城方位で，508.02mとなり，同じく基準尺を0.295とすると1720尺に近似する。ただし，先の玉手門間距離506.95mと比較すると1.07m，おおよそ，3.6尺の差がある。

つぎに推定北面大垣心と朱雀門心との差であるが，平城方位上東へ99.5mの地点で南北差1021.0mあり，3460天平尺に近似する。玉手門心，佐伯門心間距離は，266.52mで，同じく天平尺で900尺となる。

iii　造営尺

以上を要約すると，朱雀門心と佐伯門，玉手門間の東西距離は1720尺，南北距離は玉手門が820尺，佐伯門が1720尺となり，平城京の計画地割りが，大路心心距離を1800尺にとったとする『平城宮報告Ⅱ』の見解とよく符合する。つまり，1800尺−1720尺＝80尺分心から宮側へ大路が設計された事が知れる。これは佐伯門，玉手門間距離が900尺となる事からも立証される。

大路心心距離

ついで，朱雀門心から北面大垣までの距離は，平城方位で3460尺となり，宮城の周囲をめぐる大路はすべて80尺心から宮城側にくい込むとするならば，(1800尺＋820尺×2)＝3440尺より，20尺多い。北面の大路の有無について，またあったとした場合の規模については先学によっても議論のわかれるところであるが，この数値のみで判断すると，北面についても1800尺の地割計画が大路の心でなされており，大路の幅員は宮城の側に，他と異なる60尺（40尺＋20尺）で計画されていた，という考え方が出来る。あるいは，他の3面と同様に，大路計画が心から80尺でなされたと仮定し，実測寸法の1021.0mを，3440尺で除すると，0.2968となる。この1尺あたり0.297mという基準尺は，第2次内裏付近に多く見られる単位であり，平城遷都初期におこなわれたと考えられる，門，大垣関係遺構では，ほとんどが0.294〜0.296と比較的短かい。北面も同時に計画施工されたとすると，同一単位で計測されたに違いない。このことから，北面大路は，この付近では存在したようであるが，他の3面と異なり，大路幅を縮少して計画されたと考えるのが妥当であろう。ただし，北面大路については，古墳の後円部（平城陵），池（御前池）が推定大路上にあり，東西とおして大路が存在したかは疑問である。北面についての調査はこの第23次調査にとどまっている現在，断定は出来ない。

北面大路

また先述したとおり，これら中心座標のうち確定点としておさえられるのは，朱雀門心，西南隅付近南面大垣心，北面大垣心，の3点にとどまる。距離に僅かなばらつきが見えるのは施工精度ではなく，遺構の残存状況の悪さからくる心座標のとらえ難さによるものであろう。

15）平城宮跡遺構実測基準方位は，第2次内裏内郭をめぐる築地回廊の北面北側雨落溝の方向によっている（平城宮報告Ⅶ）。

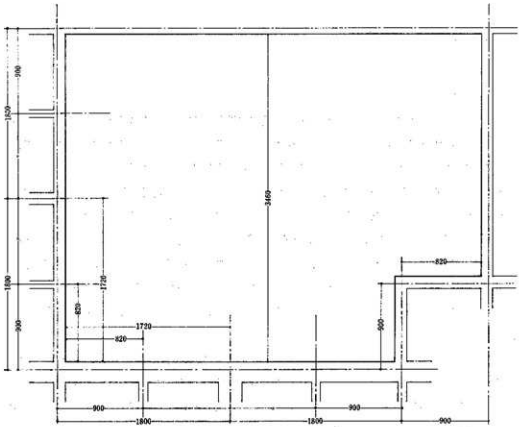


Fig. 25　門・大垣間寸法図（数字は天平尺）

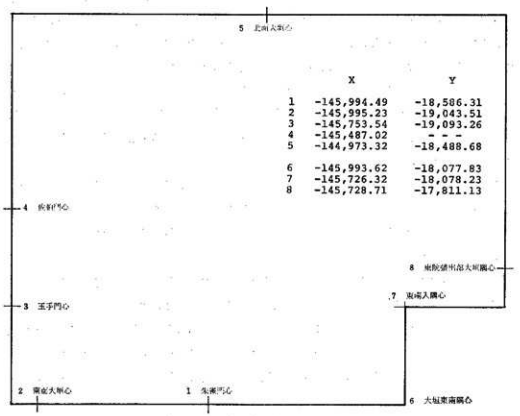


Fig. 26　各点の座標値および概念図（平面直角座標系第6系，単位m）

2 遺　　物

A 屋　瓦

軒瓦は，藤原宮の時代に属するものと，平城宮の時代になってから作られたものとに大きく分けることができる。和銅元年（708）12月に行われた平城宮の地での鎮祭を境にして二大別できるわけである。ここで便宜上，前者を「藤原宮式」と呼ぶことにする。

今回報告する諸地域の中では，この藤原宮式瓦は朱雀門地区と宮西南隅地区の両地区での出土個体数が多い。出土した軒瓦の総個体数のうち，この種の瓦は238個体で，これは型式番号の明らかな417個体のうちの57.1%にあたる。さらにこれらの型式・種は14型式36種にわたり，きわめて多種の藤原宮式を用いたことがわかる。一般的に1建物に用いられる軒瓦は同一種であるのが普通である。ところが，今回の朱雀門地区のように多様な軒瓦が見られることは，朱雀門の瓦が特定の瓦当文様を意識して使用されたものではなく，二次的な使用を示すものといえよう。

藤原宮式瓦の多用

藤原宮式軒瓦が平城宮から多量に出土する理由については，藤原宮から運んだ場合，藤原宮瓦窯の継続使用の場合，平城宮造営に伴って平城宮瓦窯で作られた場合とが考えられる。平城宮出土のものと藤原宮出土のものとを比較した場合，それぞれの同笵品では製作技法，胎土などが全く一致している。たとえば，6273Bでは，瓦当と丸瓦の接合位置は瓦当裏面の上端からやや下がった位置にあるが，外面にあてる粘土が内面に比して少ないために，瓦当上端部から丸瓦部への移行は強く弯曲している。このような特徴は，両宮跡から出土する6273Bに共通する点である。6278Bにみられる丸瓦接合時の出枘・入枘の特殊な技法も両宮跡出土瓦に共通して見受けられる。また，6279Aの瓦当部と接合用粘土にはとくに粒子の粗い砂が多く混入しており，この特徴も他の型式と比較した場合，きわだった違いとして認められる点である。こうした特徴も両宮跡出土瓦に共通する点である。以上の諸点は，6273Bと6278Bの場合，両宮跡出土のものが同一工人の手になったと言えるものであり，6279Aの場合は同一地の原料によって作ったと言える。

さらに6281Aは，瓦当文の明瞭なものから，笵型がかなり磨耗してから作られたものまで，各種の段階のものを含むが，藤原宮・平城宮ともにこれらが出土する。このことは，平城宮跡出土の藤原宮式瓦が平城宮瓦窯で作られたものではなく，藤原宮で使用したものを平城宮に運んで再使用したことを示すものである。

藤原宮瓦の再使用

さて，平城宮式の瓦は軒丸瓦においても軒平瓦においても，瓦当部はもちろん，他のあらゆる部分が藤原宮式よりひとまわり小さく作られている。藤原宮にかぎらず，一般的に7世紀後半の瓦は大ぶりであり，8世紀の瓦は，平城京内の官営寺院の瓦，難波宮の瓦等をみても前代のものよりひとまわり小ぶりに作られている。この法量の差は藤原宮式瓦と平城宮式瓦との大きな差であり，藤原宮から平城宮への移行に関連するひとつの問題点としてとりあげることができるものである。

これは，平城宮造営にともなって各分野でみられる変化の一環としてのあらわれであり，当

然のことながら，技術的な面での発展のあらわれとしてとらえられるものである。たとえば平瓦の製作において桶巻作り[1]の技法が用いられず，丸瓦において粘土紐巻きあげによる円筒作表の技法が用いられないことなど，古い技術の放棄が見られ，これに代って平瓦では新たに弧状の凸型成形台による一枚作りの技法によって生産が開始される。

桶巻作りから一枚作り

一枚作りの技術がどのようにして生み出されるのか，定かではないが，大和からこの時期に新たに始められた技術であることは明らかである。先述したように，瓦は全般的に小型化するが，法量のちがいを具体的にあげると，藤原宮式にともなう桶巻作り平瓦の平均的な大きさは，狭端28cm，広端幅31cm，長軸の長さ35cm，重さ5.5kgである。これに対して平城宮時代に作られた一枚作り平瓦は狭端幅17cm，広端幅21cm，長軸の長さ26cm，重さ3.5kgである。かなりの差をもって小型化がはかられたことが知れる。桶巻作りの場合，一般的に4分割されるので，上記の4倍の重量に焼成によって減じた水分の重量を加えた重さが平瓦を作る際の1回の生粘土のおおよその重量となる。その重量をもつ粘土板を桶型に巻きつける迄に至る工程のうち，粘土採取から粘土をこねる迄の作業は一枚作りと共通するが，その後の平面扇形の粘土角材製作，粘土角材からの粘土板切りとりを考慮し，そして桶型への巻きつけを考えた場合，技術的にはかなりの熟練を要したであろう。それに対して一枚作りの場合，先述した平瓦と同じ大きさの凸形成形台に粘土板をのせて一枚ずつ製作していく[2]。粘土角材の製作，それからの粘土板切りとり，そして成形に至る工程は，桶巻作りと比較すると技術的には容易な面が多い。しかも重量も前者の比ではない。その製作には必ずしも熟練を要しない。四枚作りあるいは三枚作りとも称される桶巻作りと一枚作りとでは，一見前者が大量生産に通ずるが，上記の諸点を考慮に入れた場合，桶巻作りよりも，一枚作りの方が作業工程が単一化され，技術的な面，労力的な面からみてより簡単に作ることができ，後者が大量生産に結びつくものである。平城宮時代の瓦の小型化の一要因はこのようなところにもあったろう。

重量と技術

大量生産の必要性

以上のことから平城宮造営に際しての造瓦は，新たな体制の中で技術の革新をはかりながら，藤原宮造営時より量産可能な規模での造瓦が行われたものと考えられる。藤原宮所用軒瓦には飛鳥地方のいくつかの氏寺との同范関係がかなり認められる。それは藤原宮造営時においては諸豪族が掌握していた工人を官が徴発した可能性を考えさせるものであり，藤原宮所用瓦の瓦当文様の多様性の一要因を示すものでもある。平城宮造営に際しては，官としては組織の充実をはかったろう。造宮省の一組織として平城宮所用瓦の生産が行われたとしたならば，その時点で，同一法量の瓦生産が行われたと考えねばならず，このような面にも大ぶりな藤原宮式瓦が再使用瓦であることを示している。

次に藤原宮から平城宮へという動きの中で，瓦当文様の変化をみてみよう。藤原宮の軒丸瓦においては，瓦当文様構成上，中房の蓮子が中央の1個を中心にして二重にめぐる特徴をもつものがほとんどである。ところが6279のみは中心の蓮子のまわりに一周めぐらせるものである。Aは蓮子がめぐるというよりもむしろ中房に蓮子が3個ずつ3列に並ぶという形をとっており，若干蓮子の配置が異なっているがBはきわめて均整な配置である。6279Bのように外区外縁に線鋸歯文をおき，内縁に珠文をめぐらせ，そして中房に一重の蓮子をおく複弁8弁蓮華

瓦当文様の変化

1) 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号1972年。

2) 厳密には，焼成によって生粘土の段階から約1割小型化する。

文軒丸瓦は次の時期に移行するとごく通例の型式として見られるものである。

文様構成上6279Bと近似するものをあげれば，第2次内裏造営時に多用された6308A・B，6311A・Bがある。この両型式は，中房の凸出度のちがいによって区別されているものである。6308は中房が6311より凸出しているところに特徴があるが，今回報告の6308Cは内区自体がA・Bより突出し，さらに中房がわずかに凸出する形状を示すものである。これは6279Bの内区の状況とよく似ている。このことから，6308Cを6279Bと6308A・B，6311A・Bとをつなぐものとして，それらの間におくことができ，そして6279Bが藤原宮式の中では終末段階のものと考えることができよう。

ここに藤原宮の6279から平城宮の6308への流れをつかむことができたが，これらの瓦当文様は，複弁と間弁とを交互に配置するものであり，藤原宮においては造営当初に製作された6273からの一連の系統である。これに対して，間弁が長く伸び，先端が互いに連なって輪郭線と化して各複弁を区画する系統のものに6281がある。平城宮時代でこの系統に属するものには6282・6284・6304等がある。これらのうち6282A・6284Cが第1次朝堂院地区での出土状況から，和銅年間の平城宮造営当初に生産された軒瓦であることが確認されている[3]。6284A・B・Dは瓦当文様の構成がいずれもCと近似しており，製作技法的な面においても大きなちがいは認められない。したがって4種の6284型式はすべて同時期のものと考える。これに対して6282は，B以下が中房の蓮子，内外区の界線，丸瓦部のとりつけ状況などAと大きく異なり，天平末年以降に造営された宮内省大膳職地域で多用されたことが明らかになっている[4]。6304は第2次内裏地域で天平年間を中心にして多量に用いられたものである。したがって，先述の6273—6279—6308C—6308A・B，6311A・Bという変遷に対して，ここに6281—6284・6282A—6304—6282B以下という流れが明確になった。

では，軒平瓦の場合はどうであろうか。藤原宮で多用される文様構成は，偏行唐草文と変形

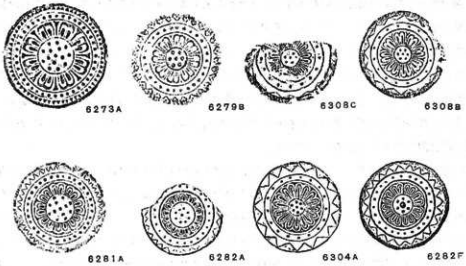


Fig. 27 軒丸瓦瓦当文様の変遷

3) 「平城宮第41次調査」『年報』1968年pp.37。　4) 『平城宮報告Ⅱ』pp.88別表3。

均整唐草文に一貫

忍冬文の両者であり，平城宮においては均整唐草文が主流を占めている。ここに前代とは異なる点を見出すことができる。平城宮で用いられる均整唐草文の祖形は大官大寺軒平瓦の文様構成であることに注目すれば，文様構成の一元化という点に今後留意せねばならないだろう。

つぎに，軒丸瓦において，瓦当に丸瓦を接合する際の位置について検討を加えてみよう。

丸瓦の瓦当との位置

丸瓦の頂点がくる位置と瓦当との位置関係を知ることのできるものについては，その位置関係が変らないものと，一定の角度をもってずれを示すものとがある。それぞれの角度はTab.19に示したように接合位置が一定のもの，90度のずれをもつもの，180度のずれを見せるものがある。一定の角度をもたない不規則のものはない。前章でふれたように，外縁の外側に笵型端部の痕跡を示すものがあることによって笵型は外縁部をも1cm弱彫りこんでいることが明らかである。こうした形態の笵が彫られる笵材の形については，この接合位置の角度から若干の推定が可能である。即ち，笵材が円形である場合，合に何らかの目印をつけない限り丸瓦と瓦の位置は一定に保ち得ず，その角度はばらつきが多く不規則になろう。こうしたことを考えた場合，角度のずれが180度のもの，90度のものについては，その笵合の平面形が正方形または長方形という推定ができよう。長方形ならば，一定の位置に対して180度という位置のずれが生じ得るし，正方形の場合は一定の位置に対して90度，180度，そして可能性として270度という3種類のずれが生じ得るだろう。

型式番号 ＼ 角度		0度	90度	180度
6233	A	○		○
	B	○		○
6273	A	○		○
	B	○		
	C	○		○
6274	A	○	○	
6275	A	○		○
	B	○		
	D	○		
6278	C	○	○	
6279	A	○	○	
	B	○		
6281	A	○		
6282	B	○		
	F	○		○
6301	C	○		
6311	A	○		○
	B	○		○

Tab. 19 瓦当・丸瓦・接合角度

文字瓦

刻印を記した瓦は，2点を除いては玉手門地区と佐伯門地区からの出土である。瓦の出土量が，朱雀門地区と西南隅地区で多かったにもかかわらず，文字瓦の出土量が少なく，逆に瓦の出土量がさほど多くない西面2門の地区からの文字瓦の出土量がきわだっている（Tab.3）。こうした状況のなかにあって，とくに「理」が大勢を占めていることは，西面2門地区の造営に「修理」関係の官司がかかわったことを示すものとも考えられる。

修理官の存在

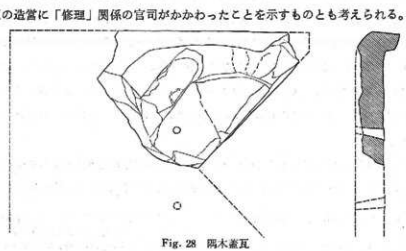


Fig. 28 隅木蓋瓦

B 土　器

溝 SD1900A から出土した土器は，同溝が朱雀門造営に際して埋め立てられていること，国郡里制を示す『遺所』木簡を共伴することから，701年から715年頃までの間に廃棄されたものと考えられる。8世紀初頭の土器様式の一基準を示す資料といいうるのであり，既刊学報においてもその内容にいくらかふれてきたところである[1]。

土師器の編年上の特徴　土師器の編年上の特徴を，藤原宮・平城宮で用いられた土器を参考に記すと，土師器では杯AⅠと口径の差で区別される杯AⅡがあり，椀Cがはじめてあらわれる。杯・皿類の調整手法では，c 手法が皆無であり，a・b の 2 手法に限られるが，杯AⅠにb手法の多いのがめだつ。またほとんどすべての杯Aについて，外面をていねいにヘラで磨いている。杯・皿の内面に緻密な螺旋暗文と斜放射暗文をつけるのを原則とし，特に杯AⅠ・杯B・高杯には 2 段の斜放射暗文を用いるのが普通である。連弧暗文はほとんど認められない。高杯では，器高が低く，脚柱部外面の面取りは11角と多い。甑の把手は，先端が体部に密着することなく，弯曲して上方にたちあがる特徴をもっている。

須恵器の編年上の特徴　須恵器では，杯類の大半を杯AⅣと杯BⅢがしめる。杯Bの高台は，わずかに外方へふんばりながらも，おしつぶされたような形態のものが多い。杯B蓋は，稜をなして下方やや内側向きに折れる縁部をもっている。縁部の屈曲する例はない。体部上面に把手のつく平瓶は，この時期に出現する。

土　器　群　つぎに本遺構出土土師器には，形態・製作手法・胎土・色調を共通にする 2 つの土器群が識認できる[2]。

第1群土器　土師器の第 1 群土器には，杯A（1～4・7・8～13：22点），杯B（19：1 点），杯B蓋（18：1 点），杯C（27・28：3 点），皿A（17・20～22：11点），椀C（35・36：3 点），高杯（38・39：2 点），壺A蓋（26：1 点），壺B（37：1 点），鉢B（48：1 点），甕C（71：1 点），甑（53：2 点）が含まれる。杯・皿は，口縁端部を内側にかるく巻きこむ形態で淡褐色を呈する。椀・高杯・壺・鉢も同様の色調である。甕・甑の外面の全体には比較的細かいハケメを残し，内面はなでて平滑にしている。把手は薄く周縁は丸みをもっている。総計49点で土師器全体の 3 分の 1 弱をしめる。

第2群土器　第 2 群土器には，椀X（31～34：16点），鉢A（49～52：6 点），甕A（55～60・63：36点），甕B（64～66：11点），甕C（67～70：16点），甑（54：3 点），鍋A（43・44：6 点），鍋B（45：1 点），鍋C（46：1 点）の計96点が含まれ，土師器全体の約半数をしめる。この土器群の顕著な特徴は，底部あるいは体部外面の下半をヘラで削る手法である。これはほとんどすべての第 2 群土器に共通する。鉢・甕・鍋の体部内面にはすべてハケメを残している。また甕・鍋の一部には口縁部を内側に弯曲させてつくるものがあり，第 2 群の土器は，一般に胎土中の砂粒がめだち，黄灰色を呈している。

胎土の分析　これら第 1 群・第 2 群両群の土器の製作地や胎土の採取地等の相違点をより明確にするための理化学的検討を試みた。分析の対象となるSD1900A出土土器は，すでにFig.30に示すように

1）『平城宮報告 Ⅵ』 p.144，『平城宮報告 Ⅶ』 p.135。

2）平城京左京一条三坊の溝SD485出土土師器の第 1 群土器・第 2 群土器（『平城宮報告Ⅵ』 p.39）や，平城宮跡 SK2113の第Ⅰ群土器・第Ⅱ群土器（『平城宮報告Ⅶ』 pp.86）とは異なる。

両群に共通する器種がきわめて少ないため，同地区以外の出土土器も分析試料に加えた。分析された試料は，第1群60点，第2群58点であり，そのうち，SD1900A出土土器は第1群20点，第2群55点である。与えられた試料に関する肉眼的観察による色調は，白色系のものが大半を占め，なかには淡朱色や黒味がかったものもみられるが両群間に顕著な差はない。また，含有される鉱物は石英・長石・雲母などが主体となっている。しかしX線回折分析からはそれらの量的な差異を見い出すことはできなかった。次に胎土の主要成分の定量分析による土器間の比較は一般的にみて困難と判断したため，微量成分の分析を試みた。螢光X線分析装置によるストロンチウム (Sr)，ルビジウム (Rb)，ジルコニウム (Zr) の測定をおこなった。チャートによる記録をし，SrKα, RbKα, ZrKα 線のピークの高さを測定し，RbKα／SrKα, ZrKα／SrKα 値をX－Y座標にプロットし比較を試みた (Fig.29)。すでにふたつのグループに分類された試料は，第1群土器の RbKα／SrKα 値が第2群にくらべて低位にプロットされた。また，全体的にみて，第2群の方が測定点のまとまりがよい。このことは同群の試料の大半が SD1900A 出土のものということに起因する。したがって，ここではSD1900A出土の第2群土器と第1群土器との間に図のような差があることを示すにとどまる。試料数を増やすことと，両群に共通する器種を分析すること，さらには数グラム以上の試料を採取し，定量分析をおこない，同時に薄片による鉱物学的な観察を加え，総合的に比較，検討する余地が残されたままである。以上のように両群の土器の胎土が異なっているのは，製作地の相違を示唆するものと考えられる。

第1群土器の分布地域

第1群土器は，7世紀以降の飛鳥地方諸遺跡や藤原宮・平城宮から出土する土器の主体をしめるものと特色を共通にする。これらの土器は，藤原京・平城京内においてもひろく使用されており，比較資料が少ないが，大和の農村集落でも使われていた可能性が高い。

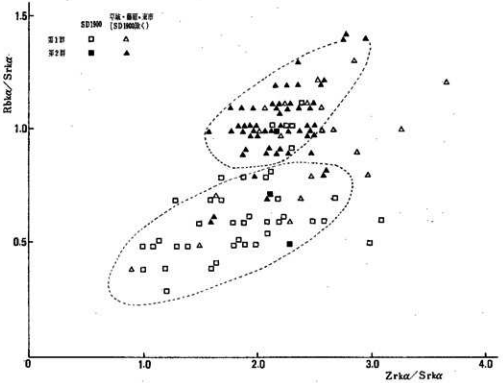


Fig. 29　SD1900出土土器の螢光X線分析

第2群土器の分布地域

第2群土器は，滋賀県琵琶湖周辺や京都府南部の諸遺跡から多量に出土する土器と形態・製作手法をおなじくするものである。奈良県内では，木遺構のほかに，小治田宮推定地，浄御原宮推定地，藤原宮，本薬師寺西南，平城京東市付近，同左京三条二坊などで出土しているが，いずれもきわめて少量である。

土器群間の器種別比率

ふたつの土器群について器種別の個体数を比較すると，第1群土器が供膳用土器の主体をしめる一方，第2群土器は煮炊用土器の大部分をしめており，2つの土器群が用途別にあいおぎなっていることがわかる（Fig. 30・31）。しかし，少数ながら第1群土器に甕・甑が，第2群土器に椀があり，用途別の土器群選択が必ずしも厳密なものではなかったことも指摘できる[3]。

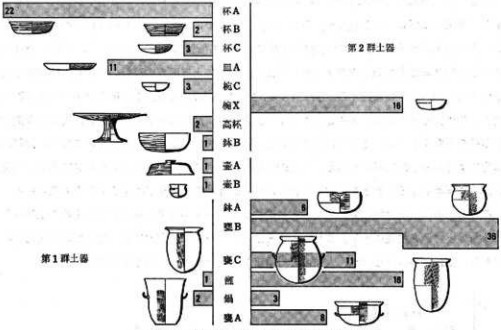


Fig. 30　第1群・第2群土器器種別個体数表

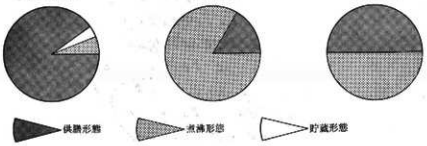


Fig. 31　土師器の用途別比率

以上の2つの土器群以外では，杯A（5・6・14・15：8点）と皿A（25：5点）は，口縁端部に巻きこみがなく，焼成不良で淡橙色を呈する特徴が共通しているので，1つの群にまとまる可能性がある。杯E（29・30）も2点のみであるが，独特のつくりをもった土器である[4]。

須恵器の産地

一方，須恵器の生産地はほとんど不明であるが，杯B蓋のうち頂部が高い山形のもの（131・

3）土壙SK1909出土の土師器甕B（201）もおそらく本来は第1群土器の甕Bとして使用されていたものと思われる。

4）大阪府船橋遺跡から出土した土器に類品がみられる（平安学園考古学クラブ『船橋I』1958，第14図278・279）。

132）と壺X（160）とは，美濃・尾張地方から搬入されたものと思われる。墨書をもつ杯B（138・139）も，他の土器とは形態・製作手法に相違がみられ，特定の生産地のものであろう。

さて，すでにのべたように本遺構出土土器のうち土師器は183点・56.8%，須恵器は139点・43.2%である。宮で用いられた土器に比較すると須恵器の割合が高い[5]。また，土師器のなかでは杯・皿・椀・高杯・鉢Bなどの食器が91点・49.6%，煮炊用の鉢A・甕・甑・鍋が90点・49.2%で，煮炊用土器の比率が高いことでも宮で使われた土器とは様相を異にしている[6](Fig.4)。 **宮との比較**

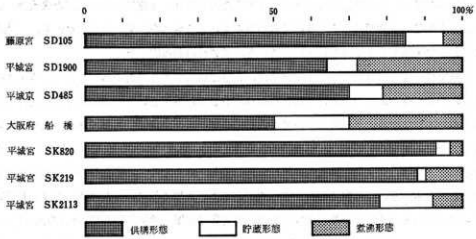


Fig. 32　各遺構における土器の比率

しかし，土師器と須恵器の比率，土師器供膳用土器と煮炊用土器の比率は，平城京内出土土器とほぼ等しく，土師器と須恵器の比率は大阪府舟橋遺跡の場合とも近い。一方，18点におよぶ土師器甕Cの存在にも特徴がある。こうした体部の長い甕は，三重県や京都府南部のように7世紀あるいは8世紀においてなお竪穴住居の多くみとめられる地域で顕著に発達したものであり，ほとんどすべてが甕A・Bからなる宮・京の通常の甕のあり方とは異っている。 **京との比較**　**土師器甕Cと竪穴住居**

以上の諸点からは，SD1900A 出土土器が貴族の宅地や集落における一般的な生活形態の土器組成と共通すること，さらにいえば，一般集落のそれに近いものとすることができよう。

本遺構からは，平城京造営にともなって消滅したと考えられる『大野里』の里名を記した木簡が出土し，『五十戸家』『五十家』など，里家の存在を示す墨書土器もみいだされている。建物遺構を検出していないので断定はできないにしても，平城宮造営以前の当地に農村集落のあった可能性は高い。しかしなお，本遺構の土器が朱雀門造営の直前に廃棄されていること，古墳時代の遺物を除いてはそれより以前の土器を含まないこと，土器のなかに産地を異にするもののあることなどから，本遺構出土土器は平城宮造営に従事した諸国役民の使用した土器とも考えうる余地を残している。 **集落の土器**　**役民の土器**

いずれにせよ，平城京隣接地域における8世紀初頭の一般集落の調査例は皆無である。本遺構出土土器を在地集落のものとするか，役民のものとするかの認定までには，なお解決を要するいくたの問題が残されている。

5）平城宮跡土濠SK219では土師器320点・93.6%，須恵器22点・6.4%（『平城宮報告Ⅱ』p.64），同じくSK820では土師器437点・69.8%，須恵器189点・30.2%であり（『平城宮報告Ⅶ』p.115），長屋王の邸宅地かと推定される平城京左京一条三坊十五・十六坪内の濠SD485では，土師器634点・60.9%，須恵器375点・39.1%である（『平城宮報告Ⅶ』p.40）。

6）SK219の供膳用土器は87.3%，煮炊用土器は11.4%，SD485では各66.3%，32.6%である。

3　文献にみえる宮城門・大垣

平城宮の諸門についての総論的検討は，すでに『平城宮発掘調査報告Ⅱ』においておこなっているので，ここでは宮の大垣と諸門がもっていた機能を中心的な対象として，主として文献にみえる史料を素材にして検討しておくこととしたい。

平城宮の築垣　ここで述べようとする平城宮の大垣とは，本報告がとりあげた朱雀門，佐伯門，玉手門等の宮城門につらなる平城宮の外郭をかぎるものをさす。しかしながら，平城宮内には宮の内・外をかぎる外郭の大垣以外にも，重要な垣が存在した。

平安宮の垣　文献史料のよく残されている平安宮では，天皇の居所である内裏をかこむ内重，さらにその外側に内廷官衙をふくむ中重，それと宮の外郭をかこむ外重という三重の垣でかこまれていたことが知られている。平城宮についても，従来の発掘調査の結果，外重にあたる大垣の他に内重にあたるＳＣ060・156・640，中重にあたるＳＡ103・705・8170・8171が発見されていて，平城宮と平安宮では，含まれる諸官衙に異動はあっても，宮大垣を含めて三重の垣の構成になって

平城宮の垣　いたと考えられる。平城宮の垣が，それぞれどのように称されていたかについては，養老律によって知られる。それは，法曹至要鈔所引の養老衛禁律闌入踰閑為限条[1]には次のようにある。

閑入は，閑を踰ゆるを以て限とせよ。閑に至りて未だ踰えざらば，宮門は杖六十。殿門以内は一等を加へよ。其れ閤垣を越えらば絞。殿垣は遠流。宮垣は近流。宮城垣は徒三年。京城垣は徒一年。

これによって，宮の垣には京の羅城である京城垣を除いて閤垣，殿垣，宮垣，宮城垣があることが知られる。宮の垣のうち，閤垣は内重にあたることは閤垣にひらかれた閤門が，職員令集解左兵衛府条所引の釈説によって御在所内重門也と注記されていることから知られる[2]。

次に，宮城垣が宮の外郭をかぎる大垣であることは明白であろう。残された二種の垣のうち，殿垣は明証には欠けるが大極殿院をかこむ垣であるとすれば，宮垣は中重，すなわち中隔垣にあたると考えられる。これらの垣は，前述の衛禁律にもみられるように，みだりに闌入するものは律によって処罰されることになっていた。さらに，これらの垣に矢，石を放つものについても法曹至要鈔所引の次の衛禁律向宮殿内射条[3]に，次のようにある。

宮殿内に向って射せらば，（中略）宮垣は徒一年。殿垣は一等を加へよ。箭入れらば，各一等を加へよ。即ち，閤門内に入れらば，徒三年。御在所は絞。弾を放ち，及び瓦石を投ぜらば，各二等を減ぜよ。（下略）

養老律令の諸門　平城宮の諸門　平城宮の主要な門としては宮の外郭に設けられた宮城門以外にも，以上に述べた閤垣，殿垣，宮垣に対応してそれぞれ閤門，殿門，宮門があった。閤門は職員令左兵衛府条，宮衛令宮閤門条にみえ，宮門は宮衛令宮閤門条にみえる。また殿門は前掲衛禁律闌入踰閑為限条にみえる。したがって，これらの門の種類についての概念は養老律令で定められていた

大宝律令の諸門　ものである。大宝律令でどのように定められていたのかははっきりしないが，宮衛令宮閤門条所引の古記は[4]

外門，謂はく，最外の四面の十二大門をいふ。主召門司，謂はく，門部をいふ。其の中門，謂はく，衛門，衛士と共に防守するなり。門始めて籍を著けるは此門をいふ。内門，謂はく，兵衛の主当の門をいふ。

1）国史大系本『律』p.107。
2）国史大系本『令集解』p.145。
3）国史大系本『律』p.110。
4）国史大系本『令集解』p.673。

とあって，外門，中門，内門という三つの分類を示しており，おそらく，大宝令文にはこの三つの用語が使用されていた可能性が高い。このうち内門は閤門に，中門は宮門に，外門が宮城門にあたると思われる。殿門は宮衛令奉勅夜開門条所引古記の引用する八十一例からみて，この三門に含まれず，大極殿門と称されたらしい[5]。またこの古記からこれらの諸門のうち，内重にあたる閤門（内門）は兵衛府が守り，宮門（中門）は衛門府と衛士府とが，宮城門（外門）は門部が守ることになっていたことが知られる（職員令衛門府・左兵衛府条参照）。

門籍

これらの三種の門のうち宮衛令宮閤門条[6]によると，宮門と閤門とには門籍がおかれ，それを中務省が管理していたことが知られる。このことからみると，宮城門には門籍はなかったことになる。すなわち，宮城門に比して天皇の在所に近い閤門，宮門の管理がきびしかったことが知られる。もっともこれらの三種の門についても垣と同じように闖入するものに対しては律による処分が行われることになっていた。法曹至要鈔所引の衛禁律闖入宮門条では[7]，

宮門に闖入せらば，徒一年。宮城門に闖入せらば，亦同じ。（中略）殿門は徒一年半。閤門は徒三年。仗を持せらば，各二等を加へよ。（中略）御在所に至らば絞。（下略）

とあって，天皇の在所に近いほど罪が重かったことが知られ，垣の場合と同様であることがわかる。これは門や垣がなによりも天皇を守るための防備施設であったことを如実に示すものであろう。

宮城門号

平城宮の宮城門　宮城門は外郭の四面にある十二門をさす。現在のところ弘仁式にみえる十二門の門号は，平城宮のものと考えられており，それはTab. 20のとおりである。ただし延喜式での門号は弘仁式とは異る部分があり，東面三門のうち南二門の名称と位置が違っている。このことは平城宮の東辺が平安宮と異って，東院部分の張り出しがあることと関連しているからと思われる。また平城宮より古い宮城門については，藤原宮の北面三門の名称が海犬養門[8]，猪使門，鍬王門[9]となっていて，平城・平安両宮と同じであることが知られているだけで，それ以前の諸宮の門号については確実な史料はない。日本書紀皇極紀には乙巳の変に際して十二門の記載がみえるが[10]，当時から宮には十二門の宮城門があったかどうか，またその門号が平

		弘仁式	貞観式	延喜式
南面	東	壬生門	壬生門	美福門
	中	大伴門	大伴門	朱雀門
	西	若犬養門	若犬養門	鳥嶋門
北面	東	多治比門	竹比門	達智門
	中	猪使門	猪使門	偉鍬門
	西	海犬養門	海犬養門	安嘉門
東面	南	達部門	的門	都芳門
	中	山門	建部門	待賢門
	北	県犬養門	山門	陽明門
西面	南	玉手門	玉手門	談天門
	中	佐伯門	佐伯門	草壁門
	北	伊福部門	伊福部門	殷富門

Tab. 20　宮城十二門号[11]

5）国史大系本『令集解』p.688。
6）同史大系本『令義解』p.175。
7）国史大系本『律』p.107。
8）国史大系本『続日本紀』大宝二年六月甲子条。
9）『藤原宮木簡』1参照。
10）国史大系本『日本書紀』皇極四年六月戊申条。
11）『続日本紀研究』第2巻第4号1955年佐伯有清論文 pp. 5参照。

城宮や藤原宮と同じであったかどうかについてはさだかではない。

宮城門の機能　以上にのべたところで平城宮の門，垣の構成の中での宮城門の位置はほぼ明らかになったと思われる。まとめてみると，宮城門は，平城宮の最も外辺をかこむ宮城垣につくられた十二の大門であって，門部が守衛の任にあたっていた。ここには門籍もなく，閑入者に対する律の処分をみても，内重，中重の門・垣にくらべてゆるやかで，その出入についても，閤門・宮門に比べて比較的容易であったと思われる。このような宮城門の機能について若干つぎに述べておくこととする。

物資の出入　まず，平安宮の例であるが『延喜式』によれば，門毎に出入する物資の内容が定められていたことが注目される。延喜弾正式[12]によると，

> 凡そ，民部の縫殿の米を運ぶ車馬は美福門の脇門より，大膳職の雑物・大炊寮の米并びに雑穀を運ぶは都芳門より，中院の西に在る木工寮の木屋の材瓦・造酒司の米を運ぶは談天門より，春宮坊の雑物を運ぶは待賢門より，並びに出入することを聴せ。

とあって，これを各官司の位置と対照させると，それぞれ門から近いところにある官司への運送物品が規定されていたことがわかる。また各門は単に交通のためだけにあるのではなく，それぞれ儀式の場として使用された場合がある。その最も典型的な例は，宮の正門ともいうべき朱雀門である。朱雀門を使用した儀式はおおよそ次のとおりである。

朱雀門での儀式

元日の大儀　『続日本紀』和銅三年正月壬子朔条・霊亀元年正月甲申朔条によると，天皇が大極殿で受朝の儀式を行うのと一連の儀式として，朱雀門外の朱雀大路で将軍に率いられた騎兵・隼人蝦夷等が参列して行う。元日の大儀に朱雀門が使用された例としては儀制令儀式条古記にもみえる[13]。

即位及受蕃国使表の大儀　延喜左衛門式大儀条によると，元日の大儀と並んで即位及び受蕃国使表の大儀の際にも朱雀門を使用している[14]。

六月・十二月の大祓　延喜式都式によると，六月十二月晦日に行なう大祓の際には[15]，百官の男女が朱雀門に会集して行なったことが知られる。

五月五日の走馬　延喜弾正式によると，五月五日諸王諸臣が走馬を献ずる儀式に，朱雀門を使用している[16]。

歌垣　『続日本紀』天平六年二月癸巳朔条によると，天皇が朱雀門に御して男女240余人による歌垣を行なったことがみえる。

新弩の試射　『続日本後紀』承和二年九月乙卯条によると，新弩の試射を諸衛府を召集して朱雀門で行なったことがみえる。

以上が朱雀門における儀式その他の使用例であるが，他の宮城門での儀式の執行の有無等については確証はない。正倉院文書にみえる天平勝宝八歳頃と推定される建部門参向者交名[17]にみえる人名に高官が多いところをみると，何か儀式に関連するものであるかもしれない[18]。

12）関史大系本『延喜式』p.916。
13）国史大系本『令集解』p.719。
14）国史大系本『延喜式』p.961。
15）国史大系本『延喜式』p.498。
16）国史大系本『延喜式』p.913。
17）大日本古文書 12—392。松崎英一「建部門参向者交名について」（『日本歴史』331，1975）
18）弘仁式にみえる建部門は，この鍵部門と同じであろう。しかし，平城宮東辺部は東院部分が東へ張り出した形態になっており，東面門の配置は明らかでないのでただちに鍵部門の位置を示すことはできない。このことは『続日本紀』宝亀3年12月乙亥条と『貞観式』にみえる的門についても同様である。

4 結　　語

この報告は平城宮の大垣と宮城門のうち，南面，北面，西面大垣の一部と朱雀門，佐伯門，西面南門の玉手門各地域で実施した発掘調査の成果をとりまとめたものである。

宮城大垣と宮城門の発掘調査は宮の東部でも実施しているが，それらは宮の東辺部及び東院推定地域であるため，その地域をとりまとめる際にとりあげることにし，今回はふれなかった。

門の機能

宮城門に関しては，門の機能を中心として史料の面からも検討を加え，平安宮の宮城門との比較の上で宮城門の機能を考察した。宮城門は儀式の場として使用された場合があり，とくに朱雀門使用の儀式は記録にも顕著に残る。これが朱雀門の内外いずれであるかについて問題点が残るが，宮城門が他の内重・中重の門とくらべて出入が容易だった点，また朱雀門外は朱雀大路・二条大路の交点であり，『続日本紀』和銅三年正月壬子朔条に元日の大儀が皇城門外朱雀大路で行われたことがとくに記されているのは特殊な場合だったためで，おおむね宮城門内で行われたとすることができよう。発掘調査で検出した朱雀門内の広場ＳＨ1850はこうした際に使用された場であるとも思われる。

大　垣

南面大垣の幅は2.7mあり，朱雀門と脇門との間は3.5mとやや広く造っている。大垣構築にあたっては版築を行なっていることを南面と北面で確認した。また南面大垣のみ掘込み地業によっているが，これは地形的な面を考慮しなければならないだろう。大垣に関して注目すべきことは北面大垣が築地構築以前は掘立柱塀であったことである。南面・西面とも，そのような痕跡を認めていないので，北面のみ前代の遺制を残すと考えるよりも北面の造作が他より遅れたことを示すものと考えるのが順当かもしれない。

造営尺

平城宮の造営尺についてはすでに『平城宮報告Ⅱ』で論じているが，その後の新たな資料によって再検討した。その結果，平城遷都初期に用いられた基準尺は１尺あたり0.297mという数値を得ることができた。

筆人橋

出土遺物のうち，特筆すべきものはＳＥ1230の井戸側板に転用されていた筆人橋である。彩色のある面を外側にして使用していたため，保存状況が良好であり，『延喜年人司式』記載橋との比較が可能であったことは幸いだった。

藤原宮式軒瓦

瓦埋類は出土総量の大半が藤原宮式であり，その理由を究明することが今回の課題であった。藤原宮式瓦使用については遷都にともなって藤原宮から運んだ場合，藤原宮瓦窯の継続使用の場合，平城遷都に際して平城の地で生産した場合等が想定できるが，瓦にあらわれた特徴，造瓦体制等から第１の場合が適当と考えた。

SD1900出土土器

土器類のうち今回はＳＤ1900出土のものに限った。土師器は，飛鳥地方諸遺跡や藤原宮・平城宮から出土するものと共通点をもつ群と，滋賀県琵琶湖周辺や京都府南部から多量に出土するものと形態・製作手法が共通する群とに分かれる。前者の土器群は当時の一般的な生活形態の土器組成と共通すること，里家の存在を示す墨書土器が出土していることなどから，平城宮造営以前の集落で使用したものと考えることができる。一方，後者の土器群からは平城宮造営の役民が使用した可能性も考えられ，問題点を後に残すことになった。

今回の調査報告は，宮城門と宮城大垣を初めて明らかにしたものである。しかし，宮城十二門と称されるもののうちの三門と，大垣の一部をとりあつかったのみである。今後，この成果をふまえて調査を進め宮城門・大垣の機能をさらに明らかにしたい。

第VI章　復　原　模　型

平城宮跡の発掘調査は昭和34年以降継続的に行われていたが，当時は通称一条通り以北と，第2次内裏の一部についてのみの発掘調査が行われていた程度で宮跡の大半は水田地帯であり，宮の遺構についてはほとんど未知の域を脱していなかった。したがって，この広い宮域には奈良時代盛時には多くの宮殿官衙が存在することを視覚的面から理解することによって，宮域保存の意義を一般の人々に周知せしむべく，文化財保護委員会は奈良国立文化財研究所に全域模型の製作を依頼した。

平城宮復原全域模型

平城宮の官衙地区については陽明文庫所伝の宮城図や裏松固禪の復原した大内裏図を参考にして敷地割を想定し，官衙建物の配置については，それまでの発掘によって知り得た建物配置に準拠するなど，模型製作に当ってはかなり大胆な想像をまじえて復原している。そのため，その後の発掘の進展によって東院張り出し部の拡張のように多少の修正を余儀なくされた部分もあるが，平城宮の概略を理解するための一助となっている。

この模型の縮尺として600分の1を採用した理由は，江戸時代からの地籍図が伝統的に600分の1であること，宮周辺を多少加えると模型本体が2m四方となり，展示にも運搬にも適当な大きさであることなどによる。

建物復原1/10模型

これに次いで計画されたのが，発掘によってあきらかとなった主要な建物につき，建物個々の実物に即した詳細かつ精巧な復原模型の製作で，縮尺としてその目的を満足さすに足る10分の1が選ばれた。製作に先立ち調査部内での討議をもとに原案を設計し，のち平城宮跡発掘指導委員会，特に浅野清氏をはじめとする建築史関係委員の指導と助言のもとに幾度か修正案を作り，実施設計の作業を進めた。

製作基本方針

製作に当っての基本方針として，部材寸法は勿論のこと，継手・仕口なども忠実に古代の技法の再現につとめること，隅木や茅負などの曲り材や，金具・風鐸・鴟尾など彫刻を伴う場合は，あらかじめ現寸形板あるいは現寸原形を作って検討を加えること，材料は原材料を原則とするが，基壇石・土壁・屋根瓦などは，予算および製作技術の上からやむを得ず木製で彩色仕上げとすること，などをきめた。

これら10分の1模型は，昭和40年以降現在まで朱雀門や内裏正殿一郭など5件14棟におよぶ[1]。今回はこれらのうち本報告の発掘区と直接関係のある朱雀門と西面門（南門と中央門）の2棟について，遺構から得られた直接資料と，推定部分のよりどころとした諸点についてのべる。

1）既製作10分の1復原模型内訳

模型名称	建物模別	製作年度
朱雀門復原模型	朱雀門	昭和40年度
内裏正殿一郭復原模型	内裏正殿	〃
	内裏回廊（単廊）	〃
	内裏回廊（複廊）	昭和41年度
	内裏東第一・第二殿	〃
	内裏築地回廊（南辺部）	〃
西面南門復原模型	西面南門	昭和42年度
埋積基壇建物一郭復原模型	埋積基壇建物	昭和43年度
	高床倉庫	昭和45年度
	築地片廂廊	〃
	目隠塀（東および南）	〃
朝集殿復原模型	朝集殿	昭和44年度

なお，模型の製作は文化庁（昭和43年以前は文化財保護委員会）の予算で執行し，完成後順次当研究所に管理替えをおこなっている。

1 朱 雀 門 (PL.64)

前節と重複するきらいはあるが，朱雀門の復原資料として遺構から直接得られた点を列記すれば次のとおりである。 復原資料

1 建物の規模は，桁行5間・梁間2間であること。

2 柱間は各間とも17天平尺（以下同じ）であること。

3 柱位置の根石の存在からみて，柱は礎石建ちであること。

4 掘込地業の範囲は側柱列から約12尺出た位置からはじまり，これがほぼ基壇の出とみられること。

5 屋根は瓦葺きであること。

また，門の左右に続く築地大垣については，

1 基底部の幅は，門中心から左右にそれぞれ84尺までは12尺と広く，それ以遠は9尺に減じていること。

2 門の両側に築地大垣を切った形で脇門を設けていること。

3 この脇門は本柱が掘立柱で，その柱間は14.5尺あり，朱雀門中心から脇門中心までの距離は98尺あること。

以上の諸点を基礎にして，これに現存する同時代の建物や，発掘の類例，あるいは平安宮を画く絵巻物などの文献資料等を加え，各部につき，次のように復原した。 参考資料

A 門の形式

平面については，遺構から明確な解答が得られたからあまり問題はない。ただ，基壇にともなう階段位置およびその幅が確認されていないので，戸口の数が不明である。ここでは常識的に当然こうであろうと思われる棟通り中央三間を扉に，その両脇間および両側面各2間を土壁と考えた。したがって階段は戸口幅3間分につくこととした。

一方，立面は遺跡からの復原という性格上推定にたよらざるを得ないところが多い。しかし階層や屋根形式などの基本的な形式については，この門が平城宮の正門であるという事実から推して宮城門の中でも第一級の構えをもっていたのは当然で，重層にして屋根を入母屋造とみてまずまちがいない。このことは絵巻物での平安宮の例からも，また当基壇の築成が周囲地表から1.5mも掘込まれ，いたって入念強固に施工されていることからもうかがえる。 構造形式

B 柱

柱の太さ，長さは全体の意匠を考える上でかなりの影響をもつ。ここではほぼ似た年代の建物である法隆寺中門と東大寺転害門などを参考にし，柱径は転害門よりやや太い2.5尺。長さは柱間と同寸の17尺と定めた。現存する古代建築で柱間と柱長さが近似するものは唐招提寺金堂その他数例みられるが，ここでは平面寸法の規準が立上りにも生かされたのではなかろうかと推定にもとずく。柱には多少の胴張りがあると考え，上方で各面0.15尺の落ちをつけ，柱頂 類例建物

には奈良時代の通例である面をとった。また隅柱および次の柱には軒反りをとりやすくするために隅延びをつけた。

建物を重層とする場合上下層のバランスがもっともむつかしい。これには斗栱や軒の高さと出，屋根の勾配などが複雑にからまりあってくるから，全体のプロポーションをみながらの設計になり，ただ単に上層の柱寸法だけでは決定できない面がある。この復原でも成果を得るまでにもっとも時間がかかったのがこの点であるが，その結果だけを示せば上層の柱間寸法を桁行・梁間とも下層より7.0尺短かい78.0尺・27.0尺にとり，桁行は15.0尺16.0尺15尺の5間に，梁間は13.5尺2間にそれぞれ割振った。また柱の太さは下層同様少し胴張りをつけた。

上層柱間寸法

C 斗　栱

前述のごとくこの門が第一級の建築として様相を呈していたとすると，斗栱は当然三斗先とみてさしつかえない。建設年代が瓦その他から平城宮造営の最初期である和銅とみられるから現存遺構では薬師寺三重塔が最も近い類例となる。ただし部材寸法は薬師寺では全体にやや小さすぎ（例えば初重柱径1.75尺、大斗幅1.7尺同高1.14尺）この点では柱径のほぼ相似た東大寺転害門がより参考となろう。一方丸桁の位置，すなわち斗栱の前方への出に関しては，軒全体の出と相関関係にあり斗栱単独ではきめ難い。ここでは後述のとおり軒の出を下層17.00尺，上層16.00尺にきめたから薬師寺三重塔の比例にしたがって側柱心から丸桁心までを下層8.00尺，上層は7.40尺にとった。この結果上下層の肘木の長さはそれぞれの位置によって異なってくる。ただし部材寸法は階層による差はつくらず，肘木を1.0尺×0.9尺，巻斗を1.30尺×1.30尺×0.9尺とするなど原則的に同一寸法とし規格性をもたせた（大斗のみは直下の柱径が適うところから幅・成とも0.1尺落しとした）。

部材の規格性

D 軒

軒の出は柱長さ同様建物の造形上重要な要素をもつ。ここでは試作図を種々作成し検討を加えた結果，全体的にもっとも釣り合いがとれたと感じられる値，下層17.00尺，上層16.00尺を採用した。これは丁度各層の基本柱間に相当する。地軒と飛檐軒との割合は下層の飛檐軒を2.50尺と押さえ残りを地軒とした。この結果，地軒は6.5尺になり全体9.0尺に対し7割2分で遺存例からみても矛盾しない。上層は同じ比率を軒の出にかけあわせて決定した。

垂木の勾配は，地垂木を斗栱の復原によって得られた尾垂木勾配10分の4.5よりやや緩い10分の4.2とし飛檐垂木をこれより10分の1.0落した10分の3.2とした。垂木の断面は奈良時代の通例にしたがって地円飛角にし，地垂木は反りを持たない棒垂木，飛檐垂木は下端を先端で少しそぎあげる形とした。なお垂木割りは，柱間寸法が整数値よりなっているところから，側柱心を手挟さむ1.0尺で割りつけた。

軒反りについてはまったく確証はない。現存遺構でみても軒まわりは後世の改変になる場合が多く当初部材を残すものとしてわずかに雛形としての海竜王寺五重小塔その他数例をあげ得るにすぎない。したがって多分に感覚的にならざるを得ないが，ここでは柱の延びによって生じた桁反りを基礎に，下層の茅負留先で1.20尺の反りをつけ，さらに中央部での視覚的な起りを矯正するため施工に際し振分心位置でわずかに押え込んだ。

E 屋 根

一般に奈良時代の瓦葺きは，化粧垂木の上に小舞を敷きならべ，その上から直接葺土を置いて葺き上げるものとされている。したがって垂木の横相がそのまま屋根面にあらわれる傾向が強く，例えば軒における飛檐垂木と地垂木の接点部，上層屋根の下方垂木と上方垂木との接点部などは，どうしても折線によってなるくぼみが生ずる。

屋根面理の処

これを補正する方法としては，普通葺土の厚さを加減することによっておこなわれる。しかしこれにはおのずから限度があって，上層屋根の上下垂木の勾配差の大きい場合のように葺土での限界を越えるときは，法隆寺金堂にみられる鏡形の垂木を挿入するなどしてかさ上げをするのも一方法である。この模型では便宜上，下方垂木の最頂部に母屋を転ばせ，これに上方垂木をのせ，先端を下方垂木になじみのよいところまで延ばし，このくぼみを埋めることにした。この結果前後流れについては解決したものの，隅位置で妻側の屋根面とに落差が生ずることになった。隅降り棟を真隅におさめようとするといきおい妻側の屋根面，特に叉首台位置では軒反り以上の反り上がりを必要とする。だから妻飾りの三角形は，野屋根によって葺き上げる後世のものとは多分におもむきの異ったものとなった。

瓦葺き立てに際しての詳細は不明な点が少なくない。最初にのべたようにこの模型の瓦は木製造り出しとしたため勿論実際どうりにはいっていないが，一応基準とした点をあげれば

瓦葺の規準

1 軒平瓦は茅負に直接瓦様りをつけてのせる古法とした。

2 瓦の形式を藤原宮式とみたため軒先における瓦割りは1.0尺とした垂木割りよりやや広くなって両者の割りにはずれが生じる。

3 平瓦の葺足は0.5尺とみた。

4 妻の掛瓦も軒同様の割付けとし，利根丸を一本通り流して，二・三本目の丸瓦に降り棟をのせた。

5 降り棟は，平・隅とも稚児棟はつけない。

6 大棟端飾りは瓦製の鴟尾があがっていたものとみて，その形式は鳥坂寺その他同時代のものを参考にして製作した。

このうち4については，法隆寺玉虫厨子のように利根瓦をやめて，一，二本目の丸瓦に直接降り棟をのせる方法も考えられる。この場合軒丸瓦の尻を長くする必要があるが，鴟尾と降り棟とのとり合いはこの方がむしろうまくおさまる。

F 雑 作 等

扉口　中央に開く三戸の扉は内開きの板扉であったと考えられる。奈良時代の板扉の遺存例は少ないが，扉の大きさからみて，例えば唐招提寺金堂のような，縦板寄せ木張り裏桟形式とみるのがもっとも妥当であろう。そしてたぶん表側には裏桟留めの釘隠し金具や，軸元の八双金具などで華々しく飾り，裏側には戸締りのための閂がついていたであろう。扉構えは辺付・方立・鼠走り・樞，からなる古式なものとし，扉の下軸は唐居敷を置きこれでうけていたとみた。唐居敷の材質は平城京羅城門のように[7]，石製であったかもしれないが，ここでは木製とみなした。

上層柱間装置　正面5間の内，中央3間を連子窓，正面端の間と側面とを土壁として設計した。連子窓としたところは板扉とも考えられるし，また板扉と連子窓の併用であった可能性もある[3]。

上層高欄　重層門の場合高欄は欠くことができない。先に上層の柱高さを決定したがこれにみあう位置に架木をもってくると，高欄地覆下と屋根面との間に空隙が生じ，ここを埋める意味もあって三ツ斗，人形斗束の腰組付の高欄にした。高欄各材の形式は，架木を八角断面，斗束を撥形，平桁・地覆間を横連子にするなど，海竜王寺五重小塔や正倉院蔵紫檀塔残欠などを参考にしてきめた。

G 基 壇 外 装

基壇土が入念な版築によって積上げられていることはすでにのべた。この仕事からみてもまた建物の格からいっても基壇の外装はもっとも本格的とされる壇正積みであったとみなされる。遺跡での凝灰岩片の散布もこれを裏付ける。基壇の高さは東大寺南大門などを参考にし，布石上端から葛石上端までを成0.9の階段石5段分4.5尺にとった。この高さは現存根石の上に礎石がのるものとして矛盾しない。基壇上面は歩行上のことを考慮して全面凝灰岩切石敷きとしたが，根拠は薄い[4]。

東　石　基壇での一つの問題は東石の存在である。実施案では大安寺南大門・中門などの発掘例から，四隅と各柱通りに入っていたものとしたが，その後の薬師寺金堂や同寺西塔の発掘によって平城遷都直後にはまだ東石のない，いわば古い形に属する基壇が築成されていた事実が判明した。したがって，朱雀門の場合も東石がなかった可能性も考えられる。今後の発掘例に期待したい。

H 築 地 大 垣

平城宮での築地の問題はさきに『平城宮報告Ⅲ』でとりあげ考察を加えている。そこでは延喜式の記載例をひき，築地の高さはその基底幅と密接な関係があることをのべた。

築地基底幅　このことから宮の外周をめぐる基底幅9尺の築地が門際でのみ12尺に広がるという事実は，門際だけ，ほかよりも1段高く構えていたことが推察され，そうすることによって，宮の正門である朱雀門への中心性をより高めるという効果をねらったものと考えた。ただし，それぞれの築地の絶対高さについては今一つ明確さを欠く。この復原では方法的にはやや逆の感はするが，先ず門本体に直接とりつく築地大棟の高さを門の柱天ときめ，以下順に反り上り分を引いて12尺幅部分の基準高さを，そしてそれをもとにして9尺幅部分の高さをきめていった。

西側にとりつく脇門については遺構そのものから，位置・大きさ・柱径まで読みとることができるので問題は少ない。朱雀門に準じて，扉構えおよび扉の形式などをととのえた。

---

2) 昭和10年に羅城門跡である現佐保川川床より発見されたもの，「平城京羅城門跡発掘調査報告書　1972」参照。

3) 伴大納言絵詞に聞く平安宮朱雀門は，正面7間の内，中央間を土壁，その両脇各2間を板扉，端の間を連子窓としている。

4) 平城宮第2次内裏築地回廊閉門では門の内側のみ門幅3間分を凝灰岩敷きとしていた。

2 西面門 (南門および中央門 PL.65)

前節でのべたとおり15次の発掘で南門を，25次発掘で中央門を，遺存する基壇の掘込み地業によってそれぞれ確認している。

この掘込み地業の範囲から基壇の大きさを復原し，さらに柱位置を想定すれば，桁行は5間で17尺等間，梁行は2間で15尺等間とした場合に丁度合致する。ただし，この場合の前提条件として切妻造単層門であること，斗栱は平三ツ斗程度のものであること，の二つを考慮した上でのことである。

復原柱間寸法

幸いなことに同程度の門として東大寺転害門が残る。桁行柱間が5間と3間の差はあるものの柱間寸法も相似ており，今回の復原では構造形式，部材寸法とも転害門によったところが多い。おもな点を列挙すれば，

構造形式

1 柱径2.4尺，柱長さ17.0尺とほぼそのままとった。

2 斗栱は現在の転害門を当初の形に復原した実肘木付き平三ツ斗とした。

3 梁架構は大梁を側柱通り，棟通りとも大斗と組合わせて受ける形式とし，妻飾りは二重虹梁蟇股式，内部は三ツ棟造りとした。

4 軒垂木は地円・飛角とし茅負までの出を9尺にとった。

5 木槍端は鬼瓦とした[5]。

なお築地の全幅は発掘区の関係で確認できなかったが，朱雀門のように広狭があるようには認められなかったので基底部9尺のまま門に取付くものとみた。脇門の位置は朱雀門による。

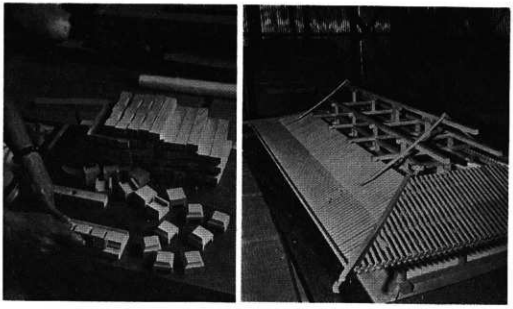


Fig. 33 模型木作り

5) 平安宮東面門を画く年中行事絵巻および信貴山縁起絵巻では大棟はともに鴟尾（瓦製か）を画いている。平城宮の場合も鴟尾であった可能性もあるが，宮内から未だ鴟尾の断片すら発見されていないことから今回の復原模型では一応鬼瓦と考えた。

別　　表

1　主要建物一覧表
2　軒丸瓦分類表
3　軒平瓦分類表

別表1 主要建物一覧表

調査地区	遺構	規模	棟方向	廂	桁行全長m(尺)	梁行全長m(尺)	廂m(尺)	柱穴m	cm/尺	備考
朱雀門地区	SB1800	5×2	WE		25.25(85)	10.10(34)			29.7	朱雀門
	SB1801				4.3 (14.5)			0.7	29.7	東脇門
	SB1802				4.3 (14.5)			0.4	29.7	西脇門
玉手門地区	SB1613	4×2	WE		7.4 (24)	4.1 (14)				
	SB1616	5×2	NS		25.25(85)[推定]	8.91(30)[推定]		0.3		玉手門
	SB1711	7×2	NS		16.1 (52.5)	5.2 (17)		0.5~0.9	30.6	
	SB1717	7×2	NS		16.8 (56)	4.8 (16)		0.8	30.0	
佐伯門地区	SB3560	7×2	NS		15.6 (52.5)	4.8 (16)				
	SB3599	3×2	NS		5.4 (18)	3.6 (12)		0.6	30.0	
	SB3600	5×2	NS		25.25(85)[推定]	8.91(30)[推定]				佐伯門
	SB3640	3×3			6.3 (21)	6.3 (21)			30.0	
	SB3690	6[以上]×2	NS		13.25(45)[以上]	5.3 (18)		1.0	29.5	
宮西南地区	SB1220	6[以上]×3[以上]			13.32(45)	5.32(18)[以上]		0.2		
	SB1222	5×4	WE	S	14.18(50)	10.91(37.5)	3.65(12)	0.9	29.6	
	SB1290	4[以上]×2	WE	S	7.11(24)[以上]	4.74(16)	1.78(6)	0.6~0.8		
	SB1333	5×2	WE		10.4 (35)	5.05(17)		0.8	29.7	
	SB1342	2×2	NS		5.4 (18)	4.5 (16)		0.5~0.8		
	SB1366	4[以上]×3	WE		8.85(30)[以上]	8.4 (28.5)		0.8		
	SB1379	4×1	WE		7.3 (24)	1.9 (6.5)		0.4		
	SB1397	3×3	WE		4.50(15)	3.39(12)		0.35~0.8		
	SB1414	4×2	WE		9.52(32)	4.76(16)		0.7		
	SB1419	3×1	NS		6.5 (22)	3.1 (10.5)		0.2~0.3		

別表2　軒丸瓦分類表

型式番号	直径	内区 中房径	蓮子数	弁区径	弁区幅	弁数	外区 外区広	外縁 縁幅	外縁 文様	外縁 外縁 幅	外縁 外縁 高	外縁 文様	全長	玉縁長	個体数 6ABX	6ABY	6ADD	6ADE	6ADF	6ADH	計	宛
6012-B	157										9									2	2	0.8
6133-B	160	36	1+6	90	17	T12	35	17	S15	15	9		406	58			(1)	1 (2)			1 (3)	0.4 (1.1)
6225-A	166	68	1+8	116	36	F8	25	12	K	13	8	RV24	373	48	1				3		4	1.5
6227-A	157	61	1+8	119	28	F8	19	9	K	10	7						1	1			2	0.8
6233-A	156	56	1+4+8	107	29	F8	31	12	S32	19	12		409	62		2					2	0.8
6233-B	156	58	1+4+8	105	28	F8	27	10	S32	17	10									2	2	0.8
6273-A	157	71	1+5+9	136	33	F8	31	13	S40	18	9	RV64	450	62								
6273-B	183	66	1+5+9	126	36	F8	29	13	S40	16	11	RV64				21			2	1	24	9.2
6273-C	185	63	1+5+9	127	36	F8	29	13	S40	16	15	RV64	440	56		23 2	(1)	1 (2)		1 (4)	27 32 2	0.8 (10.3 (11.2))
6273-D	192	72	1+5+9	131	35	F8	29	12	S40	17	7	RV64						1			1	0.4
6273-E	186	70	1+5+9	136	34	F8	28	14	S40	14	12	RV64										
6274-A	185	61	1+5+9	129	32	F8	28	13	S40	15	12	LV42	390	51		20				3	23	8.8
6275-A	196	58	1+4+12	111	29	F8	36	12	S43	24	12	LV32				6				5	11	4.2
6275-B	189	55	1+4+8	108	28	F8	35	13	S39	21	10	LV22				2				1	3	1.1
6275-C	183	59	1+8+13	115	32	F8	38	13	S43	25	13	LV					11 39			2	8 64 2 19 39	8.8 (7.3 (14.9))
6275-D	188	54	1+4+8	108	28	F8	44	13	S38	31	14	LV21				2					2	0.8
6275-I	179	51	1+4+8	114	27	F8	32	13	S32	19	15	LV32				1					1	0.4
6276			1+5+9		37	F8	26	13	S-	13	15	LV								1	1	0.4
6278-A	184	61	1+5+9	134	33	F8	28	12	S38	16	9	LV35										
6278-B	194	65	1+5+10	139	35	F8	27	15	S35	12	7	LV52							1	5	6	2.3
6278-C	174	64	1+6+10	135	32	F8	20	10	S38	10	10	LV33								1	6 1 7	2.7 0.4

T-単弁　F-複弁　J-重圏文　G-重弧文　KK-均整唐草文　HK-偏行唐草文
HK-偏行変形忍冬唐草文　K-圏界・界線　S-珠文　LV-凹線蔵南文　RV-凸線南文

型式番号	直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区 外区広	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	緯	玉長	側体数 6ABX	6ABY	6ADD	6ADE	6ADF	6ADH	計	宛
6279-A	179	48	1+8	104	28	F8	37	12	S38	25	14	LV27								1	2	3	1.1
6279-B	176	46	1+6	107	27	F8	34	17	S38	17	8	LV								1		1	0.4
																						4	1.5
6281-A	176	57	1+4+8	104	26	F8	36	14	S32	22	12	LV46	484	73			13			1	2	16	6.0
6281-B	204	66	1+8+8	115	28	F8	45	18	S32	27	21	LV37					5	18 (21)		2	1	8	3.1
																					3 (4)	24 (26)	9.2 (10.7)
6282-B	162	45	1+6	86	31	F8	36	20	S24	15	9	LV24	361	53			2		1	1		4	1.5
6282-D	132	27	1+6	64	24	F8	34	20	S24	14	9	LV24	341	39						2	3	3	1.1
6282-F	158	40	1+6	92	32	F8	33	20	S24	13	14	LV24								1	2	3	1.1
6282-L	207	36	1+6	105	25	F8	51	35	S24	16	12	LV20									2	2	0.8
																					5 (7)	12 (10)	4.6 (5.2)
6284-A	156	35	1+6	83	30	F8	36	18	S24	18	13	LV23			1		3		1			5	1.9
6284-B	153	35	1+6	82	21	F8	36	19	S20	17	13	LV20						2			4	4	1.4
6284-C	155	40	1+6	89	23	F8	33	20	S24	13	11	LV16				1 (2)			1	(4)	2	3	1.1
6284-D	164	38	1+6	92	24	F8	36	17	S20	19	14	LV16								1	4	4	1.4
																				10 (16)		16 (27)	6.0 (10.3)
6291-A	162	35	1+6	87	24	F8	37	18	S18	19	8	LV16									2	1	3	1.1
6301-C	160	48	1+5+12	102	26	F8	29	16	S20	13	8	LV33								1		4	5	1.9
6304-A	162	35	1+6	99	37	F8	31	15	S17	16	16	LV16							1			1	0.4
6304-C	159	35	1+6	84	21	F8	37	20	S19	17	14	LV16								1 (2)	1	1	0.4
6304-L	255	61	1+6	159	43	F8	45	23	S27	25	14	LV17										1	0.4
																						3 (4)	1.1 (1.5)
6308-A	162	35	1+6	94	27	F8	34	11	S16	23	8	LV16	371	52							1	1	0.4
6308-B	162	36	1+6	93	25	F8	37	13	S18	24	7	LV16	377	56							1	1	0.4
6308-C	175	40	1+6	100	24	F8	37	15	S18	21	4	LV16								1	18	19	7.3
																					20 (26)	21 (27)	8.0 (10.3)
6311-B	162	43	1+6	92	27	F8	33	13	S26	20	13	LV23			1						(1)	1 (2)	0.4 (0.8)
															型式不明	2	8	2	4	6	10	32	12.3
															計	5 (6)	87 (104)	7 (9)	10 (18)	33 (39)	69 (88)	208 (261)	79.6 (99.3)

( )は種類不明を加えたもの。
出土側体数の記載のないものは、北方宮西地域出土のもの。

別表3　軒平瓦分類表

型式番号	瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚	内区厚	内区文様	上外区厚	上外区文様	下外区厚	下外区文様	脇区幅	脇区文様	文様の深さ	全長	瓶体数 6ABX	6ABY	6ADD	6ADE	6ADF	6ADH	計	率
6561				36		OXG							5		1				1		2	0.8
6572 A	263	63	267	46	24	J	12			10		56	5	314					1	3	4	1.7
6575 B							J									1					1	0.4
6643-A				50	16	HK	17	S 23	16	LV	42	LV4	4			5					5	2.0
6641-C	286	56	308	51	20	HK	15	S 23	16	LV19	60	LV4	2	404		21	1		3		25	10.4
																43 (89)	(3)	(1)	4 (3)		52 (97)	21.8 (23.8)
6641-E				53	20	HK	15	S 21	16	LV26	64	LV	2		2	13	1		1		17	7.1
6641-F				50	24	HK	11	S 24	15	LV26	60	LV5	3	374		4				1	5	2.0
6642-A				47	25	HK	13	S 20	9	S 19		S 5	3		1					1	2	0.8
																				4 (5)	8 (9)	3.3 (3.8)
6642-B				43	22	HK	12	S 22	9	S	60	S 4	2		1	2				3	6	2.5
6643-A	288	79	291	44	21	HK	13	S 22	13	S 23		S 4	3	369								
6643-B		78		48	22	HK	12	S	14	S 23		S 4	2			1					1	0.4
																			1 (2)	2 (4)		
6643-C		64		49	21	HK	13	S 22	15	S 23		S 4	2		1	2	5		1	2	6	2.5
																					9 (12)	3.8 (5.0)
6643-D		69		46	19	HK	14	S	13	S	61	S 4	2			2					2	0.8
6646-A	311	63	337	36	27	HX	14	S 30	15	LV24	59		2	473					1	2	3	1.6
6646-B						HX	16	S							1	1	4 (7)				2	1.0
															(2)						8 (2)	4.7 (5.0)
6646-C	282	70	284	56	23	HX	15	S 29	14	LV26	72		2			3					3	1.6
6647-A				61	35	HX	13	S	13	LV	65		3			1				1	2	0.8
6647-B				60	36	HX	13	S	11	LV	64		3			2					2	0.8
																	7 (8)			2 (4)	9 (12)	3.8 (5.0)
6647-C				45	21	HX	13	S	12	LV	59		3			3					3	1.3
6647-D	285	65	316	59	26	HX	16	S 31	15	LV 42	48		2	399		1				1	2	0.8

型式番号	瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚	内区厚	内区文様	上外区文様	上外区厚	下外区厚	下外区文様	脇	脇区幅	脇区文様	文様の深さ	全長	個体数 6ABX	6ABY	6ADD	6ADE	6ADF	6ADH	計	%
6663-A	284	77	286	55	29	KK	14	K	16	K	62	K	2		349					2	33	35	16.6
6663-C	270	72	282	53	26	KK	14	K	13	K	73	K	3		376	(3)	(1)	1 (2)	1 2	2 (5)	33 (40)	4 (63)	1.7 (22.3) 16.7
6663-G				70	26	KK	12	K	12	K		K	5						1			1	0.4
6664 A				62	31	KK	18	S21	19	S21	80	S3	3							1		1	0.4
6664-C	240	62	252	51	24	KK	14	S21	13	S21	62	S3	4		376					2		2	0.8
6664-D	240	60	269	60	22	KK	20	S17	18	S19	74	S3	5		358			(1)	10 (15)	1	11	1 (24)	0.4 8.8 (10.0)
6664-H	272	68	281	57	24	KK	17	S21	16	S21	78	S3	6							5		5	2.0
6664-I	278	53	279	53	24	KK	16	S21	12	S21		S3	4		384				10	2		12	5.0
6667 A				62	23	KK	17	S21	22	S21		S3	6							1		1	0.4
6668-A				49	18	KK	15	S	16	S			4			1						1	0.4
6671-C	295	68	297	55	15	KK	18	S10	22	LV22	65	S2	4		394						1	1	0.4
6675 A	270	52	279	44	22	KK	12	S15	10	LV17	56	LV1	2										
6681-A	273	80	274	48	17	KK	17	K	14	K	68	K	9		352						1	1	0.4
6682-A	245	78	273	52	24	KK	15	S17	13	S17	78	S3	5		350						1	1	0.4
6683-B	200	51	204	38	13	KK	12	S15	13	S15	47	S1	4		327	2						2	0.8
6691-A	270	55	293	55	25	KK	14	S21	16	S21	58	S3	4		345			1		1		2	0.8
6694 A	235	67	275	60	32	KK	17	S15	11	S14	70	S3	4				1					1	0.4
6719-A	265	49	265	36	18	KK	7		7		38		3						2	1		3	1.3
6721-G	260	60	280	47	24	KK	11	S34	12	S35	52		3		368		1	1 (4)			(1)	2 (6)	0.8 (2.5)
6732							KK		S		S		S				(1)					(1)	0.4
6734-A				52	28	KK	14	K	10	K		K	3								2	2	0.8
														型式不明		0	18	3	3	2	6	32	13.4
														計		9 (12)	86 (90)	8 (10)	17 (20)	28 (30)	57 (70)	204 (239)	85.8 (99.8)

（　）は種類不明を加えたもの。
出土個体数の記載のないものは、北方宮西地域出土のもの。

PUBLICATIONS OF NARA NATIONAL CULTURAL
PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE, NO. 34

NARA HEIJŌ IMPERIAL PALACE SITE EXCAVATION REPORT IX

SURVEYS IN AREAS OF OUTER GATES
AND SURROUNDING WALLS

ENGLISH SUMMARY

**NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH
INSTITUTE 1977**

NARA (HEIJŌ) IMPERIAL PALACE SITE EXCAVATION REPORT IX

SURVEYS IN AREAS OF OUTER GATES AND SURROUNDIND WALLS
—1977—

CONTENTS

Page

Chapter I. Introduction 1

Chapter II. Progress of Research Work 4
1. General Description of Research Work 4
2. Daily Record of Excavation Work and Events 7
A. Survey 14 7
B. Survey 15 8
C. Surveys 16 and 17 9
D. Survey 18 11
E. Survey 23 12
F. Survey 25 13
G. Survey 25–2 15
H. Survey 34 15
I. Survey 52–2 16
J. Survey 58 16
K. Survey 62 16

Chapter III. Excavated Sites 17
1. Introductory Remarks on Excavated Sites 17
2. Description of Structural Remains 18
A. Area of Suzaku–mon (6ABX, 6ABY) 18
B. Area of Tamate–mon (6ADF) 21
C. Area of Saeki–mon (6ADD, 6ADE) 24
D. Area of southwest corner of palace precinct (6ADH) 27
E. Area between Tamate–mon and Saeki–mon (6ADE, 6ADF) 31
F. Area of surrounding wall on north side (6ABA, 6ABN) 32
G. Other areas 33

Chapter IV. Artifacts 34
1. Wooden Tablets (Mokkan) 34
A. Mokkan from SD1900 34
B. Mokkan from SK1979 37
2. Tiles 39
A. Round roof–edge tiles (noki marugawara) 40

B. Curved roof-edge tiles (noki hiragawara) ····· 46
C. Tiles used as tools ····· 52
D. Round and curved roof tiles ····· 52
E. Tiles bearing Chinese characters ····· 53
3. Earthenware ····· 54
A. Earthenware from SD1900 ····· 54
B. Pottery with Ink Writings ····· 60
C. Earthenware from other sites ····· 60
D. Pottery from Cultural Layers · Inkstones ····· 61
E. An Earthenware coffin ····· 61
4. Wooden Manufactures ····· 62
A. Wooden shields from SE1230 ····· 62
B. Wooden manufactures from SD1900 ····· 66
C. Wooden manufactures from SK1979 ····· 71
D. Wooden manufactures from other sites ····· 76
5. Manufactures of Metal and Stone ····· 78
A. Manufactures of Metal from SK1979 ····· 78
B. Manufactures of Metal and Stone from other sites ····· 79

Chapter V. Interpretive Essays ····· 80
1. Sites ····· 80
A. Outer palace gates ····· 80
B. Surrounding wall ····· 82
C. Thoroughfares within palace precinct ····· 84
D. Shaku measurement units used in palace construction ····· 85
2. Artifacts ····· 88
A. Tiles ····· 88
B. Earthenware ····· 92
3. Outer Gates and Surrounding Wall in Literature ····· 96
4. Conclusions ····· 99

Chapter VI. Model Reconstructions ····· 100
1. Suzaku-mon ····· 101
2. West-facing Gates ····· 105

Supplementary Tables ····· 107
Summary ····· 115
Plans and Sections
Plates

PLATES

1. Aerial photograph of Heijō-kyū remains
2. Areas 6ABX and 6ABY (total view, from south)
3. Area 6ABY-E
   1) Southern-facing surrounding wall SA1200, Suzaku-mon SB1800 and its eastern side gate (wakimon) SB1801 (from east)
   2) Suzaku-mon SB1800 and wall SA1812 (from east)
4. Areas 6ABX and 6ABY
   1) Total view, from south
   2) Suzaku-mon SB1800, and open area SH1850 (from east)
   3) Suzaku-mon SB1800, wall SA1812, and structures SX1830, SX1831 and SX1832 (build within drainage ditch SD1825 after the gate's dismantlement)
5. Area 6ABY-E·G
   1) Sites where foundation stones had been emplaced at Suzaku-mon SB1800 (northern row) and sites of post holes for wall SA1812 (from north)
      a) Site of No. 1 foundation stone (from east)
         Sites of No. 1 and No. 2 posts (from east)
      b) Site of No. 2 foundation stone (from east)
         Sites of No. 3 and No. 4 posts (from east)
      c) Site of No. 3 and No. 4 foundation stones (from east)
         Sites of No. 4, No. 5, and No. 6 posts (from east)
      d) Site of No. 5 and No. 6 foundation stones (from east)
         Sites of No. 8 and No. 9 posts (from east)
6. Area 6ABY-E
   1) Sites of foundation stones of Suzaku-mon SB1800 and of area dug out (horikomijigyō) in constructing base platform (from northwest)
   2) Area of horikomi jigyō for Suzaku-mon SB1800, showing hanchiku construction process of building foundation (from west)
   3) Area of horikomi jigyō for south-facing surrounding wall SA1200, showing hanchiku construction process (from east)
7. Area 6ABY-E·G
   1) Eastern side gate (wakimo.ı) SB1801, from north
   2) Same , from northwest
   3) Western side gate (wakimon) SB1802, from north
8. Area 6ABY-E·G
   1) Remains of the base section of the western post in

the eastern side gate SB1801 (from south)

2) Remains of the base section of the eastern post in the eastern side gate SB1801 (from south)
3) Remains of base section of eastern post in western side gate SB1802 (from south)
4) Fourth from east (northern-row) foundation stone site at Suzaku-mon SB1800 and seventh from east post hole site wall SA1812 (from north)
5) Fourth from east post hole site at wall SA1812 and remains of base section of post (from north)
6) Third from east post hole site at wall SA1812 and remains of base section of post (from east)

9. Area 6ABY-E·G
   1) Thoroughfare SF1760 within palace precinct (to east of Suzaku-mon) and wall SA1765, from east
   2) Same, viewed from northwest
   3) Thoroughfare SF1890 (to the west of Suzaku-mon), viewed from west
10. Areas 6ABX and 6ABY
   1) Western side gate SB1802 and western edge of SH1850 (from south)
   2) Eastern edge of open space SH1850 and thoroughfare SF1950 (within palace precinct), from south
   3) Western half of open space SH1850, from north

11. Areas 6ABX and 6ABY
   1) Drainage ditch SD1900A (from north)
   2) Drainage ditch SD1900B (from north)
   3) Dam SX1891 (from east)
   4) Same (from northwest)
12. Area 6ABY-G
   1) Structures SX1830, SX1831, and SX1832 within drainage ditch SD1825 (from north)
   2) Same (from south)
   3) Remains of base section of eastern post in SX1830 and soil strata of SD1900 (from north)
13. Area 6ADF
   1) Total view of sub-area R·T, viewed from northeast
   2) West-facing surrounding wall SA1600 and Tamate-mon site SB1616 (viewed from south)
14. Area 6ADF
   1) Tamate-mon site SB1616 and east-west wall SA 1692 (viewed from north)
   2) Area of horikomi jigyō at Tamate-mon site SB1616 and evidence of hanchiku process of constructing foundation (from northeast)
   3) Detail of same (from north)

15. Area 6ADF
    1) Total view, from north
    2) Buildings SB1711 and SB1717, and wall SA1692 (from northwest)
    3) Buildings SB1711 and SB1717 (from southwest)
16. Area 6ADF
    1) Drainage ditch SD-1759 (from north)
    2) Pit SK1623 (from southeast), showing stratification of filled in earth and debris
    3) Pit SK1623 (from south)
17. Area 6ADF
    1) Well SE1748 (from southwest)
    2) Well SE1595 (from north)
    3) Well SE1591 (from south)
    4) Well SE1598 (from northwest)
    5) Well SE1588 (from south)
    6) Well SE1596 (from east)
18. Areas 6ADD and 6ADE
    1) Saeki-mon site SB3600 (from south)
    2) Saeki-mon site SB3600 and walls SA3590 and SA3680 (from northeast)
19. Areas 6ADD and 6ADE
    1) Saeki-mon site SB3600 and walls SA3699 (from northeast)
    2) Area of horikomijigyō and hanchiku process of constructing base platform of Saeki-mon SB3600 (from southeast)
    3) Detail of same (from northeast)
20. Areas 6ADD and 6ADE
    1) Saeki-mon site SB3600, and walls SA3590 and SA3680 (from north)
    2) Same (from south)
    3) Walls SA3590, building SB3640, and pit SK3650 (from northwest)
21. Areas 6ADD and 6ADE
    1) Wall SA3680 and building SB3690 (from south)
    2) Wall SA3590 and building SB3640 (from west)
    3) Wall SA3590 and building SB3599 (from north)
22. Area 6ADE-M
    1) Walls SA3563 and SA3590, old river bed SD 1759, and pit SK3753 (from south)
    2) Same (from north)
    3) Walls SA3555, SA3557, and SA3563, and building SB3560 (from northwest)
23. Area 6ADH-F·K·L
    1) Southwest corner of palace precinct (from east)
    2) Southern edge of palace precinct (from west)

24. Area 6ADH-F·K·L
    1) South-facing surrounding wall SA1200 (from west)
    2) View of scattered roof tiles on north side of surrounding wall SA1200, and walls SA1240 and SA 1245 (from southeast)
    3) View of scattered roof tiles on north side of surrounding wall SA1200 (from east)
25. Area 6ADH-J·K·L
    1) Total view (from northeast)
    2) Walls SA1221 and SA1240, buildings SB1220 and SB1222, and upper part of well SE1230 (from north)
    3) Walls SA1221 and SA1240, building SB1222, and upper part of well SE1230 (from south)
26. Area 6ADH-J·K·L
    1) Southwest corner of the palace precinct (from northeast)
    2) Building SB1333 (from northeast)
    3) Wall SA1345 and building SB1342 (from east)
    4) Building SB1397 (from southeast)
27. Area 6ADH-J·K·L
    1) Total view (from southwest)
    2) Total view (from north)
    3) Building SB1414 (from east)
28. Area 6ADH-J·L
    1) Walls SA1345 and SA1365, Building SB1366 (from north)
    2) Building SB1366 (from west)
    3) Buildings SB1379 and SB1419 (from east)
29. Area 6ADH
    1)) Southwest section of surrounding outer moat SD 1250 (east trench), from northwest
    2) Same, from west
    3) Southern section of surrounding outer moat SD 1250 (west trench), from southwest
30. Area 6ADH-F
    1) View of upper part of well SE1230 during excavation (from north)
    2) Well SE1230 (from south)
    3) Same (from southeast)
31. Areas 6ADE and 6ADF
    1) Total view of north-south trench (from north)
    2) Wall SA1970 (from west)
    3) Wall SA1970 and covered conduit SD1975 (from east)
32. Areas 6ADE and 6ADF
    1) Square structure of wooden stakes SX1978, pit SK1979, and covered conduit SD1982 (from north)

2) Structure SX1978 and pit SK1979 (from west)
3) Wall SA1970 and covered conduit SD1975.

33. Areas 6ABA and 6ABN
    1) Northern half of Area 6ABA and total view of Area 6ABN (from southwest)
    2) Northern surrounding wall SA2300 (from west)
    3) Northern surrounding wall SA2300 and wall SA 2330 (from west)
34. Areas 6ABA and 6ABN
    1) Total view of Area 6ABA (from northwest)
    2) Northern surrounding wall SA2300 and tile-paved structure SX2333 (from south)
    3) Tile-paved structure SX2333 (from southeast)
35. Wooden tablets (*mokkan*)
36. Round roof-edge tiles (*noki marugawara*)
37. Round roof-edge tiles
38. Curved roof-edge tiles (*noki hiragawara*)
39. Red pottery (hajiki) from SD1900
40. Red pottery (hajiki) from SD1900
41. Red pottery (hajiki) from SD1900
42. Red pottery (hajiki) from SD1900
43. Grey pottery (sueki) from SD1900
44. Grey pottery (sueki) from SD1900
45. Ink-inscribed pottery from SD1900
46. Red and grey pottery from SD1900, and ceramic inkstone and ceramic coffin lid from pit SK1949
47. Shield from SE1230
48. Shield from SE1230
49. Shield from SE1230
50. Shield from SE1230
51. Shield from SE1230
52. Detail of shield from SE1230
53. Inked and incised drawing on shield from SE1230
54. Incised drawing on shield from SE1230
55. Round wooden food container (magemono) from SD1900
56. Magemono and wooden bowl (hachi) from SD1900
57. Wooden spinning and weaving utensils from SD1900
58. Wooden tools and other wooden objects from SD1900
59. Wooden broom and other wooden objects from SD1900
60. Wooden objects from pit SK1979
61. Wooden tools from pit SK1979
62. Wooden objects from pit SK1979 and other sites
63. Metal manufactures and other objects
64. Model of Suzaku-mon
65. Model of West-facing Gates

PLANS AND SECTIONS

1. Topographical map of entire area of Heijō-kyū remains
2. Diagram to scale of areas 6ABX and 6ABY (entire)
3. Diagram to scale of 6ABY-D·E·F·G (centlal part of southern half)
4. Diagram to scale of 6ABY-G·E (eastern part of southern half)
5. Diagram to scale of 6ABY-F·G (western part of southern half)
6. Diagram to scale of 6ADF-P·R·T (entire)
   Diagram to scale of 6ADD-Q and 6ADE-K·L·M (entire)
7. Diagram to scale of 6ADF-R·T (entire)
8. Diagram to scale of 6ADF-P (southern half)
9. Diagram to scale of 6ADF-K·P (entire)
10. Diagram to scale of 6ADD-Q and 6ADE-K
11. Diagram to scale of 6ADE-K·L (entire)
12. Diagram to scale of 6ADE-L·M (entire)
13. Diagram to scale of 6ADH (entire)
14. Diagram to scale of 6ADH-F
15. Diagram to scale of 6ADH-I
16. Diagram to scale of 6ADH-K
17. Diagram to scale of 6ADH-K·L
18. Diagram to scale of 6ADH-L·J (northern half)
19. Diagram to scale of 6ADE-P and 6ADF-J·K (entire)
20. Diagram to scale of 6ABA-N and 6ABN-B (entire)
21. Diagram to scale of 6ACA-D·E

SUPPLEMENTARY TABLES

1. List of major buildings
2. Classification of round roof-edge tiles
3. Classification of curved roof-edge tiles

COLOR PLATES

Frontispiece Reconstructed model of Suzaku-mon
COLOR PLATE The original of Hayato shield
The model of Hayato shield

FIGURES AND DIAGRAMS IN TEXT

1. Areas excavated in each separate survey
2. Map of areas excavated in Survey No. 14 and principal remains
3. Map of areas excavated in Survey No. 15 and principal remains
4. Map of areas excavated in Surveys No. 16 and No. 17 and principal remains
5. Map of areas excavated in Survey No. 18 and principal remains
6. Map of areas excavated in Survey No. 23 and principal remains
7. Map of areas excavated in Survey No. 25 and principal remains
8. Principal remins unearthed in the area of Survey No. 25-2
9. Schematic drawing of the foundation platform with subterranean substructure
10. Well SE1247, from west
11. Well SE1410, from south-east
12. Well SE1313, from south
13. Well SE1422, from north-west
14. Round roof-edge tiles of types 6233, 6273, 6274 and 6275
15. Round roof-edge tiles of types 6275, 6276 and 6288
16. Round roof-edge tiles of types 6278, 6279, 6281 and 6284
17. Curved roof-edge tiles of types 6641, 6642 and 6643
18. Curved roof-edge tiles of types 6643 and 6646
19. Curved roof-edge tiles of type 6681
20. Curved roof-edge tiles of types 6687, 6671 and 6675
21. Incised chinese characters and a mark on roof tiles
22. Relative dimensions of red pottery tableware
23. Relative dimensions of grey pottery tableware
24. An earthenware coffin
25. Map showing the distances between
26. Coordinate values at each mesured point and a conceptual map of it's position
27. Changes over time in designs of round roof-edge tiles
28. Sumiki-futagawara (tiles covering ends of angle rafters)
29. X-ray fluolescence analysis of pottery excavated from SD1900
30. The number of Groups I and II pottery, classified by shape-types
31. Ratio of red pottery, classified by purpose
32. Compasison of pottery by it's use between Nara Palace site and other several specific sites
33. Process of making miniature building

TABLES IN TEXT

1. Area and time span of execution in each survey
2. The number of roof-edge tiles excavated from dairi north exterior precinct
3. Tiles with incised character of "Ri (理)"
4. Quantities of pottery unearthed from SD1900A classified by shape-types
5. Manufacturing technique of red pottery tsuki and sara
6. Relative dimensions of wooden shields
7. Relative dimensions of crosspieces attachd to the wooden shields
8. Relative dimensions of cylindrical wooden containers
9. Relative dimensions of cylindrical wooden containers
10. Relative dimensions of cylindrical wooden containers
11. Dimensions of wooden spools
12. Dimensions of worked wooden boards and sticks found from SD1900
13. Dimensions of wooden models excavated fromSK1983
14. Dimensions of wooden hafts or handles of tools found from SK1983
15. Dimensions of ritual wooden blade
16. Dimensions of iron nails
17. Size and weight of bronze coins
18. Scale of roofed mud-wall
19. Differences of binding angles between round faces and semicylindrical ends of round roof-edge tiles
20. Names attached to the twelve gates around the Palace

NARA (HEIJŌ) IMPERIAL PALACE SITE EXCAVATION REPORT Ⅸ

Heijō-kyu (Nara-no-miya), whose construction was begun in 708, was built in the cental part of the northern extremity of Heijō-kyō (Nara), which was the capital of the country during the Nara Period, following the removal of the capital from Fujiwara-kyō in 710. The basic palace area was approximately 1250 meters from east to west and 1000 meters from north to south, but it had a protruding addition on the east side measuring 250 meters from east to west and 750 meters from north to south. The total area was approximately 120 hectares.

With the exception of certain areas along the northern and eastern edges which are occupied by private residences, nearly the whole area of the Heijō-kyū has been preserved, and excavation surveys are continuing to be carried out. Ever since the studies of Heijō-kyū made by Kitaura Sadamasa in the middle of the 19th century, the area of the palace was thought to be one kilometer square, and this became a fixed view in academic circles. When in 1961 a certain private company planned to develop the southwestern part of the palace area and as a result the decision was taken to preserve the entire palace site, it still seemed natural that the area in question should be taken as measuring one kilometer square. However, after excavations were begun in 1964 to determine the four sides of the palace area, it was learned that no remains existed for the three gates on the eastern side (i.e., the *Yama-mon* 山門, the *Takerube- mon* 建部門, and the *Ikuha-mon* 的門, from north to south, respectively) at the sites that had been postulated for them. During a 1967 survey of a newly postulated site for the southernmost gate on the eastern site, remains were uncovered of a gate which opened, rather, to the south along the street known as *Higashi Ichibō-ōji*. In this way it could be hypothesized that the Heijō-kyū had a protrusion on the eastern side of the originally supposed area. From visible topographical features of nearby paddy fields it was newly postulated that the eastern edge of the protruding area lay some 250 meters away from the originally supposed boundary. Through a 1968 survey, the southeast corner of the protruding area could be verified. This area was later designated as corresponding to mentioned in historical literature the "*Tōin*" 東院 (or "eastern courtyard") and thus also as the area where the Yamamomo-no-miya 楊梅宮 ("willow and plum palace") must have stood.

The preservation of this protruding area came to be a new problem as a result. Through the efforts of many different parties, nearly the entire sector with the exception of areas where private houses already stood is to be preserved in perpetuity.

Three gates opened on each side of the rectangular palace area, and with each gate there was associated the name of a prominent clan. The gate at the center of the South side of the palace is in historical literature of the Nara Period known as the Suzaku-mon (not indicating the name of a clan), but it is possible that this gate was at first also known as the Ōtomo-mon. The problem of which names may be attributed to which gates was taken up in the *Nara Imperial Palace Site Excavation Report II*.

With the above sort of background to the various excavation surveys carried out, the present report deals with some of the areas surveyed in the attempts, mentioned above, to determine the outer boundaries of the palace precincts. The areas discussed in the present report are primarily the following: area of the central gate on the south side (the *Suzaku-mon*, Surveys 16 and 17); area of the southern gate on the west side (the *Tamate-mon* 玉手門, Survey 15); area of the central gate on the west side (the *Saeki-mon* 佐伯門, Survey 25); area of the southwest corner (Survey14); area between the *Tamate-mon* and the *Saeki-mon* (Survey 18); and area of the surrounding wall on the north side (Survey 23) (See Chapter I).

The southwest corner and the *Tamate-mon* areas were excavated in 1963; the areas of the *Suzaku-mon*, of the surrounding wall on the north side and of the interval between the *Tamate-mon* and the *Saeki-mon* in 1964; and the area of the *Saeki-mon* in 1965. The survey in the *Suzaku-mon* area uncovered drainage ditches on the east and west sides of the *Shimotsumichi*, (The three official roads "kando" which cut across the Yamato basin from north to south were called Kamitsumichi , Nakatsumichi, and shimotsumichi, respectively, the last named lying furthest to the west among the three) the road which may be taken as having formed the standard axis dividing the main area of the palace into east and west sectors at the time of the palace construction (See Chapter II/1).

In the present report, following the above-mentioned general outline is a daily record of progress in the excavation work (Chapter II/2).

Chapter III deals with the various remains uncovered.
Numbers of the various types of remains uncovered are as follows: Buildings (22); Surrounding walls (3); Other walls (22); Drainage ditches (15); wells (14); Pits (10). Remains of buildings were few due to the fact that the areas surveyed were adjacent to the outer wall surrounding the palace. The various remains are discussed in the following order: the Suzaku-mon area; the Tamate-mon area; the Saeki-mon area; area of southwest corner; area between the Tamate-mon and the Saeki-mon; area of the surrounding wall on the north side; and lastly, other small-scale excavation areas (Chapter III/1).

Among the excavated remains, we may state regarding the palace gates and surrounding wall (i.e., the principal objects of the surveys) ,

as follows. The site of the Suzaku-mon (SB1800), in comparison to the other two gates, was in a relatively good state of preservation. The remains of the foundation stones which had been removed revealed an east-west dimension of 5 span and a north-south dimension of 1 span, with each span (distance between centers of foundation stones) measuring 5.05 meters. The southern half of the gate's foundation structure had at some time been destroyed in the digging of a pond. The southernmost remaining traces of a row of foundation stones corresponds to the center line, widthwise, of the southern surrounding wall, a fact which permits us to assign two span instead of one span as the original width of the gate. No remains of other structures outside the gate's foundation platform were revealed. When the foundation was built, it was placed largely below the original ground level but also protruded above the original ground level in the form of an earth mound specially prepared to have sufficient soil resistance. The original work of digging an excavation in the surrounding soil is known as horikomi jigyō. From the traces of this horikomi jigyō it is possible to estimate that the foundation extended 1.5 meters below the original ground level. The foundation was built up by a process known as hanchiku, i.e., successively building up and hardening thin layers of clay and sand in the area dug out to be filled. The horizontal dimensions of the gate were thus 25.24 meters in length by 10.10 meters in width (with 5.05 meters, or 17 shaku, as the distance between pillars). At approximately 29 meters to both the east and west of the gate are remains of side gates (wakimon, SB1801 and SB1802) which form openings in the southern surrounding wall of the palace. These are approximately 4 meters wide. The excavation surveys confirmed the fact that the southern surrounding wall (SA1200) was built on a foundation which was set, by means of horikomi jigyō, approximately 0.4 meters below the original ground level, and also the fact that the width of its base was 2.4 meters. It was possible to confirm the same base width also in the survey (No. 14) carried out in the area of the palace precinct's southwest corner. However, within 12 meters on both the east and west sides of the Suzaku-mon, the base width of the surrounding wall is found to measure approximately 3.5 meters. This feature of the surrounding wall being built wider than usual in segments which adjoin either side of a gate has not been found in the surveyed areas around other palace gates, and is thus peculiar to the Suzaku-mon. There are remains of an east-west mud (SA1812) built around posts sunk into the ground (hottate-bashira). It was constructed across the northern edge of the gate's foundation platform, evidently after the time when the Suzaku-mon was dismantled.

In the case of the Tamate-mon (SB1616), no traces remained of the foundation stones or of the sites of their removal but the survey work revealed the position of the bottom layer of the gate's foundation work, which had been, at the time of the gate's construction, the bottom

of the area dug out through horikomi jigyō. The depth of the horikomi jigyō was discovered to be approximately 0.6 meters. The foundation was built up by means of hanchiku, as described above. As for the horizontal dimensions of the horikomi jigyō, the length was found to be approximately 32.1 meters (north to south), while a reconstructed figure for the width (only a half of wihch was confirmed during the survey in question) may be given as 13.9 meters.

The site of the Saeki-mon (SB3600), like that of the Tamate-mon, leaves no traces of foundation stones or their removal sites. Its size likewise has come to be known only through the remaining evidence of the horikomi jigyō, seen to have a depth of approximately 0.7 meters. The length of the area of the horikomi jigyō is 29.4 meters (north to south), while the width (east to west) is thought to be about the same (13.9 meters) as the width of the Tamate-mon.

The surrounding wall on the palace precint's west side (SA1600) into which the two above-mentioned gates are built, was found to have a foundation built with a shallow horikomi jigyō, in a way similar to the construction of the surrounding wall on the south side (SA1200). A reconstructed figure for the width of the foundation's base yields 2.4 meters, the same as in the case of the southern wall. A part of the remains of the northern surrounding wall was revealed in Survey 23. At the time it was built, the Heijō palace was first set apart by means of a wall of hottate-bashira construction, which was subsequently replaced by a thicker roofed wall (Tsuiji).

In the areas covered in the present report, there were found the remains of a large number of wells. Most of these date from the Heian or Kamakura periods, but one well (SE1230), in the south-west corner of the palace precinct, is from the Nara period and is also noteworthy for the fact that it made use of painted wooden shields, placed side by side to serve as planks around its four sides (See Chapter III/2).

The wooden tablets (mokkan) uncovered among the varios remains were discussed in the 1970 publication Heijō-kyū mokkan. However, a selective list of the more important finds is given in the present report. For example, the tablets bearing the notation Kasofu 過所符, uncovered from the lower strata of site SD1900, were a kind of passport for passing through checkpoints, and thus are an important source material for research concerning the transportation routes of the time. Among the mokkan uncovered from pit SK1979 in the area between the two above-mentioned gates on the west side (Survey No. 18), there are a large number which bear notations having to do with metal nails 釘. The fact that these mokkan were uncovered together with wooden handles for metal utensils, furnace fittings for the insertion bellows and slag left over from molten metal suggests that there was a metal-casting workshop in the vicinity (See Chapter IV/1).

In proportion to the extent of the areas surveyed and also in view of the fact that the surveys in question centered around gates and the surrounding wall, it may be said that the quantity of roof tiles uncoverd was surprisingly small. Among the 261 roof-end round tiles ("noki marugawara") and 239 roof-end curved tiles ("noki hiragawara") uncovered, 138 of the former and 102 of the latter ··· 48% of the total--were of types used in the Fuji-wara palace. In the case of the area of the Suzaku-mon, 65% of the noki marugawara and 68% of the noki hiragawara were Fujiwara palace types. (See Chapter IV/2).

Pottery treated in the present report is limited to those objects unearthed from site SD1900, i.e., the drainage ditch along the west side of the Shimotsumichi. Taken together, the 183 pieces of hajiki (red pottery) and 139 pieces of sueki (grey pottery) form excellent material for purposes of establishing a chronology of pottery types.

Among those examples of pottery which bear inked Chinese characters, there is a shallow bowl (Tsuki) which bears an inscription reading 秋万呂十口 and which may refer to a set of ten such bowls (found together) that were the property of one "Akimaro". Others bear inscriptions like 五十戸家 and 五十家 which seem too refer to households in villagse governed by the system of one "village" (sato) unit designated for each 50 households, as prescribed in the Taihō legal code of 701. In addition to utensils, also unearthed was the lid of a pottery coffin from Tumulus (Kofun) Period. It has the shape of a hipped (shichūshi-ki) roof (See Chapter IV/3).

Among wooden objects uncovered from site SD1900 were such food receptables as tapered bowls and round boxes (magemono), spindles, bridges to hold Koto strings, combs, wooden clogs (geta), tool handles, etc. From pit SK1983 (Survey No. 18) were recovered such wooden objects as round boxes, spoons, various models in the shape of arrows, knives, etc. (probably used to instruct metal manufactures as to the desired dimensions of orders placed), and handles to such implements as knives, drills and scythes. The 16 painted wooden shields used as side planking in well SE1230 (Survey No.14) fit the description that is given in the "Hayato no tsukasa" article of the Engishiki code (completed 927) with regard to shields employed on ceremomial occasions by the group of people known as Hayato (who lived in Southern prefecture of Kyūshū). The lengths of the shields uncovered vary from 149.6 to 152.2cm, and their widths vary from 48.0 to 50.8cm, the average figures being 151.1 cm and 48.6cm., respectively. This corresponds almost exactly to the dimensions given in the Engishiki, namely, a length of 5 shaku (151.5 cm) and a width of 1.8 shaku (50.5cm). The shields bear sawtooth designs at both their upper and lower ends; swirling designs painted red, white and black are drawn on the center portions, and at the very top are several small holes thought to have been for the purpose of attaching

horse hair. These particulars also fit the Engishiki description. On the reverse sides of several of the shields are found such characters as [山], [山地], [海], [海□], and [爲], written in ink or with a stylus. The patterns by which paint was applied to the obverse side may be classified into two types (See Chapter IV/4).

Chapter V gives attempts at interpretations based on the facts listed above. These deal primarily with the gates and secondarily with the surrounding wall, thoroughfares within the palace precinct, and units of measure used in palace construction.

Supposing that the size of the foundation platform of the Suzaku-mon was approximatsly the same as that of the area of the horikomi-jigyō carried out at the site, we may hypothesize that the platform extended on all four sides approximately 10 shaku (about 3 meters) beyond the area demarcated by the pillars supporting the roof, and that the platform was on all four sides overhung by eaves. From these facts, it could be supposed that the roof was either of a hipped (yosemune-zukuri) or a hipped and gabled (irimoya-zukuri) construction. However, given the fact that the area of horikomi jigyō was deep (approximately 1.5 meters) and painetakingly filled in to make the ground under the platform as hard as possible, and in light of the extant picture scroll (emakimono) representations of the Suzaku-mon of the Heian-kyū (likewise the principal "front gate" of the palace), we are probably justified to suppose that the Suzaku-mon of the Heijō-kyū had a heavy hipped and gabled roof construction rising several storeys high. The fact that the area of horikomi jigyō of the other two gates is shallower, the fact that their lateral dimensions are somewhat smaller, and especially the fact that the ratio of their shorter to their longer sides is smaller (each of the 5 span between the six pillars on the longer sides to equal thought are 5.05 meters, but each of the 2 span on the shorter sides are thought to equal only 4.5 meters) permit us to suppose that the roofs of those gates were of a simple gable-type construction. The east-west wall (SA 1812) built across the northern edge of the Suzaku-mon platform may be seen as giving a clue to the time when the gate was dismantled. By excavation at the sites of this wall's former foundation stones, it became clear that the wall was built following the end of the gate's use. The fact that it was built only within an area corresponding to the length of the gate's platform indicates that there was at one time thought to de a need to seal up the opening in question. In this regard, it is highly probable that at the time this wall was built, the surrounding wall on the southern side was still in existence. No traces of such a wall built within the gate area were found at the two other gate sites surveyed. It is probably correct to see the year 791 (Enryaku 10) … i. e., the year when the various gates of the Heijō palace were physically removed to be newly set up at the Nagaoka palace … as marking the time when the Heijō palace outer gates were dismantled.

The units of measure used in the Heijō-kyū construction were discussed in The Nara Imperial Palace Site Excavation Report II.

However, the present report contains some further material, including the discovery, through surveys of the gates and surrounding walls, that the shaku used in the earliest stages of the palace construction was equal to 0.295 meters (See Chapter V/1).

The fact that many of the roof tiles were diverted to the Heijō palace from the Fujiwara palace after the latter was abandoned is attested by manufacturing techniques, physical composition, special characteristics in ornamental patterns, size and weight, etc. The fact that the tiles newly manufactured at the time of the Heijō palace constrution showed, in comparison to the Fujiwara-kyū tiles, a tendency to become smaller, is thought to be related to the necessity of producing tiles in large quantities. The transition in the composition of the various tile patterns from the Fujiwara palace types to Heijō palace types is treated from the point of view of typology (See Chapter V/2A).

Nextly, consideration is given to the red pottery (hajiki) unearthed from site SD1900. The pieces unearthed from this drainage ditch are divided into 2 groups. Those in the first group show features common to other hajiki unearthed in the Asuka and Fujiwara regions after the latter half of the 7th century, and it is highly probable that the pottery in question was in common use in agricultural villages of the Yamato basin. Those hajiki in the second group are similar to pieces unearthed from various sites around Lake Biwa in Shiga-ken and in the southern part of Kyoto-fu. Those hajiki in the first group are mainly for use in serving food, while those in the second group are mainly for use in cooking. The uses to which the pottery in the two groups was put may thus be seen as mutually complementary. Given the characteristics of excavated site SD1900, the pottery in question was thrown away during the early stages of the palace construction. The same site SD-1900 produced mokkan on which is inscribed the name of a village, Ōno sato 大野里, which is believed to have disappeared at the time the Heijō palace was built. Further evidence to support the possibility that there existed an agricultural settlement (or settlements) on the same spot before the construction of the Heijō palace may be had in the fact that among the pottery uncovered at SD1900 are pieces with inked characters such as (五十戸家) and (五十家), indicating the existence of rika ("village houses," corresponding to the terminal elements in the structure of local administration prescribed in the ritsuryō codes). Given the fact that the pottery from site SD1900 was discarded immediately prior to the time when the Suzaku-mon was completed, as well as the fact that no earlier pottery is included and the fact that three is a mixture of pottery from different places of manufacture, it was pointed out that it is possible that the pottery in question was used by ekimin (per-

sons carrying out obligatory labor services) from the various provinces (kuni) who had come to work at building the palace. (See Chapter V/2B).

In addition to the above attempts at interpretation, some further considerations are attempted, based on written historical materials, in regard to such matters as supervision of the gates, entry and exit function of the surrounding wall, and punishments administered to persons who climbed over the wall unlawfully (See Chapter V/3).

Chapter VI deals with the models of the Suzaku-mon and the excavated west-facing gates, construction of which is continuing on the basis of excavation survey results. Each of the models in question is built to 1/10 scale. The work of making a reconstruction of the Suzaku- mon also makes use of compartive data from other excavations, and can usefully refer to the examples to be had in buildings which still remain from the Nara period, as well as to the examples to be had in pictorial scrolls which depict the Heian palace in Kyoto. In the present report, the particulars of the Suzaku-mon reconstructed model are described in the following order: a) general form b) pillars c) entabiature (tokyō) d) eaves e) roof f) miscellaneous fixtures g) base platform h) the roofed adjoining wall. The two west-facing gates in question are thought to have been of identical scale and construction.

They are thought to have had many points in common with the still extant Tegaimon 転害門 at Tōdaiji.

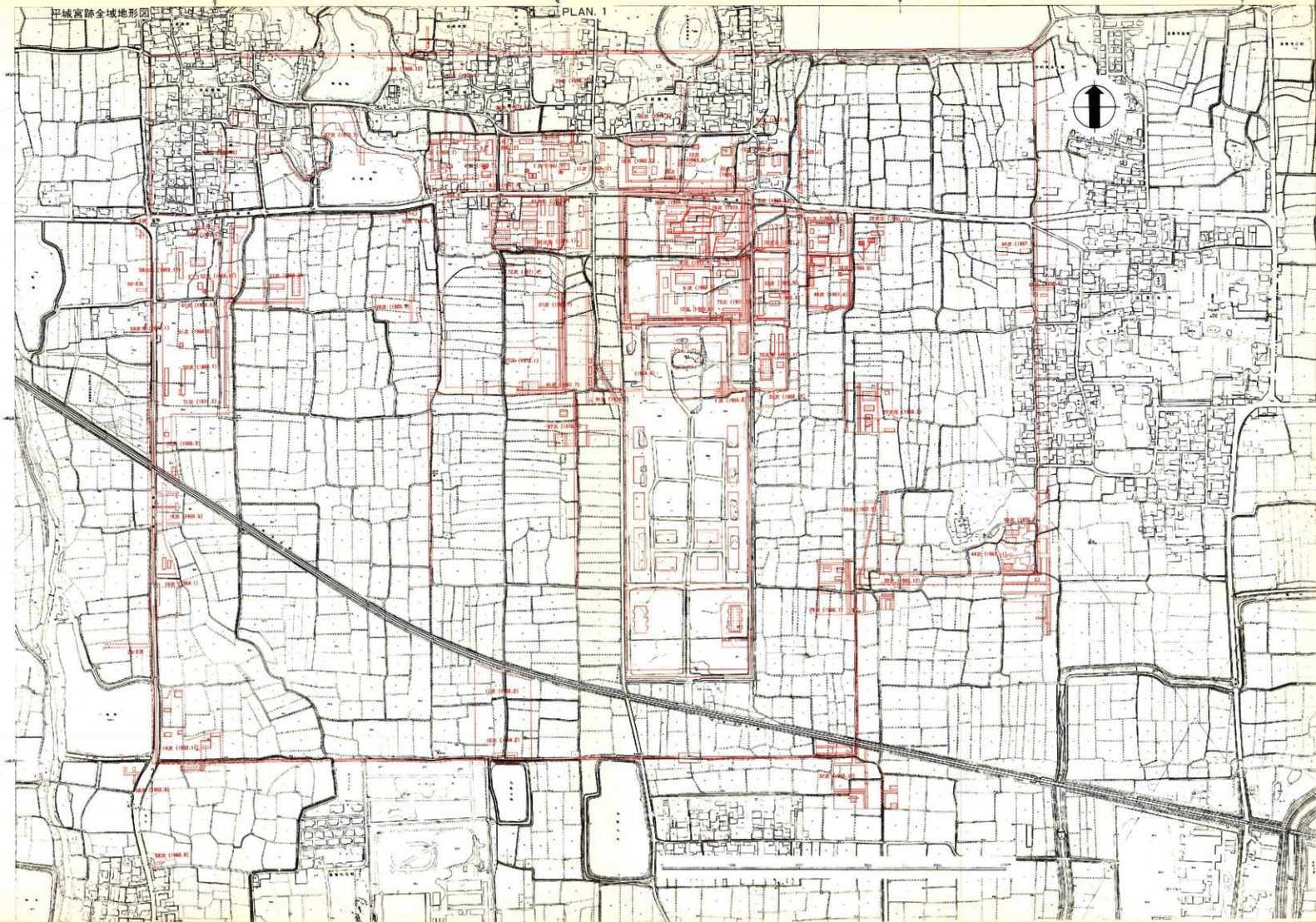
図 面・図 版

凡 例

1. 遺構には遺跡ごとに一連番号を付し
その前にSA:築地・塀・囲，SB:建物，
SD:溝・堀，SE:井戸，SF:道路，
SH:広場，SK:土坑，SX:その他，
などの分類記号を標記する。
2. 遺構の寸法数字はm単位である。

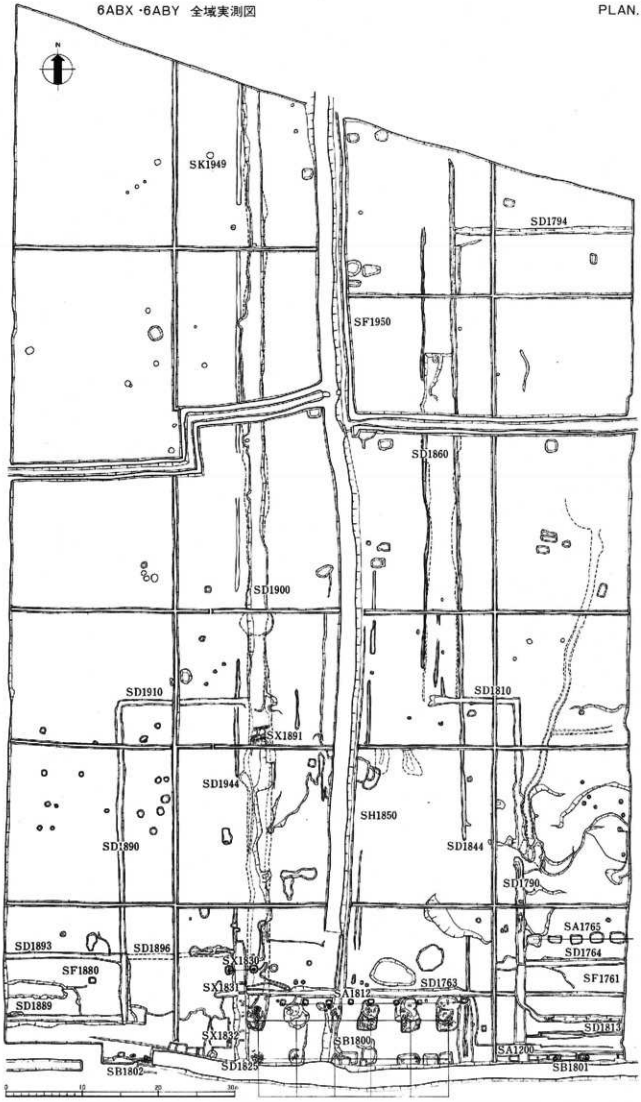
平城宮跡全域地形図

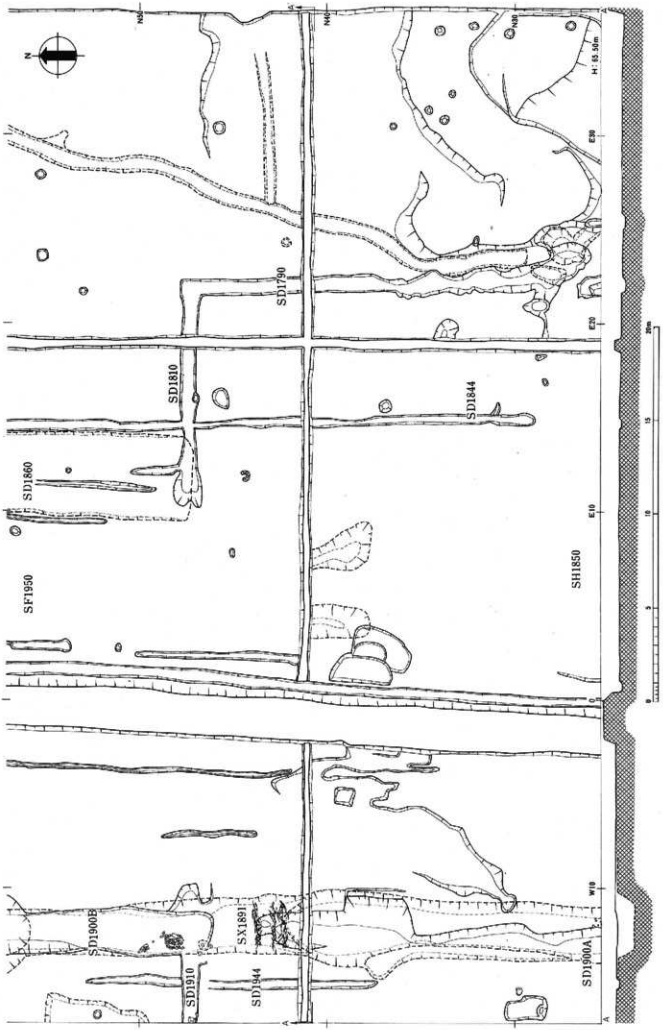
PLAN. 1



6ABX -6ABY 全域実測図

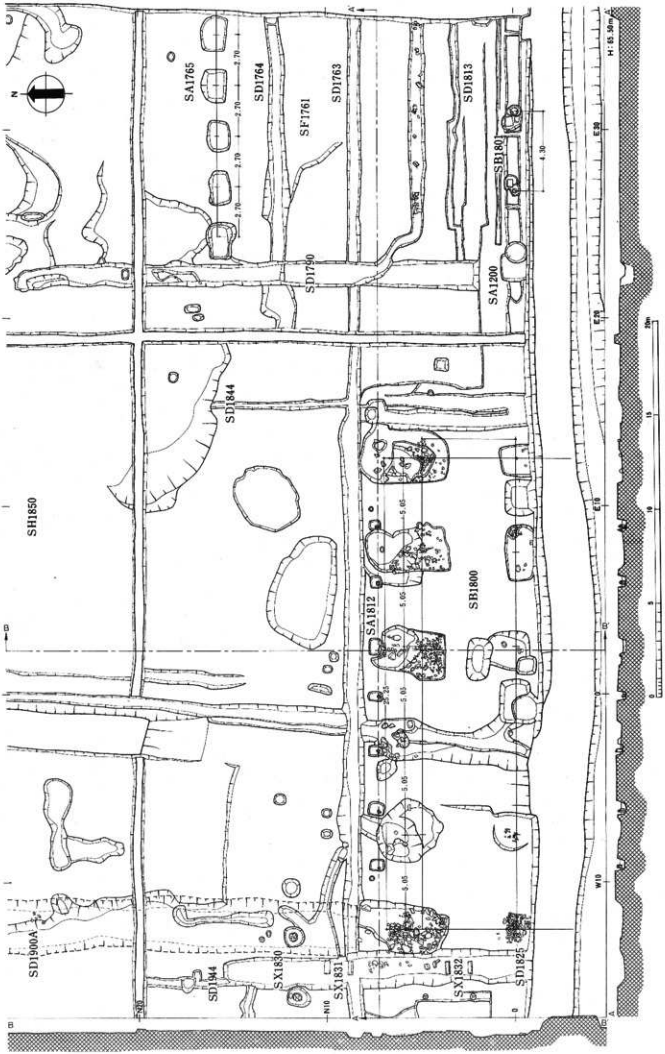
PLAN. 2

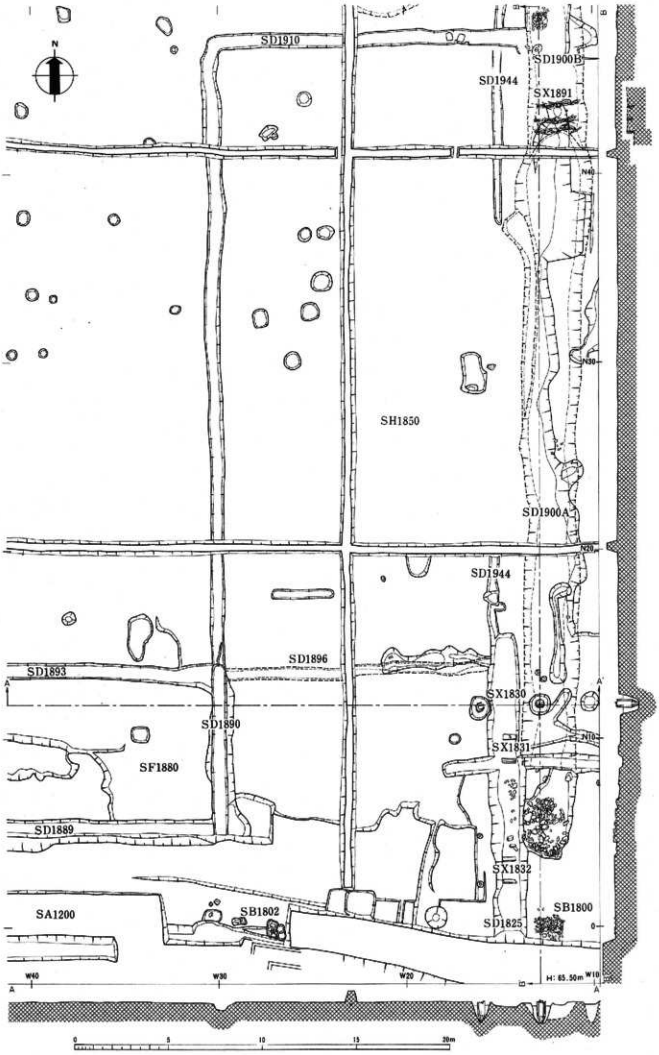



N
SD1790
SD1810
SD1660
SF1950
SD1844
SH1850
SD1900B
SD1910
SD1844
SX1891
SD1900A
N30
N40
E20
E10
W10
H: 59.50m
0
5
10
15
20m

6ABY —G·E 南半部中央実測図

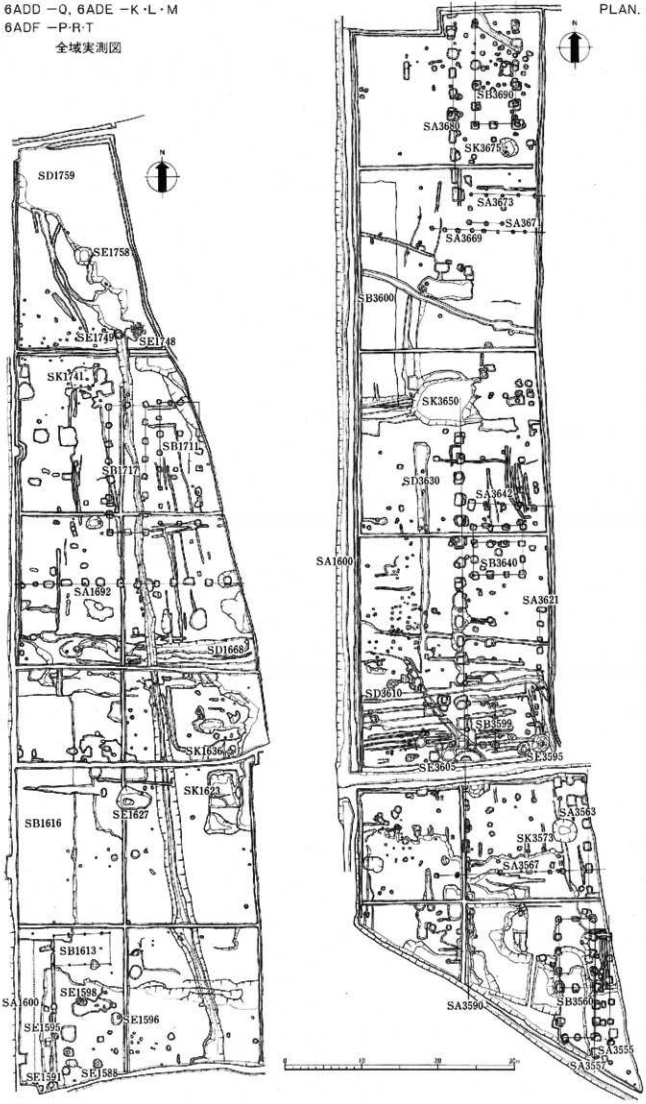
PLAN. 4




N
SD1910
SD1900B
SD1944
SX1891
SH1850
SD1900A
SD1944
SD1896
SD1893
SX1830
SD1890
SX1831
SF1880
SD1889
SX1832
SA1200
SB1802
SB1800
SD1825
W40
W30
W20
W10
H: 85.50m
0
5
10
15
20m

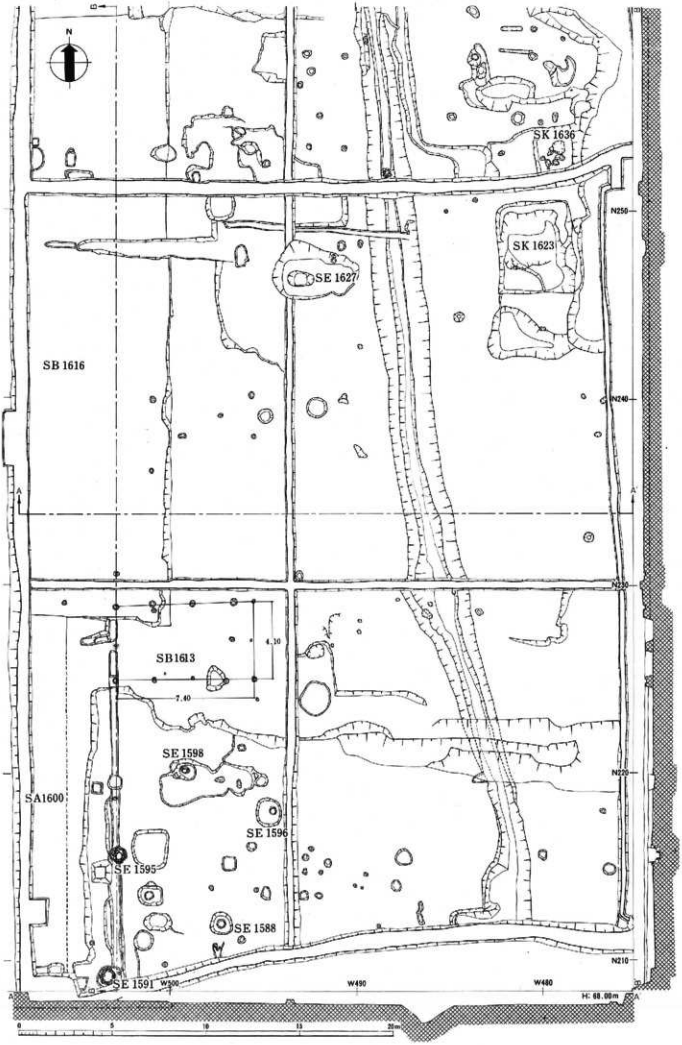
6ADD −Q, 6ADE −K·L·M
6ADF −P·R·T
全域実測図

PLAN. 6



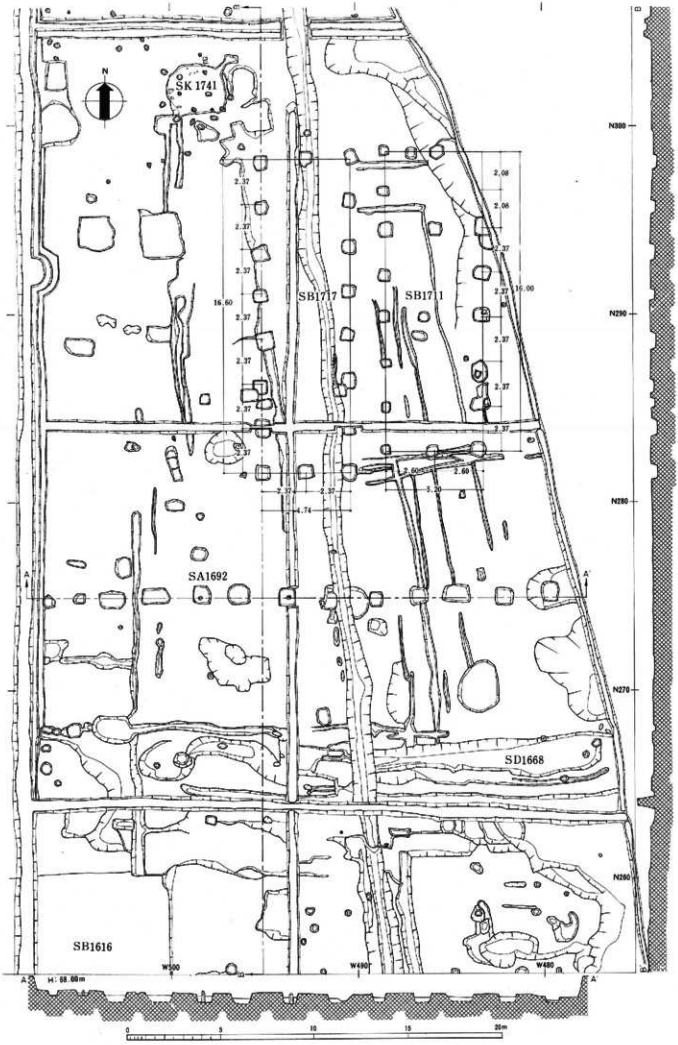
6ADF －R.T 全域実測図

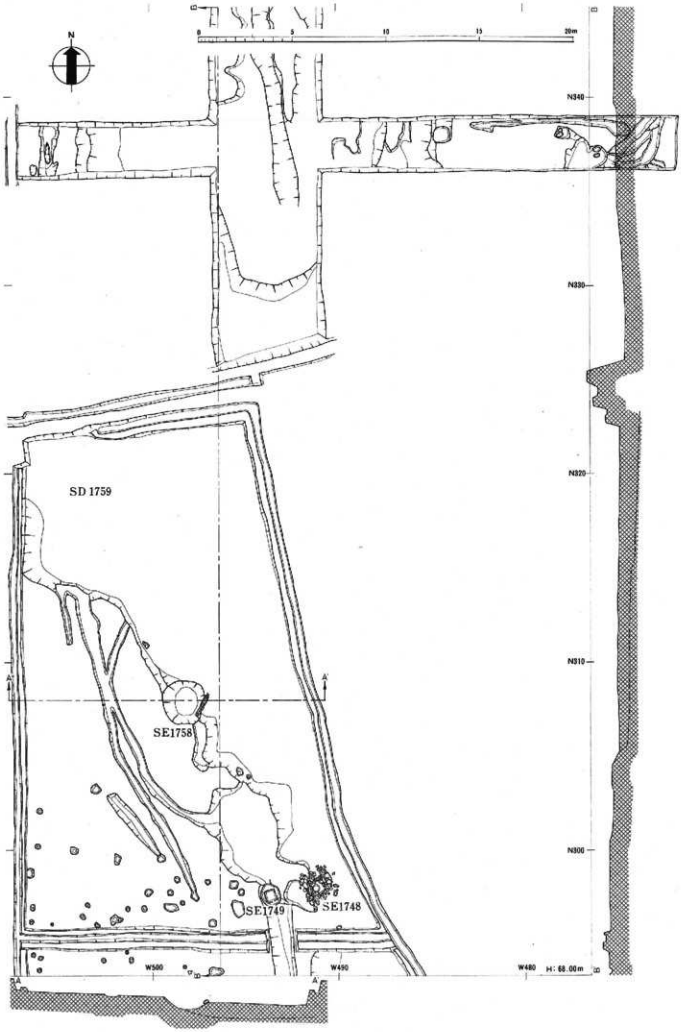
PLAN. 7



6ADF －P 南半実測図

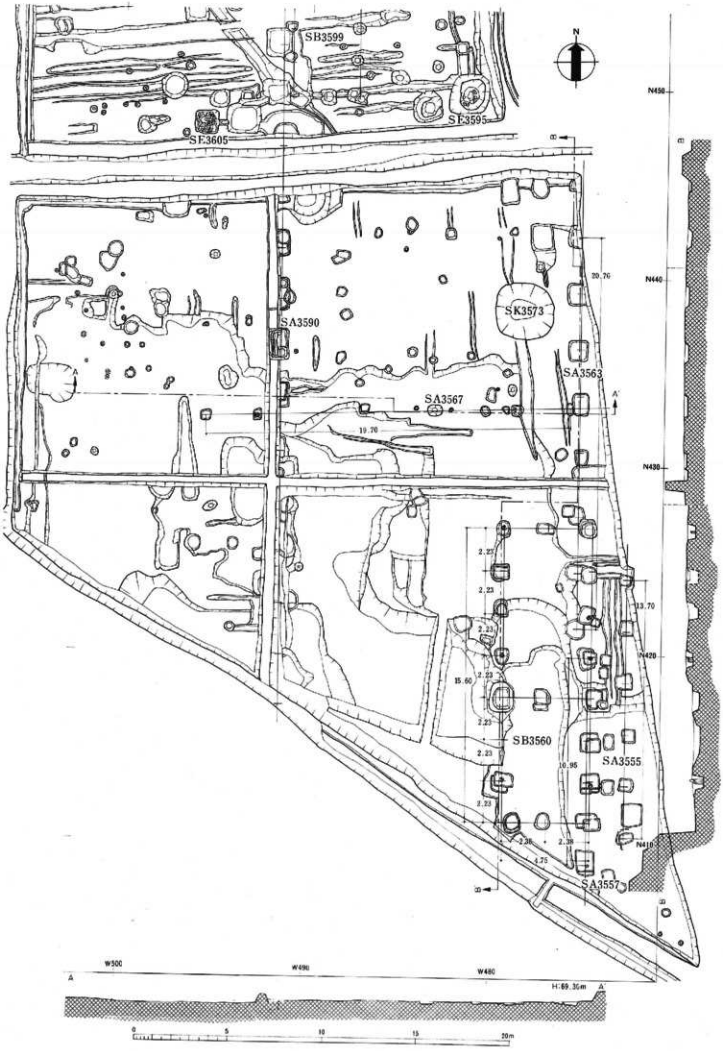
PLAN. 8

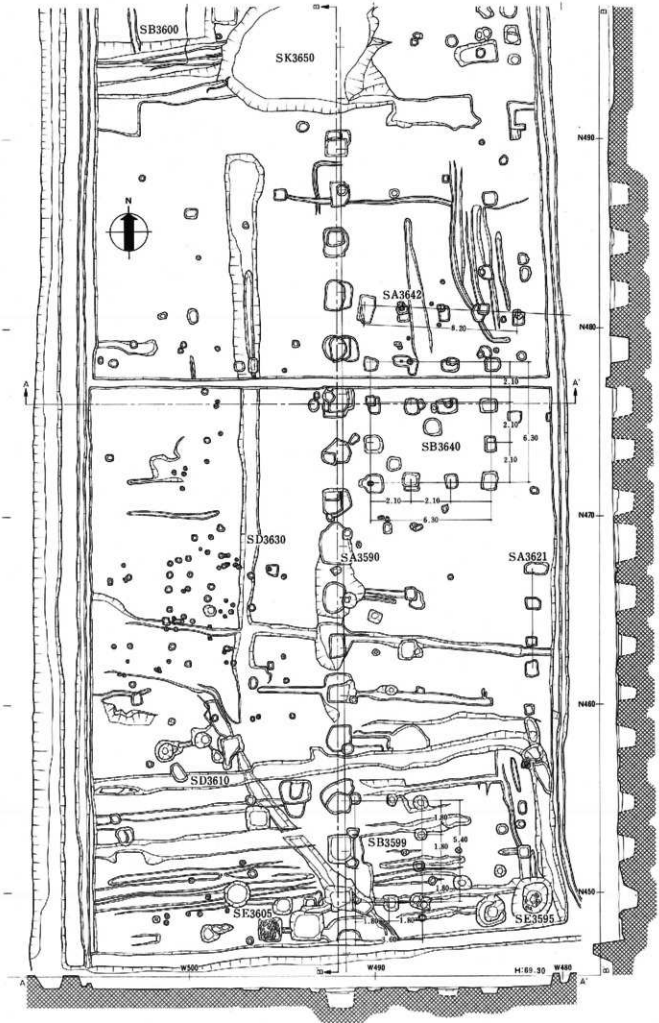


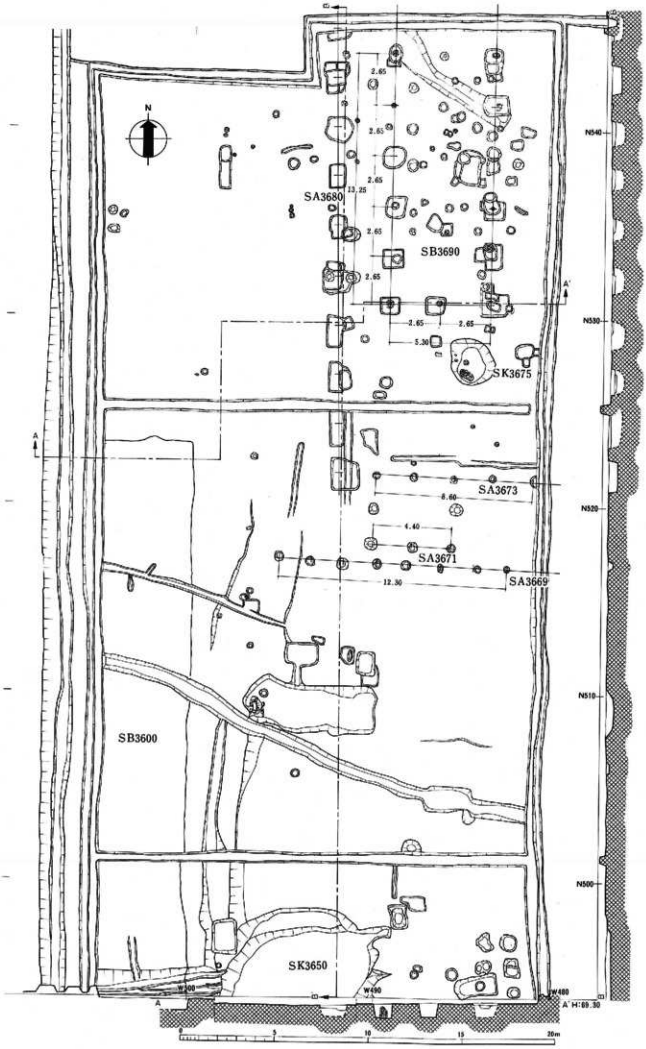

N
0
5
10
15
20m
N340
N330
N320
N310
N300
SD 1759
SE1758
SE1749
SE1748
W500
W490
W480
H: 68.00m

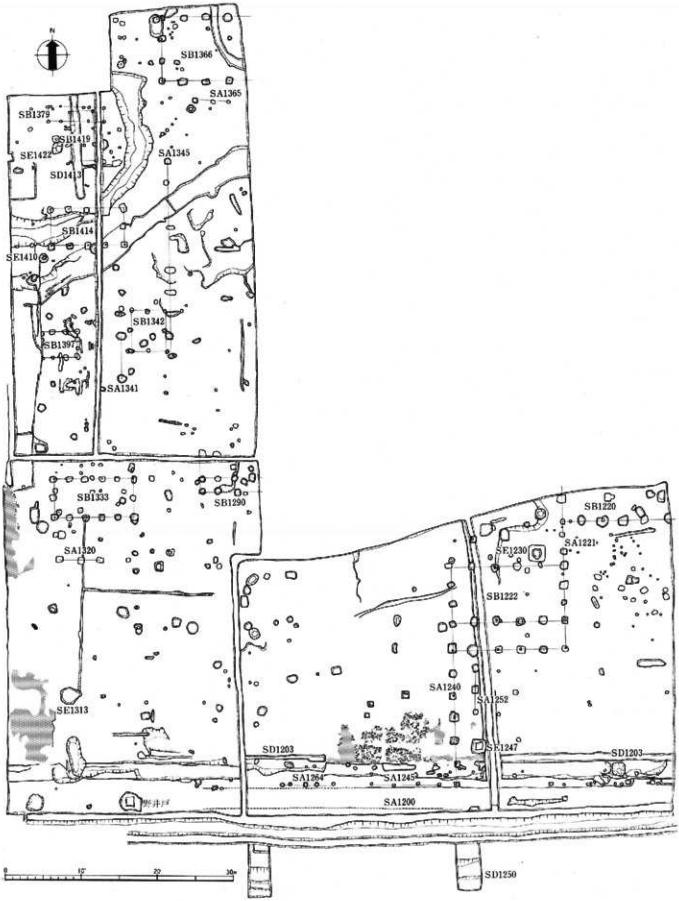
6ADE －K·L 実測図

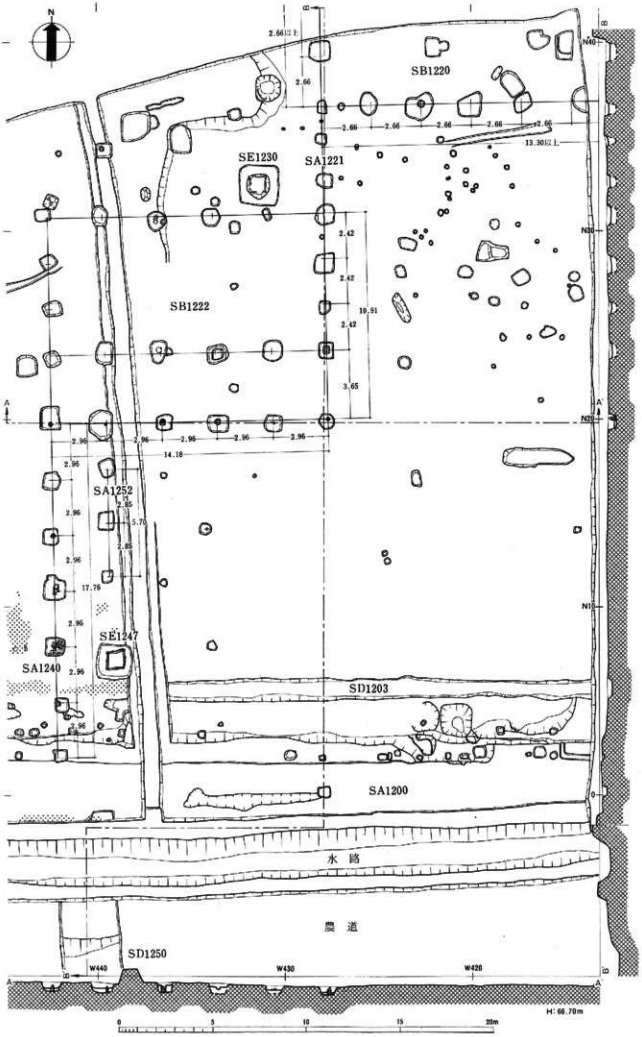
PLAN. 10

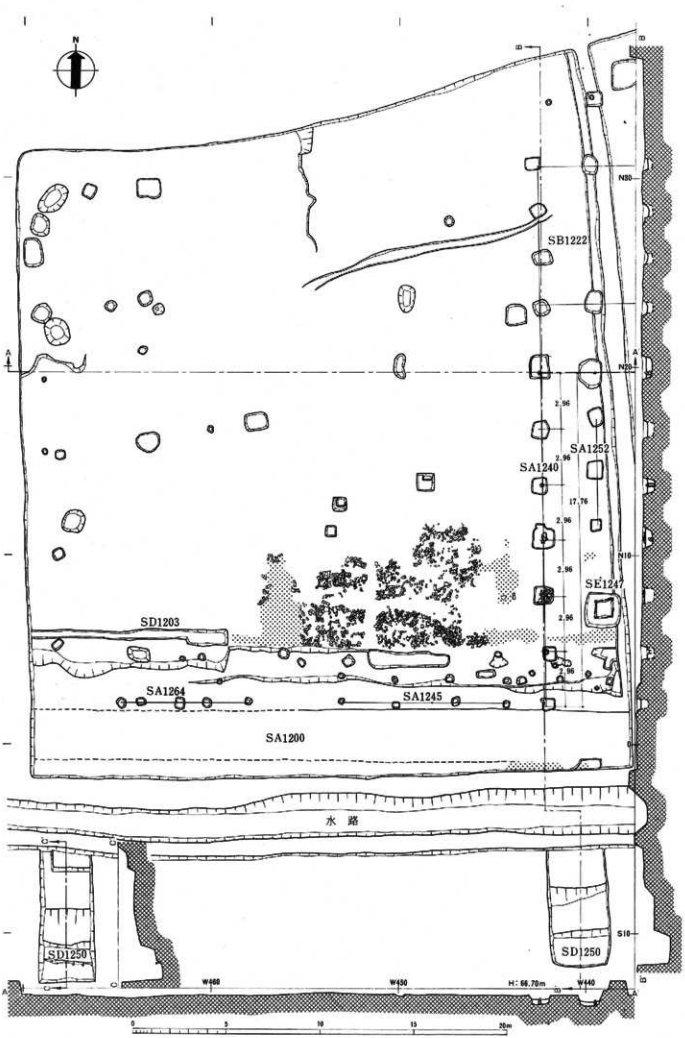


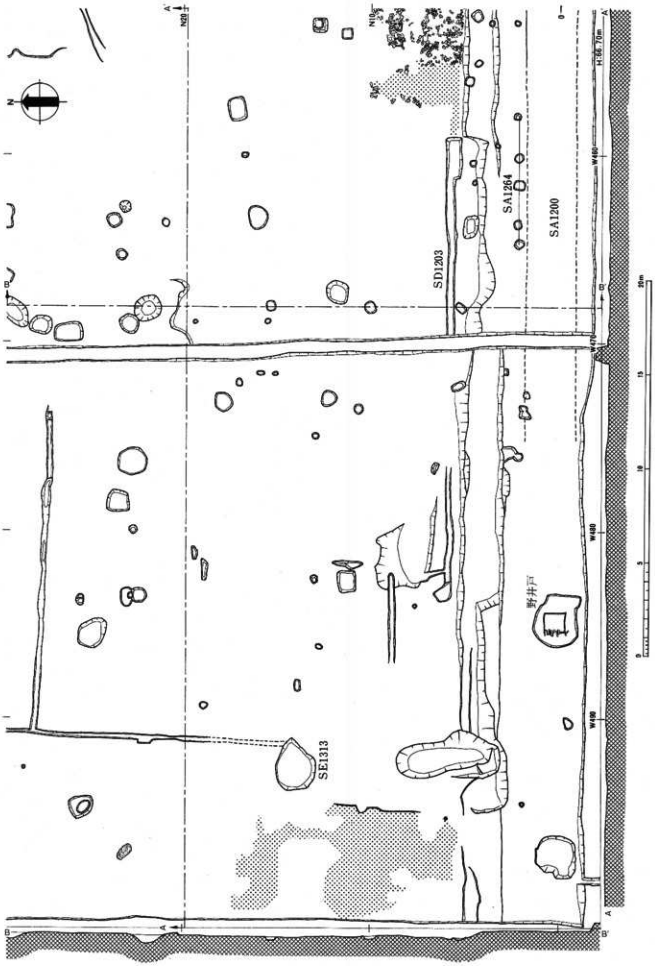

SB3600
SK3650
N
SA3642
8.20
2.10
A
A'
2.10
6.30
SB3640
2.30
2.10
2.10
6.30
SD3630
SA3590
SA3621
SD3610
SB3599
5.40
1.80
SE3605
SE3595
N490
N480
N470
N460
N450
W500
W490
H:69.30
W480
0
5
10
15
20m

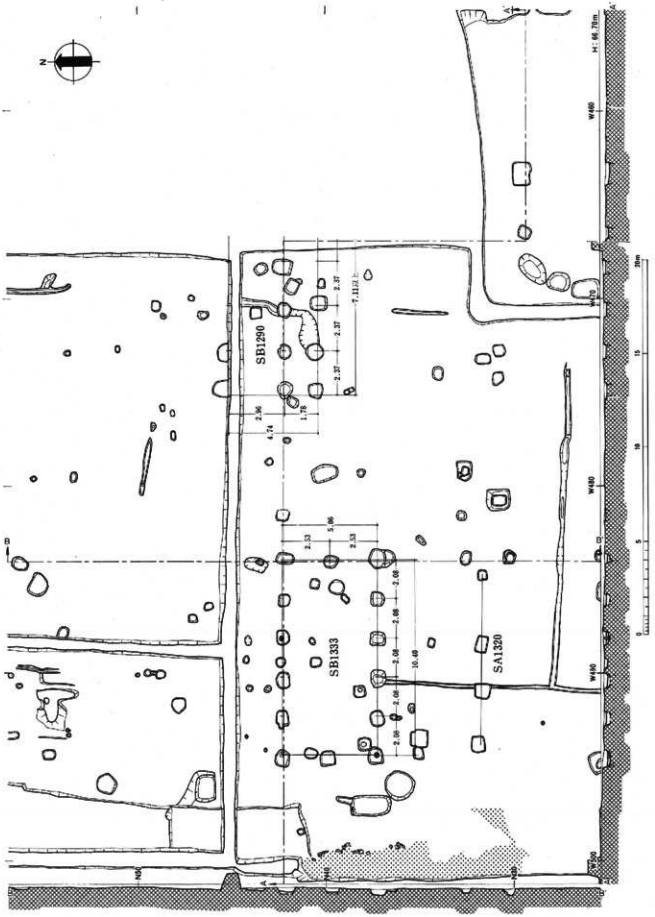

N
SA3680
SB3690
SK3675
SA3673
SA3671
SA3669
SB3600
SK3650
2.65
13.25
5.30
8.60
4.40
12.30
N540
N530
N520
N510
N500
A
A'
W400
W490
H:89.30
0
10
15
20m

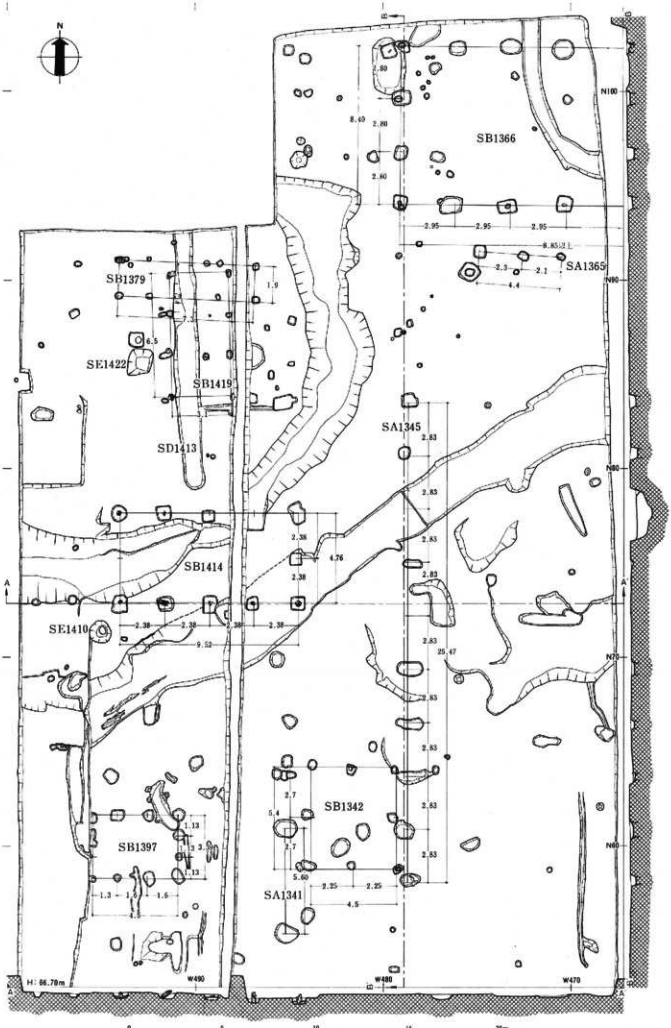

N
SB1366
SA1365
SB1379
SB1419
SE1422
SD1413
SA1345
SB1414
SE1410
SB1342
SB1397
SA1341
SB1333
SB1290
SA1320
SE1313
SD1203
SA1264
SA1243
SA1200
SA1240
SA1252
SE1247
SE1230
SA1221
SB1220
SB1222
SD1203
SD1250
0
10
20
30m


N
SB1220
SE1230
SA1221
SB1222
SA1252
SE1247
SA1240
SD1203
SA1200
水 路
農 道
SD1250
W440
W430
W420
N440
N430
N420
N410
H: 66.70m
0
5
10
15
20m


N
SB1222
SA1252
SA1240
SE1247
SD1203
SA1264
SA1245
SA1200
水 路
SD1250
SD1250
N30
N20
N10
S10
W460
W450
H: 68.70m
W440
2.96
17.76
0
5
10
15
20m

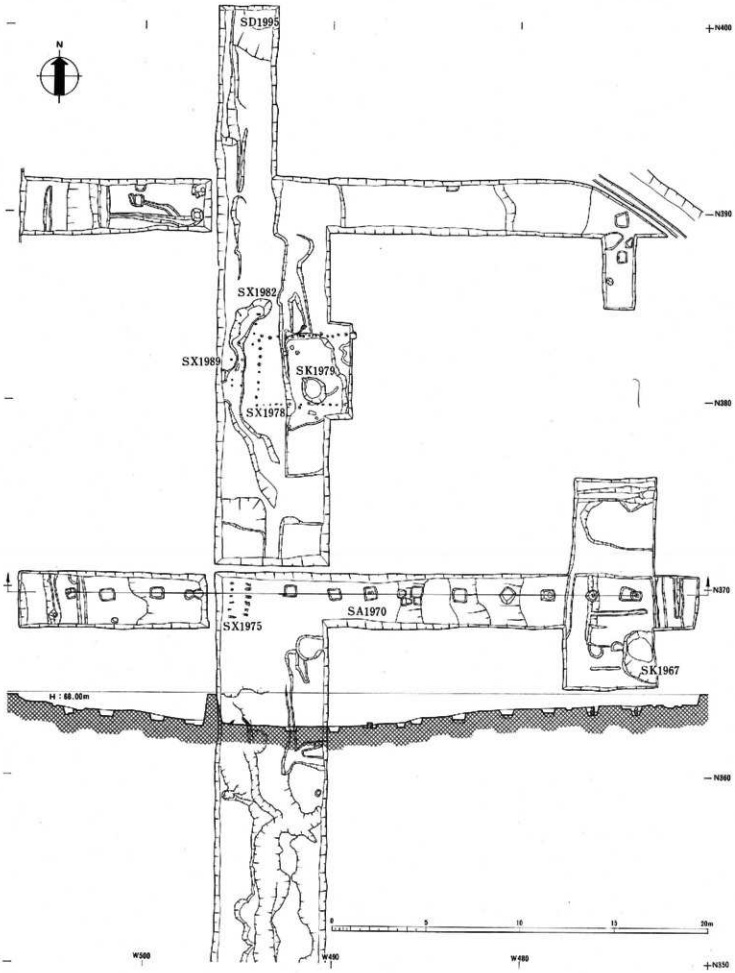

SD1203
SA1204
SA1200
SE1313
野井戸
N10°E
N20°E
W100
W160
H:36.10m
A
A'
B
B'
N
0
5
10
15
20m

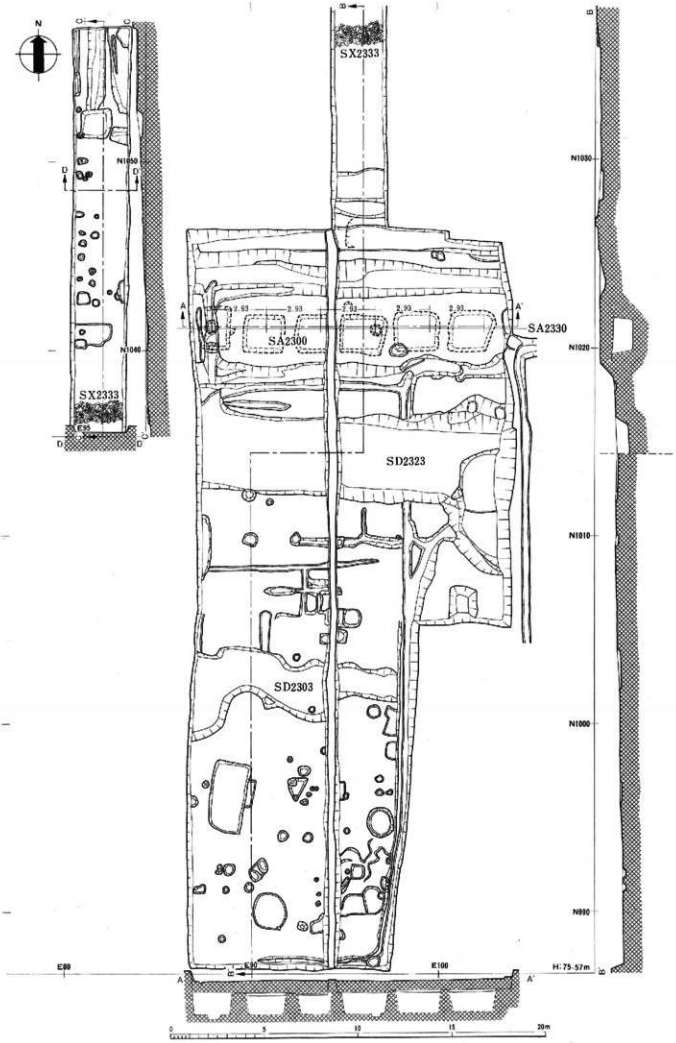

SB1290
SB1333
SA1320
W480
W470
W460
W450
H=66.78m
2.37
2.37
2.37
7.11
2.36
1.78
4.74
2.33
5.06
2.33
2.00
2.00
2.00
2.00
2.00
10.40
20m
15
10
5
0

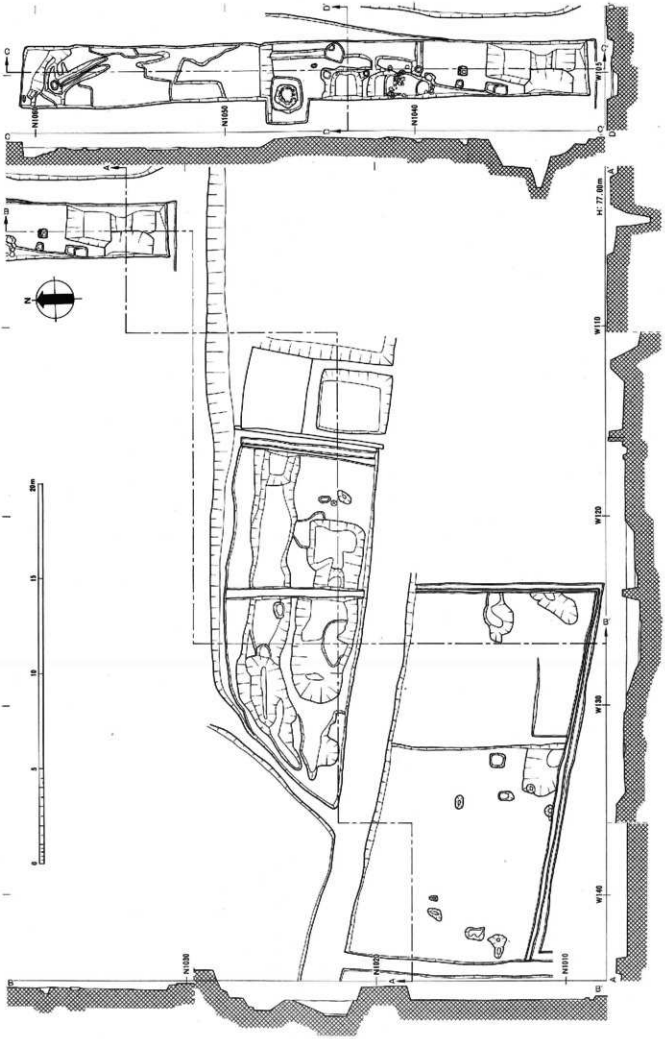

N
SB1366
SA1365
SB1379
SE1422
SB1419
SD1413
SA1345
SB1414
SE1410
SB1397
SB1342
SA1341
N100
N90
N80
N70
N60
W490
W480
W470
H: 86.70m
0
5
10
15
20m

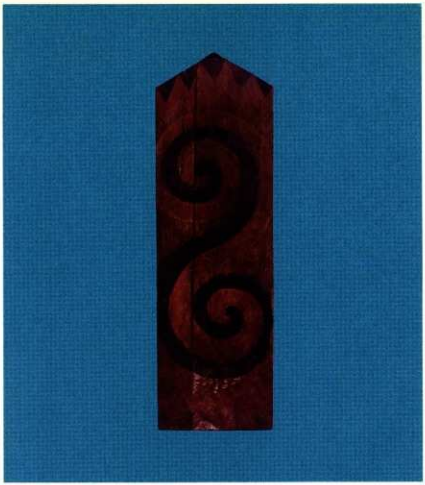
6ADE －P, 6ADF －J·K 全域実測図

PLAN. 19

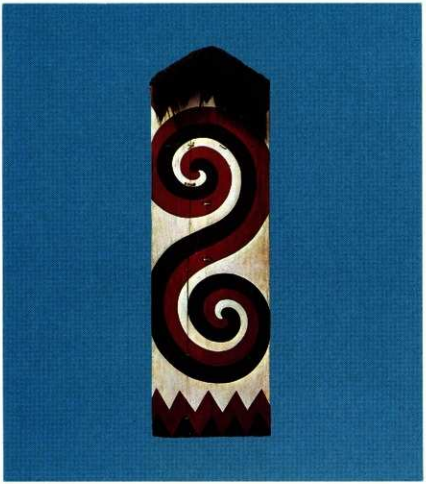



N
SX2333
SA2300
SA2330
SD2323
SD2303
N1050
N1040
N1030
N1020
N1010
N1000
N990
E80
E90
E100
H:75.57m
A
A'
D
D'
0
5
10
15
20m


N1080
N1060
N1040
W105
W110
W120
W130
W140
H=77.00m
N1030
N1020
N1010
N
5m



隼人楯



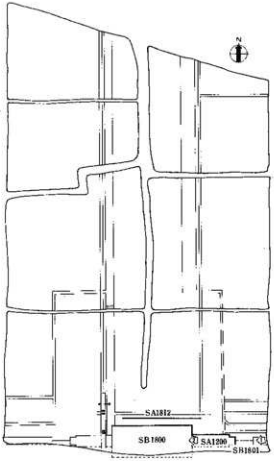
隼人楯模型

平城天皇陵
不入池
佐紀池
佐紀東池
西坊大路
東坊大路
二条大路
朱雀大路
昭和23年9月撮影
73000B

平城天皇陵
小池
佐紀池
西一坊大路
東一坊大路
二条大路
朱雀大路
昭和23年9月撮影
1:7300ca

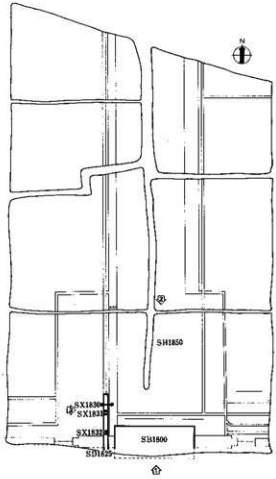
N

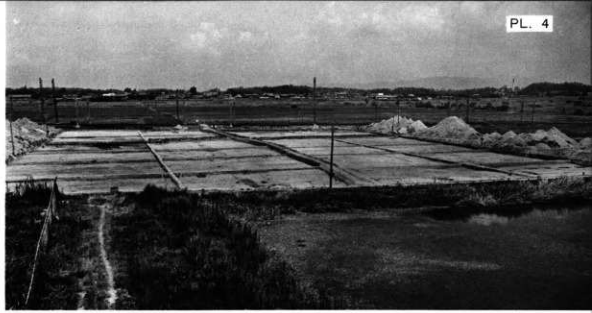
全　景　南から


N
SA1812
SB1800
SA1200
SB1801

1．南面大垣SA1200・朱雀門SB1800・東脇門SB1801　東から

2．朱雀門SB1800・塀SA1812　東から


N
SH1850
SX1830
SX1831
SX1832
SH1800
SD1625

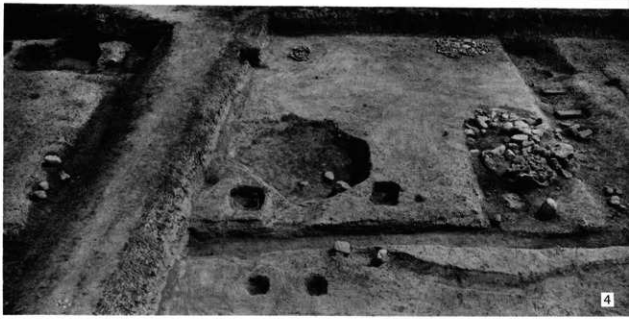


1　全　景
南から

2．朱雀門SB1800
・広場SH1850
北から

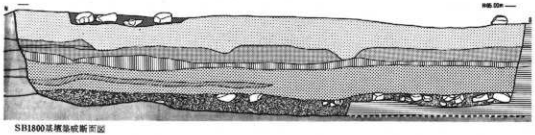
3．溝SD1825に
伴うSX1830
・1831・1832
西から

N
SA1812
SH1800



朱雀門SB1800
礎石跡北列・堺
SA1812柱掘形
北から

礎石跡　1．東第1　2．東第2　3．東第3・第4　4．東第5・第6
柱掘形　1．東第1・第2　2．東第3・第4　3．東第4・第5・第6　4．東第8・第9

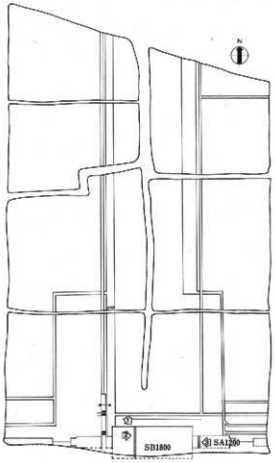


SB1800基礎築成断面図

SA1200築成断面図

SB1800
- 強き方解土
- 褐色含礫土
- 淡黄黒色土
- 淡黄褐色砂礫質土
- 明黄黒色砂礫質土
- 淡黄黒色粘土質土（含パミス）
- 玉石混淡黄黒色土
- 地山

SA1200
- 合礫黒褐色土
- 黒灰色粘土
- 黒褐色粘土
- 石礫褐色土
- 灰色粘土まじり黒灰色土
- 灰色粘土
- 地山



6ABY-E区

1．朱雀門SB1800
礎石跡と掘込み
地業　西北から

2．朱雀門SB1800
掘込み地業と
版築　西から

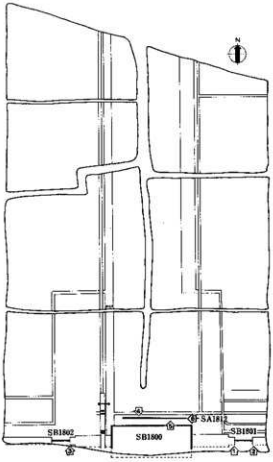
3．南面大垣SA
1200掘込み地
業と版築　東から

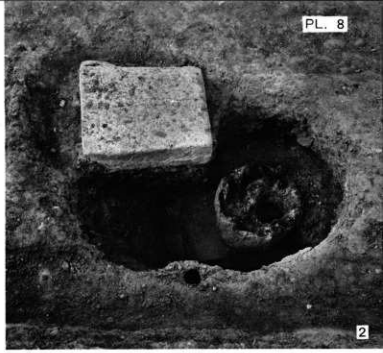
N
SD1M2
SD1M1

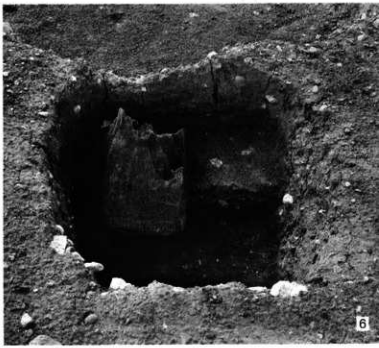
1．東脇門SB1801
北から

2．同上　西北から

3．西脇門SB1802
北から


N
SA1812
SB1800
SB1801
SB1802





1．東築門SB1801西柱根　南から

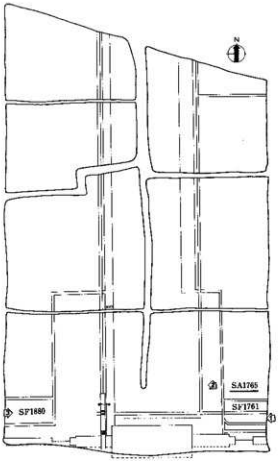
2．同上東柱根　南から

3．西築門SB1802東柱根　南から

4．朱雀門SB1800東第4 北廂石跡・塀SA1812東第7 柱掘形　北から

5．塀SA1812東第4 柱掘形と柱根　南から

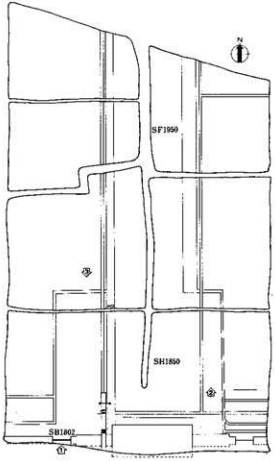
6．同東第3 柱掘形と柱根　東から

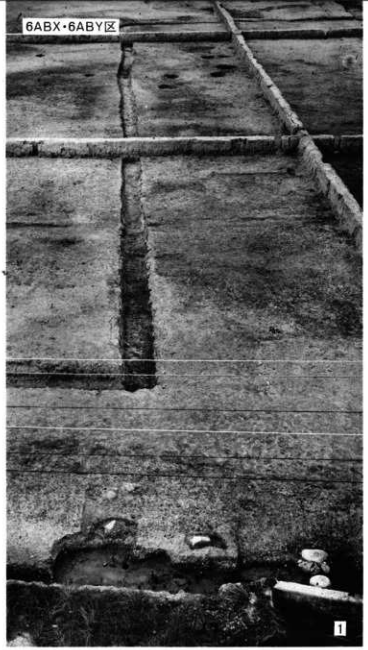

N
SA1765
SA1761
SA1880

1．朱雀門東の宮内道路SF1761・塀SA1765 東から

2．同 上 西北から

3．朱雀門西の宮内道路SF1880 西から


N
SF1950
SH1850
SB1802

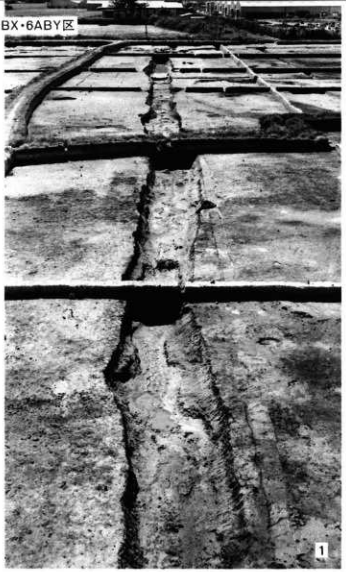


1．西脇門SB1802・広場SH1850西辺部　南から

2．広場SH1850東辺部・宮内道路SF1950　南から

3．広場SH1850西半部　北から

N
SD1900A
SD1900B
SX189

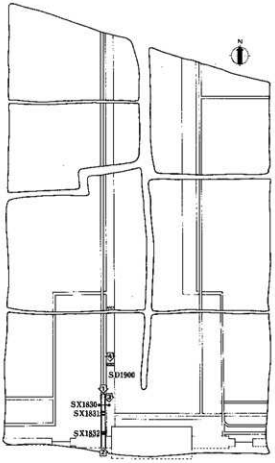


1．溝SD1900A　北から

2．溝SD1900B　北から

3．堰SX1891　東から

4．同　上　西北から


N
SJ11900
SX1830
SX1831
SX1832

1．溝SD1825に伴う
SX1830・1831
・1832　北から

2．同　上　南から

3．SX1830東柱根・
溝SD1900土層
北から

4．溝SD1900土層
北から

N
SB 616
SA 100

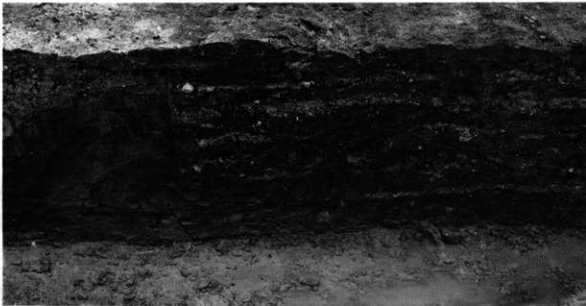
1．R・T地区全景　東北から

2．西面大垣SA1600・玉手門SB1616　南から

N
SA1602
SB1616

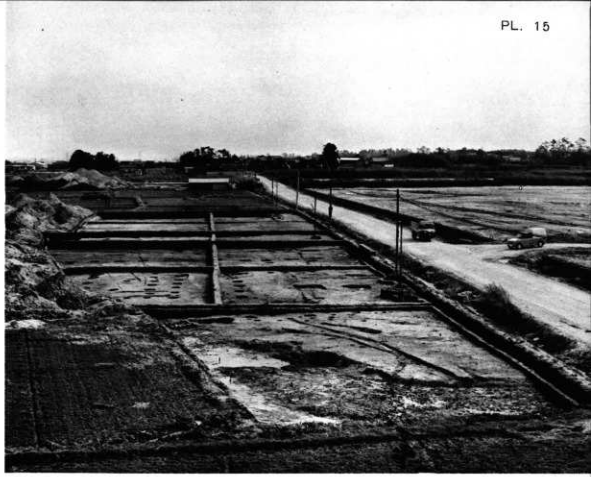
1．玉手門SB1616
東西塀SA1692
北から

2．玉手門SB1616
掘込み地業と版築　東北から



3．同上細部
北から

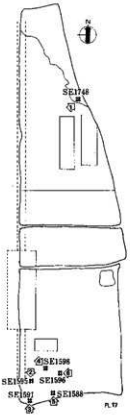
SB1717
SB1711
SA1692

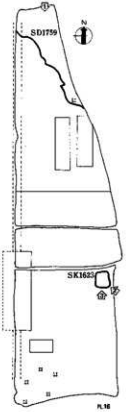


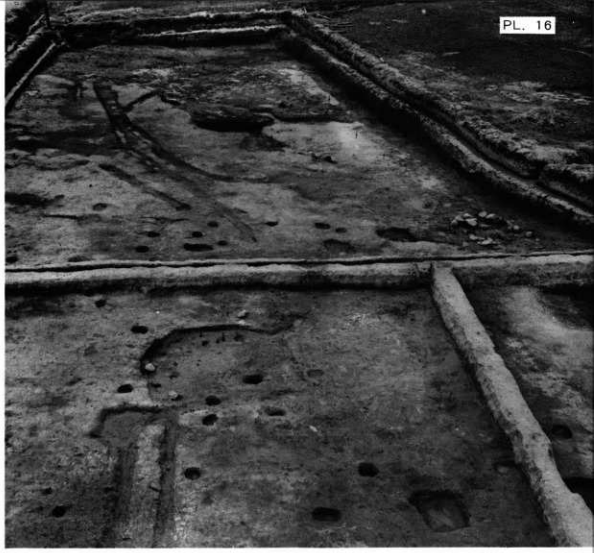
1．全　景　北から

2．建物SB1711・1717，堀SA 1692　西北から

3．建物SB1711・1717　西南から


N
SE1748
SE1598
SE1595
SE1596
SE1597
SE1588
FL 17

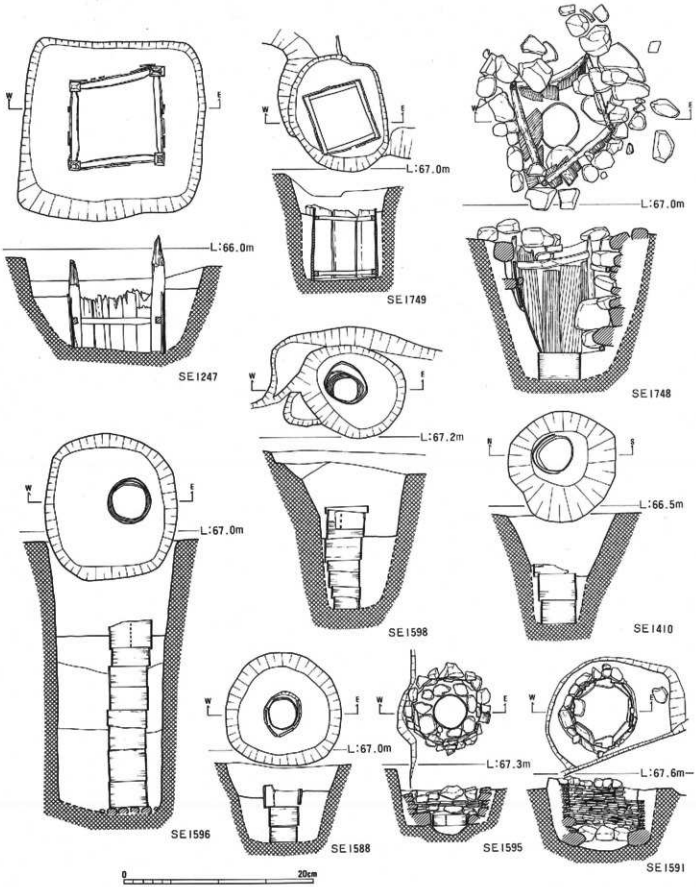

N
SD1759
SK1625
FL 16

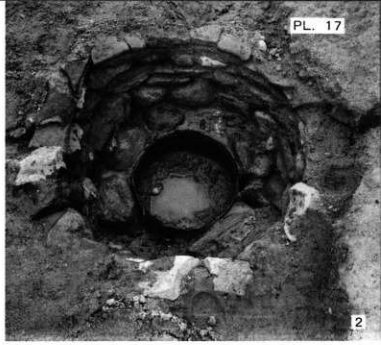


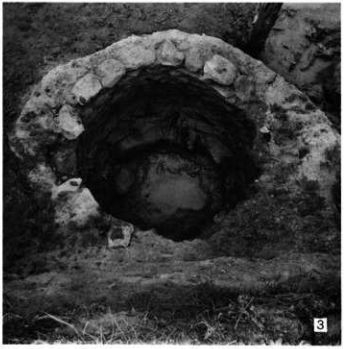
1．溝SD1759
北から

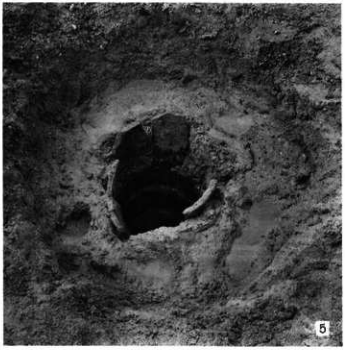
2．土壙SK1623の埋土
堆積状況　東南から

3．土壙SK1623　南から


W
E
L:66.0m
SE1247
W
E
L:67.0m
SE1749
W
E
L:67.0m
SE1748
W
E
L:67.2m
SE1598
W
S
L:66.5m
SE1410
W
E
L:67.0m
SE1596
W
E
L:67.0m
SE1588
W
E
L:67.3m
SE1595
W
E
L:67.6m
SE1591
0
20cm







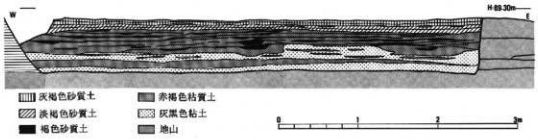
1．井戸SE1748　西南から
2．井戸SE1595　北から
3．井戸SE1591　南から
4．井戸SE1598　西北から
5．井戸SE1588　南から
6．井戸SE1596　東から

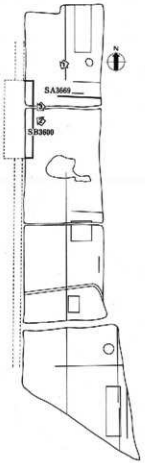
SA3680
SA3600
SA3590
N

1．佐伯門SB3600　南から

2．佐伯門SB3600，塀SA3590・3680　東北から

SB3600基壇築成断面図





1．佐伯門SB3600
塀SA3669
東北から

2．佐伯門SB3600
基壇掘込み地業
と版築　東南から

3．周上部
東北から

SA3680
SK3600
SK3650
SH3640
SA3590

1．佐伯門SB3600
塀SA3590・3680
北から

2．同　上　南から

3．塀SA3590
建物SB3640
土壙SK3650
西北から

SB3690
SA3680
N
SB3640
SA3590
SB3589

1．塀SA3680
建物SB3690
南から

2．塀SA3590
建物SB3640
西から

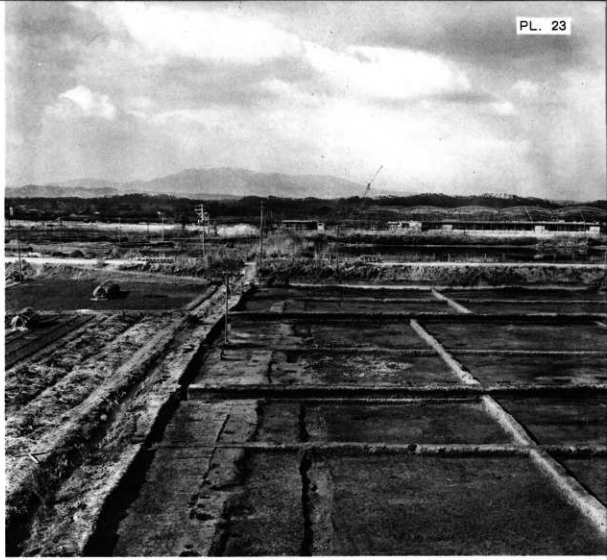
3．塀SA3590
建物SB3599
北から

N
SA3563
SK3572
SD1759
SA3590
SB3560
SA3558
SA3557

1．堀SA3563・3590
旧河床SD1759
土壙SK3573
南から

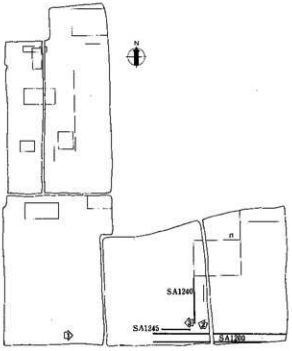
2．同　上　北から

3．堀SA3555・3557
3563，建物SB3560
西北から



1．宮西南隅
東から

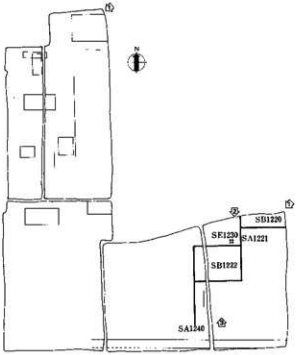
2．宮南辺部
西から


N
SA1246
SA1245
SA1250

1．南面大垣SA1200
西から

2．大垣SA1200北側
瓦散布状況
塀SA1240・1245
東南から

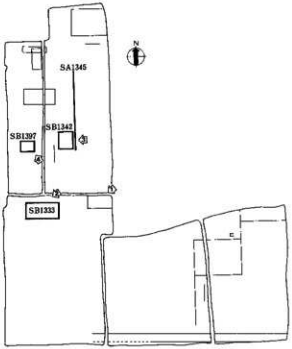
3．大垣SA1200北側
瓦散布状況
東から


N
SB1220
SE1239
SA1221
SB1222
SA1240

1．全景　東北から

2．堀SA1221・1240，建物SB1220 ・1222，井戸SE1230上部　北から

3．堀SA1221・1240，建物SB1222，井戸SE1230上部　南から


N
SA1345
SB1342
SB1307
SB1333

1．宮西南隅
東北から

2．建物SB1333
東北から

3．塀SA1345，建物SB1342　東から

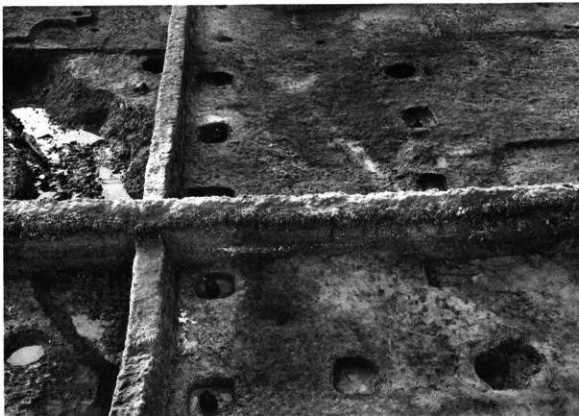
4．建物SB1397　東南から

N
SB1414

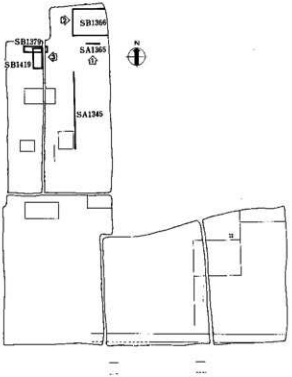
6ADH-J・K・L区

1．全景　西南から

2．全景　北から



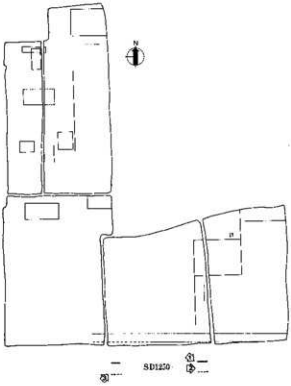
3．建物SB1414
東から


SB1266
SB1270
SB1419
SA1365
SA1345
N

1．堀SA1345・1365
建物SB1366　南から

2．建物SB1366
西から

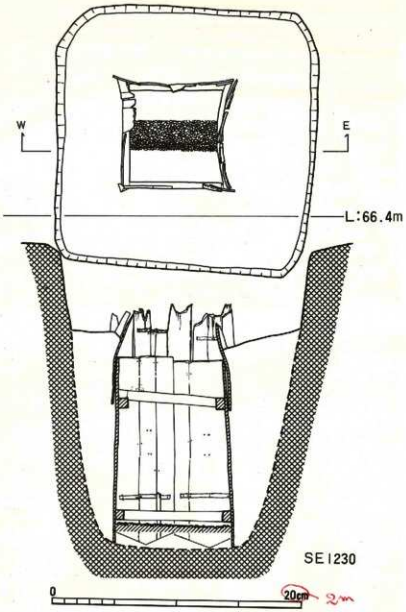
3．建物SB1379・1419
東から

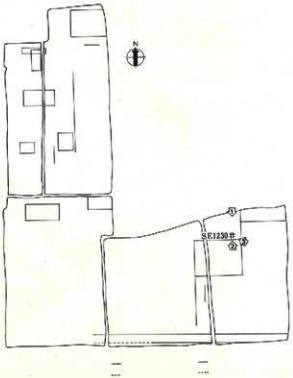

N
SD1250

1．南面外堀SD1250
（東トレンチ）
西北から

2．同　上　西から

3．南面外堀SD1250
（西トレンチ）
西南から

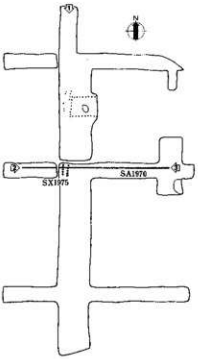

W
E
L:66.4m
SE1230
0
20cm
2m


N
SE1230

1．井戸SE1230
上部検出状況
北から

2．井戸SE1230
東南から

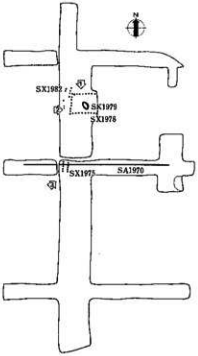
3．同　上　東南から


N
SX1975
SA1976

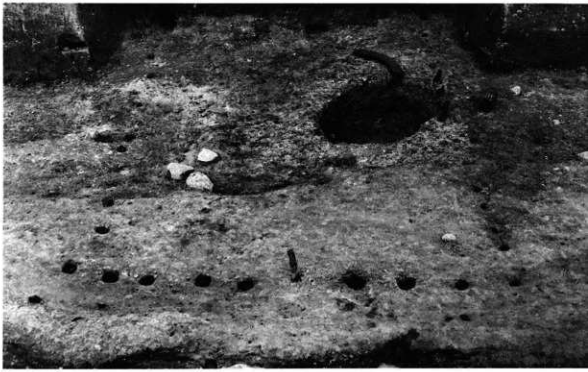
1．南北トレンチ全景
北から

2．塀SA1970
西から

3．塀SA1970
暗渠SD1975
東から


N
SX1982
SK1979
SX1978
SX1975
SA1970

1．方形施設SX1978
土壙SK1979
暗渠SX1982
北から



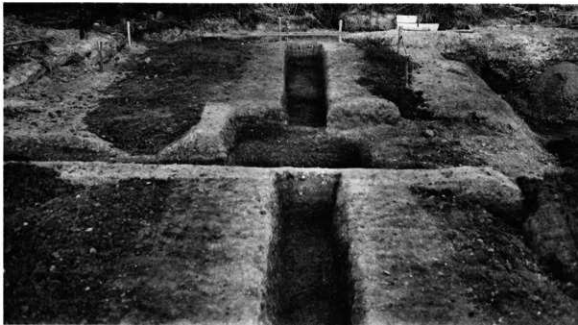
2．方形施設SX1978
土壙SK1979
西から

3．堀SA1970
暗渠SX1975
南西から

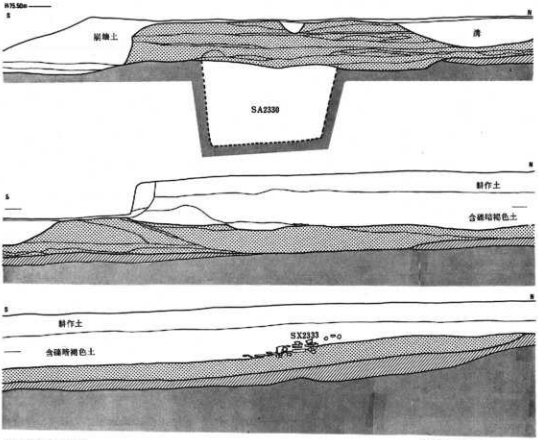
SA2000
SA2330

1．6ABA区北半
6ABN区全景
西南から

2．北面大垣SA2300
西から

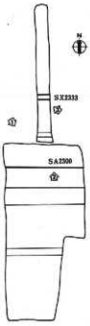


3．北面大垣SA2300
・2330　西から



SA2300築成断面図

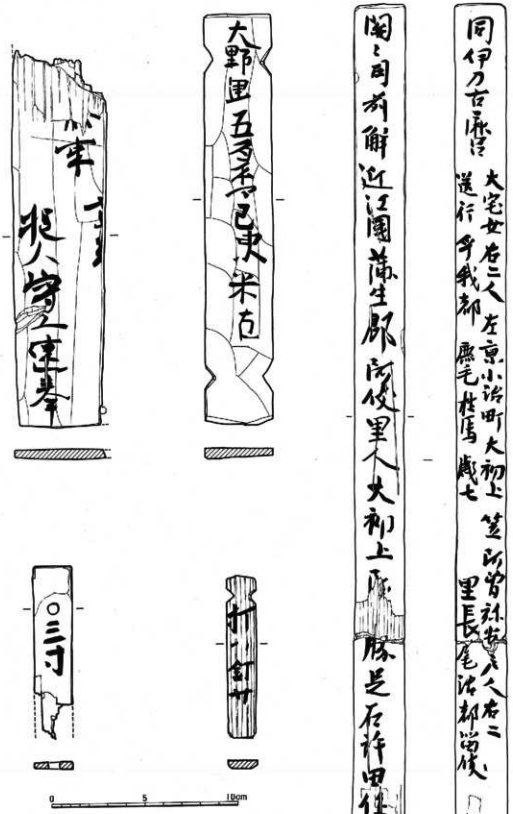
SA2300築成土
暗褐色砂質土（旧地表）
地山



1．6ABA区全景　西北から

2．北面大垣SA2300
瓦敷き施設SX2333
南から

3．瓦敷き施設SX2333
東南から



1:2.5

1:1.5 1927

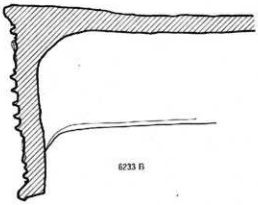
1:1 1928

1942

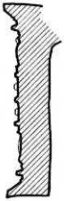
1936

1:1

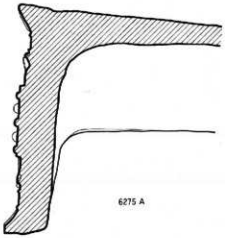
1:2.5 1926



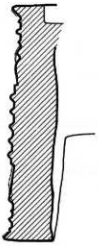
6233 B



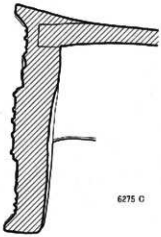
6233 A



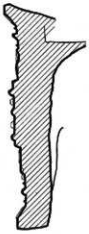
6275 A



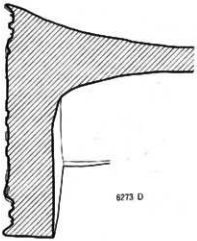
6275 I



6275 C



6275 B



6273 D

6273 E

1 6233-A

2 6233-B

4 6273-E

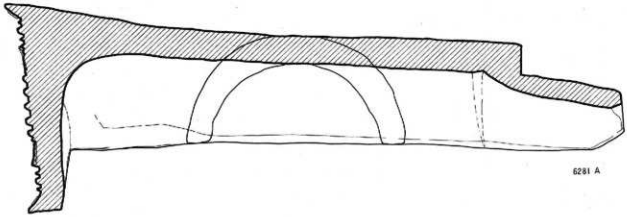
3 6273-D

7 6275-C

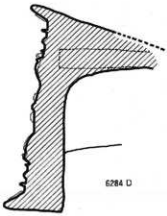
5 6275-A

8 6275-I'

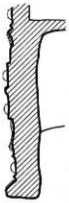
6 6275-B



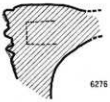
6281 A



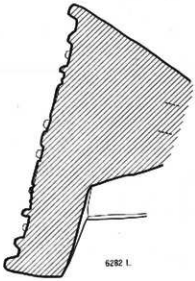
6284 D



6279 B

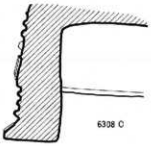


6276



6282 I.

6278 A



6308 C

13 6281-Ab

12 6281-Aa

11 6279-B

10 6278-A

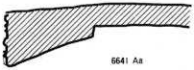
9 6276

15 6284-D

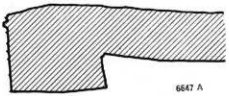
16 6308-C

14 6282-L

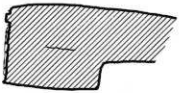
6641 Ab



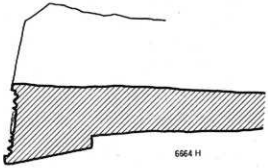
6641 Aa



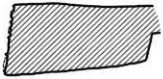
6647 A



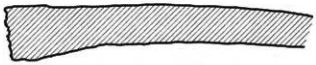
6647 B



6664 H

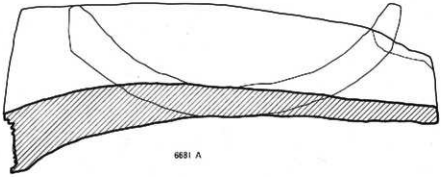


6646 C



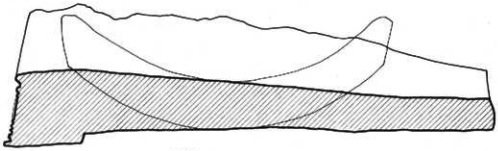
6646 B

6642 A

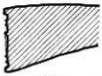


6681 A

6642 B



6664 I



6734 A

2 6641-Ab

1 6641-Aa

4 6642-B

3 6642-A

8 6647-A

7 6647-B

6 6646-C

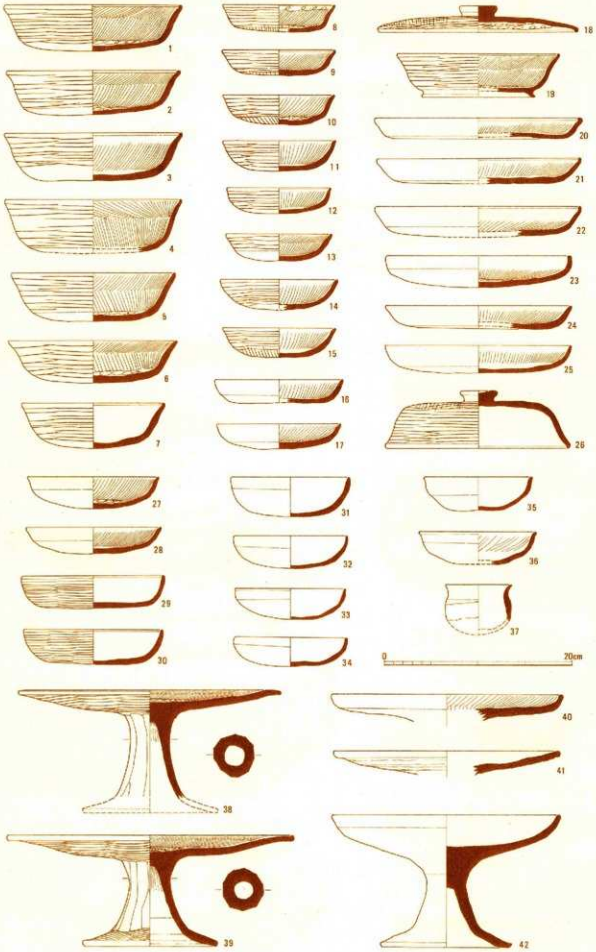
10 6664-I

5 6646-B

9 6664-H

12 6734-A

11 6681-A


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
20cm
38
39
40
41
42

5

2

1

28

27

30

29

10

15

11

17

34

7

33

31

18

26

25

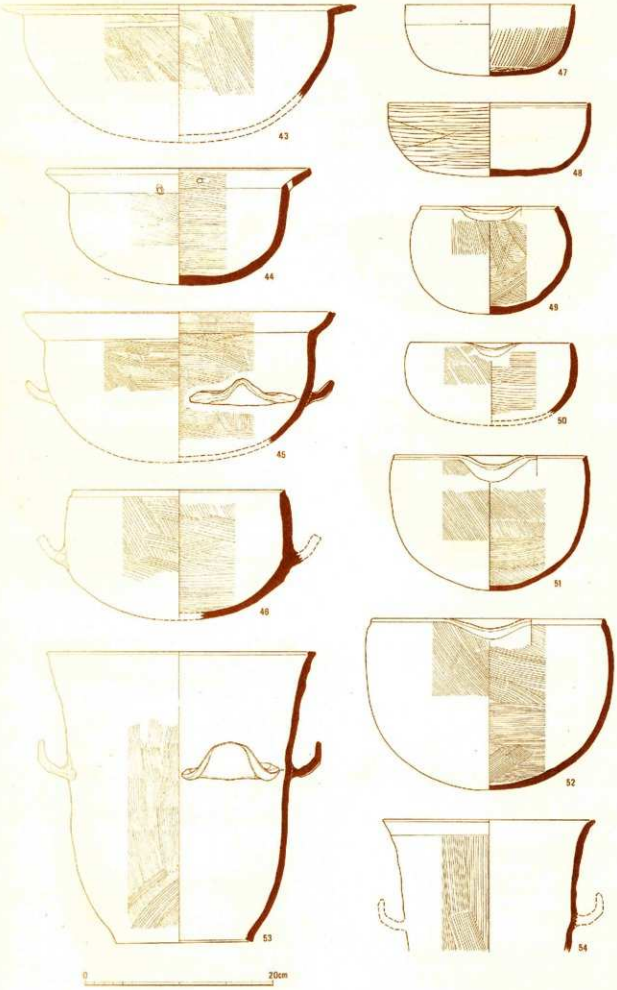
23

21

20

38

1～34：1：2.5
38：1：3


43
44
45
46
53
47
48
49
50
51
52
54
0
20cm

48

44

47

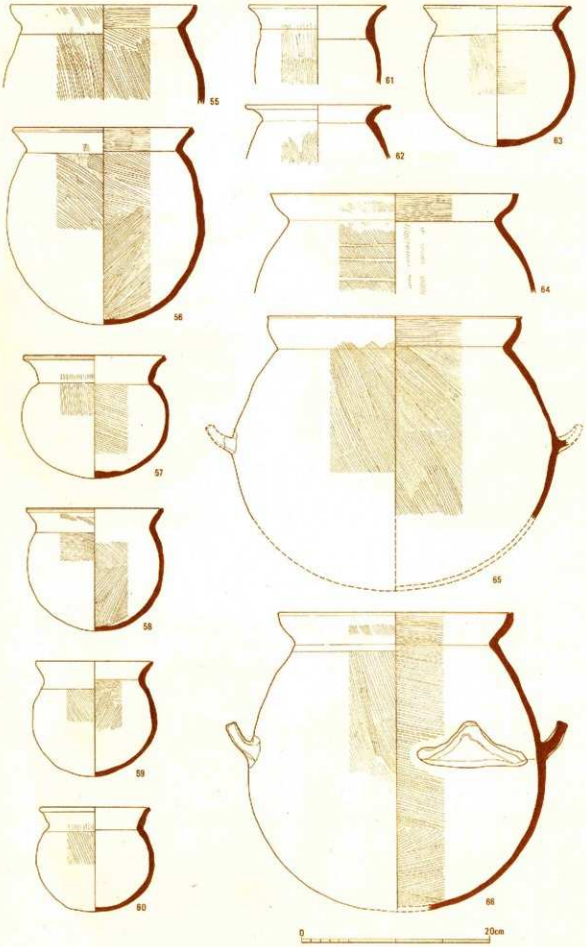
45

49

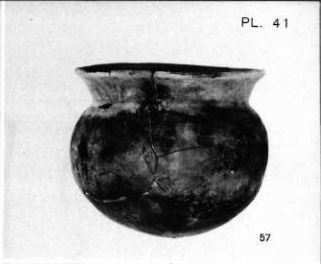
52

53

44・45:1:4
47~49・52・53:1:3


55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0
20cm

60


57

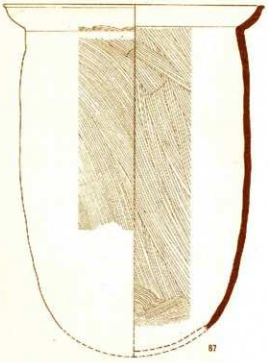
59

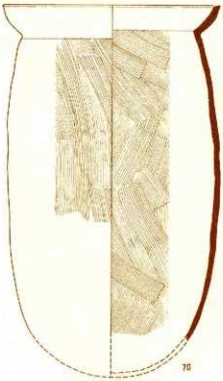
56

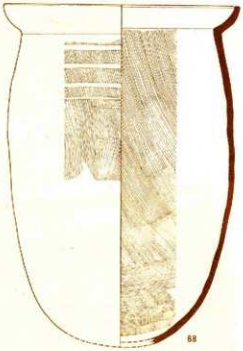
58

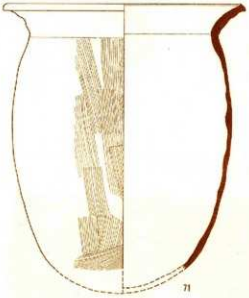
66

1:3

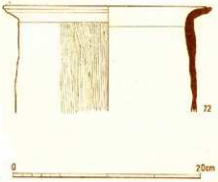

67


70


68


71

69


72
0
20cm

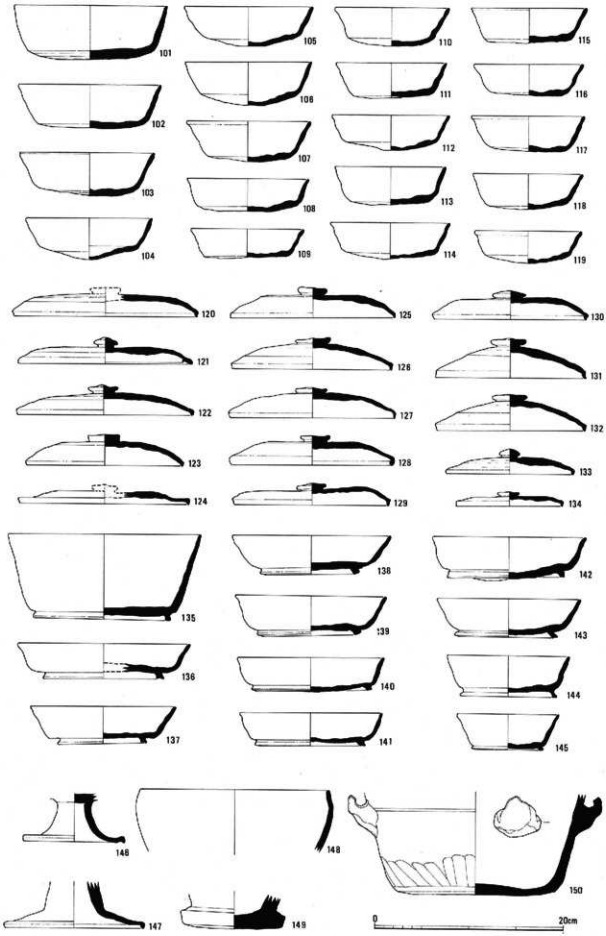
71

68

1:3

69

70


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
0
20cm

134

122

130

123

133

132

101

145

102

143

104

137

108

136

110

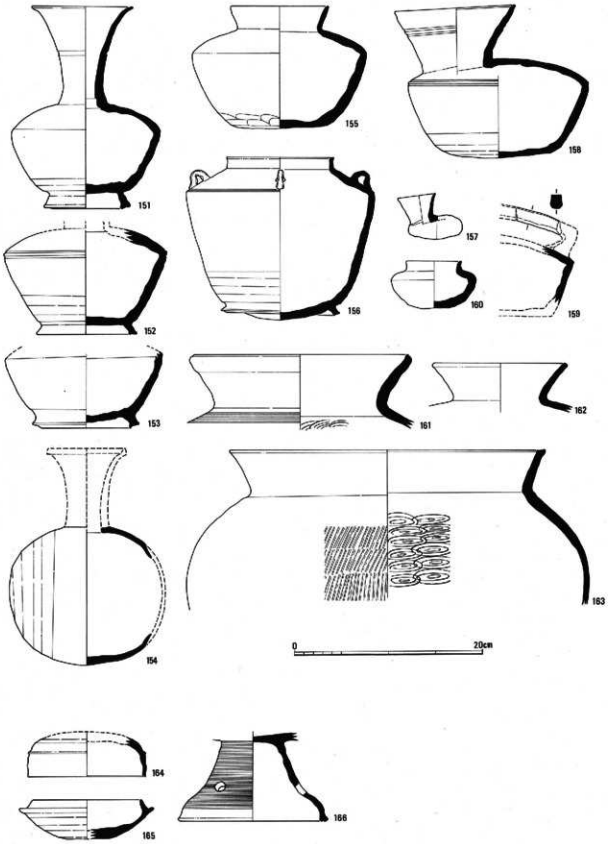
138

119

109

135

1 : 2.5


151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
0
20cm

160

157

155

154

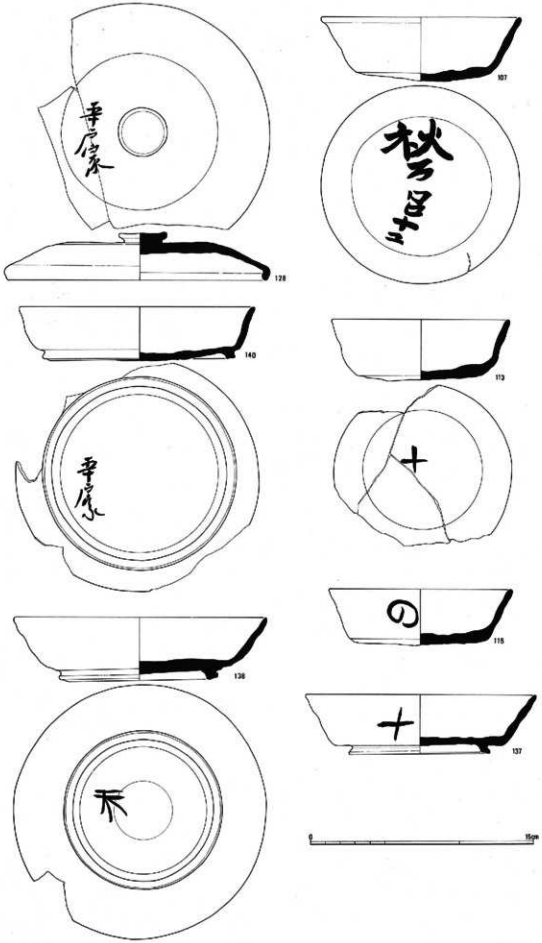
158

151

156

150

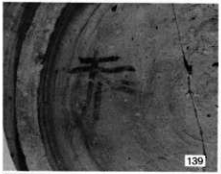
1 : 2.5

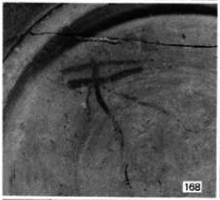

107
128
140
113
115
138
137
0
15cm

141

128

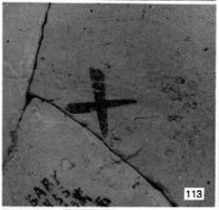
140

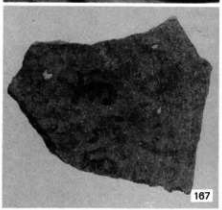

139


168

138

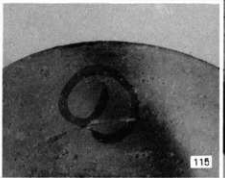
127


113

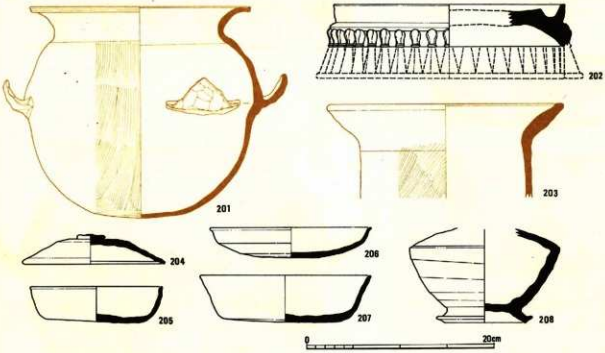

167

107

137


115

1 : 1


201
202
203
204
205
206
207
208
0
20cm

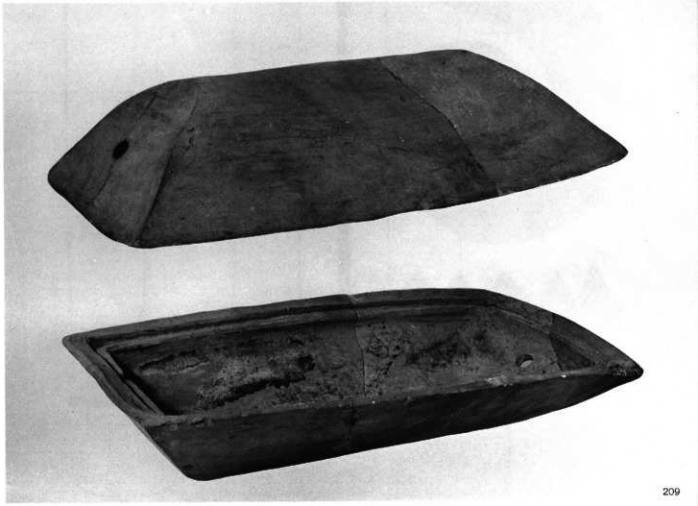
1：2.5
204

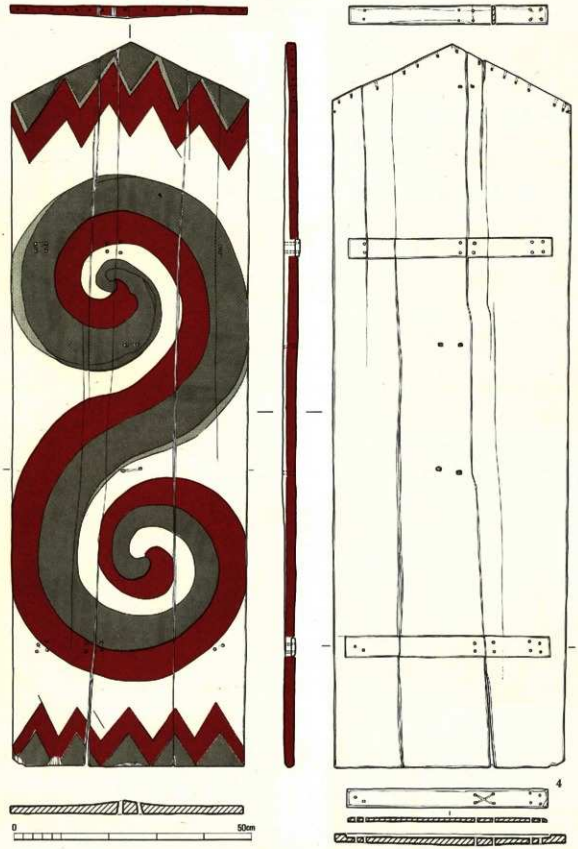
1：1.5
202

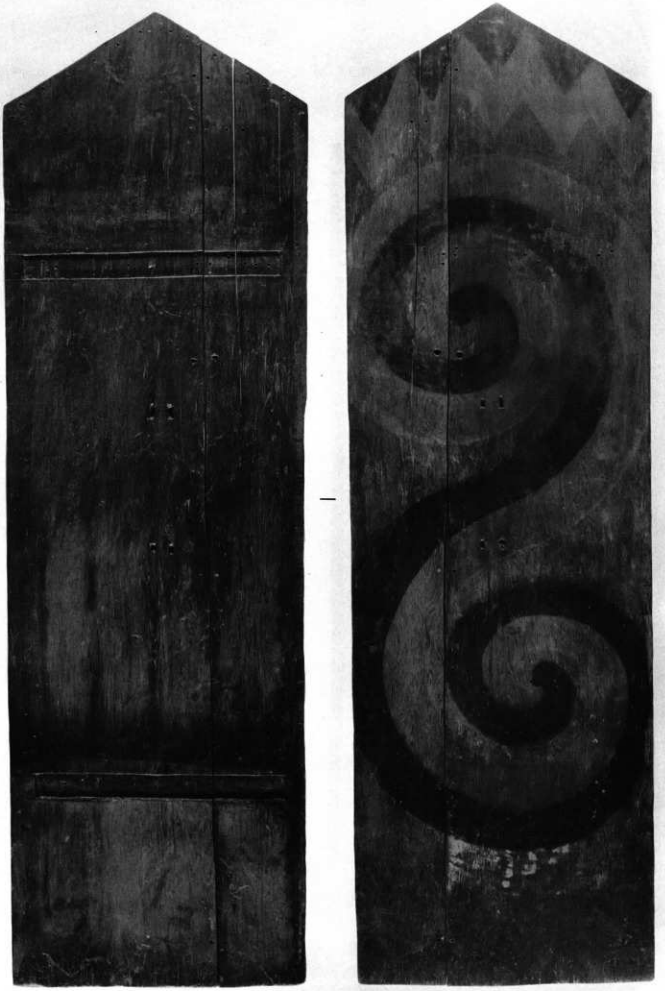
1：3
207

1：1
207

1：2.5
201

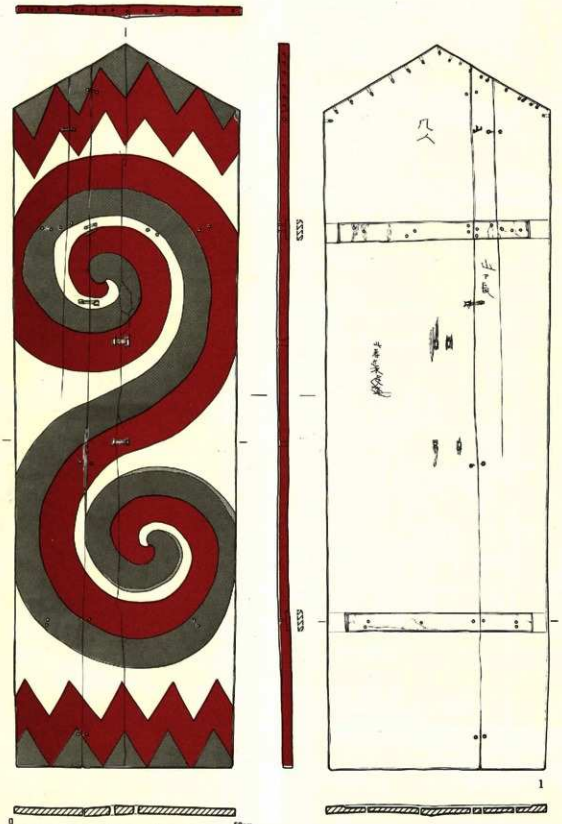

209


4
0
50cm

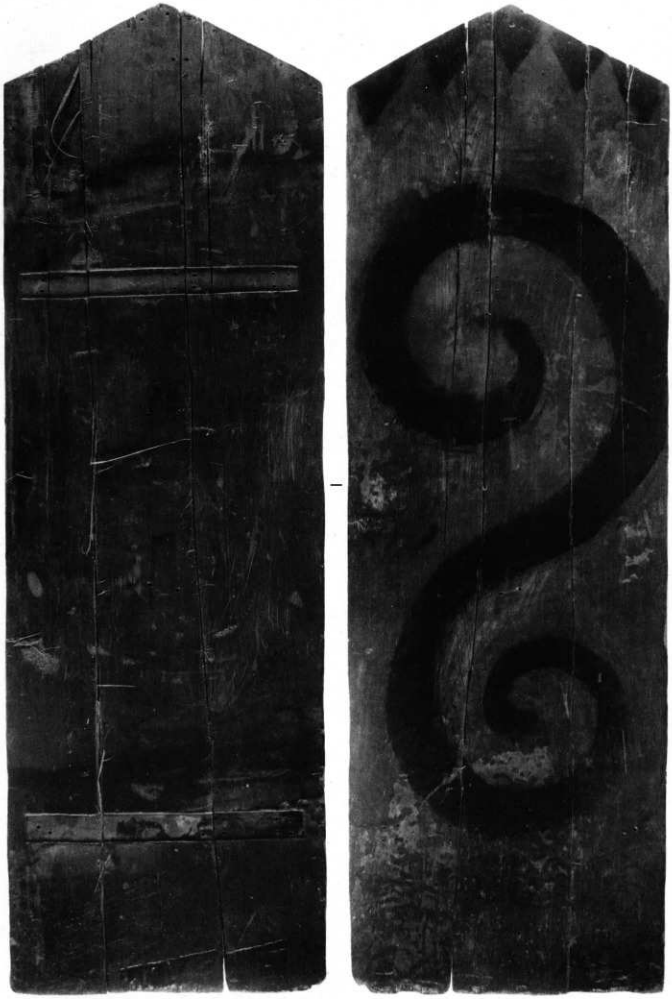


1：6

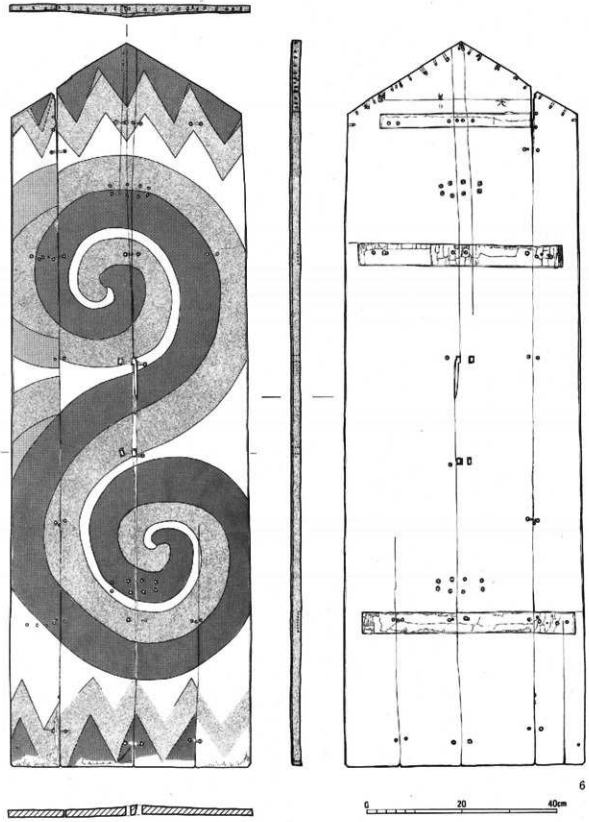
1



1



1 : 6



6

1

1

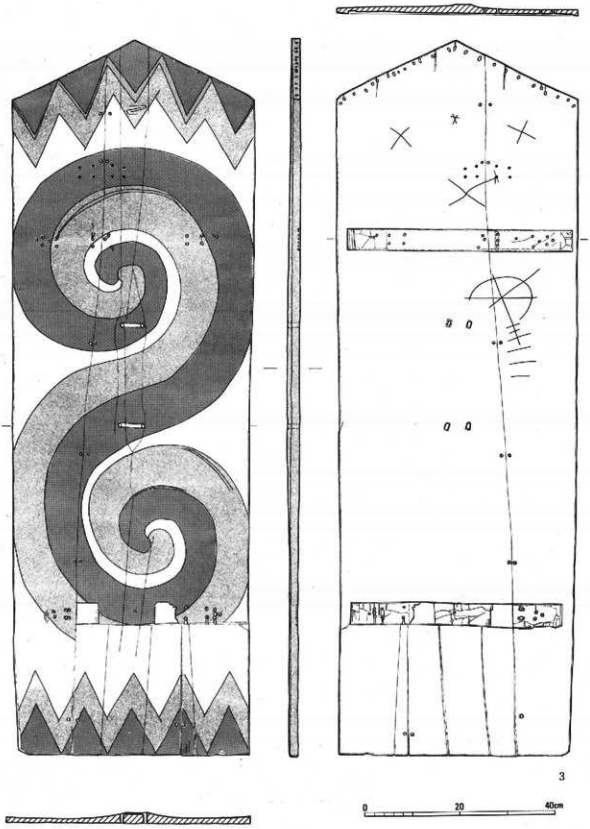
1

8

7

6

1 : 11



3

I

I

I

I : II

5

3

2

9

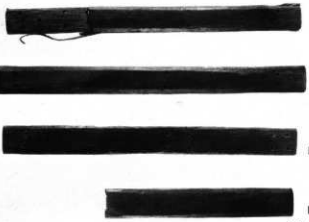
11

10

13

12

表



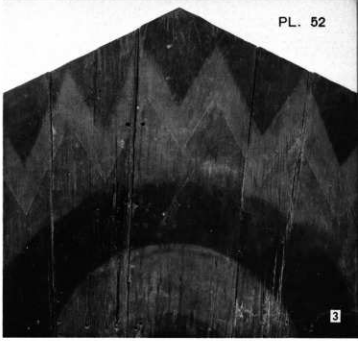
1 : 6

裏

1 : 6

9～11; 1 : 10
12・13; 1 : 8.5

3


3

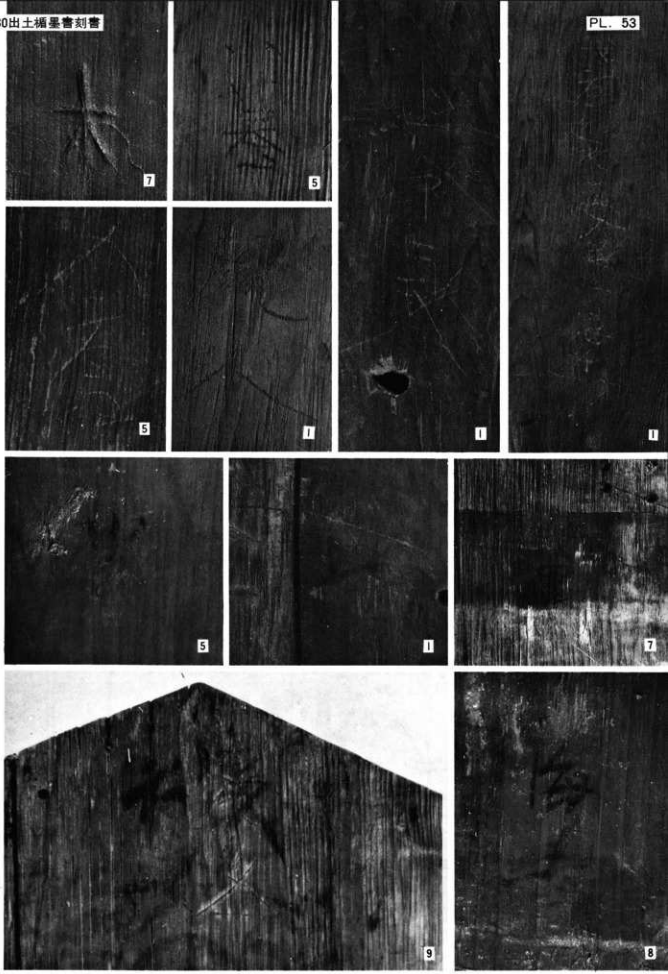
3

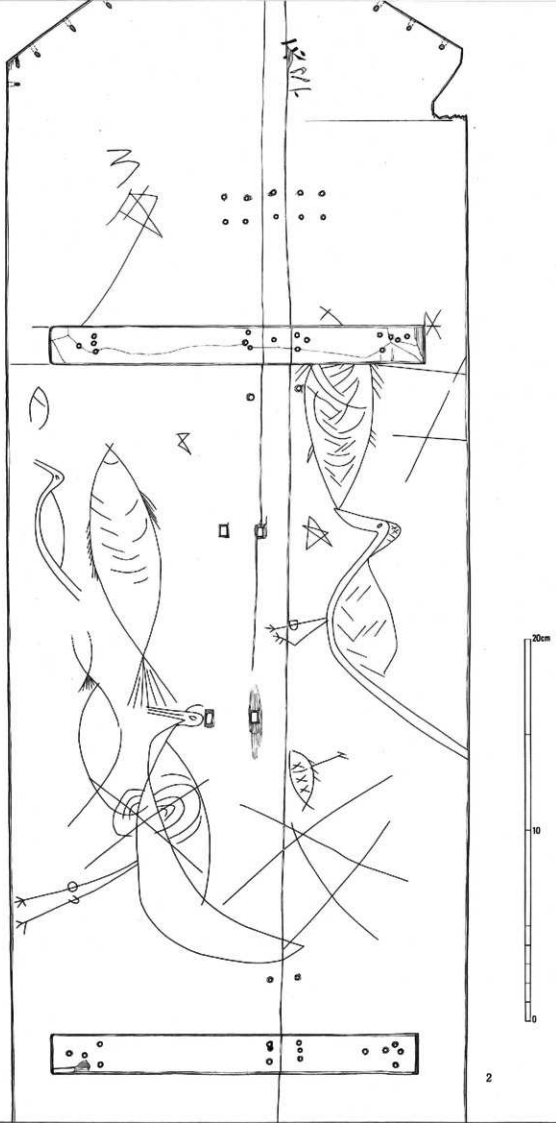
3

6

6

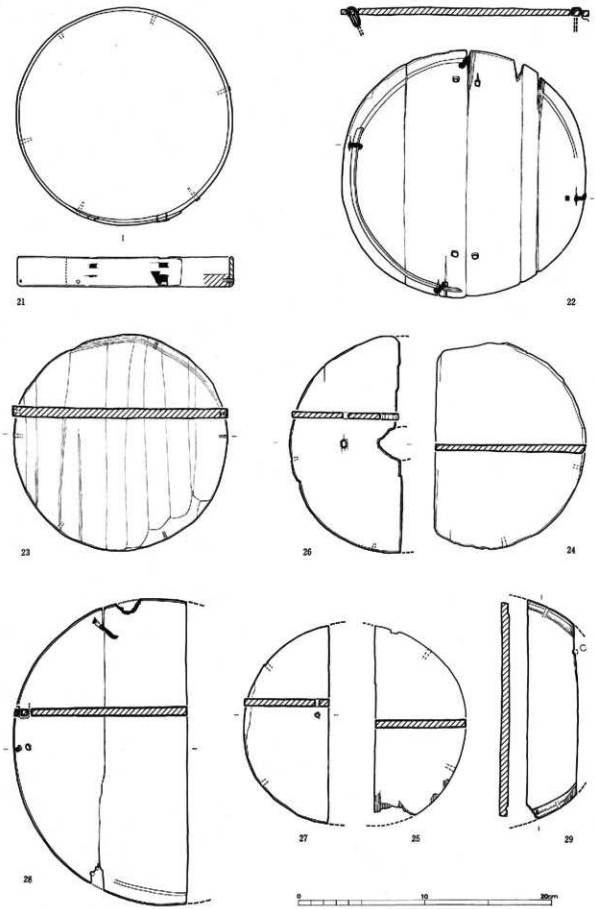
SE1230出土楯墨書刻書

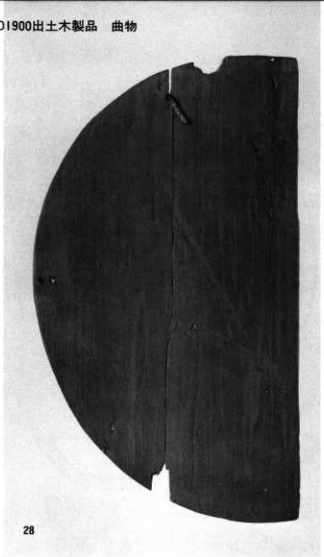




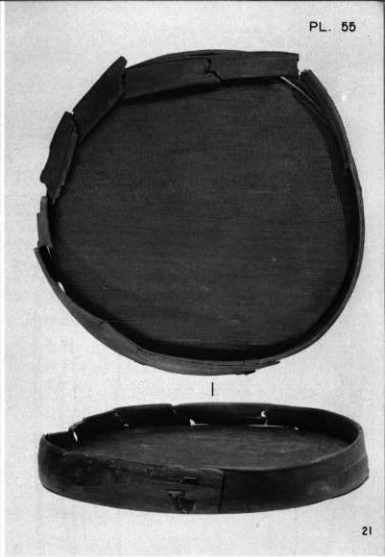
2

SE1230出土楊刻線画

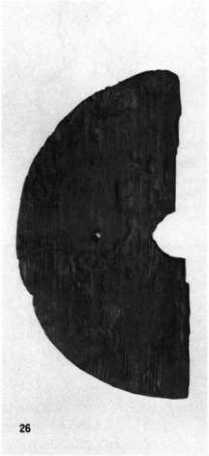

21
22
23
26
24
28
27
25
29
0
10
20cm



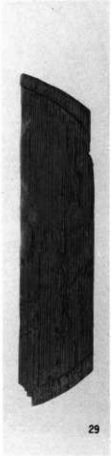
28



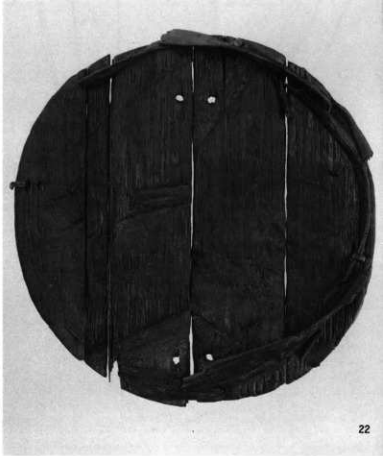
21



26



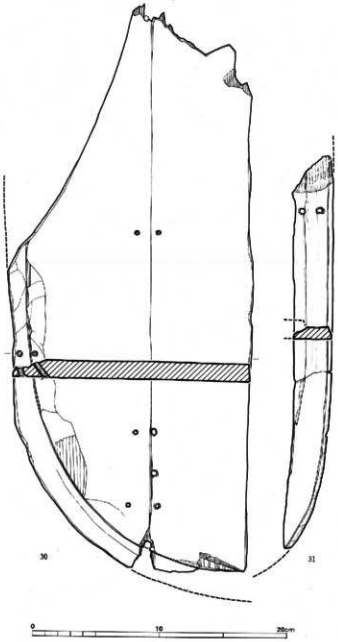
29

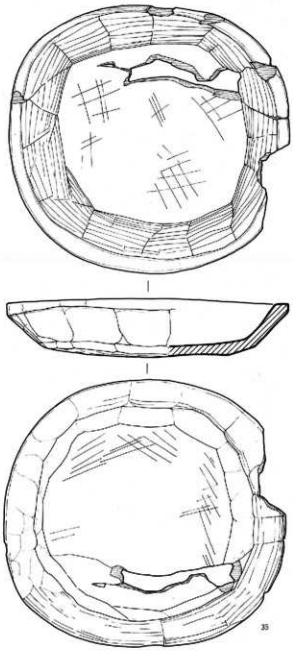


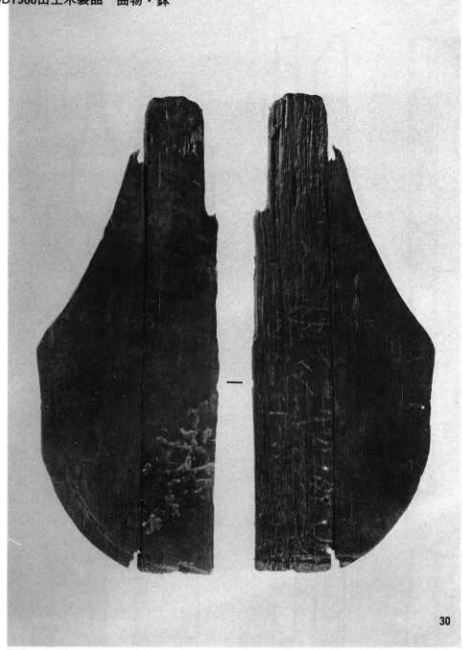
22

1 : 2

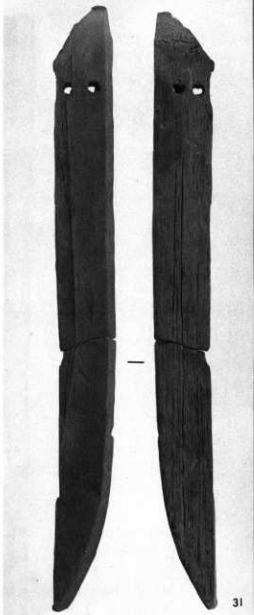
3 : 4


30
31
0
10
20cm


35

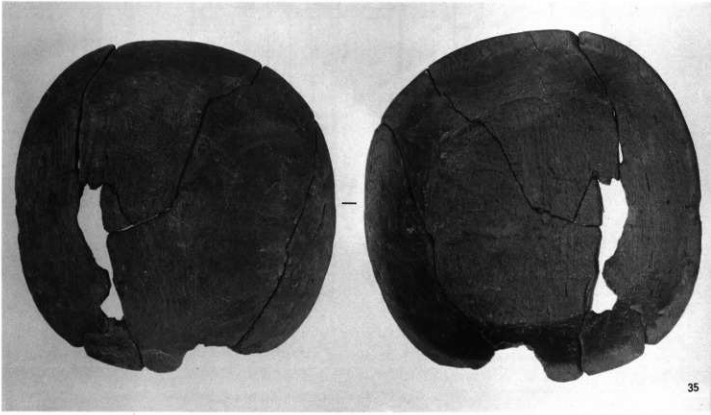


30



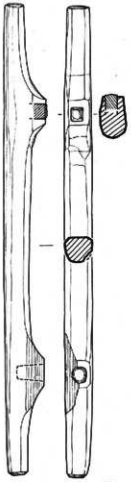
31

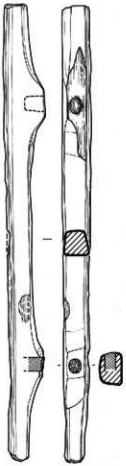
1 : 2

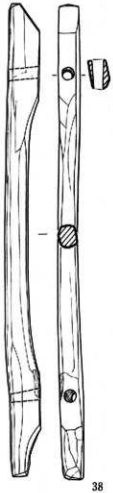


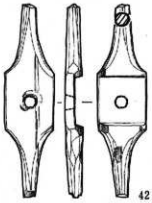
35

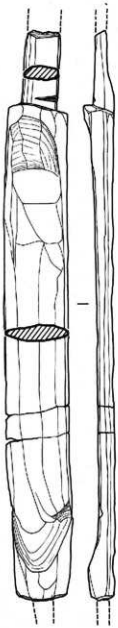
2 : 5

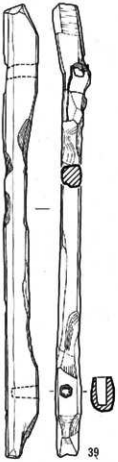

36

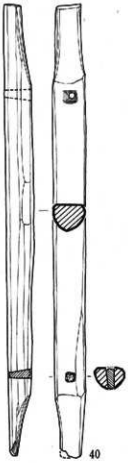

37


38

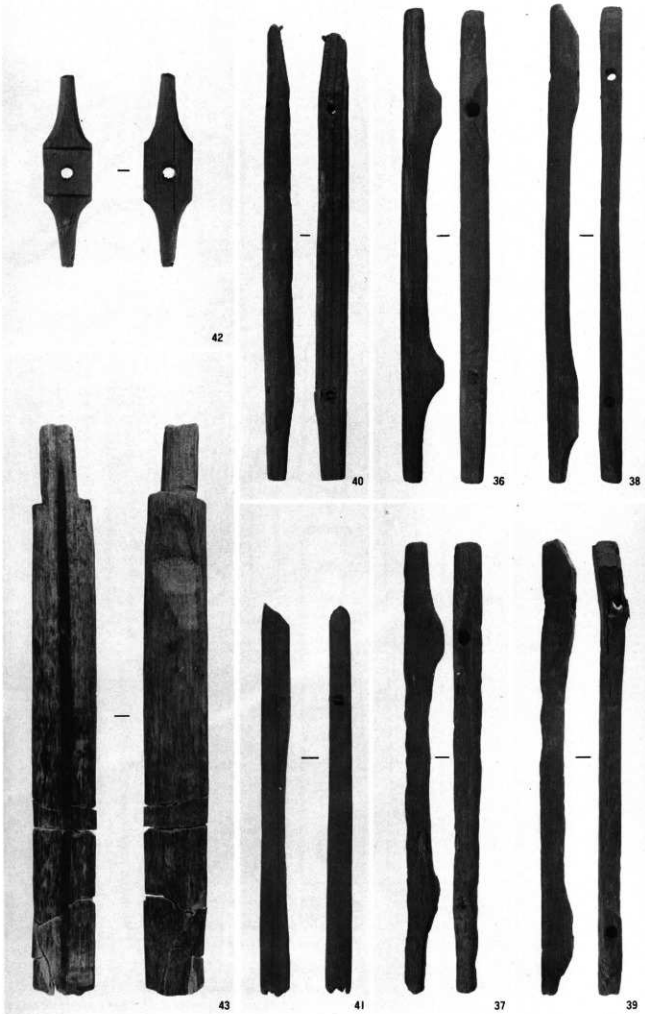

42


43

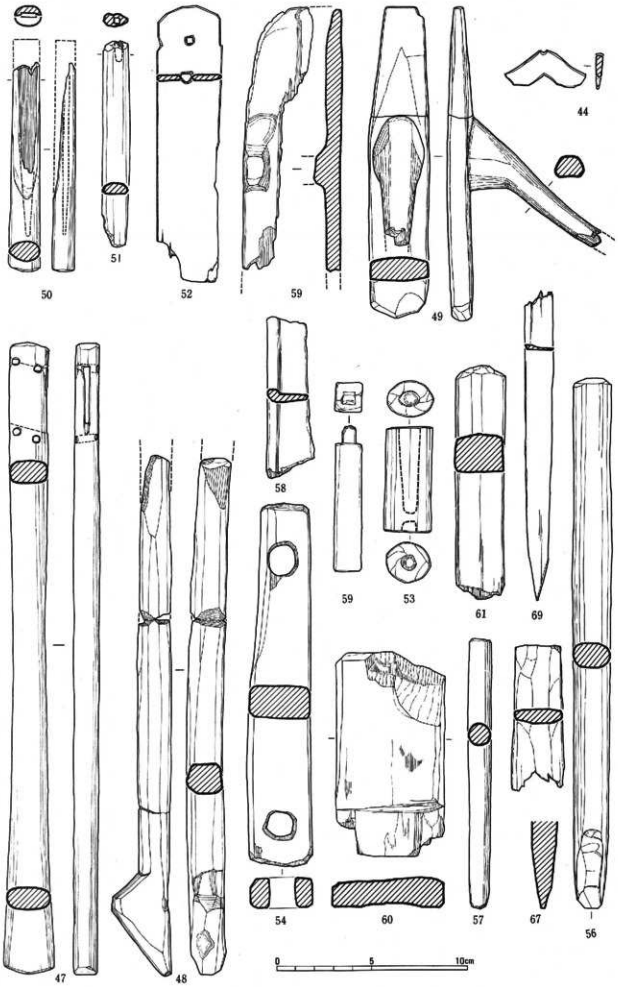

39

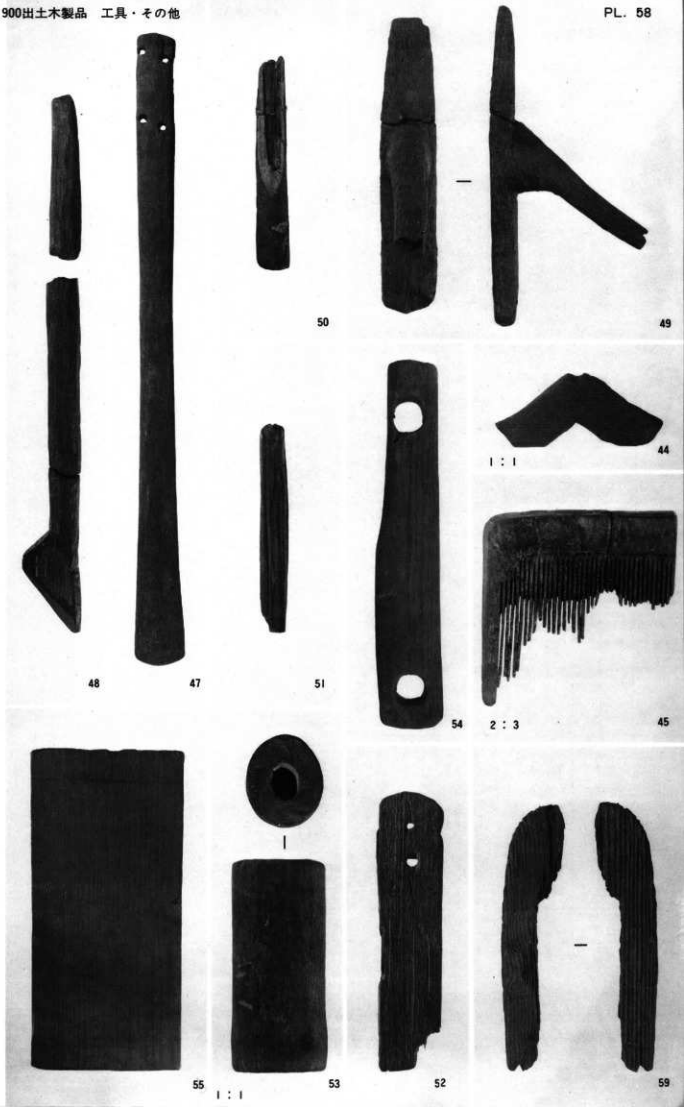

40

41



1 : 2


50
51
52
59
49
44
47
48
58
59
53
61
69
54
60
57
67
56
0
5
10cm

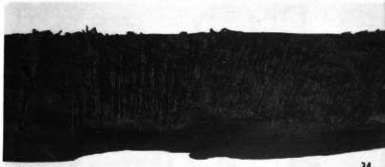

48
47
50
51
49
54
44
1 : 1
45
2 : 3
55
53
1 : 1
52
59
1 : 2

1 : 2

71

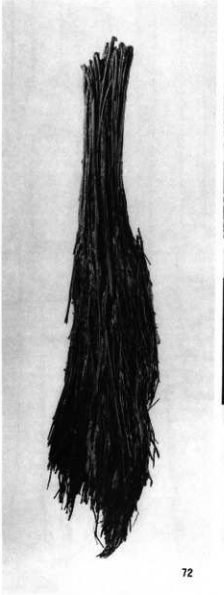
1 : 1

7



2 : 3

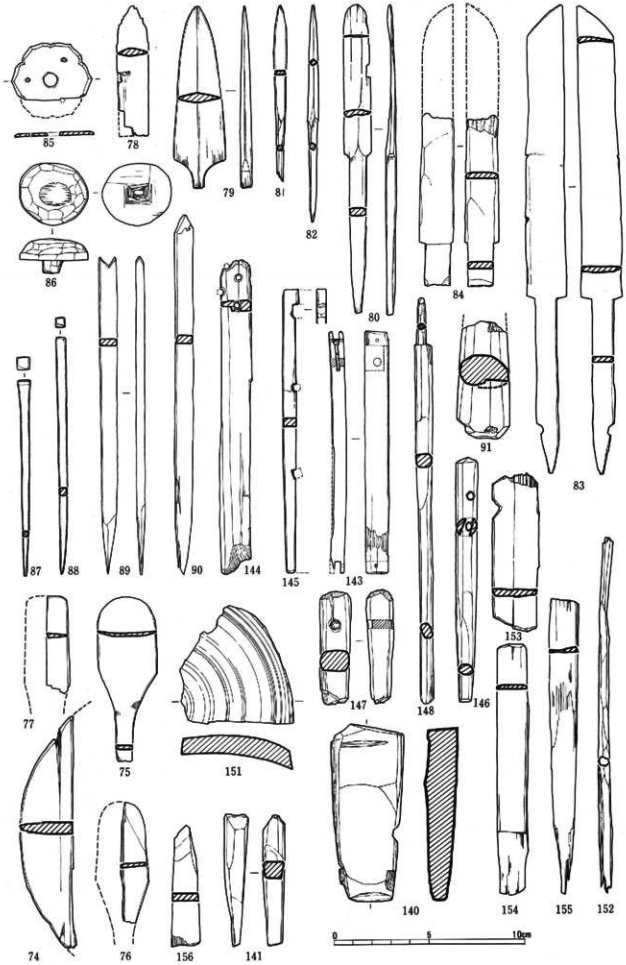
34



72

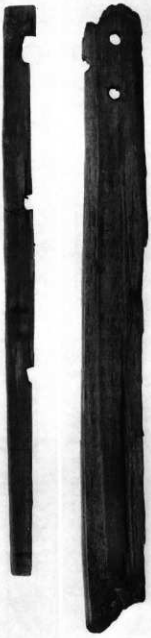
1 : 2

70


85
78
79
81
82
80
84
83
86
87
88
89
90
144
145
143
91
153
77
75
151
147
148
146
74
76
156
141
140
154
155
152
0
5
10cm

83

146



145 144

85

86

87

148

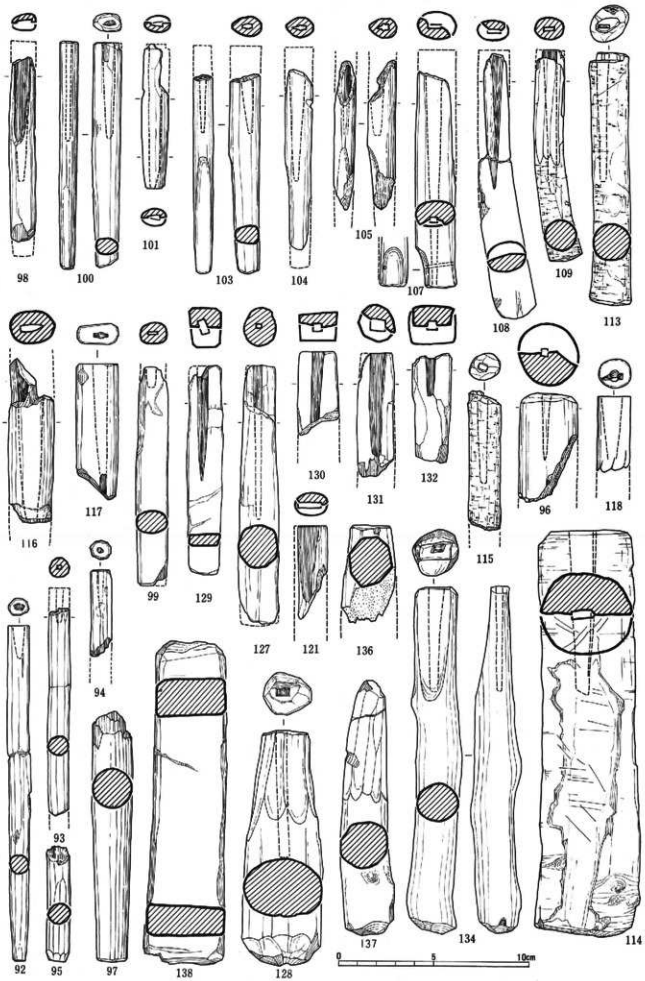
82

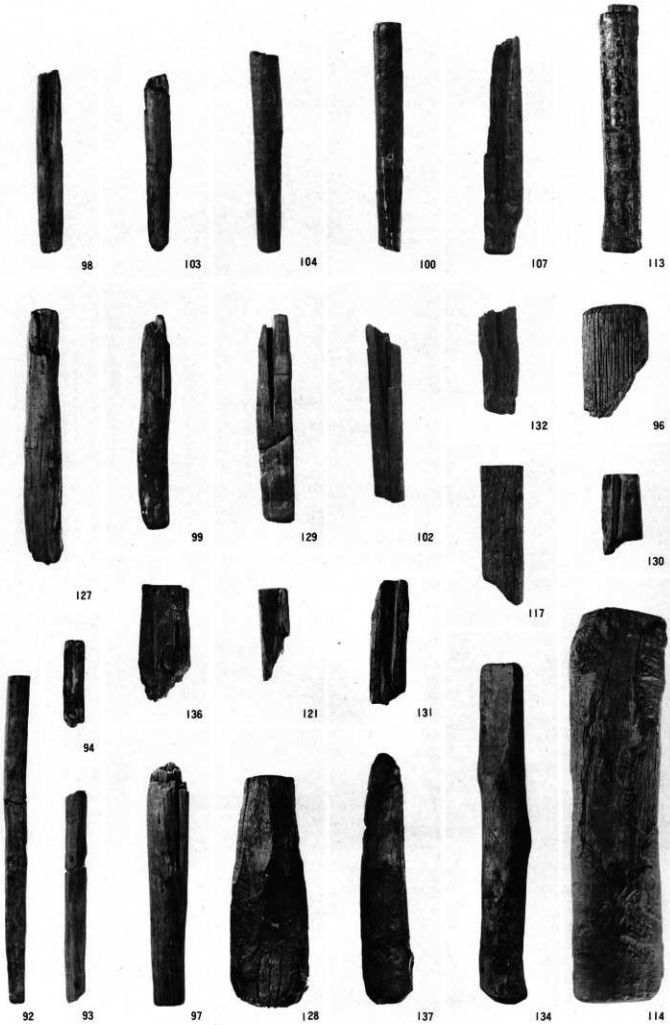
88

75

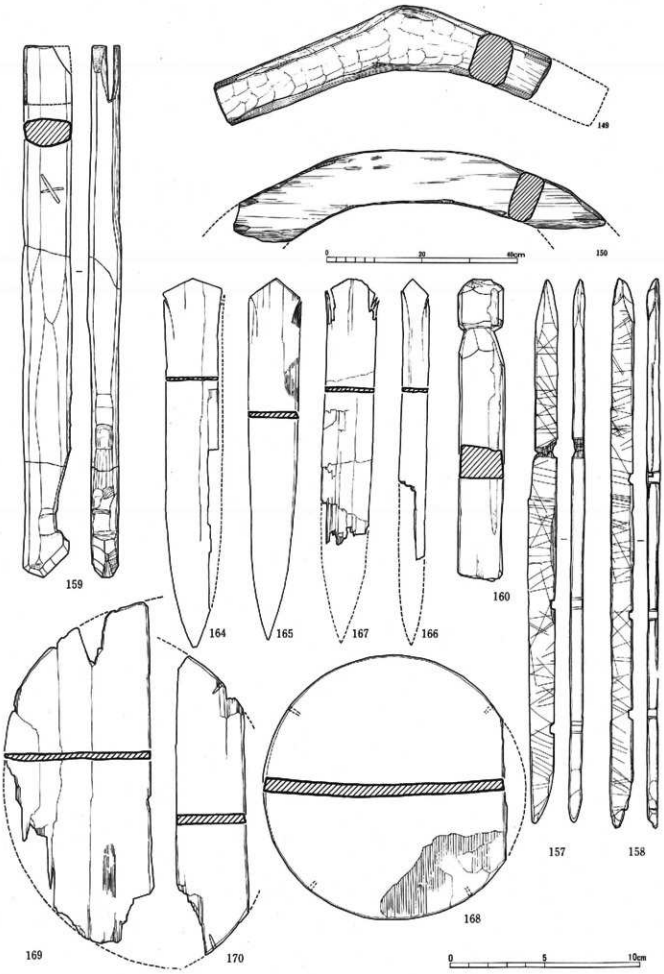
79

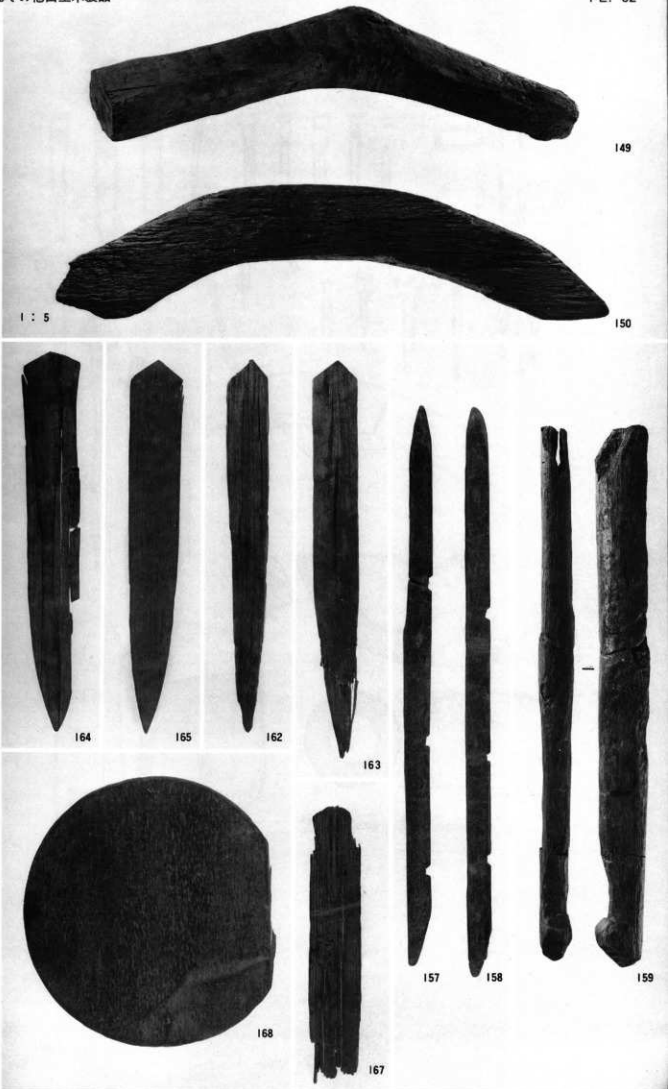
83-148; 1 : 2
87-88; 1 : 1.5
他 1 : 1

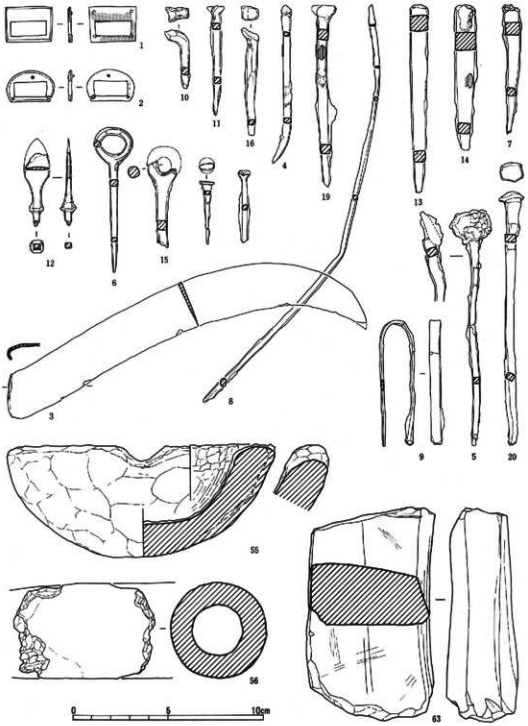

98
100
101
103
104
105
107
108
109
113
116
117
99
129
130
131
132
96
118
115
127
121
136
94
93
92
95
97
138
128
137
134
114
0
5
10cm


98
103
104
100
107
113
127
99
129
102
132
96
117
130
94
136
121
131
92
93
97
128
137
134
114

1 : 2

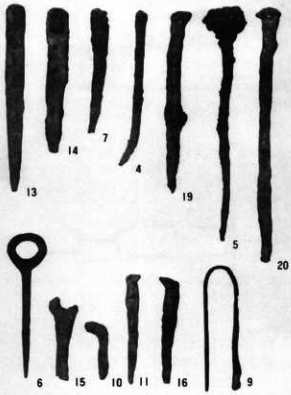

149
150
0
30
60cm
159
164
165
167
166
160
157
158
168
169
170
0
5
10cm


149
150
1 : 5
164
165
162
163
157
158
159
168
167
1 : 2


1
2
10
11
16
4
19
13
14
7
12
6
15
3
8
9
5
20
55
56
63
0
5
10cm

1 : 1
2
1

2 : 3
55


13
14
7
4
19
5
20
6
15
10
11
16
9
2 : 1

2 : 1
3

1 : 1
23
22
21

1 : 1
66
1 : 1
12

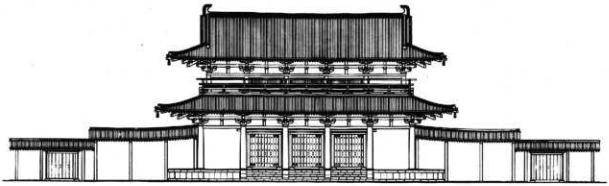
2 : 1
67

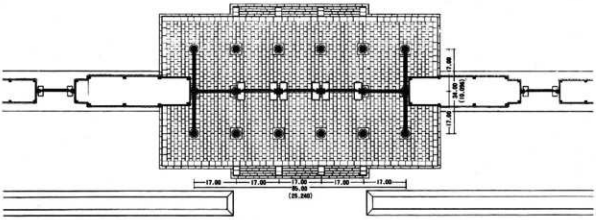
2 : 1
56

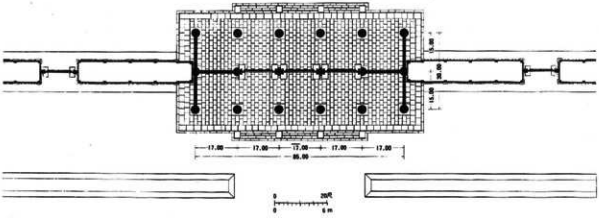
2 : 1
62

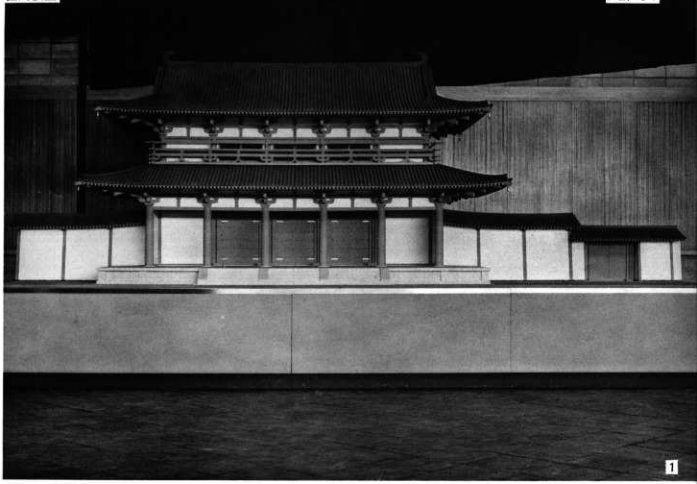
2 : 1
61

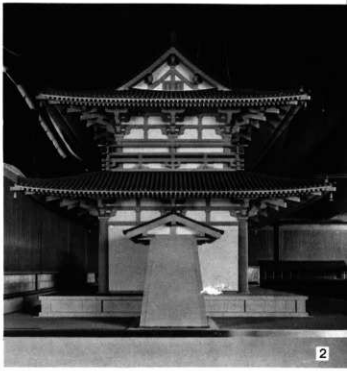
2 : 1
57



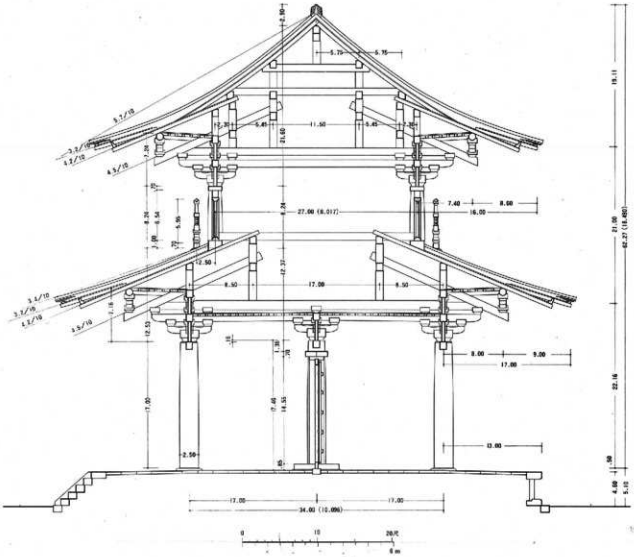

17.00
17.00
17.00
17.00
17.00
85.00
(28.24M)
17.00
26.00
(15.60M)
17.00

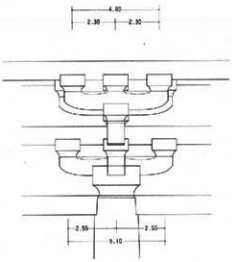

17.00
17.00
17.00
17.00
17.00
85.00
5.00
20.00
15.00
0
20尺
0
6 m

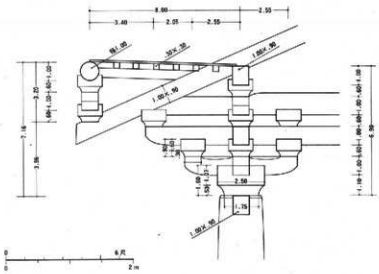




1．正面
2．側面
3．断面


27.00 (8.017)
17.00
34.00 (12.096)
62.27 (18.822)
21.00
22.16
16.11
0
10
20尺
6 m


4.60
2.30
2.30
2.55
2.55
5.10


8.80
3.40
2.05
2.55
2.50
0
6尺
2 m

西面門模型

1．正側面

2．正面

3．軸部詳細

昭和53年3月25日　印刷
昭和53年3月31日　発行

奈良国立文化財研究所学報 第34冊

平城宮発掘調査報告 IX

—宮城門・大垣の調査—

著作権所有者　奈良国立文化財研究所

発行者　奈良国立文化財研究所

印刷者　株式会社 奈良明新社